

超次元物語

天龍神

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

テルカ・リユミレースを襲った星喰みを倒した凛々の明星と龍姫達はそれぞれの元の世界で気ままに過ごしていたのだが、また次元を超えてとあるゲームギョウ界での冒険が待っていたのだった。

また医学者のジュード・マティス、精霊のミラーマクスウエルも仲間たちともに龍姫達とユーリ達と一緒にゲームギョウ界を旅することになるのだった。

星喰みを倒してから一ヶ月が経ったのである。

目次

再び	1	判を超えし者	47
ノーム誕生	6	参戦、審判を超えし者	52
依頼受理	12	緑の大地	55
ウンディーネ	16	アンダーインヴァースに	60
一難去つてまた一難	21	ゲームギョウ界のイフリート	65
神機	27	やはりこうなる	71
凛々の明星と精霊の王達の初めてのゲ	27	騎士団長様	76
イムギョウ界の白の大地	30	リュウオウ	81
指揮者と少女としやべる人形	38	指揮者とトリック・ザ・ハード	87
世界中の迷宮	43	明星と誤った正義と医学者と女神候補	87
分史世界のゲームギョウ界に現れし審	43	生	91
		いざ!! ギョウカイ墓場へ	95

三人目の霸王	100
ひと段落	107
凛々の明星と紫色の女神	114
結局	118
罷免	122
コスプレ	127
凛々の明星と蝟	131
紫龍と黒衣の断罪者と気高き精霊の	
王、マジック・ザ・ハードに遭遇するの段	134
緋凰絶炎衝!!	137
調査報告	141
巨大化したワレチュー	145

思いを舞い上げ!!	152
飛翔せよ!!	159
逆陽動作戦	163
黒衣の断罪者が選んだ道	168
気になったこと	173
ご対面	178
集え!! 三龍神	182
紫の時空女神	190
マジック・ザ・ハードの末路	196
伝承	201
黒の三龍神の魔王の成長	205
満月の子	210
紫の満月の子	215

紫の女神の悩み	220	ウラヌスに	275
骸殻発動!!	223	ウラヌスの助言	280
模擬戦と書いて決闘と読む	227	四天王が復活	284
黒衣の断罪者VS黒の女神	231	前略 温泉銭湯	292
レイアVS緑の女神	237	前略、温泉戦争&龍菜が選んだ道	
白狐VS白の女神	241	298	
模擬戦終了	246	あの男	305
ゲームギョウ界に舞い降りた帝国騎士		人質救出	310
団隊長首席	249	震天裂空・・・	313
反省	253	この世に悪があるとするとするなら	318
黒の女神、消えゆ	257	記憶の試練	321
記憶を失くした黒の女神	265	蘇れ!! 黒の女神!!	325
黒の女神、妹と再開する	272	試練を乗り越えた結果	331

ノワールのこれから	334
巫女？	339
魔神煉獄殺	343
ガットウーゾ現る	347
アイエフ救出	352
事情聴取	356
ノワールの新しい服	360
久しぶりの白の大地	363
穿て!! 烈穿!! 無限の拳閃	367
閃く刃は勝利の証	371
ザギ	375
神剣	379
黒衣の断罪者V S 冒険家	382

オルティナ	387
精霊刀	391
名刀	394
たたら製鉄	397
次元断「絆龍」	400
日本刀の説明	403
星覇龍	406
再会？	409
エージェント	414
龍の姫の女神降臨	417
真那、成長する	424
真那、侍になる	428
大豆料理	431

暗殺者ザギ、再び	434
斬り裂け!!	437
リンボックスからの	441
ライブ、前篇	444
ライブ後半	447
開始!!	450
緑の戦乙女	453
正義VS正義	458
正義VS正義 後編	461
さらば、	465
再会、四象衆の一人&変態と言う、馬鹿	468
背中、語れ!!	471

救いようがない	474
華麗に	477
空想の魔物	480
遭遇、銀火龍	483
銀火龍!! 後編	486
金火龍	491
響け!! 集え!!	494
密かに	497
朝の鍛錬	501
まさかの	505
ケジメと言うのも	508
騎士団長との対談	512
黒と紫、決意	515

誓い	518
潜入!! ゲームギョウ界のザウデ不落	522
宮	526
アレクセイ、再び	533
地球編	529
客員女神の幼馴染みとの再会	536
地球でも・・・	540
遭遇、アンチスピリットチーム!!	544
536	547
爆誕!! 士織ちゃん	547
士道と異世界人	547
龍姫の経緯	547
アンチスピリットチームの真実	547

550	588
十香の選んだ道	583
精霊姫騎士女神、参る	579
強がっていても	576
紅き精霊女神	573
成長期	570
折紙の決意 前篇	567
折紙の決意 後編	564
天使女神、降臨	561
紫龍の女神、実家に帰る	557
紫龍の女神、実家に潜入	553
鳴流神姉妹	557
黒衣の断罪者と紫龍の女神の兄	553

591

凛々の明星、鳴流神家に泊まる

594

朝の稽古

598

決戦編

シスコンは次元をも超える

602

紫陽と黒月の女神

606

再び、ザウデ不落宮へ

610

龍姫達の今の女神の仕事

613

我、霸王なり

617

双子精霊、女神になる

621

それぞれの決意

627

リドウ参上

630

助太刀

633

天界

637

でじ

640

ラシユガルの王

645

優雅に

649

冥闇

652

氷姫の女神

656

ぷち子

659

戦乙女

664

決戦直前

668

最終決戦

671

会合

675

犯罪神

678

最終章

第二グラウンド

685 681

再び

テルカ・リュミレースから戻ってきた龍姫達は新しい教祖に龍宮寺刀夜が就任して一ヶ月が過ぎたのだった。

「龍姫!! また依頼が来てるよ!!」

「誰から?」

「ツクヨミ様からだよ、今回は凛々の明星と一緒に分史世界のゲームギョウ界に行つて事件を解決してほしいんだって、報酬の半分を凛々の明星の授与するだつて」

「わかつたよ、行くよ!! 今日のパルバーは真龍姫・姫龍紗・うずめ・プルルート・龍空翔・龍音でいいかな」

「いつでも行けるぜ!!」

「ボクも久しぶりにユーリさん達に会えるんだ」

「わたしもユーリちゃんに会いたい」

「今回は星龍達と武龍達と輝龍達も向こうで合流することになつてるからね」

「わかつたよ、それじゃあ、次元探偵、流星の絆^{ビグロスト} 出発するよ」

「ボクはユーリ達を迎えに行つてから合流するね」

「うん、わかった」

黒髪の長髪をポニーテールに結って、白色の十字キーの髪飾りを前髪に着けて、瑠璃色の猫と龍がプリントされた戦闘服にロングタイプのジャケットを着て、瑠璃色のニーソックスに男物のズボン履き、黒のブーツ履き、両手にはオーブンフィンガーグロブを嵌めて、あれから167cmまでに身長が伸び、胸も大きくなった少女ことプラネテューヌの紫龍の女神でプラネテューヌの女神の姉兼秘書兼女神パープルドラゴンハートこと鳴流神龍姫は天界のツクヨミから凜々の明星と供に分史世界のゲームギョウ界の事件を解決する依頼を受けたのだった。

龍姫はユースリ達、ギルド「凜々の明星」を迎えに行くので、一緒に行く、真龍姫・龍空翔・姫龍紗・うずめ・ブルルート・龍音に先に行ってもらったのであった。

ところ変わってテルカリユミ・レースの帝都ザーフィアスの下町に住む青年こと凜々の明星のユースリ・ローウエルは相棒のラピードとともに就寝していたのだが、

「ゲームギョウ界が壊れちゃうよ!!」

「な!!」

「ワン!!」

どうやら分史世界のゲームギョウ界のある場面を夢で見ていたのであった。

ところ変わって医学者のジュード・マティスと精霊の王のミラマクスウエルも同じ

夢を見ていたのだった。

「何これ、たった一人に五人が」

「完膚なきまでにやられてるとは」

そして、翌日の朝

「つたく、嫌な夢見たぜ」

「ワフ!!!」

「おーい!! ユーリ!!!」

「カロールか、どうしたんだ?」

「大変だよ!! エステルとリタが城の騎士達の目を盗んで、異世界に行っちゃったんだ

よ!!!」

「なんだと!! つたく、フレンの奴は」

「ユーリ、迎えに来たよ!!!」

「お、龍姫!! ちょうど良かったぜ、実は」

「エステルとリタがボクたちが今から向かう分史世界のゲームギョウ界にいつちやっ

んでしょ、御剣の階梯に設置してある次元転送装置で」

「行くぞ、カロール!! ラピード!!!」

「なんじゃ、ユーリ、今日は龍姫の嬢ちゃんと一緒か」

「しばらく留守にすつから」

「安心せい、おまえさんより龍姫の嬢ちゃんの方が頼りになるわい」

「そうかよ、ほんじゃ行つてくるわ」

カロールが慌ててユーリの部屋にやって来て、エステルとリタが勝手に分史世界のゲイムギョウ界に向かつてしまったらしく、そこに龍姫がユーリを迎えに来たので、龍姫とユーリ達はハンクスに挨拶してザーフィアス城の御剣の階梯に向かったのだった。

「あれ、龍姫ちゃんじゃない」

「ホントだわ」

「ちようど良かった、これからボクと一緒にツクヨミ様の依頼を一緒に行くとこだったんだよ」

「なるほどね、今回は龍姫ちゃん達と一緒にすることか」

「どうやらレイヴンとジュデイスもザーフィアス城の前にやってきたので一緒に御剣の階梯に向かったのだった。」

龍姫は教会に設置してある転送装置でザーフィアス城の御剣の階梯に転移してユーリ達を迎えに来てたのである

閑話休題

ザーフィアス城の廊下を通過して謁見の間の階段を上り、転送術式に乗って目的地の分

史世界のゲームギョウ界に向かったのだった。

ところ変わってジュード・マティスとミラーマクスウエルは時の大精霊のクロノスの力で分史世界のゲームギョウ界に向かったのだった。

ノーム誕生

龍姫達とユーリ達は分史世界のゲームギョウ界のバーチャルフォレストの龍姫達がいいつも武術の特訓をしている場所に到着したのだが、

「此処がゲームギョウ界なのか」

「うん、此処はプラネテューヌのバーチャルフォレストだよ」

「どうやら、おっさん達以外で此処に来てるみたいよ」

「ボクは医者をやっています、ジュード・マティスです」

「精霊の王、ミラーマクスウエルだ、おまえたちは何をしているのだ？」

「初めましてボクは鳴流神龍姫です、龍姫でいいよ」

「どうやら、別の異世界からここのゲームギョウ界に来ていたのであった。」

龍姫達とユーリ達はそれぞれ自己紹介を済ませて、プラネテューヌ教会に向かったのだった。

スキット：どこ？

ミラ「龍姫、此処は何処か知ってるのか？」

龍姫「此処はゲームギョウ界って呼ばれてる世界ですよ」

ジュード「ゲームギョウ界？ まさか、あの夢がこの世界で起こってることなのかな」
ユーリ「あの夢？」

ジュード「うん、たった一人に五人が手も足も出なくて、女の子が」

レイヴン「ゲームギョウ界が壊れちゃうよ」

ユーリ「おっさんも見たのかよ」

ジュード「私もよ」

カロル「ボクも」

龍姫「ボクも以前に夢で見たことあるよ、此処とは別のゲームギョウ界だけど」

ミラ「どうやら、全員があの夢に導かれたようだな」

龍姫達とユーリ達はジュード達と一緒にバーチャルフォレストの出口に向かってい

たら、

「ぎゃあ!!」

「誰だこいつ？」

「ユーリ!!」

「おっさんも」

「エステル!! リタ!! 久しぶり!!」

「お姉ちゃん!! 遅いよ!!」

「このリンダさまに楯突いた・・・」

「悪いけど、しばらく寝てね!!」

「ゴフ!!」

リンダがエステルとリタにコテンパンにされて、龍姫達の場所に飛ばされてきたのだった。

先に行かせていた真龍姫達も一緒にいたのだった。

しばらくリンダにはご退場してもらい、あのゲームキャラのいる場所まで向かったのだった。

もちろんこっちのゲームギョウ界のネプギア達に遭遇したのだった。

「誰ですか？ わたしはプラネテューヌの女神候補生のネプギアって言いますエステルさん達には先ほど自己紹介をしました」

「ボクは鳴流神龍姫」

「オレはユーリ、ユーリ・ローウエルだ」

「おっさんはレイヴンよ」

「ジュデイスよ」

「ボク、カロール、カロール・カペル、ギルド「凛々の明星」の首領だよ」

「ボクはジュード・マティス」

「わたしはミラⅡマクスウエルだ」

取り敢えず、自己紹介を終えたのでゲームキャラにご対面をしたのだが、ミラが近づいたら、

「これはマナだな」

「マナ!!」

「つてことは、精霊に転生出来るんですね!!」

「精霊つて何よ!!」

「じゃあ、始めるわよ!!」

なんとゲームギョウ界に存在していない物質のマナであると言うのだった。

龍姫達はテルカリユミ・レースの聖核を精霊にする要領でパープルディスクにマナを流し込んだのである。

「わたしは・・・」

「もしかすると、ノーム?」

「なるほど、わたしが感じていた違和感は地・水・火・風の内の地の元素と水の元素が感じられなかったようだ」

「ゲームギョウ界は、火・風・雷・氷の四属性で構成してるんですよ!!」

「なんだと、それで均衡を保てると言うのか」

パールディスクはなんと地の精霊のノームに転生したのであった。もちろんノームはネプギアに力を与えることが可能であった。

龍姫達はプラネテューヌ教会に向かったのだった。

そんなこんなで龍姫達はプラネテューヌ教会に到着したのであった。

「ようこそ、プラネテューヌ教会に、わたしはプラネテューヌの教祖、イストワールと申します、ネプギアさん、ゲームキャラの協力を得られましたか？」

「いーすんさん実は、」

「此処がプラネテューヌ教会なんだ」

「これは一体？」

教会に入った龍姫達はイストワールと対面して、ネプギアにゲームキャラの協力を得られたか尋ねたら、スコップを持ったモグラの地の精霊ノームが現れたのだ。

龍姫達とユーリ達とジュード達はノームが誕生したことを事細かに説明していたのだった。

スキット：男の娘

ミラ「龍姫と龍音は女、なのだな？」

龍姫「はい、そうですけど？」

ジュード「初めて会ったとき、ユーリの弟に見えたから」

ユーリ「初対面の奴から見たら、オレと龍姫と龍音が兄妹に見えるからな」
真龍姫「わたしのお姉ちゃんだよ!!」

ミラ「それはわかっているのだが、なぜ男装をしているのだ？」

龍姫「この方が戦闘しやすいのと、敢て体型を隠しているだけですよ」

レイヴン「おっさんは誤魔化せないわよ!! その戦闘服の下には・・・」

リタ「何セクハラしてんの!! このエロおやじ!!」

レイヴン「ぎやああ!!」

ユーリ「これはおっさんが悪い」

レイヴン「男のロマンが・・・」

依頼受理

龍姫達はノームが誕生したことを説明して、本題に入ったのだった。

そしたら奥から

「あ、ジュード!! それにミラ!!」

「レイア!! どうして此処に、まさか」

「うん、わたしもあの夢を見たんだよ!! だから、精霊界に行って、クロノスに頼んで此処に送ってもらった」

「どうやら、この様子だと、おまえらの仲間も来てんじゃねえ」

「そうだね」

なんとジュードの幼馴染みのレイアがこの次元のゲームギョウ界に来たようで、レイアも龍姫達とユーリ達同様にほっとけない病のようだった。

龍姫達とユーリ達は自己紹介をして、ここで起きている事を聞くことにしたのだった。

「はあ!!」

「三年前!!」

「どうして、その時に助けに行かなかったのだ!!」

「そうだよ!!」

「アンタ達は馬鹿なの?」

三年前にギョウカイ墓場に犯罪組織を討伐に行った四女神達は龍姫達が見た夢の通りにたつた一人に五人が完敗して、ギョウカイ墓場で幽閉されていると言ったのだ。龍姫達は以前光龍と姫龍紗が女神を勤めていた次元のゲームギョウ界を助けていたので知っていたのである。

「シエアの八割を犯罪組織が」

「それがどうした!! つまりおまえらは、女神達にいつか助けるから、今は我慢して待つてろってか!!」

「貴女達は三年も掛かってその子を助け出すのがやっとだった、つまり貴女達は見捨ててきたのね」

「見捨ててなんていないわよ!!」

「そうですう!!」

「キミたちは二人は、マナを扱えないようだな!!」

「そうだったの!!」

やはりユーリ達とジュード達はアイエフ達が三年も掛かってネプギアしか助け出せ

なかったことに意見していたのだった。

ミラはアイエフとコンパがマナを使えない体質だと気づいていたのだった。

そしたらあの龍姫達とユリー達が知っている男がやってきたのである。

「デュークさん!!」

「おまえら二人が倒そうとしている者は、シエアの怨念だ、シエアを用いて倒すことはできません」

「なるほどね、ボクたちは魔力とマナを使って術技を使用できるからね」

「そんな、お姉ちゃんが」

「ユリー、お願いします」

「分かった、オレたちにおまえの姉ちゃん達を助けるのに協力してやるよ、ただし、決めるのはギア、おまえひとりだ!!」

「お願いします、お姉ちゃん達を助けるのに協力してください!!」

「わかったよ、夜空に瞬く凛々の明星の名に懸けてその依頼をお受けします」

「そして夜空を駆ける流星の絆もお受けします」

「ただし、君たちはお留守番だ!!」

なんとデュークがなぜかゲームギョウ界のプラネテューヌ教会に来ていたのだが、マジエコンヌ四天王がシエアでできた怨念だと龍姫達同様に気づいていたようで、デューク

は教会を出て行ってしまい、マジエコンヌ四天王に対抗できるのは此処に居る龍姫達とユーリ達とジュード達だけだった。

ネプギアは龍姫達と一緒に同行することになったのだが、ミラがアイエフ達は同行できないと言ったら、反論してきたのだが、ジュードが医者であることを明かしたら二人は大人しくなったのである。

スキット：エステルの服

龍姫「それ着てくれてるんだね」

エステル「はい、龍姫がゲームギョウ界ではあの格好では動きずらかったので」

ユーリ「そうだよな」

ジュード「確かに動きやすそうだね」

リタ「アタシもこの服着てるんだけどね」

カロール「あれ、リタ、大きくなった？」

リタ「アンタよりはね」

龍姫達とユーリ達とジュード達はイストワールの逆鱗の所為で追い出されてネプギアを連れて重厚な黒の大地ラストেশションに向かったのだった。

ウンディーネ

今ラストイェーションに到着した龍姫達は街に入ったのだが、ネプギアと姫龍紗の機械好きが黙っていなかったのだった。

「初めて来たんです」

「初めて？」

「なるほどな、候補生は他国に来たことがないのか」

「まあいい、どうやら海が見渡せる所にゲームキャラの気配を感じる」

「龍姫、どこかわかる？」

「多分、ボクの記憶が正しければ、センプテントリゾートだね」

「それじゃあレッツゴー!!」

以前龍姫達はセプテントリゾートにゲームキャラがいたことを思い出して、一行はセプテントリゾートに向かおうとしたら、

「ミラ〜」

「ミュゼ!!」

「俺もいるぞ!!」

「誰ですか？ わたしネプギアって言います」

「俺はアースト・アウトアウェイだ」

「わたしはミラの姉のミュゼよ、よろしくね」

「ボクは鳴流神龍姫です!!」

どうやらジュード達の仲間で、漆黒のスーツを着た男アースト・アウトアウェイとミラの姉だと言う宙に浮いている女性ミュゼがどうやらこっちのゲームギョウ界に来ていたのだった。

もちろんユ-uri達とジュード達は得物を粒子化できるように龍姫達が次元デバイスで認識したのだった。

ユ-uri達はツクヨミからもらった魔導器のおかげで術技を使うことが可能だった。龍姫達はセプテントリゾートに行くのであった。

セプテントリゾートに到着した龍姫達は先客がいたのだが、ユ-uriがニバンボシを抜刀して

「蒼破刃!!」

「魔神剣!!」

「龍菜!!」

「あれ、ユ-uriの服だよ!! それに同じ武醒魔導器と剣」

「なんでおまえがオレの服着てんだ!？」

「いいじゃない別に、ちゃんと下に戦闘服着こんでるんだから」

「そこら辺にしろ」

どうやら星龍達がセンプテントリゾートにクエストがてら来ていたのだった。

星龍達も自己紹介をしてゲームキャラのところへ行こうとしたら、

「あの子にリーンボックスへ送ってもらおうわ」

「無茶すんなよ、ジュディ」

ジュディスがバウルを縮小した魔物ホエールを見つけたので、ジュディスが近づいたら、リーンボックスに送ってくれると言うので、ジュディスと別れたのだった。

そんなこんなで龍姫達はゲームキャラのいる場所に到着のである。

「誰だ、おまえらは」

「どうやら、頑固みたいだ」

「お願いします、精霊になってください!!」

「悪いがそれは出来ん!!」

「どうしてだ？」

「願いです」

「おまえは、まさかパープルディスクか」

「そうです」

「いいだろう、パープルディスクに免じて精霊になってやる、どうやら、ゲームギョウ界を脅かす者がまだいるようだからな」

「リタ!! お願い!!」

「始めるわよ!!」

灰色のディスクことブラックディスクはパープルディスクがノームに転生したのを見てシエアではどうにもならないことに気づいたので龍姫達に精霊になることを決意して、リタが術式を作って龍姫達はマナと魔力を注ぎこんだのである。

「わらは」

「ウンディーネだ!!」

「わかった、わらわの名は今もってウンディーネか」

「これで水の元素がこの世界に誕生したんですね」

ブラックディスクは女性の姿を持ったので水の精霊のウンディーネと命名して姿を消したのだった。

龍姫達は街に戻ることにしたのだった。

スキット：星龍一家と凜々の明星

龍菜「あなたの相棒もラピードって言うのね」

ユーリ「おまえも、相棒がラピードって名前のか、紛らわしいぜ」

星龍「だったら、ボクたちの相棒のラピードは、龍ラピって呼びますね」

ユーリ「それで構わねえ、助かるぜ」

レイア「待って〜!!」

ラピード「ワウ〜ン」

龍ラピ「キュ〜ん!!」

ジュード「レイアの犬好きが始まった」

スキット：姉と同じ武器

アースト「どうした？ ネプギア、俺の刀がどうかしたか？」

ギア「すいません、実は、お姉ちゃんも、龍姫さん達やアーストさんと一緒に、刀を武器にしてるんで、そんな深い意味はないんです」

アースト「つまり、俺の刀を見て、今、ギョウカイ墓場に幽閉されている、姉のことを思いだしたのか、大丈夫だ、俺にも、妹がいるからな、それに、このメンバーなら、助け出せる」

ギア「そうですね（まさか、アーストさん、お兄さんだった）」

一難去つてまた一難

ウンディーネの誕生を見届けて龍姫達は街に帰ろうとしていたら、

「待つでチューー!!」

「なんだ、あのネズミは」

「ワレチューって言つて、犯罪組織マジエコンの構成員です!!」

「そうなんだ」

「そうね、敵なのね」

「これでも喰らえでチューー!!」

「え!! ディスクから魔物が」

「来るぞ!!」

犯罪組織の構成員のワレチューがディスクを掲げてフィンリルともに龍姫達に攻撃してきたのである。

龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

「魔神剣!!」

「蒼破刃!!」

「虎牙破斬!!」

「三散華!!」

「チュー!!」

ワレチューが龍姫達とユーリ達とジュード達に敵うはずなく、

「我が生涯に一片の悔いもないでチュー!!」

と言って気絶したのだった。

ワレチューの邪魔をされたが何事もなく済んだので街に戻ろうと向かって行ったら

「あんだ達は誰? アタシはユニって言っただけだ」

「わたしはネプギア」

「ボクは鳴流神龍姫」

「オレはユーリ・ローウエル」

こっちのゲームギョウ界のラスティションの女神候補生のユニに遭遇したのだった
が、

龍姫達は慌てることなく自己紹介をして街に戻ろうしたら、

「見つけたぜ!! 暴力魔導士とクソガキ女神!!」

「つたく、しつこいと嫌われるよ!!」

「もういい加減にしてください!!」

「ちよつと、ネプギア!!」

「アンタ!!」

「やっちやつた〜」

下つ端のリンダがどうやら龍姫達を追ってラステイションに入っていたらしく、ネプギアは勢い余つて女神化してしまったのだった。

龍姫達と星龍達は女神化をしないで助太刀に入ったのである。

「やられた〜」

「アンタ、女神だったのね」

「ごめん、ユニちゃん」

「この場を以つてアンタは敵よ!!」

「ユニっち、おっさん達とお話しよう」

「聞きたくないわ!!」

「いい加減にしろ!!」

「!!」

リンダはそれほどかからず気絶させたのだがユニがネプギアが女神候補生だと知つて敵意を向きだしたので、龍姫達がユニに檄を飛ばしたのである。

「どうして」

「三年前、アタシは連れてってもらえなかった、そして帰ってきたのが候補生のアンタ、この気持ちわかる?」

「わからんな、キミはネプギアに八つ当たりしてるように見える」

「アンタには関係ない、これはアタシとネプギアの話なんだから引つ込ん出なさい!!」

「いい加減にしなさい!!」

「そうだよ!!」

「いいわ、ネプギア、アタシとタイマンしなさい!!」

「わかった」

「ジュード!! 龍姫!! 止めてよ!!」

「レイア、やらせてやれ」

「そうね、こうなったら止まらないわよ」

「そうだな、下手に止めちまったら二人の間に溝が出来ちまうからな」

「そうですね、ですけど、勝負が決まったら、問答無用に止めますから」

ユニはネプギアに八つ当たりをってしまったので、ミラが咎めたのだが、関係ないと言つて、ライフルを構えて、女神化をしたので、ネプギアも女神化をしたのだった。

念のためエステルとジュード達はいつでも止めれるようにスタンバイしたのだった。

「始め!!」

「アイスバレット!!」

「みなさん!! 技、お借りします!! 魔神剣!!」

「銃弾を斬撃で、これならどう? アイシクルバレット!!」

「甘いよ!! 虎牙破斬!!」

「う!!」

ユニは手始めに氷の銃弾を放ったが、ネプギアがガンブレードで斬撃を放って、銃弾を撃ち落として、すかさずユニが先ほど強力な氷の銃弾を放ってきたが、ネプギアはかわして接近して斬り上げて斬り下ろしたのだ。

「ネプギア、もうオーバリーミッツ出来るよね」

「やってみます、飛ばして行きますよ!!」

「ギアちゃん、飲み込む速いわね!!」

「そうだな」

「来なさい」

ネプギアは此処に来る途中に龍姫達に戦闘術であるオーバリーミッツを伝授してもらったのだが、まだ秘奥義を出せるLv3までは修得していないのである。

「行くよユニちゃん!! 魔神双破斬!!」

「へえ、もう奥義修得したのね」

ネプギアは龍姫達に伝授された魔神剣と虎牙破斬を合体させた奥義を繰り出して、

「舞い上がって!! 光翔戦滅陣!!」

「あれは、フレンの」

「バーストアーツ!!」

「バーストアーツって何?」

「バーストアーツって言うのはね、オーバーリミッツ中だけしか奥義から繰り出さない
戦闘術なんだよ」

「なるほど、龍姫達はそのバーストアーツを修得してるのか、興味深い」

「キヤアあ!!」

「そこまで!! ネプギアの勝ちだ!! ジュード!! エステル!!」

「わかった(わかりました)」

ネプギアはユーリの幼馴染みのフレンのバーストアーツを土壇場で修得して勝負を決めたのだが、お互いの得物が碎けてしまったのである。

バーストアーツを受けてしまったユニは氣を失ったのでエステルとジュードが治療術を掛けたのである。

神機

ネプギアとの勝負に敗れたユニは気を失ったのだが、エステルとジュードの治療を施されて、目が覚めたのだった。

ミラとミュゼはあることに気づいたのである。

「あなた、変身したら、なんで小さくなるのかしら」

「アタシは好きでこんな体になったわけじゃないんです」

「どうやら、キミは無理に変身しているようだな」

「わかるんですね、ミラさんも、アタシも気づいていましたけど（実はアタシは別次元のアタシなんだからわかって当然よ）」

それはユニが女神化すると更に小さくなることに疑問に思っていたらしく、ミラは少し自分のマナを分けたのである。

龍華も魔力を少しだけ分けたのである。

「なにこの光は」

「マナよ」

「そして魔力って言う物質よ」

「体に馴染むのに時間が掛かるけど、これで女神らしい体になれるよ」

「ありがとうございます!! ミラ様!! 龍華!!」

「別に様はいらん」

「そうだけ、さっきの事は水に流そうぜ」

「はい、アタシも一緒に行きます!!」

「そうだ、はいこれ、アタシが使ってる、神機って武器なんだけど、見た目に反して軽いし、刀身を刀にしてある上に、防御する時は二つ折りにしてある盾形の装甲が自動的に開くわ、もちろん銃に変形可能だから」

「ありがとう、龍華」

「ネプギアはこの刀使って」

「はい!! わかりました!!」

「すまんが腹が減った」

「そうだね、街に戻ってご飯にしよう」

「今日はわたし達がお金出すわ」

「あ、ガルドじゃなくてゲームギョウ界はクレジットだった」

「すまん」

ミラが空腹を訴えたので急いで街に戻るのだったが、クレジットを所持していない

ジュード達の分は龍姫達が立て替えて払ったのだった。

スキット：神機

ミラ「龍華、ちよつと聞いていいか、神機はどのような機能を搭載されてるのだけ？」

龍華「あれは早い話が剣と銃と盾が一体化した武器なんですよ!!　ですから接近戦と遠距離戦も可能なんです、今は斬馬刀だけですけど」

ユーリ「そりや、便利だな　ってことはさつきまであれを左手だけで操ってたわけか」

ミラ「なるほど、アルヴィンが腰抜かしそうだな」

レイア「そうだね」

スキット：そういえば

龍姫「エステル、お城に帰らなくてもいいの？」

ユーリ「後でフレンに叱られるのオレなんだが」

エステル「帰りません!!　此処で帰ったら示しがつきません、ですから怒られてください」

龍姫「わかったよ、けど無茶はしないでね」

エステル「はい、必ず女神様達を救い出しましょう!!」

ユーリ「こうなったら、梃子でも動かねえからな」

エステル「はい!!」

凛々の明星と精霊の王達の初めてのゲームギョウ界の白の大地

龍姫達はこの次元のゲームギョウ界に四属性の精霊を生み出すべくホワイトハートことブランが統治しているルウィーにやってきたのだった。

ラストイションにいる間、アーストの機械音痴が発覚して、姫龍紗とネプギアがフル稼働したのは言うまでもないのであった。

街に入った龍姫達は探索をすることにしたのだった。

スキット：白の女神

アースト「真龍姫、ホワイトハートとはどんな奴だ？」

真龍姫「普段は大人しいんだけど、一旦キレ出すと止まらなくて、女神化すると常時キレっ放しになるんだよ!! あと胸がないこと気にしてるからミラとミュゼは気を付けてね」

ミラ「わかった」

ユーリ「そんな女神が国治めて大丈夫なのかよ？」

スキット：マジコン

ジュード「マジコンってどんなの？」

龍姫「簡単に言うと、ゲームデータを違法コピー出来るツールなんだよ」

ジュード「それって、犯罪だよ!!」

リタ「なるほどね、それがマジコンヌのシエアの補給源ってわけね」

龍姫「けど、それを許可してるのが、各国のお偉いさん達なんだよ」

ユーリ「つたく、どこ行っても権力者はやりたい放題だな」

エステル「そうですね、一刻も早く、ギョウカイ墓場から女神様を助け出さないと」

アースト「と言いながら、俺達にはシエアは関係ないのだが」

「龍姫ちゃん!!」

「武龍!!」

「ボクは御子神武龍や」

「わたしは秋龍」

「龍琥です・・・」

「礼龍ちゃんです」

「わたし、レイア・ロランド」

龍姫達は武龍達と合流したので、ユーリ達とジュード達はお互い自己紹介をしたので

ある。

今回は芽龍に変わって秋龍が龍姫達に同行することになり、得物は魔戦斧「グランヴェール」を元で作られた形はそっくりで念話が出る「デュナミス」を装備しているのである。

「そういうえば、どうして直接、ギョウカイ墓場に行かないの？」

「実は、行こうとしたら、転送装置の準備に時間が掛かるからって言われて、教会を追い出されたんだ!!」

「なるほどな、俺達の事を信用できないと言うことか」

「わたしは信用します、ですが、アイエフさん達が聞かないと思います」

「だって、アイって、三年間、連絡を超越さなかつたって言い訳していたからね」

「それって、自分が悪いのではないか」

「そうだよ!!」

「おっさんを見習って欲しいわよ」

「アイ、携帯でしか情報を手出来ないからね、それで、良く陽動作戦に引つかかってるし」

「おい、そんな奴が諜報部でいいのか」

「ダメだと思おう」

龍姫達はプラネテューヌ教会で謹慎処分をしているアイエフの諜報能力の無さに呆れて物が言えなかったのだった。

取り敢えず龍姫達はルウィー教会に向かうことにしたのだが、その道中で

「げ!! 暴力魔導士にロン毛野郎に暴力侍どもじゃねえかよ!! お、ちようどいいところにも、おいそこのガキ!!」

「え、誰? キヤアあ!!」

どうやらリンダはルウィーでピラを配っていたら、龍姫達を発見したので、こっちのゲームギョウ界のロムを人質にして逃げて行ったのだが、

「ラピード!!」

「追いかけなさい!!」

「ワン!!」

「此処は全員が行く必要がない」

「人質はボクとユーリ達で助けに行つてくるから、星龍達はミラさん達を教会に案内して」

「わかつたよ、龍姫ちゃん」

ユーリと龍菜がラピードに追いかけるように指示を出して、ジュードとレイアも一緒に追いかけて行ったので、龍姫達と武龍達とユーリ達は後を追いかけることにして、龍

菓を除く星龍達はミラたち一行をルウィー教会に案内するのだった。

そんなこんなで龍姫達はルウィー国際展示場にたどり着いたので、

「ユリー達は正面から行ってくれるかな？」

「なるほどな、オレたちが引きつけてる間に龍姫達は背後に回って」

「人質を救出するんだね、わかったよ」

「もしもの時はアタシが魔術で不意打ちするから」

「おっさんも弓で小細工しとくね」

作戦計画を立てて、龍姫達は別ルートからリンダを追い詰めることにして、ユリー達は先ほど合流式したジュード達と二匹のラピードともに正面から挟み撃ちにする作戦を決行したのだった。

そんなこんなでユリー達はリンダがいる部屋へ正面から入って行ったのである。

「おまえら!! この人質が目に入らねえのか」

「一言、言っついていいかな、人質がボクたちに意味があるの？」

「そうだな、オレたちに人質は意味ないと思うぜ!!」

「そうね、アタシたちが来る前に、始末してるのかと思っってたわ」

「おっさんも、リタっちに同意よ」

「そうですね」

「おまえらってやつは」

リンダはユーリ達の口車に乗ってしまったので、龍姫達がいることに気づいていなかったのであった。

そして知らず知らずにロムを捕まえていた左腕の力が抜けていったので、龍姫達は透かさず

「年貢の納め時や!!」

「縛に就いてね!!」

「腕が!! 折れる!!」

「ゝ(≡皿≡)ノ ウワアアン!!」

「もう大丈夫だよ」

リンダの腕を取って捻り上げて関節技で押さえつけて、ロムをレイアとエステルが保護したのである。

リンダを縄で縛り上げようとしたら、

「ロムちゃんを返せ!!」

「わあ!!」

「ぎやああ!!」

「ラムちゃん!!」

「双子ですね」

「美龍飛と姫龍紗かよ!!」

上空から杖で兜割りでリンダを攻撃した、女神化したラムが現れたのである。

ラムはラムに龍姫達に助けられたことを説明してネプギアとユニまで女神化してしまつたので、

「ロムちゃん!! 変身して!!」

「ギャツあ!! 女神が四人も、それとおまえら!! 得物をしまえ!!」

「わたし達さいきよう」

「さいきよう」

「まあいいじゃない」

「どうせ、リンボックスにはジュデイがいるから問題ねえけど」

「ネプテューヌ? ラステイション? わたし達の敵よ!!」

ラムがネプギアとユニに敵を剥き出してしまつたのだが、ロムは

「お姉ちゃん」

「わたしはあなたのお姉ちゃんじゃないわよ」

「仕方ないよ、秋龍、顔が瓜二つなんだから」

「ロムちゃんの馬鹿!!」

別次元のプランである秋龍に抱きつて寝てしまったので、ラムが嫉妬して飛んで行ってしまったので、龍姫達の案内で教会に向かったのだった。

指揮者と少女としゃべる人形

龍姫達はロムが秋龍に抱きつて寝てしまったので秋龍が背負って教会まで送ることにしたのであった。

秋龍の今の格好は和をモチーフにした紅葉色の戦闘服に、白のアンダーウェアを着こみ、七分丈のズボンを履いているのである。

髪型はツインテールに結っているのである。

龍菜はユリーのお揃いの私服を着て、黒の戦闘服のアンダーウェアを着込んで、下はユリーのお揃いのズボンとブーツを履いて、得物もニバンボシで、右手首に武醒魔導器の形をした次元デバイス「伊耶那岐命」イザナミノミコトを装着して、左手にタイラントフィストを着けているのである。

髪型はリボンを解いてロングヘアにしているのである。
相棒も一緒に来ているのである。

閑話休題

「龍姫ちゃん、大丈夫だったの?」

「うん、大丈夫だったけど、安心したのか寝ちゃったんだよ」

「もしかして、お知り合いでしたんですね!! 申し遅れました!! わたしはルウィーの
教祖の西沢ミナと申します」

「ボクは鳴流神龍姫です」

「ボクはカロルです」

「わたしはエステルって言います」

「リタ・モルディオ」

「ジュード・マティスです」

「オレはユーリ・ローウエル」

「わたしは鳴流神真龍姫!!」

「龍空翔!!」

そんなこんなで龍姫達はミナに自己紹介をして、先に教会に到着したメンバーと合流したので、これまでの経緯をエステルとジュードと龍姫が事細かにミナに説明したのだった。

「そうだったんですね、ではこちらの執務室に運んでください、実はラムちゃんが怒りながら帰って来て、引きこもってしまったんです」

「ガキンチョなんだから」

「わかったわ」

秋龍はロムをブランの執務室にあるベットに運んでいったのであった。

龍姫達はしばらくミナが戻って来るまで待つていたら二人の人物が部屋に入ってきたのである。

「ジュードゥ!! ミラゥ!!」

「エリーゼ!! それにティポ!!」

「わたしもいますよ」

「やはりローエンも来ていたのか」

「ねえ知り合いなの?」

「これはこれは失礼しました、わたしはローエン・J・イルベルトと申します、ローエンとお呼びください」

「わたしはエリーゼ・ルタスです、こっちが」

「ティポだよ」

「ボクは鳴流神龍姫」

「龍姫ちゃんの幼馴染みの獅子神星龍です」

「わたしは星龍の妹の龍菜よ」

どうやらジュード達の知り合いで燕尾服をきた老人ことローエン・J・イルベルトとカロールと同じくらしい年頃の少女ことエリーゼ・ルタスと相棒の人形ティポが龍姫達に

名乗ったので龍姫達も自己紹介をしたのであった。

龍姫達とユーリ達とジュード達がローエンとエリーゼに今の状況を事細かに説明したのであった。

スキット：報告

エリーゼ「つまり、それって」

ローエン「アイエフさんは、三年間も友であるネプテューヌさん達を助けに行かなかったのですね」

龍姫「はい、理由は連絡が三年間なかったと言うことです」

ティポ「酷いよ!!」

ジュード「僕たちが助けに行こうとしたら、警備兵を喚びつけて追い出されたんだ」

ユーリ「あの教祖、結局、力で押せつける気満々な上に、今だにシエアだとか、女神だとか、言いだしたからな」

真龍姫「それにデュークさんがシエアエナジーは通用しないって通告したのに」

ローエン「聞く耳を持たなかったんですね」

ミラ「ああ、その通りだ」

リタ「アタシたちの経験が役に立っつてのに、あのバカ教祖は!!」

龍姫「確かにエアルからできたのが星喰みって言うのなら、人間の怨念のシエアエナ

ジーで生まれたマジエコン又四天王はシエアエナジーで倒せないってことだね」
アースト「だから、オレたちは一刻も早くこの世界に精霊を誕生させないと」
ミュゼ「いけないのよ!!」

ローエン「そうだったんですね、わかりました、この爺が力を貸しましょう」
エリーゼ「わたしも精霊術で回復も」

ティポ「攻撃も出来るよ!!」

ギア「ありがとうございます!!」

世界中の迷宮

龍姫達とユーリ達とジュード達はゲームキャラの知る場所は龍姫達が世界中の迷宮と言うの思いだったので、早速向かったのだった。

しばらくしてロムが目が覚めたのだが、

「ペンがない……」

と買ったばかりのペンを落としてしまったので、そのまま街に繰り出してしまったのだった。

「あれあの子」

「どこ行くんだ、秋龍、ラピード」

「ワン!!」

「あなたも行つてあげて」

「ワン!!」

「秋龍さん!!」

街を徘徊していたロムに気づいた秋龍はそのまま走って行ってしまったので、ユーリと龍菜は相棒のラピードと一緒に付いて行くように指示を出して、ネプギアも一緒に

行ってしまったのだった。

ロムと合流したので、秋龍達は一緒にロムのペンを探していたのだが、どうやらルウィー国際展示場に落としてしまったらしく、仕方なく秋龍達はそこに向かったのである。

「ワン!!」

「これじゃない」

「うん、これわたしのペン、ありがとう、ネプギアお姉ちゃん、お姉ちゃん」

「お姉ちゃんはちよつと、名前で呼んでほしいな」

「わたしもできれば」

「うん、ネプギアちゃん、お姉ちゃん」

「わたしは結局お姉ちゃんなのね」

秋龍は身長と胸の大きさが違うだけで、顔がそっくりなためロムにお姉ちゃん扱いされてしまったのであった。

もちろん戦闘服で龍姫達同様にペったんこに見せているのである。

「ワン!!」

「そうね、早くみんな心配してるから行きましょ」

「わたしも行く!! エリーゼちゃん達の魔法やってみたいから」

「わかったわ、一緒に行きましょう、アーストさん辺りが怒ってるかもしれないし」
「アーストさんならあり得ますね」

急いでロムと一緒に龍姫達の元に戻るのであった。

秋龍達はなんとか世界中の迷宮の入り口で合流できたのだが、離脱することは龍姫達とユースリ達がジュード達に教えていたので、御咎めなしになり、ロムは龍姫達の魔術を修得したいと言うので、

「そうだこれあげる・・・」

「それはリリアルオーブ!!」

「わたしが作りました!!」

「器用だな、美龍飛も、姫龍紗も、カロール負けてられないな」

「なんでボク」

「ありがとう、姫龍紗ちゃん」

「わたしとアローサルオーブに共鳴してください、ロム様」

「ロムでいいです、ローエンさん」

「ではお言葉に甘えて、行きますよロムさん」

ジュード達の世界ではもう使うことが出来ないアイテム「リリアルオーブ」をゲームギョウ界の環境に合わせて姫龍紗が此処に来る前に双子の姉美龍飛と一緒に共同開発

したものをロムに渡して、ローエンとロムがオーブ共鳴することにしたのだった。

ロムは「ファーストエイド」を修得しました。

スキット：ピンク

エリーゼ「じい〜」

エステル「どうしたんです？ エリーゼ」

ジュード「エリーゼはピンクが好きなんだよ」

プルルート「そうだよね〜エステルちゃん、髪もピンクで、服もピンクと白だからね

〜

エリーゼ「すみません、つい見とれました」

分史世界のゲームギョウ界に現れし審判を越えし者

ルウイーのゲームキャラに精霊になってもらうために龍姫達は世界中の迷宮の奥へと魔物を倒しながら進んでいったのである。

「あなたは・・・ネプテューヌさん!! 男の方が来るなんて珍しいですね」

「わたしは鳴流神真龍姫こっちが龍空翔」

「それは失礼しました!!」

「あれ? ルウイーを統治してるのって確かブランじゃなかったっけ?」

「どうして、プラネテューヌの女神の名が出てくるんだ?」

「実は・・・」

「ネプテューヌとの約束があるんでしょ」

「はいそうです」

龍姫達は白いディスクことホワイトディスクを見つけたので早速近づいたら、真龍姫と龍空翔を見てネプテューヌと呼んだことを聞いたユーリ達とジュード達は疑問に思いついていたので龍姫がネプテューヌの約束があるのじゃないのか尋ねたら、ホワイトディスクはその通りだと言った。

龍姫達以外は約束の内容を知らないの、龍姫がユーリ達とジュード達に事細かに説明したのだった。

「なるほど、殺戮兵器を封印してるのか」

「はい、そうです」

「確か、龍姫達は此処とは違うゲームギョウ界でも同じことを言われたんだっけ」

「うん、その時はリンダが魔物を召喚して囮にして壊されたんだよ」

「お願い、ホワイトディスク、精霊になって〜」

「わらわからもお願いする」

「まさか、パープルディスクとブラックディスクですか？」

「あ、その通りだ、もうシエアではどうにもならん」

「デューク!!」

「おまえがデュークか」

精霊なつて欲しいとノームとウンディーネが頼んでいたら、龍姫達の背後から宙の戒典を持ったデュークが現れたのである。

デュークと初めて会ったメンバーは自己紹介をして、本題に入るのだった。

「なるほど、デュークさんはわかつていたのですね」

「ああ、マジエコンヌ四天王は人々の怨念と言うシエアの成り果てである以上、シエアを用いては倒せん」

「わかりました、あなた方の決意、しかと受け止めました、お願いします」

「わかったわ、始めるわよ!!」

「リタさん、わたしも手伝いましょう」

「わたしも精霊の王だからマナの流れは請け負った」

デュークの説得もあり龍姫達はホワイトディスクにマナと魔力を注ぎ込んで行ったのである。

そして

「わたしの新たな名前は」

「風の精霊、シルフってどうです?」

「わかりました、ホワイトディスク改め風の精霊、シルフですね」

緑色の服を身に纏った妖精の姿になったので、風を司るらしくエステルがシルフと名付けたのである。

封印はリタがテルカ・リュミレースの術式で封印したのだが、

「倒しても構わないだろか」

「ごめん、一機出てきちゃった」

「ひさびさに戦闘らしい戦闘出来るんだから、いいじゃねえか」

「そうよ、わたしの剣裁きも冴え渡るわ!!」

「こう見ると二人は兄妹ですね」

「だからわたしと」

「こいつは」

ユーリ&龍菜「兄妹じゃない(ねえ)」

「兄妹喧嘩は後にしてくれるか、来るぞ!!」

ハードブレイカーだけ封印から逃れてしまったので龍姫達は一斉に得物を構えたのだった。

ユーリと龍菜はほかのメンバーに容姿が似てるので弄られていたので弄られていたのであった。

もちろん龍姫と龍音もジュード達に弄られていたの言うまでもない。

「早く帰って、ご飯食べたいから」 魔神剣!!」

「霸道滅封!!」

「ほう、俺の技を出来るのか、いいだろう俺もそれに答えてやる、霸道滅封!!」

「姫龍紗も霸道滅封修得してんだな、蒼破あ!!」

「耐えられるかしら? デモンズランス・ゼロイン!!」

「こつちは、デモンズランス・ゼロ!!」

「ナハティガル涙目だな、ファイアーボール!!」

「そうだねミラ、連牙弾!!」

「我に仇成す敵を討て!! デイバインセイバー!!」

「龍姫スゴイ!!」

「龍姫さん達は、武術だけで無く、術も使いこなせるんですね、空破鉄鎧、エアプレツシャー!!」

龍姫達とユーリ達とジュード達が協力したのでそれほど時間も掛からないでハードブレイカーを倒したのだが、封印していた台座から光が飛び出してきたので、龍姫達はしばらく見ていたら、

「ルドガー!!」

「おい、しっかりしろ」

「仕方ない、教会まで運んで帰るわよ」

「わかった」

ジュード達の知人だったルドガーがどう言うわけか、ホワイトディスクのあった台座から現れたのだが、気を失っているらしく、仕方なく肩を担いで教会まで戻るのであった。

参戦、審判を越えし者

なんとかルウイーのゲームキャラをデュークの説得もあり、精霊に転生することができたのだが、ジュード達の知人でルドガー・ウイル・クルニクスが現れたのだが、気を失っていたので、龍姫達はルウイー教会に戻ってきているのであった。

「う〜ん・・・」

「気が付いた」

「ジュード!! それにみんなも、確かオレはエルの代わりにオリジンの審判で消えたはずだが」

「どうやら、おまえもオレたち同様に、この世界のゲームギョウ界の夢を見たのだろうか?」

「確か、たった一人に五人がコテンパンにされて、」

「ゲームギョウ界が壊れちゃうよ!!」

「うん、その通りだ、そうだ、オレの名はルドガー・ウイル・クルニクスだ、ルドガーでいい」

「ボクは次元探偵「流星の絆」のリーダーの鳴流神龍姫です」

「ボクはギルド「凜々の明星」カロール・カペル、首領だよ」

「オレは凜々の明星のユーリ・ローウエル」

「わたしはエステリーゼ・シデス・ヒュラツセインです、エステルって呼んでください」
ルドガーが目を覚ましたので改めて龍姫達とユーリ達は自己紹介をして、ルドガーにこれまでの経緯を説明したのだった。

龍姫達の説明を聞いたルドガーは快く承諾してくれたのであった。

得物である「双剣」・「鎚」・「二丁拳銃」は手元にあつたので、前線に復帰できると言うてくれたのであった。

「そうだ、輝龍達に連絡しないと、お願い!! イルミナル!!」

「マスター!! かしこまりました!!」

「龍姫、どう言う仕組みだ?」

「すまんが俺の前で機械の説明はよしてくれ」

「龍姫ちゃん!! そっちは大丈夫みたいだね」

「うん、次はリーンボックスに行くから教会で合流できる?」

「もちろんよ龍姫」

「ジユデイも大丈夫みたいだな」

「何を言っているのですのお兄ちゃんは、この神楽堂家の長女、神楽堂神子龍が一緒なの

ですから」

「お兄ちゃんだって」

「笑っちゃダメですよ、レイヴン」

「おまえらは〜」

「もう神子龍つたら、教会で防衛してるんだね」

龍姫は猫の鈴の形を象った紫色のクリスタルが付いたチョーカー型次元デバイス「イルミナル」で先にリーンボックスに行っている輝龍達に連絡を取ることにしたので、イルミナルを起動させて空中にスクリーンを表示し、そこに輝龍達とジュデイスが映ったのでミラがどう言う仕組みなのか尋ねたのだが、アーストの機械音痴が炸裂したので、気を取り直して輝龍達にリーンボックスの現状を説明してもらったら、まだリンダ達は来ていないと言うのだった。

「神託の神子」の服を戦闘服の素材で作った服を身に纏った神子龍はユーリにお兄ちゃんと呼んでからかって、レイヴンとエステルが笑いを堪えていたのであった。

龍姫達はミナの計らいで使われていない宿舎に泊まることにしたのだった。

緑の大地

ルウィー教会で一晩休んだ龍姫達はリーンボックスに向かうためにラステイションの船着場に到着したのであった。

ルドガーが仲間になった直後にラムの部屋に秋龍が行って、

「気に入らねえなら、ネプギアのように意気込むか、飛び出して勝手に決めるかだ」

と諭したら、一緒に行くと言いだして、ラムもパーティーメンバーに入り、ミラとミュゼとローエンとエリーゼとリタから魔術を教わりながら修得に勤しんでいるのである。

閑話休題

スキット：乗船

龍姫「今回は乗れたね!!」

ユーリ「なんだ、前回は乗れなかったのか」

星龍「前回はアイちゃん達と一緒にいたからね」

レイヴン「そうだったの」

龍ラピード「ワン!!」

龍菜「あの二人がいたら、乗れてないって」

レイア「だってエステルより足が遅そうだもん」

リタ「そうね、アタシとエステルが助太刀に入る前なんて、リンダってやつ相手にコテンパンにされていた上に、ネプギアが女神化状態でやつと戦えるレベルだったわよ!!
何のためのカタールなのよ!!」

ユーリ「つたく、ギアは兎も角、あいつらはダメだろ」

「ユーリイイイ!!」

「パティ!! どうしたの、確か、海精の牙を建て直して、ギルドやつてるんじゃないやなかつた?」

「実はもう、子分たちがウチを送り出してくれんたんじゃ、なんせウチもあの夢を見たからじゃ」

「そうか、またよろしくな、パティ」

「そのつもりじゃ」

「知り合いか?」

「うちはパティ・フルールじゃ」

なんとパティが龍姫達の乗船している船に乗り合わせていたようで、ジュード達に自己紹介をして、そろそろリーンボックスの船着場に到着したのであった。

リーンボックスに上陸できたので龍姫達はリーンボックス教会に行こうとしたら、

「なんでお前らがいるんだよ!!」

「それでチュー!!」

「誰じゃ? ユーリ」

「こいつらは犯罪組織の雑魚だ」

「うん、インカローズとも言う」

「言わねえよ!!」

「さっさと逃げるチュー!!」

「待て〜!!」

「おい、リタ、教会に行くぞ」

どうやらリンダ達と一緒にだったのだが、龍姫達を見るなり足早に逃げて行ってしまったので、リタが追いかけて行ったのだが、逃げられてしまったので、龍姫達はリーンボックス教会に行くのだった。

そんなこんなで龍姫達はリーンボックス教会に到着したのであった。

「龍姫ちゃん!! 星龍ちゃん!! 武龍ちゃん!!」

「ユーリも元気みたいね」

「ジューデイも元気みたいだしな」

「もしかしてお知り合いの方でしたのね、わたくしはリーンボックス教会の教祖、箱崎チ

カと申します、ゴフ!!」

「大丈夫ですか、ボクは医者です」

「容態はどうだ？」

「どうやら、喘息みたいだね、少し休めば直に良くなるよ」

「ありがとうございます!!」

「いえいえ、当たり前のことでしたますから」

教会の中に入った龍姫達は輝龍達と合流したので、無事を確認していたら、リーンボックスの教祖のチカが自己紹介をした。

咳き込んだのでジュードが脈を取ったら少し安静にしていれば良くなるいいのであった。

チカはネプギアギョウカイ墓場で起きた出来事を尋ねたのである。

「なるほど、お姉さまそこに幽閉されてるんですね」

「はい」

「輝龍、大剣を担いだ、銃を使う男が来なかったか？」

「いや、来てませんよ、ミラさん」

「だって、アルヴィン、あの夢見なかったって言ってたからね」

「まあ、居てもいなくていい男だから別に構わんが」

「そうだよね、龍華の方が上だもんね」

「そうなのか、龍華？」

「昔は、ライフルしか扱えなかったんですけど、ある時を境に夢で斬馬刀を得物にして、左に神機を持つて戦うアタシの夢をみたんです、その翌日に体が急激に成長したんです（本当は星龍お姉ちゃんに魔力を分けてもらって魔王に覚醒しちゃったからなんだけど）」

「なるほど」

ミラは輝龍にリーンボックス教会にアルヴィンと言う男が訪ねて来なかったか聞いたのだが、どうやらゲームギョウ界に送られていなかったのだった。

アンダーインヴァースに

リーンボックス教会に到着した龍姫達は輝龍達と合流できたのでこれからの事を話し合っていたのである。

チカからガベイン草原に調査に行っているリーンボックス特捜部のケイブを迎えに行ってほしいと頼まれたので、龍音とレイアとパティと候補生一同が行くことになったのである。

「ネプギアさん、一応、格下相手でも油断しないでね」

「わかったよ、龍音ちゃん」

「あの人じゃない？ 行ってみよう!!」

「待ってください!! レイアさん!!」

「レイアお姉ちゃん・・・」

「足が速い」

どうやらケイブラしき人を見つけたので、一目散にレイアが走って行ったので、龍音と候補生一同は後を追いかけることにしたのである。

その人物は戦闘中だったのだが、背後から魔物が迫っていることに気づいていなかった

たので

「此処はウチに任せるのじゃ!!」

と言つてパティがお得意のユニ顔負けの射撃を披露したのであった。

放たれた銃弾は寸分も狂わず背後から迫っていた魔物に命中して、青い光になつて消えていったのであった。

「ありがとう、わたしも背後のから来ているのに気付かなかつたわ、わたしはリーンボックス特捜部所属、ケイブ」

「わたしはプラネテューヌの女神候補生のネプギアです」

「ウチはパティ・フルールじゃ」

「わたしはレイア・ロランド」

「ラストেশヨンの女神候補生のユニです」

「どうやら、その人物こそ探していたリーンボックス特捜部のケイブだったのでお互い自己紹介をして教会に戻るのであった。

一方その頃

「すいません、食堂と厨房を借りちゃつて」

「いいんですわ、あなたたちはわたくしの命の恩人ですから」

「龍姫!! ジュード!! 星龍!! ユーリ!! 御代わりはまだか?」

「ミラ、あなたどれだけ食べるの!!」

「スゴイ量ですね」

「うん、お姉ちゃん達が作ったあれだけの量のおからハンバーグにコロツケをたつた数人で完食するなんて」

「オレの分残してくれ!!」

「それにレイアたちの分は後で作らないと」

龍姫達はリーンボックス教会の食堂をお借りして昼食を摂っていたのだが、ミラとエリーゼが大食いだったので、料理が得意な龍姫達とユーリとジュードとルドガーが厨房でフル稼働していたのだった。

しばらくしてケイブを迎えに行ったメンバーが帰ってきたので龍姫達は一緒に昼食を摂ることにしたのであった。

しばらく休憩した後、ミラがマグマがある場所にゲームキャラの気配を感じたらしく龍姫達はアンダーインヴァースに向かったのだった。

アンダーインヴァースに到着した龍姫達は道なりに進みながらあることをユーリ達とジュード達に教えたのである。

それは以前光龍と姫龍紗がプラネテューヌの女神としていたゲームギョウ界でアンダーインヴァースを道なりに進んでいたら上からスライヌと言う魔物に襲われたこと

を教えたのである。

「エステル!! 下がれ!!」

「ミラ!! 下がって!!」

「ユーリ!! カロル!! ラピード!!」

「ジュード!! アースト!! ローエン!! ルドガー!!」

「大丈夫だ、こういうことは」

「男の」

「仕事」

「です」

「ワウ!!」

「おっさんは〜!!」

今回もスライヌの群れが上から襲ってきたので男性陣が前に出て、上から襲ってきたスライヌを片っ端に

「守護方陣!!」

「衝波魔神拳!!」

「裂旋スマツシュ!!」

「行きますよ、空破鉄鎚!! エアプレッシャー!!」

「サイカトリス!!」

「猛招来!!」

「ヌラ〜」

そんなこんなであっさり片付けて、先を急ぐのであった。

スキット：スライヌ

ミラ「あんな魔物見たことないぞ、あれがゲームギョウ界に生息している」

エリーゼ「スライヌですか〜」

龍姫「そうだよ、単体ならそれほど気にならないんだけど」

龍音「それがですね、スライヌは繁殖力がすごいので短い期間で」

ユーリ「あんなに増えるのかよ!!」

カロール「もう懲り懲りだよ!!」

ゲームギョウ界のイフリート

最後のゲームキャラを求めて龍姫達はアンダーインヴァースを道なりに進んでいたら、聞き覚えのある声が聞こえてきたので耳を澄まして聞くことにしたのである。

「なんで、あの暴力集団が一緒にいるんだ!!」

「なにしてるんでちゆか、こっちはゲームキャラを捕まえたでちゆよ!!」

「わたしをどうするのですか!!」

どうやらもうリンダ達の手ゲームキャラが墜ちてしまったので、ユーリが近くに落ちてた小石を拾ってリンダとワレチューの額目掛けて投げて命中させたのであった。

「痛て〜!! 誰だ!! このリンダ様に石ぶつけたのは!!」

「観念しな」

「インカローズ!!」

「おまえら!! 名前を覚えやがれ!! こうなったら纏めて掛かって来い!!」

ユーリに石をぶつけられたのが余程悔しかったのか自棄になったしまつた上に龍姫達を纏めて相手をしてやると言い出したので龍姫達は一斉に得物を構えたのである。

「後悔するなら今のうちだ!! 魔神剣!!」

「そうですね、アーストさん!! 魔神剣・双牙!!」

「ちよつと飛ばすわよ!! 怒りの穂先を変え、前途を阻む障害を貫け!! ロックブレイク!!」

「風よ起これ!! サツと吹いて、サツと斬れ!! ウインドカッター!!」

「龍音の嬢ちゃん!! おっさんの詠唱盗まないでよ!!」

「おっさん、こんな時に何呑気なこと言ってるんだ!! 絶風刃!!」

「魔神連牙斬!!」

「スゴイ、単独で一度に五発も斬撃を放てるのか!! 刺宴!!」

「ぎゃあああ!!」

「ヂュ〜!!」

リンダ達は斬撃と岩と打撃の雨霰を喰らって悲鳴を上げていたのだった。

「飛ばして行きますよ!!」

ネプギアが女神化しないでオーバーリミッツLEVELを発動して、

「虎牙破斬!!」

斬り上げて斬り下ろし

「魔王炎撃波!!」

刀身に炎を纏わせて薙ぎ払い

「猛虎連撃破!!」

斬り上げて斬り下ろす動作を八回繰り返して

「荒ぶる大地です!! 光翔戦滅陣・震斬!!」

地面から発生した斬撃で攻撃するバーストアーツをお見舞いした。

「スゴイ、あれがバーストアーツ」

「あれはユーリの幼馴染みのフレンのバーストアーツですよ」

「ギア見ると、女版フレンだな」

「ぎゃあっあ!!」

そんなこんなで龍姫達はリンダ達からグリーンディスクを取り返したのである。

「グリーンディスク、お願いです、精霊になってください!!」

「まさか、ホワイトディスクですか!! それにパープルディスクも」

「こうなったら、これで始末してやる!!」

今ここに三属性の精霊とゲームキャラが勢ぞろいしたのであったのだがリンダが懐から黒いディスクを取り出して掲げたら光り出して、光が収まったらリンダ達は魔物と化したのだ。

この時リンダ達は龍姫達とユーリ達とジュード達が魔物退治に関してはプロ級だったことに後悔することを知る由もなかった。

「喰らえ!!」

「魔物だったら、遠慮はいらえな!! 円閃牙!!」

「そうですね、ユーリさん!! レクイエム!!」

「ぎゃああ!!」

「ぢゅ!!」

結局リンダ達は龍姫達とユーリ達とジュード達にコテンパンにされていたのだった。

その時だったどこからともなく歌声が聞こえてきたのである。

「あれ、元に戻ってやがる!!」

「一曲聴かせてもらおうかしら」

「それじゃあ、ボクもデュエツトしていいかな?」

「デュエツトは大歓迎だよ!!」

「キミと離れてく☒ 僕を探してく☒ 幾千の夜を歩いたく(ゝゝ♪」

「龍姫、歌、うまいんだな」

「そうですね」

「あれ、なんか力が漲ってきたよ」

「響け!! 壮麗なる歌声!! ホーリーソング!!」

「龍姫の術は歌でも術が発動できるのか」

龍姫はその歌声の主共にデュエットをして補助魔術を発動させたのである。

リンダ達はゲームキャラを諦めて逃げて行ったのであった。

ネプギアが歌声の主に近付いたら、物陰に一目差に隠れてしまったのだった。

どうやら歌を歌っている間は大丈夫だけど、歌い終わると我に戻ってしまったて、軽い対人恐怖症に陥るのであった。

「わかりました」

「始めるわよ!!」

「行きますよ、みなさん!!」

グリーンディスクの承諾を得た龍姫達とユーリ達とジユード達はマナと魔力を注ぎ込んでいったのであった。

そしてついに

「我の名は」

「イフリートだ!!」

「そうか、我はグリーンディスク改めイフリートとなることしよう」

何故か女性の姿で炎を纏っていたので龍姫達はイフリートと命名して教会に戻ることにしたのだった。

教会でチカにグリーンディスクがイフリートに転生したことを報告したら、快く承諾

して龍姫達とユーリ達とジュード達を今日行われる先ほど会った人物でリンボックスの歌姫5pb.のライブを著名人専用席に招待してくれたのだった。

「ボクも一緒に行きます!! お願いします、どうか連れて行ってください」

「あなた」

「おまえが自分で決めたんだろ、オレたちに断る理由はないぜ」

「ありがとうございます!!」

5pb.も龍姫達とユーリ達とジュード達ともに女神達救出にどうこすることになり、龍姫達とユーリ達とジュード達は今夜行われるライブの会場に向かったのだった。

やはりこうなる

チカから5pb.のライブに招待された龍姫達とユーリ達とジュード達は係員に案内されるがままついて行ったらVIP席に案内されたのである。

「みんなく!! 5pb.だよ!!」

「5pb.ちゃん!!」

「おっさんも応援するよ!!」

「これがライブなんです!! フレンも連れてきたかったです!!」

「あいついたら、入り口で突っ立ったまま警備してるぞ」

「まあいいじゃない、楽しんだもん勝ちだよ!!」

ユーリ達はライブを初めて見るようだったのだが、エステルがフレンも連れて来たかったのだった。

しばらくして龍姫達はみんなの目を盗んで席を立てある場所に向かったのだった。

それはもちろん

「取り敢えず、この制服に着替えたらいよいよね!!」

「何してるんですか? 龍姫の服かわいいです!!」

「エステル!! リタ!! レイアにエリーゼまで!!」

「ずるいです!! 龍姫達だけでステージに立つなんて!!」

「そうですよ、わたしとは親友なんですから!!」

「わかった、それじゃあ、イルミナル!!」

チカが観客の大半が男性が占めている所に男性アイドルユニットを送り込むことに気づいた龍姫達は学校の制服にリライズ機能で即座に着替えたら、その場にエステル・リタ・エリーゼ・レイアが現れたので仕方なく龍姫達はリライズ機能でエステル達を着替えてもらったのである。

「スゴイです!!」これが龍姫達の今来ている制服なんですわね!!」

「アタシまで着替えるのね」

「これかわいいです」

どうやら気に入ってくれたのである。

「エステルさん達もステージに立つんですかΣ(。Д。)!!」

「姫龍紗はピンクのイヌ耳の歌姫なんですわね!! かわいいです」

姫龍紗も美龍飛と同じくイヌ耳のお姫様の歌姫衣裳に着替えてステージ裏にスタンバイしたのである。

やはり龍姫達の予想通りステージ上では

「5 p b . ちゃん出せ!!」

「おっさんも!!」

「こうなったら行つてきます!!」

「ギア!! 待て!!」

「ネプギア!!」

男性アイドルユニットが登場して観客がブーイング嵐を起こしている中にネプギア達候補生一同がステージに上がってしまったのだが、

「どうしよう!! 何も考えていなかったよ〜。(。ロ。*) ツ三ヅ (*。ロ。)ノ」
そんな時だった

「意味不明の文字のられつく☒ 教えてコンパイラ〜♪」

「嬢ちゃん達!!」

「エステルの奴」

「レイアにエリーゼまで」

「リタまで踊ってるよ」

颯爽と龍姫達は曲に合わせて歌いながらステージに登場したのである。

リタは詠唱でいつもしてる動作なのだが踊って見えるのである。

それを見る男が見ていたのである。

「エステリーゼ様!! 龍姫様まで!! こうしちや居られない!!」

なんとテルカ・リュミレースにいるはずのフレンがライブ会場の近くの高い台からステージに立つ龍姫達を発見してしまったのだった。

「おゝ!! あのピンクの猫耳の女の子誰だ?」

「それにあのクルクル踊っている女の子もいいな」

「どうも!! わたしはエステリーゼ・シデス・ヒュラツセイんです!! エステルって呼んでください!!」

「わたし!! レイア・ロランド!! みんなよろしく!!」

「リタ・モルディオ!!」

「エリーゼ・ルタスです」

「真龍姫と」

「龍空翔だよ!!」

「ティポだよ!!」

「おゝ!! 双子の猫耳の歌姫最高!!」

そしてオオトリを飾るのは

「おゝ!! 犬耳ウタヒメ最高!!」

「わたしは鳴流神姫龍紗です!!」

姫龍紗の持ち歌で事なきを得てライブは幕を閉じたのであった。

騎士団長様

龍姫達の活躍により5 p.b.のライブは無事に終了したのであった。

今龍姫達は宿泊部屋で一泊してチカに挨拶を済まそうと向かったのだった。

「昨日のライブは大成功だったわ!!」

「おい、おまえの所為で」

「大騒ぎになりかけた」

「わよ!!」

「はあく」

暴動が起きかけたのは言うまでもないのだった。

そこにある人物が入ってきたのだった。

「エステリーゼ様!!」

「フレン!!」

「おまえ!! 騎士団どうしたんだよ?」

「ヨードル殿下からエステリーゼ様達がゲームギョウ界に向かったと聞かされたからね、騎士団の方はソディア達が請け負ってくれている」

「騎士団長様自らお迎えに来たと」

「わたしまだ帰りません!!」

「え、騎士団長!!」

そう何を隠そうユーリの幼馴染みであり現テルカ・リュミレースの帝国騎士団長であるフレンがああのだらけでエステルを迎えにきたのだった。

もちろんジュード達と候補生一同は初めてフレンに会うので驚いていたのである。

「エステリーゼ様?」

「ごめんなさい、わたしはテルカ・リュミレースの帝国副帝なんです」

「それって」

「つまり」

「王女」

ジュード達&候補生一同「様(。D。)ナンダツテく!!」

「おまえら、落ち着け!!」

やはり鳩が豆鉄砲を食ったようになってしまった上にレイアとエリーゼと候補生一同はてんやわんやになっていたのでユーリ達とジュードと龍姫達がなんとか沈めたのだった。

「申し遅れました、わたくしはテルカ・リュミレースの帝国現騎士団長閣下、フレン・シー

「フオと申します」

「俺はアースト・アウトウエイだ!!」

「ジュード・マティスです」

「ルドガー・ウイル・クルニクスです」

「ミラⅡマクススエルだ」

「ローエン・J・イルベルトと申します、気軽にローエンとお呼びください」

「プラネテューヌの女神候補生のネプギアと言います」

「ラストイシヨンの女神候補生のユニです」

「ロムです……」

「ラムちゃん……」

取り敢えずお互いの自己紹介を終えたのであるがやはり候補生一同は堅くなつてしまつたのと言うまでもない。

一行はプラネテューヌ教会に戻ろうとしたらネプギアのNギアが鳴り出したので、

「すいません、ネプギアさんいまどこですか?」

「なんだ、今になってオレたちに用か、教祖様」

「ほう、おまえがプラネテューヌの教祖か、如何にもできそうにないな」

「で用つてなんですか?」

「はい、プラネテューヌの南西に位置する島で」

「どうせ、犯罪組織を潰して来いってことでしょう」

「わかりました」

「あの教祖は考えてるんだ」

「仕方ないわね、その島に行かないとこの子達のおねえさん達を助けに行くための許可が下りないんでしよう？」

「行こう、その島に」

プラネテューヌの南西にある島で犯罪組織が拠点を築こうとしているとイストワールから今になって連絡してきたので、龍姫達とユーリ達とジュード達は呆れ果てていたのだった。

仕方なく龍姫達とユーリ達とジュード達はその島に向かうのであった。

スキット：ライブ

エステル「緊張しました」

フレン「お願いですから、無茶は」

ユーリ「今の姫様に言っても無駄だ」

レイア「見るのとステージに立って見るのって」

エリーゼ「ちがいますね」

ジュード「レイアもエリーゼもかわいかったよ」

ギア「それにしても龍姫さん達の衣裳かわいいですね」

龍姫「そうかな、制服来て、猫耳のカチューシャ付けてるだけだけど」

リタ「ニャー!!」

カロール「リタが猫になってるよ!!」

龍音「そういえば、リタさん猫に目がなかつたんだった」

リユウオウ

イストワールからプラネテューヌの南西に位置する島で犯罪組織が拠点を築こうとしていたと言うので、龍姫達とユーリ達とジュード達は否応なしに到着したのだった。

スキット：あれが

フレン「ユーリ、あれが」

ユーリ「あ、プラネテューヌの教祖様だ」

ミラ「本当に女神達を助ける気があるのか？」

フレン「それはどうして？」

龍姫「そうか、フレンさんは知らなかったね、実は三年前に女神達とネプギアがギョウカイ墓場に犯罪組織を討伐しに行つて、たった一人に完膚なきまでに叩きのめされて、今も幽閉されてるんです」

リタ「三年も費やして、救出したのが、ネプギアだけしか助けられなかったって言うて言い訳してきたわ」

ジュード「確か前置きが、三年も連絡を寄越さなかったって言うてたんですよ」

フレン「尚更、助けに行かなければいけないじゃないか!!」

ユーリ「それが、オレたちがギョウカイ墓場に乗り込んで助けてやるって言ったなら、シエアがどうか、女神がどうか言つて、無理やり職員を喚けてオレたちを追い出したんだよ!!」

ミュゼ「シエアって確か、人の心だったわね、女神って不便ね」

アースト「人と言うのは、次第に神を頼らずに生きていけると思うのだが」

パティ「何かやらかすのはいつも人間じゃ、それがわかっておらんの」

龍菜「そうね、取り敢えず、この仕事終わらせてプラネテューヌに帰るわよ」

しばらく道なりに歩いていると小さな街が見えてきたのである。

龍姫達とユーリ達とジュード達は近づいて見ると一人の剣士が戦っていたので、話を聞くと、

「噂は聞いてるよ確か、流星の絆と凛々の明星だったかな、済まないけど、此処を離れるわけには行かないんだ、この先にあるノーコネデイションと言うダンジョンを犯罪組織の拠点にしてるから、それとアタシはファルコム、それじゃあ、よろしくお願いするね」

ファルコムは龍姫達とユーリ達とジュード達にノーコネデイションにいる犯罪組織を潰して欲しいと頼まれたのだったのである。

そんなこんなで龍姫達はノーコネデイションに潜入して突き進んでいったのである。

結局最深部でリンダ達を発見したのであった。

リンダは街を落とせないことに苛立ちを隠せないでいたのであった。

「へえ、現場任されてるんだな、犯罪組織の下っ端さんよ!!」

「無駄な抵抗を辞めて、大人しく武器を捨てて、投降しろ!!」

「観念した方がいいよ!! インカローズ!!」

「好き勝手言いやがって!! おまけに鎧来た騎士までいるのかよ!! もう自棄だ!!

やっちまえ!! リュウオウ!!」

「なんだ、円盤から魔物が」

「あいつらは、円盤に魔物を封じて無理やりに使役してるんだよ!!」

「もう、あの者は、元には戻らん、救ってやってくれ」

「こっちはそのつもりだよ!!」

案の定リンダは龍姫達とユーリ達とジュード達にからかわれたので自棄を起こしてディスクを取り出して中からリュウオウを呼び出して一目散に逃げて行ったので、龍菜とユーリはラピードに追わせてリュウオウを倒す為、一斉に得物を構えたのだった。

「ぐおお!!」

「つたく、あの教祖は変な仕事押し付けやがって!! 牙狼撃!!」

「そうだよ!! 折角四属性揃ったって言うのに!! 狂気と強欲の水流、旋嵐の如く逆巻

く!! タイダルウェーブ!!」

「そうよね、ブルースフィア!!」

「全くだ!! スプラッシュ!!」

「これにはユリー達に同意するよ、魔神剣!!」

「イーすんさん、もう龍姫さん達に謝った方がいいような、虎牙破斬!!」

此処にはいないイストワールに文句を言いながらリュウオウに攻撃を繰り返していったのであった。

そろそろ止めを刺す頃合だったので、

「飛ばして行きますか!!」

「あれ? わたしのオーバーリミッツと色が違います」

「簡単に説明すると、三段階目のオーバーリミッツだよ」

龍姫はオーバーリミッツLv3を発動させてリュウオウに攻撃を仕掛けに行つたのである。

「決めるよ!! 龍姫!!」

「わかってるよ!! ユリー!! 虎牙破斬!!」

斬り上げて斬り下ろし、

「閃空裂破!!」

回転斬りで巻き上げて突きで追撃して

「襲爪雷斬破!!」

斬り上げて雷を落として虎牙連斬を叩き込んで

「これがボクが修得したバーストアーツ!! 腹括ってね!! 天龍凰牙!!」

「あれ、ユーリのバーストアーツに似てます」

「だっってお姉ちゃん、元々は天狼滅牙を繰り出していましたから」

「なるほどな、改良してあの形にしたんだな」

龍姫はユーリの天狼滅牙を自分なりに考えた結果、震脚で怯ませて、滅多斬りにしながら、蹴りと殴打を叩き込む形に改良したのだった。

「元祖には劣るけど、お終いにしようよ!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り裂き仇名す者を微塵に砕く!! 決まった!! 漸毅狼影陣!!」

「どこがオレに劣ってるんだよ!!」

「龍姫が決めると」

「女であるわたしも」

「見とれちゃう」

「です」

龍姫はユーリの秘奥義を本人の目の前でリュウオウにお見舞いしてリュウオウは光

になつて消えて逝つたのだつた。

結局ラピードでもリンダに逃げられてしまったのであつた。

そんなこんなで龍姫達はファルコムに報告した後プラネテューヌ教会に戻るのであつた。

スキット：龍姫版

レイヴン「へえ、龍姫ちゃんも青年の秘奥義できるのね」

龍姫「これでもまだユーリほどじゃないですよ」

ユーリ「あれのどこがオレより劣るんだよ」

フレン「そうですよ、謙虚にならなくていいですよ」

ローエン「フレンさんの言う通りです」

エリーゼ「そうですよ、わたしは女の人であんな技出来る人初めて見るんです」

レイア「龍姫が出来るなら、わたしも新しい秘奥義覚えよう!!」

アースト「本末転倒だな」

龍菜「わたしも漸毅狼影陣を秘奥義として修得してるわ」

ユーリ「おまえもかよ」

真龍姫「こうなるんだね」

指揮者とトリック・ザ・ハード

イストワールからの突然の依頼を終えた龍姫達とユーリ達とジュード達はなんとかプラネテューヌ教会に戻って来る事が出来たのだった。

「あのくみなさん、顔が怖いですよ」

「なについて、おまえが遠回りさせたんだだろうが!!」

「その通りだ!!」

「まあいい、済んだことは置いといて本題に入ろうか」

教会に入った一部のメンバーはイストワールのやり方に呆れてしまったのだった。

「どうしたの？」

「ジュード先生、助けて」

「ルウイーのシエアが奪われたんや!!」

「なるほどな、シエアが無くなれば、女神は死ぬからな」

「取り敢えず、ジュード頼めるか？」

「うん」

ロムとラムが倒れ込んでしまったので医師免許を持っているジュードが診察してる

間、龍姫達はあることを考えていたのだった。

「マジエコンヌ又四天王の一人で、幼女が好きなのがいるんだけど、アンチクリスタルって物で女神の力を封じて、操ることが可能なんだ」

「簡単だな、人間と精霊には効かないのだな」

「なるほど、この二人を狙ってる以上、人間と精霊でルウィー教会に向かえばいいのだな」

「みんなで行く必要はないわ、此処は二手に別れましょう」

龍姫達は以前トリック・ザ・ハードが仕掛けて来た手口をユーリ達に教えていたのである。

ルウィー教会にフレン・龍ラピード・レイア・ローエンで行くことになったのである。龍姫達からは龍音・天龍・神子龍が同行することになったのである。

後のメンバーはプラネテューヌ教会に残り、ジュードの手伝いもとい防衛に徹することになったのである。

そんなこんなで選抜メンバーはルウィー教会に向かったのだった。

ルウィー教会に到着した選抜メンバーは中に入ると

「ミナさん!! しっかりしてください!!」

「大丈夫です、こここの所、不眠不休が続いています」

「シエアがないだけでこんなにも忙しくなるの」

「取り敢えず、仮眠室へ運びましょう!!」

ミナが蹲っていたので選抜メンバーが駆け寄ったら不眠不休で寝ていないと言うのだった。

取り敢えず仮眠室に運んだのである。

「やはり、この世界はシエアと言う、人の心で動いてるんですね」

「そうですね、けどそれをわたくしたちが天界から変えるように事件を解決しなければ、この次元のゲームギョウ界にマナと魔力を送れませんわ」

「その通りです、神子龍さん」

「確かにその通りです」

ミナを運んだメンバーはこの世界にマナと魔力を送るため事件解決に決意を新たにしていたのだった。

そんな時だった

「ロムちゃん!! ラムちゃん!!」

「ほう、これは大きな、ぬいぐるみですね」

「そうですね」

「あれ? 誰だ!! お前らは!! 俺はマジエコノヌ四天王のトリック様だ!!」

「生憎、不法侵入するような者に名乗る名だの無い!!」

「男と熟女しかおらんから帰る!! 二桁は熟女だから」

「待ってくださいよ!! トリック様!!」

「どうやら、守備範囲が狭いんですね」

「もう、わたしがいる意味あるの!!」

トリック・ザ・ハードが乗り込んできたのだが、お目当てのロムとラムがルウイー教会ではなくプラネテューヌ教会にいたることを調べてなかったので、選抜メンバーと鉢合わせて何もしないで帰って行ったのであった。

用が済んだので選抜メンバーはプラネテューヌ教会に戻るのであった。

明星と誤った正義と医学者と女神候補生

ルウィーでトリック・ザ・ハードとのご対面を果たしたメンバーはプラネテューヌ教会に戻ってきたのだが、また厄介ごとに巻き込まれたのであった。

今度はラスティションの女神候補生のユニにブレイブ・ザ・ハードから果し状が来たらしく、ユニとネプギアが指定されたゾーンオブエンドレスに向かったのだった。

「流星にお二人だけではまずいですね」

「だったら、わたしが行きます」

「アタシも行くわ!!」

「オレも行ってやるか」

「ありがとう、ユーリ!!」

「気にすんなって、オレはブレイブ・ザ・ハードって奴の顔を拝みたいだけだ」

「ボクも行くよ!!」

姫龍紗・龍華・ユーリ・ジュードは二人に気づかれないように後をつけるのだった。

「待っていたぞ、黒の女神候補生」

「アンタがブレイブ・ザ・ハード」

先に指定されていた場所に到着したネプギア達はブレイブ・ザ・ハードと対面を果たして、ブレイブ・ザ・ハードはユニに女神の統治では貧しい子供たちは浮かばれないと言い、そして女神はそれに目を瞑っているだけと言いつ放ったのである。

それを聞いたネプギアが黙っておらず

「だからと言ってお姉ちゃん達を幽閉して良いはずがありません!!」

「いいだろう、その身に刻んでやる!!」

こうして二人の候補生とマジエコンヌ四天王のブレイブ・ザ・ハードとの戦いの火蓋が切つて落とされたのである。

「魔神剣!!」

「魔神剣!!」

「く!! これはシエアではないのか」

ネプギアは龍姫達とユリー達とジュード達が修得して伝授された術技を繰り出しながら、ユニも同じく自分なりに試行錯誤して修得し龍華から借りている武器「神機」を剣ままで剣技を繰り出してブレイブ・ザ・ハードをシエアエナジーではなく、龍姫達とユリー達とジュード達同様にマナと魔力で放っていたのである。

「これでどうだ!! ブレイブソード!!」

「く!!」

ブレイブ・ザ・ハードは大剣に炎纏わせて龍姫達が修得している魔王炎撃波のように薙ぎ払ってきたが、二人は龍姫達とユリ達とジュード達との時間の中で培っていた能力で難なくかわしたのである。

「もう始まつてるのか」

「ネプギアちゃん!! ユニちゃん!!」

「助けに来たわ!!」

「どうやら間に合ったみたいだね!!」

「おまえらは誰だ!!」

「生憎、あなたのような人に名乗る名前はありません!!」

「そう言うことだから」

「そうか、いいだろう、纏めて掛かって来い!!」

そこに姫龍紗・龍華・ユリ・ジュードが駆けつけたのである。

ブレイブ・ザ・ハードは纏めて掛かって来いと言うのだった。

「アンタがブレイブ・ザ・ハードか、勝手に正義語ってるらしいじゃねえか!! 蒼破刃!!」

「それでも、わたしは負けません!! 魔王炎撃波!!」

「そうよ、正義って言葉、軽々しく使わないでほしいわ!! 魔王炎撃波!!」

「そうだよ!! いくら貧しくても人は死ぬ気でやればどんな困難でも乗り越えられるだ

!! 魔神拳!!」

やはり加勢に来てくれた四人はブレイブ・ザ・ハードの實力を上回り、

「これほどとはな、いつかまた会おう、さらばだ!!」

ブレイブ・ザ・ハードのライオンのエムブレムに亀裂が入り、ブレイブ・ザ・ハードはまた会うのが楽しみだと言い、テレポートしていったのだった。

「さてとみんなの所に戻るぞ」

「はい!!」

プラネテューヌ教会に戻るのであった。

いざ!! ギョウカイ墓場へ

なんとかマジエコン又四天王の二人を退けた龍姫達とユウリ達とジュード達は今プ
ラネテューヌ教会に集まっていたのである。

「そうか、もう出て来れるのだな、出て来い四大よ!!」

「お願いします!!」

「ええ!! 精霊が十二体も」

「ほう、エステルも薄々気づいていたがキミも四大と共にいるのだな」

「はい、力を制御してもらってるんです」

「これだけの精霊がいるんだ、文句ないわよね」

「わかりました、ギョウカイ墓場に行くことを許可します」

「今日はゆっくり休んで明日、乗り込むぞ、いいな!!」

今此処に三つの世界の精霊が終結したのである。

これを見たイストワールとアイエフは腰を抜かして龍姫達とユウリ達とジュード達
の事を少し認めて、龍姫達とユウリ達とジュード達は明日ギョウカイ墓場に乗り込むこ
とにしたのだった。

その夜

「いよいよ明日助けに行くんだね」

「そうだな、なんかゲームギョウ界の全域図見たんですけど、テルカ・リュミレースに似てました」

「そうか、確か明日行くところは確か、オレたちの世界で言う、ザウデだからな」

ユーリとエステルはこの次元のゲームギョウ界の全域図とテルカ・リュミレースの全域図を見比べて似ていると思っていたのであった。

龍姫達と言うと

「必ず助けるから、待っててね、ネプテューヌみんな!!」

「どうするの、助けた後は？」

「取り敢えず、エステルとフレンをテルカ・リュミレースに送らないと、ヨードル殿下に申し訳ないし、後は自分で決めるんじゃないかな」

「そうだよな、最後は自分で決めないとね」

それからの事を話し合っていたのだった。

そして、翌日。

いよいよギョウカイ墓場に乗り込むのであった。

龍姫達とユーリ達とジュード達は教会の転送装置に乗り込んでギョウカイ墓場に向

かったのだった。

「此処がギョウカイ墓場か」

「いかにも悪の集団がいそうだな」

「こんなところで三年間も待たされるとは」

「ネプギアを救出した際に、女神達が殺される可能性が出ている以上、急ぐぞ!!」

「此処が敵さんの根城ってこと忘れてないわよね」

ギョウカイ墓場に到着した龍姫達とユーリ達とジュード達は雰囲気を見て思ったことを述べて魔物を倒しながら道なりに進んでいったのである。

そして

「このままでは暇で死ぬ!! 暇死にする!! 貴様らが暴力集団とか暴力魔導士とか言うものはシエアを使わないで剣と魔法と体術を使うと言ったな!! だが待てぬ!! お前らが相手をしろ!!」

「おい、龍姫、まさかあんな奴にアイエフは負けたのかよ」

「うん」

「シエアと女神に頼りすぎなのよ!! この世界の奴らは!!」

「リタの言う通りだな、自分で成し遂げる力を身につければ、どんなことでも、人間は出来るはずだ!!」

「そうだけ、女神達助けたら、オレたちが剣の相手しやろうぜ」

「そうだね、けど、ボクは一旦、テルカ・リュミレースにエステリーゼ様ともに戻らないといけないけどね」

「そうですね、ヨーデルとソディアに押し付けてしまってますから」

「わかったよ、後は龍姫達と凛々の明星に任せな!!」

「それじゃあ、行くよ!!」

ジャッジ・ザ・ハードが待ちくたびれて、リンダ達に八つ当たりをしている現場に龍姫達とユリー達とジュード達は遭遇したのであった。

龍姫達とユリー達とジュード達は意を決して得物を構えて戦闘態勢に入ってその場所に向かったのだった。

「遅いんだよ!!」アタイが肉片にされるとこだったろうが!!」

「そんなこと知らん!!」

リンダは龍姫達とユリー達とジュード達に逆切れしていたが聞き流して

「女神達返してぶっ飛ばされんのと、ぶっ飛ばされて女神達返すのと、どっちか選びな!!」

「そんなことはどうでもいい、久しぶりに戦えるのだから、来い、出ないと、上がってこれねえええだろが!!」

「こいつ、ザギと同類だよ」

「それでもお姉ちゃん達を助けるです!!」

ユーリがアレクセイに言い放った言葉をジャツジ・ザ・ハードに言い放ったのだが、ジャツジ・ザ・ハードは以前、龍姫達ともに戦ったことのある暗殺者ザギと同じくあつちの世界の住人だったのである。

「変身!! これお姉ちゃんと同じ色です」

「さて、行くぞ!!」

全員「オウ!!」

ネプギアが淡い紫色の露出が多いプロフェツサーユニットになり、龍姫達とユーリ達とジュード達は女神達を助けるため一斉に得物を構えたのだった。

女神達を助けるための戦いの火蓋が切って落とされたのである。

三人目の霸王

龍姫達とユーリ達とジュードと女神候補生の連合軍は女神達を助けるためギョウカイ墓場のマジエコンヌ四天王のジャツジ・ザ・ハードと戦闘を繰り広げられているのである。

「効かねえって言ってるだろうが!!」

「そうか、おまえ、自分の装甲、壊れてるのに気づいてないのかよ!! 絶風刃!!」

「おまえを倒して、女神達を返してもらおうぞ!! 虎牙破斬!!」

「その通りだよ、女神達を返してもらおうよ!! 魔神連牙斬!!」

「わたしもいること忘れないでね 瞬迅爪!!」

やはり龍姫達とユーリ達とジュード達はジャツジ・ザ・ハードより場数を踏んでいるために戦いに関してはマジエコンヌ四天王の上を行っているのであった。

「ちよこまかと動くんじゃねえ!!」

「キヤアア!」

「ネプギア!!」

それでも女神候補生はジャツジ・ザ・ハードの攻撃を躲すのが精一杯だったのである。

そしてネプギアにある変化が起ころうとしていたのであった。

「ネプギア!! ならもつと上に行けるはずだ!!」

「遠慮すんな!! オレたちはそんなに軟じゃねえ!!」

「そうですよ!! わたし達は大丈夫です!!」

「キミの内なる力を解放しろ!! 決断に必要なのは時間や状況ではない!! おまえの意

志だ!!」

「大丈夫ですよ、あなた様ならやり遂げると信じてます」

「だからって、人の期待を全部背負う必要はないよ!! たけど、他人が決めた選択に意味なんてない!! 決めるのはネプギアだよ!!」

「わたしの内なる力・・・」

ネプギアは今紫色の炎に包まれながら薄れていく意識の中で龍姫達とユーリ達とジュード達の言葉が聞こえてきて、ある異世界の龍神がネプギアの目の前に姿を現したのである。

「此処どこ?」

「どうやらおまえは選ばれたようだな」

「それはどういうことですか? それと誰ですか?」

「聖龍皇アルティメットセイバー、三龍神の支柱じゃ!! ツクヨミとクロノスはどうかや

ら異世界の人間と精霊をこの世界を変えるために送り込んだようだ。別次元のおまえも聖龍霸王の力を持っている」

「まさか、姫龍紗ちゃん!!」

「それだけではない、この世界にいないが美龍飛もわたしの力を使いこなしているようだ。女神と言うのはシエアと言う人の心がなければ死ぬのだからな、しかしお前とおまえの友であるユニとおまえの姉、ネプテューヌと言ったか、おまえと一緒にリンカーコアを持って生まれてきたのだから、もうシエアと言う輪廻から解放されている!!」

「それじゃあ、わたしは女神じゃなくなるんですか?」

「そうではない、女神の特有の不老長寿は受け継がれる。もう国を統治する必要がないだけだ!! おまえは悪しきを挫き、弱きもののために戦い、そして、見返りを求めない」

「わたし以外でそんな人」

「力を持たぬ正義、それは無力だ、見える、おまえには覚悟がある、その強き心が我々を呼んだ」

「これは」

「わたしの力の一部だ、だが目覚めさせるにはわたしとおまえの力が必要だ。わたし

ともに戦い、わたしを使いこなし、その衝撃で龍の力をリンカーコアに宿すのだ」

そう言って三龍神の一柱である天女のような羽衣を纏った聖龍皇アルティメットセイバーはネプギアに三龍神の力をネプギアのリンカーコアに融合させたのだ。

そしてネプギアを包んでいた炎が消えかかった瞬間

「アースト、ポケットが光ってるよ!!」

「これはもう使えなくなったりリアルオーバー!!」

「あれ、ネプギアの方に向かって飛んで行っちゃった!!」

「アーストさん、使わせていただくぞ!!」

「あれ、ネプギアの口調が変わった」

「あれがああの無個性って悩んでたネプギアなの!!Σ(。D。)」

「こうじゃあねえとな!! 紫の女神はな!! 行くぞ!! フレン!!」

「ああ!! 僕たちも負けてられないよ!! ユーリ!!」

「なんだか、お姉ちゃんみたいに胸が大きくなっている上に、ミラさんみたいな声になっているのだが、それに翼がない、髪がミラさんように前髪が金のメツシユで紫色のツインテールで髪飾りが天使の羽根が二つ付いているのか、これならお姉ちゃん達を助けられるぞ!! みなさん、援護をお願いしてよろしいか?」

「いつでもいいよ!!」

「もうとつくに出来ておりますよ、龍神様」

「そうです、わたしも」

「ボクだってできてるよ!!」

ネプギアはアーストのリリアルオーブをリンカーコアに取り込ませて、美龍飛と姫龍紗同様に赤紫色を基調にし、胸はこの次元のゲームギョウ界のボールを遥かに超えるまで成長しているが、その上から淡い青味がかった胴丸が装備されているので上半身の露出はなくぺったんこにして、両手には武士の手甲が付いた籠手が装着されて、巫女服をモチーフにしているが、前が開いたワンピースタイプで短パンを履き、両足には赤紫色のレガースが付いたヒールがないロングブーツを履いている姿に覚醒したのだった。

目つきが少したれ目だったのが、目尻が上がり、目の色が右碧左翠に変わっていたのである。

身長はルドガーと同じくらいになっていたのだった。

ネプギア以外の候補生一同はあまりの変貌ぶりに石化してしまったのだった。

これを見たレイヴンは立ったまま気絶していたのだった。

「来い!! 出ないと上がってこれねえええだろうが!!」

「いいだろう、おまえを倒してお姉ちゃん達を返してもらおう。」

飛ばして行くぞ!!」

聖龍皇の力を宿した女神に覚醒したネプギアはオーバリーミッツLv3を発動してジャツジ・ザ・ハードに攻撃を仕掛けたのだった。

「おりやつや!! 何!! オレの得物が!!」

「わりいな!! おまえだけ、格好つけさすわけには」

「いかないからね!! 裂空斬!!」

龍姫とユーリはジャツジ・ザ・ハードの得物であるハルバードを一刀両断にして使いものにならなくしたしたのである。

「ありがとう、龍姫さん、ユーリさん、二人が作ってくれてた好機、無駄にしてたまるか!! 喰らえ!! 虎牙破斬!!」

ネプギアは龍姫とユーリが作ってくれた好機を無駄にしないために斬り上げて斬り下ろし

「秋沙雨!!」

滅多刺しにしてメに斬り上げて

「斬魔龍炎剣!!」

炎を纏い刀で突きを繰り返しながら斬り付けながら連続で蹴りを浴びせて

「焼き尽くす!! 光翔戦滅陣・獅炎!!」

「あれは僕のバーストアーツ!!」

「本人の目の前でお披露目してるわよ、フレン!!」

周囲を薙ぎ払って獅子の鬨気を放つバーストアーツを繰り出して

「心得よ!! 我が剣は女神の刃!! 六道の悪行を浄滅させる!! 闘・魔神王剣!! 成敗

!!」

「あれはアーストの秘奥義!!」

「まだオレの技には程遠い!!」

「この俺がきえるのかあかカカ!!」

龍姫から譲り受けたテルカ・リユミレースで購入した鬼包丁をゲームギョウ界の素材で強化して折れにくくした「臨」「兵」「闘」「者」「皆」「陣」「烈」「在」「前」と彫られた名刀「九字兼定」に宿した鬨気で打ち上げて魔法陣で捉えて大上段で一刀両断にしてジャツジ・ザ・ハードに止めをしたのであるのだった。

ひと段落

三人目の聖龍皇に覚醒したネプギアの活躍によってジャッジ・ザ・ハードは倒されたのである。

それを見たりんダは一目散に逃走したのである。

龍姫達とユーリ達とジュード達は女神達が幽閉されている場所に向かっていたのであった。

「此処だよ!!」

「酷い、今助けます!!」

「この蔓が邪魔だな」

幽閉されている場所にたどり着いた龍姫達とユーリ達とジュード達は女神達に絡まっている黒いコードを器用に剣士達が女神達の体を傷つけないように斬って降ろしたのである。

「ネプギア、会いたかった」

「お姉ちゃん、わたしのことわかるのか」

「何言ってるの、わたしより大きくなったじゃない」

「お姉ちゃん!!」

「大人ぽっくなつたと思つたら、中身は変わらないのね」

「あれがネプテューヌなんだな」

「うん、けどまだ覚醒してないから」

紫色の女神の再会を見届けていた龍姫とユーリはネプテューヌが真龍姫と龍空翔の覚醒前であることを誰にも悟られずに話していたのだった。

ネプギアは念願の姉との再会に思わず身長差を気にせずに抱きついて、その衝撃で装備していた胴丸に罅が入って壊れてしまったのだった。

「ネプギア、苦しいわ、胸が当たって」

「このままじゃないと、大きくなつた胸が隠せないんだ、一応赤紫色のインナーウェアを着てるのだが、恥ずかしいんだ」

「ジュード、女神達の容態はどうだ?」

「取り敢えず、ネプテューヌさん以外の女神達はしばらく安静が必要だね、ネプテューヌさんはどう言うわけか、回復速度がボクたちと一緒にくらいだから、二〜三日ゆっくり療養したら大丈夫ですよ」

「エステル、龍姫達も頼めるか?」

「はい、万物に宿りし」

「生命の息吹を此処に」

龍姫達&エステル「リザレクシヨン!!」

「スゴイ、わたしとエリーゼが二人でやっと発動するのに、龍姫達とエステルって単独で発動できるんだね!!」

「スゴイ〜」

「それほどでも」

「ないです」

ネプギアはインナーウェアを着てるのだが、ユーリ達とジュード達男性陣の目気が気になって女神化したまま恥ずかしがっていたのだった。

男性陣は目のやり場に困っていたのは言うまでもない。

医者であるジュードに女神達の脈を計ってもらったら、ネプテューヌ以外の女神達は回復速度が遅いことが判明したのだった。

気休めだが、高度な治療術を修得している龍姫達とエステルは女神達を纏めて治療術を掛けて癒したのである。

ネプギアはそのまま寝てしまったのである。

「さてと、女神達を教会まで搬送するから手伝って!!」

「あ、任された!!」

教会に女神達を搬送するため龍姫達とユーリ達とジュード達は協力して女神達を搬送するのである。

そして女神達は自分の国に還って来れたのであった。

「エステルとフレンさん達送って来るね!!」

「ユーリ、無茶はしないでくれ」

「わかってるさ」

「送り届けたら、光龍と美龍飛を連れて戻って来るから、それまで辛抱してね」

「大丈夫よ!!」

龍姫はエステルとフレンをテルカ・リュミレースに、ジュード達はそれぞれ自分の世界で仕事があるので、転送装置を使って送ることにしたのである。

それほど時間も掛からないで龍姫はテルカ・リュミレースにエステルとフレンをザ・フィアス城に送り届けて、ジュード達をエレンピオスに送り届けたのである。

どういわけかルドガーはユーリ達、凜々の明星と一緒に残っているのであった。

そのわけはエルと言う少女を助けるためにオリジンの審判で消滅したのにこうしていることが帰ってしまったら軽いことになってしまおうと言うので凜々の明星の手伝いをすると言う名目で残ったのである。

「すいません、この軽鎧ください」

「はいよ、全部で1500クレジットだよ!!」

「ありがとうございます!!」

「また来てくれよ!!」

龍姫はエステル達を元の世界に送った後、天界の武具屋で女神化用の和風の三色の軽鎧を三つ購入したのである。

その理由は聖龍皇に覚醒したネプギアの大きくなつた胸が覚醒した時に装備していた軽鎧が仮の軽鎧だったので、砕けてしまったので、龍姫が新しく作ってあげることになったのである。

「ただいま!!」

「お帰り!!」

「それ軽鎧か」

「まさか、わたしのために」

「そうだよ、だって折角覚醒したんだから、今から女神姿用に作るから待っててね」

「そうか、オレたちはゆつくりさせてもらうが」

「うん、今のうちに休んでてね!!」

龍姫はユーリ達が待っているゲームギョウ界に、光龍と美龍飛を連れて戻ってきたので、ユーリ達は先に休んでもらって、龍姫は女神姿の胴丸をゲームギョウ界の素材を合

わけて作るのであった。

それほど時間も掛からないで完成したので早速ネプギアに女神化をしてもらったら「ネプギア、変身してみてくれるかな？」

「はい、変身!!」

「どう、息苦しくない？」

「大丈夫だ、ありがとう、龍姫さん」

完成した胴丸は天界の技術で作ったのでどんな大きな胸でもぺったんこに見せられて、息苦しくないようになっていたのであった。

スキット：女の武器

ジュデイス「別に隠す必要あるの？ 折角悩殺できるのに」

ギア「ジュデイスさん、確かにわたしも大きな胸に憧れていたんですけど、実際、なってみてお姉ちゃん達の苦勞がわかりました、今思ったら、男の人の前であまり胸を強調するのが恥ずかしくなってしまうて、それにユニちゃんが気にしてましたので、それに抜刀するのに聞えちやうので」

うずめ「確かにユニはまだ覚醒してないからな、俺もインナーウェアを着て、胸を潰してからな」

ブルルート「そうだね〜」

龍姫「けど、覚醒したって事は」

美龍飛「背も伸びるんだよ」

ギア「どうしよう!! 服ないよ!!」

レイヴン「何!! 元の姿でも・・・」

ユーリ「おっさん、その辺にしとけ」

レイヴン「青年!! 怖い!!」

龍空翔「はいこれ、わたし達がいつも着ている戦闘服」

ギア「ありがとうございます!!」

凛々の明星と紫色の女神

女神達を救出して三日が過ぎようとしていた。

龍姫達とユーリ達はプラネテューヌ教会に下宿しているのである。

「今日はあの二人と一緒に魔物退治だな」

「うん、そういや、なんでギルドじゃなくて女神が魔物退治の依頼が来るの?」

「確かに、普通、ギルドが行うはずだろ」

「早い話が、自分達で倒す気がなんじやない」

「ゲームギョウ界の女神の仕事は、テルカ・リユミレースで言う、国営とギルドを一緒にしてるんだよ」

「なるほどな、この世界は女神を頼りすぎてんだな」

「二兎を追う者は一兎をも得ずって言葉が通用しないからね」

「取り敢えず、ネプ子と一緒にいきますか!!」

今日は魔物退治がネプテューヌに寄せられていたのだが、当の本人が嫌がついていたのだが、ユーリがオレたちも手伝ってやる代わりに、報酬の何割かをもらおうと言うことで合意したのである。

そんなこんなで魔物退治に向かったのだった。

目的の地までは龍姫達が案内することにしたのである。

「行くよ!!」

目的地であるプラネテューヌ領のバーチャルフォレストに到着したので龍姫達とユーリ達は一齐に得物を構えたのだった。

「牙狼撃!!」

「わたしも!! 牙狼撃!!」

「ネプちゃん、戦いが好きなのね」

「三年前はね、ノワールを誘ったんだけど、こんな敵一人でやれるからって言って断られちゃったんだ、わたしって、ダメなのかな」

「そうなの、けど一人で戦い続けたら、孤独に呑み込まれるわよ!!」

「それ、アーストがオレに言ってくれた言葉だ!!」

「そうだったんですね」

「さっさと片付けようよ、魔神剣!!」

ネプテューヌは自分がめんどくさがりで、いつもイストワールから説教されて、ノワールを見習えと怒られていることを龍姫達とユーリ達に明かしたのだった。

それを聞いた龍菜が一人で抱え込むなどと言ってネプテューヌを励ましたのである。

「そんなこんなで教会に寄せられた依頼である魔物退治を終えた一行はギルドの受付で報酬を受け取って教会に戻るものであった。

「みなさん、お疲れ様でした、ネプテューヌさん、今日は三年間溜まった書類をやつてもらいますから、覚悟してくださいね」

「わかった・・・（龍姫達とユリー達に技教えてもらいたかつたな）」

教会に戻ってきた龍姫達とユリー達とネプテューヌは、龍姫達とユリー達は昼食を取るため台所を借りて昼食を作っていたら、イストワールがネプテューヌに仕事をさせるために何人かの監視を連れて執務室に連れて行ってしまったのだった。

スキット：やり方

レイヴン「はあ」

ユーリ「どうしたんだよ、おっさん？」

レイヴン「なにして、ネプちゃんの女神の仕事見てたら泣きそうよ」

ジューデイス「そうね、あれでは、あの子の心が壊れるわ、まだ心が幼いのに」

龍姫「いーすんは先代女神が作った人工生命体なのは知っているよね」

ユーリ「ああ、どうやら、人間の立場に立ったことないんだらうな」

レイヴン「ネプちゃんはネプちゃんよ、先代女神のようにしろっておかしいわよ」

ユーリ「その通りだ、あいつは自分なりにやっつてんだ!! おまけに軽くオレと剣でや

り合った時なんて女神化しないで良い線行ってたぜ!! 役周りがあるってのは同感だけどな、その中身は自分で決めるもんだ!!」

真龍姫「あく見えてネプテューヌは剣ではノワールとネプギアの上なんだよ!!」

龍菜「これじゃ、宝の持ち腐れよ!!」

カロール「そうだよね、初めて会った時なんてボクたちを白い眼で見てたし」

Vラピード「ワン!!ワン!!」

ユーリ「ラピードまでキレてるぜ、アイって奴はダチの癖につてな!!」

うずめ「全くだぜ、帰って来て早々にねぶつちの監視及び逃走したら捕獲するからな」

龍姫「そうだよね、自ら歩み寄らなければ、何も得られないのに」

結局

龍姫達とユーリ達は一緒に昼食を取っている最中のであった。

昼食を取り終えた龍姫達とユーリ達は食器を片付けて、しばらく体を休めることにしたのであった。

「そういえば、ユーリ達は確か、権力者は嫌いじゃなかったか」

「ああ、嫌いだね、けどな、オレはネプ子のような奴は信用できるが、ノワールのような野郎はどうも好きになれねえな」

「そうなのか、他人から見たらダメな女神なのにか？」

「確かに、真面目な奴から見ればあいつはダメかも知んねえが、オレたちから見たら庶民感覚で行けるからな、あのイストワールとアイエフは好きになれねえな」

「そうですね、ルドガーさん、ネプテューヌは思ったことは口にしてるので、親しみやすいんですよ」

「そうよ、ネプちゃんはいつかはこのゲームギョウ界と言う檻から飛び出さないとけない存在よ、ルドガー青年!!」

「わかった」

ルドガーは以前ユーリ達は貴族などの権力者が嫌いであることを聞いていたので、女神は嫌いでないのか聞いたのである。

ユーリ達は権力者でも庶民の事を考えているなら大丈夫だと答え、ノワール達のような自分の国しか考えない傲慢な態度をする女神は好きになれないと答えたのである。

「ちょうど、休んでいたんですね」

「ツクヨミ様どうしたんですか？」

「どうしたんだ？ ツクヨミ」

「ルドガーさんは初めてでしたね、わたしは天界で次元探偵を派遣している役目をしております、女神ツクヨミです」

「どうも、ルドガー・ウィル・クルニクスです」

ちょうど龍姫達とユーリ達が休んでいる時にツクヨミが天界から降りてきたので、ルドガーとお互い自己紹介を済ませて、本題に入ることにしたのであった。

「どうやら、三年前のギョウカイ墓場に女神達を犯罪組織の討伐に向かせて、幽閉されてしまった上に、その責任を全てネプテューヌさんに押し付けたことが判明しましたので、今日の天界で行われる次元会議でイストワールに罷免が言い渡されるとのことです」

「そうだよね、いーすん、自分が悪いって自覚がないから」

「そうだな、オレたちにあんな事してタダで済まされる訳ねえからな」

「はい、ユーリさん達の好意を仇で返してしまつた以上、許されません、それとネプテューヌさんとネプギアさんは、リンカーコアを持っていますので、シェアは影響しません」

「そうなんだ!!」

「はい、この世界のゲームギョウ界のプラネテューヌは天界の管轄に区域指定になりましたので、担当の者を派遣します、あとネプテューヌさんの意志を尊重するため自分で決めてもらうようにしてもらいます。ではこれにて失礼します」

「これで終わったんじゃないんからな、オレたちはあくまでもあいつの手伝いだからな」

「そうだね、ボクもあんな教祖は嫌だつたから」

「おっさんも、少年に同意!!」

「ボクたちも同じだよ!!」

「そうね、わたしも昔の自分はもう見たくないから」

「それでいいのか?」

「まあ、ルドガーは真面目だからな、気楽に行こうぜ!!」

ツクヨミは今日行われる次元会議でイストワールに解雇処分が決定すると言うことを龍姫達とユーリ達に伝えて、天界に帰って行ったのである。

ルドガーは釈然としてなかったのだった。

罷免

ツクヨミから報告があつて、一日が経つたのだつた。

今日は天界からイストワールに解雇処分が言い渡されることになつているのである。

「これは一体、どういう事ですか、説明してください!! わたしは・・・」

「自分が何やらかしたのか、わからねえのかよ」

「三年前の事は関係ないはずよ!! だってあれはネプ子達が・・・」

「それで諦めたの、アイ、何のために今までやってきたの?」

「わたしは!! わたしはこの国のために!!」

「そんなこと聞きたくなかつたわ!! 自分の覚悟忘れて三年間も助けに行かなかつた人に国のためとか言わせないわよ!!」

どうやらイストワールに解雇処分が下つたことが受け入れなかつたらしく、龍姫達とユーリ達に説明を求めたのだが、龍姫達とユーリ達は三年間も命令を無視してでも助けに行かなかつたことに反論したのだつた。

その様子をルドガーは見届けていたのだつた。

「ボクたちは諦めた人に構つてるほど暇じゃないんだよ!!」

「諦めてなんて!!」

「それじゃ、どうして三年前、友達のネプテューヌとネプギアを一人でも助けに行かなかったの!!」

「わたしは幽閉されてることを知らなかったのよ!!」

イストワールとアイエフに龍姫達とユリー達は呆れてしまったのだった。

「知らなかったことが罪じゃなくて、知らなかったことに胡坐をかいて、恥じる心忘れることが罪なんだよ!!」

「龍姫さん……」

いつもは大人しい龍姫でもアイエフの知らなかったと言う発言に呆れてしまったのだった。

それを聞いていたネプギアは只々見守ることしかできなかったのである。

しばらくして龍姫達とユリー達は会議室から出て行くことにしたのであった。

「あの日、この次元のゲームギョウ界に派遣された、ものなんですけど」

「誰?」

「お姉ちゃん、龍姫さん達が言ってくれた、新しい」

「はい、わたしは海道セドナと申しまして、今日から副女神として此処で働かせてもらおうことになりました。 これをツクヨミ様から預かって来ました」

「卵？」

「それじゃあ、セドナちゃんは女神なのね!! おっさんはレイヴンよ」

「はい、女神化もできます、女神化すると胸と身長が大きくなるのと髪が青味掛かった銀髪で、得物が刀を使えます、では早速仕事に取り掛かりますので、失礼します」

教会に天界から副女神として海の女神「オーシャンハート」ことピンクの髪をツーサイドアップにして紫色のワンピース姿の海道セドナがやってきたので、龍姫達とユーリ達は荷物運びを手伝いながら自己紹介をしたのであった。

与えられた部屋に荷物を運び終えたセドナはネプギアにツクヨミから預かったハート模様が入った卵を渡して、さっそく執務仕事に取り掛かるのであった。

スキット：セドナ

ネプ「いーすんとアイちゃんには悪いけど、セドナが助けてくれるんだね」

ユーリ「そうだな、変身したらまるでジュディみたいだったな」

ジュディス「そうね、わたしを女神にした感じだったわ」

龍姫「まあ、人には得手不得手があるからね、ネプテューヌみたいにじっとしているのが苦手な子に書類をやらすのはいかがかと」

レイヴン「龍姫ちゃん流石」

ユーリ「考えるのが苦手な奴がじっと椅子に座ってる方が可笑しいからな、おまえっ

て困ってる奴見るとついつい面倒を見る、ほっとけない病だろ」

ネプ「うん、わたしも龍姫達とユーリ達と一緒に困ってる人見ると助けちゃうんだよね、それでいつもいーすんとアイちゃんに怒られてから」

カロール「そうだよ、一人でできなくてもみんなでやれば出来るもんね」

龍音「そうだよ!! 職員の人たちは協力してやってるのに」

光龍「いーすんが仕事が遅いもん」

ルドガー「確かに言えてるな」



コスプレ

イストワールが罷免されてセドナがプラネテューヌ教会にやって来て、龍姫達とユリ達が魔物退治などの依頼をこなして三日が経ったのだった。

スキット：左利き

ネプ「とう！」

ギア「お姉ちゃん、右手どうして括ってるの？」

ネプ「どうしてって、ユーリや龍姫達みたいに両手をうまく使いこなしたいから」

龍姫「そうだね、二刀流から入って、一刀流に戻して左手の感覚を養う目的があるんだよ」

ユーリ「なるほどな、龍姫達が二刀流をするのはそう言うことだったんだな」

ネプ「そうなんだね、わたしも真龍姫みたいに大きかったら二刀流できたのにな、ネプギアだって大きくなったから」

龍音「焦っても仕方ないですよ」

ネプ「そうだね」

「確か今日は午後から会議だよ」

「ありがとう、龍姫」

「会場までオレたちが護衛すればよかつたんだよな?」

「うん、セドナも会議に出席してね」

「はい、もちろんです」

今日は午後から女神会議が入っていたので龍姫達は教会で待機して、凜々の明星はネプテューヌと新しくプラネテューヌ女神首席のセドナを会議が行われる会場まで護衛することになったのである。

それまで各自得物などの手入れをしていたらこつちの次元のボールがやって来て、

「あのくすいません、ちよつとネプギアちゃんと龍姫達に用があるのですが?」

「用って何なの?」

「実はわたくしがやっているオンラインゲームのイベントが行われるのですが、そこで特典コードが配布されるのですが」

「おんらいげいむ? つまり、特典コードをもらつて来い言うんだろ、会議と時間が被つたとかで」

「さすが、神子龍達のお兄ちゃんですわ!! ですから、これは龍姫達に個人的の依頼ですわ」

「いい加減に、オレをお兄ちゃん扱いすんな!!」

「わかったよ、ベール、その依頼、夜空を駆ける流星の絆が受けてあげるよ」

龍姫達「流星の絆」に自分が会議で行けないので代わりに行ってほしいと言うので龍姫達は二つ返事で受けることにしたのであった。

もちろんほかのメンバーもイベント会場に向かったのだった。

スキット：コスプレ

ユーリ「こすぶれってなんだ？」

龍姫「あ、そつか、ユーリ達はテルカ・リュミレースに住んでたから知らないなよね、コスプレってのは」

龍菜「物語に出てくる登場人物の服を着てなりきる遊びよ!!」

レイヴン「龍菜ちゃんは青年の服、着てるんじゃない」

龍菜「これはわたしの変装用の戦闘服よ!!」

ユーリ「お願いだから、いつも着てる服着てくれ」

イベント会場に到着した龍姫達は会場に設置されている女子更衣室に向かったのだった。

「あれ、レイア、それにエリーゼ」

「わたしもいるぞ」

「どうやら、レイアさん達もベールさんに依頼されたみたいだね」

ベールはどうやらレイア達にも頼んでいたのであった。

「着れるかな、よっこいしょ!! ふうくなんとかなったよ!!」

聖龍皇に覚醒したネプギアは覚醒した所為で、身長が162cmまで伸び、胸がミラに匹敵するまで大きくなっていったのだった。

用意された衣裳はロイヤルナイツと言う剣士の女剣士の衣裳だったので、なんとか胸を潰せたのであった。

「何故、龍華はジュードの服を着てるのだ?」

「これが一番似合ってたので」

「そうなんだ、ジュードに見せたら驚くな」

「そうですね、それにしても龍姫達はカツコイイです」

「そうかな」

「それにしても、まさか、わたしの服を着てるのか」

「なんか文句あるの」

「礼龍ちゃん、ダメだよ・・・」

龍姫はいつもコスプレで着ている、コスプレ用に作ったバリアジャケットを着て、真龍姫は今回はあの赤い二刀流の剣士と黒の二刀流の衣裳を着ているのである。

そんなこんなで撮影会場にラピードと一緒に向かったのだった。

凜々の明星と蛸

龍姫達とミラ達がコスプレイベント会場の特典コードをもらっている頃、女神達とはと
言うところ、

「龍姫達はかっこいいわね〜」

「そうですね、龍姫さん達は女の憧れですから」

「まさか、レイア達にも頼んだのね」

「どうせ、着てみたい癖に〜」

「そんなんじゃないわよ」

「もう、ユニさんには龍菜さんが告発しましたよ」

「それって・・・」

「ばれてるわね、あなたがコスプレが趣味だった」

会議が終わったらしく、パソコンで龍姫達が行っている会場のホームページを閲覧して、写真が掲載されてるか見ていたのであった。

この後ノワールはユニにコスプレが趣味だと言われたのは言うまでもなかったのだ。た。

それを扉越しに聞いていたユーリ達は呆れてしまったのだった。

そんなこんなで次の日

「つまり素手でタコを倒して来いってことだな」

「おっさんも行くわよ!!」

「どうせ、龍姫達とジユデイスの水着姿を見たいだけでしょ」

「少年、よくわかったね!!」

「いや、レイヴンさんだからですよ」

今日とはある環境保護区域でタコが大量発生したので今回は凛々の明星と合同で行う子となったのだった。

レイヴンが龍姫達とジユデイスの水着姿を拝む気満々だったのは言うまでもない。

早速現場に向かったのだった。

龍姫達とジユデイスは、ユニ達と合流して設置されていた更衣室に入り、龍姫達は次元データベースのリライズ機能で競泳水着に着替えて、ユーリ達男性陣の元に向かったのだった。

「ネプギアちゃん、行くよ!!」

「ありがとう、美龍飛ちゃん」

「どういたしまして、みんな待ってるから行こう!!」

ネプギアは美龍飛に頼んでリライズ機能で美龍飛の色違いの競泳水着に着替えてみんなそこへ向かったのだった。

「どうして、もつとジユデイスちゃんみたいの着てこないのよ!!」

「おっさん!! うるさい!!」

「レイヴンさんは置いといて、蛸退治に取り掛かるよ!!」

現場の浅瀬に到着した龍姫達の競泳水着を見たレイヴンはジユデイスのビキニタイプの水着だと思っていて、ガツカリしていたのだった。

「行くぜ!! 三散華!!」

「鳳凰天駆!!」

「飛燕連脚!!」

「スゴイ、素手で戦い慣れてる」

「口動かすんじゃないで、手を動かさなさい!! 獅子戦吼!!」

素手でも龍姫達とユーリ達は戦い慣れていることを身を持って体感したユニ達だった。

どういうわけかユニと龍華が蛸に集中攻撃されたので龍姫達とユーリ達が助けたのは言うまでなかったのだった。

そんなこんなで蛸退治を終わらせた一同は教会に戻るのだった。

紫龍と黒衣の断罪者と気高き精霊の王、マジック・ザ・ハードに遭遇するの段

龍姫達とユーリ達は依頼されていた蛸退治を終わらせて、女神首席のセドナに報告して、龍姫達とユーリ達は龍姫達の暮らしているプラネテューヌ教会の下宿している部屋で一晩休んだ後またある依頼を受けることにしたのであった。

今回はジュード達も仕事の合間を縫って駆けつけてくれたのだった。

「なるほど、候補生一同と一緒にギョウカイ墓場へ調査に行つてほしいんだな」

「わかつたよ、念の為に二手に別れた方がいいですね」

「それなら、わたしが決め差してもらいましたよ」

「さすが、指揮者コンダクターと呼ばれた軍師だな」

「ローエンさんつて」

「はい、3年前まで軍隊に所属しております、それから転々としてアーストさんの付き人をしております」

今回の流星の絆と凛々の明星へ依頼はギョウカイ墓場へ赴いて調査を行つてほしいと言うのである。

元軍師のローエンが防衛組と調査組に編成した書類を全員に渡したのである。

調査に向かうメンバーは龍姫・ユーリ・Vラピード・ネプギア・ユニ・真龍姫・龍菜・ミラの七人と一匹でギョウカイ墓場へ向かうことにして、残りのメンバーはプラネテューヌ教会に残り、防衛線を張ることにしたのであった。

「そんなじゃあ、ちよつくら行つてるわ!!」

「ユーリ!!無茶はしちゃダメだからね!!」

「おい、このメンツ相手に無茶無理禁止は意味ないだろ!!」

「そうだね、いつてらっしやい!!」

龍姫達は転送装置に乗り、ギョウカイ墓場へ調査に向かったのだった。

スキット：あの教祖は

ミラ「あの教祖はどうやらクビになったみたいだな」

ユーリ「当たり前だろうな、オレたちのこと信用してなかったからな」

龍姫「うん、アイとコンパだけで救出に行かせたことがわかつたからね」

ミラ「普通、五人の女神を助けるならそれ相応の部隊が必要はずだ、余程、焦つてたんだんだろう、そう言う時こそ落ち着いて行動すべきだ!!」

ユーリ「その時点で全員を救出しねえと、殺された可能性が出てたんだからな!!　　つたくあのチビ馬鹿教祖は!!」

ギア「わたしもお姉ちゃん達にもう会えないと思ってましたから」

龍姫「シエアクリスタルを作ってる暇があるなら、救援部隊を編制すればよかつたんだから」

ユニ「それにはアタシも同意します」

「ここだな、依頼に会った場所は」

「見渡す限り、何も無いわよ」

「ワン!!」

そんなこんなで依頼書に書かれていた地点に到着した龍姫達はあたりを見渡していたら突然ラピードが

「ウウウウ!!」

「どうやらお出ましか」

「ほう、私の気配に気づいていたとは、我はマジック・ザ・ハード」

「おまえがマジエコンヌ四天王の頭か!!」

「その通りだ」

唸り出したのでふとその方向を向くと赤い髪に露出度が高いプロフェツサーユニツトを纏って鎌を持ったあの因縁のマジック・ザ・ハードが姿を見せてのである。

龍姫達は一齐に得物を構えて、マジック・ザ・ハードを迎え撃つのであった。

緋凰絶炎衝!!

龍姫達はギョウカイ墓場でマジエコンヌ四天王の一人、マジック・ザ・ハードと火花を散らしていたのである。

ネプギアとユニは女神化をして得物を構えたのだった。

「魔神剣!!」

「アンタがマジック・ザ・ハードか、如何にもおっさんが好きな格好してるじゃねえか!!
斬!! 成敗!!」

「だが、わたしには勝てないと思うがな!! アサルトダンス!!」

「ワウウウ!!」

「こつちよ!! 幻狼斬!!」

「三年前のわたしだと思うな!! 破邪十字屋!!」

「龍華直伝!! アクアキャノン!!」

龍姫達とユリー達と共に戦った知識を生かしてネプギアとユニはマジック・ザ・ハード相手に怯むことなく果敢に攻撃を仕掛けて行った。

龍姫達とユリー達にはマジック・ザ・ハードの鎌で行う攻撃はあっさりかわして攻撃

を仕掛けたのだった。

「飛ばして行くぞ!!」

「無駄な足掻きを!!」

「させないよ!! 魔神連牙斬!!」

「ぐ!!」

ネプギアはオーバーリミッツLv3を発動してマジック・ザ・ハードに向かって行ったのである。

マジック・ザ・ハードは攻撃を仕掛けて来たので真龍姫が斬撃を合計で六発纏めて放って止めたのである。

「喰らえ!! 飛燕連脚!!」

回転蹴りを浴びせて、

「虎牙連斬!!」

斬り上げて↓左右に薙ぎ払って↓斬り下ろし

「獣破・双牙衝!!」

虎牙破斬をした後、二度斬り上げて

「舞い上がれ!! 光翔戦滅陣!!」

光の魔法で攻撃して斬撃を放つバーストアーツで追撃して、

「うおおお!! 緋凰絶炎衝!! 焼き尽くせ!!::::!!::!!」

鳳凰天駆をした後、駆抜け抜けて嘖き出す炎で攻撃する秘奥義を叩き込んだ。

「聖龍皇の力はこれほどまでとは、それにおまえたちはシエアで攻撃していかないらしいな、今日のところは見逃してやる、だが次に会う時はおまえらの命はないと思え!!」

「戻って来い!! マジック!!」

「ネプギア、アンタ、二つ目の秘奥義修得したのね」

「だが、倒せなかった」

「ギア、次を用意してくれたみたいだからな、その時までオレたちが鍛えてやるよ!!」

「すまない、ユーリさん」

「もう此処には用がないな、帰るぞ!!」

聖龍皇の力の前にはさすがのマジック・ザ・ハードもプロフェツサーユニットを大破させられた挙句、左頬に一文字の傷を付けられた上に、マナで攻撃できる二人と魔力で技を使える龍姫達とは分が悪いと判断して、一目散に逃げて行ってしまったのだった。

龍姫達とユーリ達は次こそは倒すと決意を新たして教会に戻るのであった。

スキット：マジック・ザ・ハード

ユーリ「あれがマジック・ザ・ハードか、どうやら、オレたちにはあいつの攻撃は効かねえらしいな」

ミラ「だが、油断は禁物だ!!」

龍姫「そうですね」

真龍姫「マジック見てると、あの人を思い出すよ」

ユーリ「あいつだな、正しく」

ギア「誰ですか？」

龍菜「ごめんなさい、落ち着いたら話してあげるわ」

ユニ「わかりました」

調査報告

ギョウカイ墓場で調査を終えた選抜隊はマジック・ザ・ハードに襲われたがなんとか無事に帰還したのだった。

「マジック・ザ・ハードと一戦やり合っただんですね」

「ネプギア!! 怪我不い? 怪我してたらすぐに言っただけ、これでも龍姫達に治療術を教えてもらって、レイズテットまで修得済みだよ!!」

「大丈夫だよ、龍姫さん達が一緒だったから、無傷だったよ」

「そのための龍姫さんと龍菜さんの戦闘能力ですから、その辺は抜かり有りませんよ」
「なるほどな、エステルがいればオレたちと一緒に行くからな」

「確かに、龍姫達は全員が術と武術の心得があるからな」

「あのネプテューヌが!! 勉強とか大嫌いな、あなたが、回復魔法を取得したですって!!」

「どいうわけか、ゲームギョウ世界の魔法より、龍姫達が使ってる魔法の方が簡単だったもん!! だって詠唱がカッコイイからね!!」

「そうなのね、おっさんもこっちの世界の魔法って難しいもん、だって一つ修得すんのに

早くて一年掛かったりするからね」

「おまけにそれってシエアエナジーだからわたし達には効果がないんです」

「オイオイ、それでいいのか」

龍姫達はギョウカイ墓場でマジック・ザ・ハードと一戦やり合ったことを待機していたメンバーに報告したのだったのである。

ネプテューヌは三女神が動けない間に龍姫達の真似事でレイズデットまであつという間に修得していたのであつた。

もちろん、地・水・火・風・闇・光・無の下級魔術から上級魔術を龍姫達が見せただけでその場で修得して見せたのだったのである。

それを聞いたノワール達は腰を抜かしていたのだった。

「取り敢えず、話は此処までにして、各自解散だ!!」

「はい!!」

龍姫達は解散して戻つたのであつた。

それから数日が経とうとしていたのであつた。

ネプテューヌ以外の女神達はシエアがないと動けないらしく、しばらくは龍姫達とユーリ達が教会に寄せられた魔物退治を片付けていたのであつた。

「そつち行つたぞ!! 蒼破あ!!」

「任せて!! 魔神連牙斬!!」

「さすがお姉ちゃん、あれから龍姫さん達と一緒にクエストやるようになってから、剣術に磨きが掛かったような」

「当たり前よ!! 磨きが掛かってないかっただらおかしいでしょ、ギアっち!!」
「どうやったら、六発放ってるんだ?」

「そうか、ルドガーは共鳴技でしかあの技出来ないんだっただね」

「ああ、その通りだ、けど、二人で三発しか放つことが出来ないんだ」

「まあ、龍姫達はあの型の魔神連牙斬を一人で出来るのよ」

「まあ、人それぞれってことですよ!! ルドガーさん!! 魔神剣・双牙!!」

「今度は、一発放つてから、標的の魔物の両側から攻撃した!!」

「今回も魔物退治の依頼が寄せられていたので慌てることなく的確に魔物を片付けていったのだったのである。」

ネプテューヌは魔神剣系統を複合奥義を含め全て修得していたのだったのである。

ルドガーは単独で斬撃を六発放つてるのを見て啞然としていたのだったのである。

片付いたので龍姫達はギルドに行き、教会に戻ることにしたのだったのであった。

スキット：虎牙破斬

ネプ「う〜ん」

ユーリ「ネプ子、どうしたんだよ？」

ネプ「ちよっとね、虎牙破斬をどの型にするか悩んでたんだよ」

レイヴン「確かに、青年みたいに殴りつける物もあれば、龍姫ちゃん達みたいに斬り上げて斬り下ろす二連撃したり、蹴り入れたりとかあるからね」

ユーリ「つたく、そんなの自分にあつたやり方でいいじゃねえか」

ネプ「そうだね、わたしも龍姫達と一緒に斬り上げて斬り下ろす二連撃にするよ」

ルドガー「普通、虎牙破斬は殴らないと思うぞ・・・」

龍姫「ルドガーさん、ユーリの虎牙破斬はとある人からもらった奥義書にそう書かれていたのですよ」

ルドガー「そうなのか」

巨大化したワレチユー

ネプギアから女神達にケーキを振舞いたいと言うので流星の絆と凛々の明星でネプギア達女神候補生の手伝いをする事になって、ケーキ作りを甘党のユーリとお菓子作りが得意なレイヴンがすることになり、龍姫がああ猫耳メイド侍のコスプレをして、レイヴンが早速セクハラを実行しようとして、たまたま来ていた猫耳メイド服を着たり々に制裁を受けて、ネプテューヌ以外の女神達は鼻血を出しながら、龍姫が女であることを知って、レイヴンと一緒に立ったまま気絶してネプテューヌは龍姫の了承を得た上でカメラで写真を撮っていたのは言うまでもない。

閑話休題

龍姫達はいつものように依頼をこなして、ネプテューヌの女神の仕事は龍姫達「流星の絆」が受け持つって、ユーリ達「凛々の明星」は魔物退治を代行してくれているのである。

「どうしました?」

「どうしたんだ?」

「良かった、実はガベイン草原で巨大ネズミが出現しました!!」

「わかりました、すぐに応援を向かわせます!!」

「それじゃ、凛々の明星出撃!!」

「みんな!! 行くよ!!」

いつものように龍姫達はネプテューヌの執務仕事を手伝っていて、ユーリ達が下宿している部屋でくつろいでいたら、リーンボックスのガベイン草原に巨大ネズミが出現したと言うので、戦闘狂のユーリを筆頭に凛々の明星と流星の絆もリーンボックスのガベイン草原に向かったのだった。

「輝龍!! 飛龍!! 神子龍!!」

「生きてるか?」

「龍姫ちゃん、ユーリさん」

「どうやら、無事みたいね」

「はい」

「リタ、あれどうなってるの?」

「たぶん、犯罪神のシエアエナジーで大きくなってるのよ」

「要するに、テルカ・リュミレースで言う、エアルが暴走して、植物が巨大化したみたいなのよ」

「それで合ってるわ!!」

「このまま、ほっとくわけに行かないよ!!」

「確かに、行くぞ!!」

ガベイン草原に到着した龍姫達は先に到着していた神子龍達と合流して巨大化したワレチューの進行を阻止すべく、一齐に得物を構えたのだった。

「蒼破追蓮!!」

「星影連波!!」

「フレイムドラゴン!!」

「魔神剣!!」

「イラプシヨン!!」

「ヂュ〜!!」

全員で戦ったのでそれほど時間も掛からないで巨大化したワレチューを気絶させて、元の大きさに戻して、龍姫達は教会に戻ることしたのであった。

「デュークさん」

「どうやら、犯罪神の封印が解け始めたらしい」

「そうでしたか、ありがとうございます、デュークさん」

「もう法ではどうしようもない」

「あ、わかってるさ、オレたちが星喰みを倒したみたいに、マジコンを精霊化させればい

いんだからな」

「わかっているようだな」

プラネテューヌ教会に戻ってきた龍姫達とユーリ達は中に入るとデュークが来ていたのである。

そこにはエステル達も集まっていたのだったのである。

「ユーリ!!」

「エステル、それにジュード達も来ていたのか」

「どうやら、向こうも本気の様だな」

「そのようですね、もうこれは法を発表したところで、マジコンがなくなるはずもないですし」

「手はある」

「宙の戒典か」

「あ、その通りだ、だがその前に、マジエコンヌ四天王の残り三体を倒して犯罪神を倒さなければ意味がない」

「でしたら、わたしのこの「吉光」も宙の戒典と同じことが出来ます」

「なんだと!!」

龍姫達とユーリ達とジュード達はこれからマジエコンヌ四天王討伐作戦をネプ

テューヌとネプギア以外の女神達に知らせないで行っていったのだったのである。

魔核同様にマジコンを精霊化させることにしたのであった。

「ラストেশヨンにマジコン工場が見つかったらしいわ」

「どうする、龍姫？」

「此処は二手に別れた方がいいよ、組織が相手でアイが手に入れた情報を確かめないでボクたちに知らせて来たって事は、此処をもぬけの殻にして、プラネテューヌを陥落させるはずだよ、なんせ、発展国だからね」

「そうね、プラネテューヌの技術を狙うのは、当たり前ね、此処は俺様に任せてくれない？」

「レイヴンさんだけでは荷が重すぎますのでこの爺もプラネテューヌに残りますよ」

「それじゃ、美龍飛・龍音たちも残ってくれるかな？」

「前もお姉ちゃんが陽動作戦を逆手に取ったじゃない、いいよ、レイヴンさん達と残るよ」

「そうか、無茶すんなよ」

「はい!!」

作戦会議を行っているところにアイエフが陽動作戦に引つかかかっていることに気づいていなかったので、感が働く龍姫とユーリはこれがプラネテューヌの技術力を狙ったマ

ジエコンヌ四天王の陽動作戦だとわかっていたので、流星の絆から妹組を、凛々の明星からレイヴンが、元軍師のローエンが残ることになったので、ほかの女神達に悟られないようにマジコン製造が行われている工場に向かったのだった。

いつの間にかデュークは姿を消していたのだった。

スキット：秘剣参上!!

レイヴン「龍姫ちゃん〜かわいかったわよ!!」

ジューデイス「おまけに、帯刀してたわね、それに刀以外の得物持つてるじゃない」

リタ「にゃ〜!!」

エステル「リタも猫になるほどの猫耳メイド姿でした」

レイア「正しく、サムライって感じだったよ。それにあの」

ティポ「ティーチ!! ミー!! カヴァーバリボー!! だったね〜。それに女の子なの

にボクって言うし、うずめは俺だもんね〜」

エリーゼ「そうですね、龍姫達は、サムライメイドって感じでした」

龍姫「あのメイド姿での二つ名が、秘剣なんだよね」

ミラ「それはしようがないだろうな、キミは女神達の守り刀のような物だからな」

ジュード「けど、龍姫もそうだけど、流星の絆のみんなのメイド姿は目のやり場に困ったけど」

ルドガー「露出が全くないのにな」
龍音「ボクは和服なんだけど」

「思いを舞い上がれ!!」

ラストイションにマジコン製造工場を見つけたと言う、犯罪組織が態とアイに流してプラネテューヌを陥落させることに気が付いた龍姫とユーリとレイヴンとローエン達は、プラネテューヌに美龍飛を筆頭に流星の絆の妹組が、レイヴンとローエンが残ることになり、残りのメンバーはラストイションにあるマジコン製造工場に潜入したのであった。

「わく機械がいっぱいある（*・・*）」

「アンタ、何はしゃいでんのよ!!」（。D。）ノベし!!」

潜入して早々ネプギアの機械好きが暴走してしまったのをユニが制止して、突っ込み、アーストが機械音痴を炸裂しながら奥へと進んでいったのだったのである。

「もうすぐ、我々、マジエコンヌの物だ!!」

そこにまた工場の現場監督をしている下っ端もといリンダが部下が言い返さないことを良いことに、目の敵にし出したので、ユーリが愛刀のニバンボシを抜刀して

「下っ端」

「おおお前は!!」 ロン毛野郎ども!!」

「はしやぎすぎたな、リンダ、そろそろ舞台から降りてくれねえかな？」

「こうなったら、掛かって来い!!」

「ユーリちゃん、此処はあたしにくらせてく、双撞掌底破く」

「ぎやああ!!」

制裁をする振りをしたのである。

リンダは焼きが回ったのか、身の程を弁えず、龍姫達とユーリ達とジュード達に戦いを挑んで来たのだったが、プルルートが、前に出て、前進しながら掌底を繰り出して、突き飛ばしていたのだった。

「リンダ!! 俺に任せて先に行け!!」

「ブレイブ様、ありがとうございます!!」

「ほう、おまえがブレイブ・ザ・ハードか」

「いかにも、俺がマジエコンヌ四天王のブレイブ・ザ・ハードだ」

あのマジエコンヌ四天王のブレイブ・ザ・ハードが姿を現したのである。

龍姫達とユーリ達とジュード達はブレイブ・ザ・ハードと言葉を交わして行つたが、結局分かち合うことが出来なかつたのだ。

「わかつた、アクセス!!」

そして龍姫達とユーリ達とジュード達は此処で引くわけに行くわけにいかなくなつたの

で一斉に得物を構えたのだった。

ユニのプロフェッサーユニットがそれで防御力があるのかとう言う装甲になっていたのだった。

「こんなことしても意味はない!! スプラッシュユ!!」

「そうだよ!! 魔神剣!!」

「幸せとは誰かに与えられるものじゃない!! 自分で手に入れてこそ価値があるんだ!!」

「龍姫の言う通りね!! 人間、死ぬ気でやれば、生きて行けるものよ!!」

「それと、オレたちはゲームって物がないところだからな」

「ありえん、そんな所、このゲームギョウ界にあるはずがない」

龍姫達とユリー達とジュード達はブレイブ・ザ・ハードと火花を散らしながら言葉 exchangedしながら戦っていたのだった。

「ブレイブソード!!」

「ユニちゃん!! 危ない!!」

その時だったブレイブ・ザ・ハードがユニ目掛けて大剣を振り下ろしてきたのだ。

「此処で負けるわけはいかないのよ!!」

「!!」

ユニにブレイブ・ザ・ハードの大剣が当たる直前に、ユニから黒い炎が包み込み、刀形態にしていた神機で斬り上げて、ブレイブ・ザ・ハードの大剣を打ち上げたのだった。

「ユニ!! 離して!! ユーリ!!」

「おまえが落ち着け!! 大丈夫だ!! おまえの妹はそんなに軟じゃねえ!!」

「その通りだ、此処は、ユニちゃんに任せて、わたし達はブレイブ・ザ・ハードを抑えな
いと」

「姉のあなたがそんなことでは、ダメよ」

「そのためわたしたちもいるのだから」

ノワールがユニが黒い炎に包まれ出したので、ユーリが両腕を掴んで、落ち着かせて、ブレイブ・ザ・ハードとの戦闘を行うのであった。

「アンタは誰?」

「わたしの名は三龍神の石柱、アルティメット・サジツト・アポロドラゴンだ。ツクヨ

ミは、この世界を変えるべく、異世界の人間と精霊、そして、別次元の龍の女神達を送りつけたようだな」

「まさか、龍華が別次元のアタシ」

「その通りだ、この世界の女神は人間の創造が女神の姿になることは知っている。

それでは意味がない、今こそおまえの魔王の力を解放する時だ!! わたしもおまえた

ちと共に戦うことを誓う、それとおまえのリンカーコアに三龍神の力を与える」

「ありがとう、アルティメット・サジット・アポロドラゴン、アクセス!!」

「あれがユニなの!!Σ(。D。)」

「あれ、わたし、胸がおおきくなってる、それとなんでわたしって言うてるの?」

「まさに黒の魔王だな!!」

ユニは身長が170cmになり、ベール以上に大きくなった胸を、あの黒の胴丸でべつたんこにして、銀髪碧眼で髪が腰の辺りまで伸びてロングヘアーになっており、両手に黒のグローブを装着して、右に神機を、左に黒色のドスを握って、両足に黒のロングブーツを履き、真正面が開いた黒のワンピース型の露出がない戦闘服に、首にスカーフが巻かれて、黒の短パンを履いて、一人称がアタシからわたしになり、翼のプロフェッサーユニットが無くなったことにより小回りが利くようになり、踵と肩胛骨の辺りから半透明の翼が生えていたのだったのである。

「来い!! 黒の女神候補生!!」

「此処はわたしに任せてください!!」

「わかった、だが、ちゃんと決めろ!!」

「はい!! 飛ばして行くわ!!」

オーバリーミッツLv3を発動してユニはブレイブ・ザ・ハードに攻撃を仕掛けたの

だった。

「無影衝!!」

「何!! 俺の剣を斬ったのか」

衝撃波を伴う斬撃放ってブレイブ・ザ・ハードの大剣を真つ二つにして

「魔王炎撃波!!」

刀身に炎を纏わせて薙ぎ払って追撃して

「飛燕斬空脚!!」

二段蹴りをして十文字の真空の刃を放って追撃して

「ユーリさん、技お借りします!! 焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

「あれ、ユーリのバーストアーツ!!」

「まだまだ、オレのバーストアーツには届いてねえけどな」

地面を叩いて怯ませる炎を纏った剣戟を連続でお見舞いするバーストアーツで追撃して

「耐えられるかな? ☆ 小さい羽の纏い手よ・・・蒼穹に思いを馳せ、今こそ舞い上がれ

!! 連波女^{れんぱじょうてん}雨纏!!」

「見事だ、後は任せた・・・」

「ブレイブ、あなたの思い、受け取ったわ」

二刀で竜巻を熾して、ドスを回転させながら投げてまた竜巻を発生させて、引きつけた後、乱舞をしながら斬撃と蹴りをお見舞いして、最後に飛びあがりながら斬り上げる秘奥義で止めを刺して、ブレイブ・ザ・ハードは青い光になって消えて逝ったのだった。

飛翔せよ!!

龍姫達とユーリ達とジュード達がマジエコンヌ四天王のブレイブ・ザ・ハードをユニが龍華と優華龍同様に三龍神のアルティメット・サジット・アポロドラゴンの助力のおかげで、時空魔王に覚醒したことによつて、倒し、マジコン製造工場を制圧したのだつた。

「幼女・・・あれ、おまえ誰だ!!」

「おっさん達、ぬいぐるみで遊ぶつて歳でもないんだけど」

「はしやぎ過ぎましたね・・・」

「トリック・・・」

「そろそろ・・・」

「舞台から・・・」

「降りてくれませんかね・・・」

「みんなして、青年の物まねしてるのずるい!! おっさんも入れてよ」

プラネテューヌを陥落させるための陽動作戦を逆手に取られたことに気づいたなかつた上に、見た目が幼女のイストワールが罷免されたことを知らなかつたので、まん

まと龍姫達の罠にはまっていたトリック・ザ・ハードだったのである。

「自棄だ!! 掛かって来い!!」

「みなさん、行きますよ!!」

「はい!!」

焼きが回ったのかトリック・ザ・ハードはそのまま戦闘態勢に入ったので、待ち伏せをしていた美龍飛達は一斉に得物を構えたのだったのである。

「ベロくん!!」

「魔神剣!!」

「おっさん、仕掛け終わったわよ」

「チュードン!!」

「これはすごいですね!! わたしも負けていられませんね」

「霸道滅封!!」

「ぎやあああ!!」

待ち伏せをしていたメンバーはローエンをはじめとする元軍人と騎士団隊長首席と龍姫達の妹組だったので、トリック・ザ・ハードとの実力の差が雲泥の差であったのだ。た。

「此処はわたしが決めます!! いい気にならないで!!」

「セドナさん、援護しますよ」

「おっさんも、頑張っちゃうよ!!」

もちろんセドナも戦闘に加わっていたので女神化しないで、オーバリーミッツLv3を発動してトリック・ザ・ハードに攻撃を仕掛けたのだった。

後衛のメンバーは回復と援護の態勢に入ったのである。

「おまえ誰だ!!」

「知らなくて結構です!! 散沙雨!!」

「ぎよえええ!!」

セドナのことを知らないトリック・ザ・ハードは先ほどローエンがセドナの名を言ったことを聞いていなかったの、これから逝く者に名乗る気はないと答えて、連続で滅多刺し

「烈震天衝!!」

突きを繰り出して、自分のイメージカラーのマリンブルーのタイラントフィストで打ち上げて

「守護氷槍陣!!」

愛刀でうずめの鬼丸国綱に引けを取らない水色の拵えの名刀「鬼切丸」を地面に突き刺して氷の槍で攻撃しながら自分も回復しながら追撃して

「巻き上がれ旋風!! 光翔戦滅陣・旋迅!!」

「ほう、フレンのバーストアーツ修得してるのね」

竜巻を起こして巻き上げて、自分も飛びあがって追撃を行い

「飛翔せよ!! 疾空の刃!! 奥義!! 翔王!! 絶憐衝!!」

「オレは、幼女にやれたかった」

「スゴイですね」

「セドナちゃん」

「変態!!」

「ギャファン!!」

「これはレイヴンさんの自業自得です」

真空の刃で切り裂いた後、往復で駆け抜けて、風ともに舞い上がり、最後はネプテューンブレイクのように敵を叩き付けて止めをしたのであった。

秘奥義を喰らったトリック・ザ・ハードは光になって消えて逝ったのだった。

ドサ草に紛れてレイヴンがセドナにセクハラを実行しようとしたら、セドナに殴り飛ばされたのだった。

龍琥が介抱していたは言うまでもない。

逆陽動作戦

マジコン製造工場を制圧した龍姫達とユーリ達とジュード達と同行していたベールにチカから連絡が着てリンボックスの繁華街で犯罪組織の集団が大暴れをしていると言うので、陽動作戦に倣められた振りをして早速リンボックスの繁華街に向かったのだった。

「どんどんやれ!!」

「蒼破あ!!」

「魔神拳!!」

「星影連波!!」

「魔神連牙斬!!」

「スターストローク!!」

あつさりリンダ達犯罪組織の集団を見つけた龍姫達とユーリ達とジュード達は一斉に斬撃の雨霰を繰り出していったのだったのである。

「ぎゃああ!!」 普通、戦闘だろうが、まあいい、野郎ども撤退だ!!」

「待ちなさい!!」

「チカが心配ですわ!! 教会に急ぎましょう」

陽動作戦を逆手に取られたことに気づいていなかったの、ベールの言うがまま教会に行くことにしたのであった。

教会に到着した龍姫達とユーリ達とジュード達にチカがこれがプラネテユースを陥落させるための陽動作戦だったこと明かしてきたのだが、龍姫達とユーリ達とジュード達はアイが情報を確認しないで持つてきた瞬間に気づいていたので、その場の空気を讀んで、驚いた振りをしていただけだったのである。

一方その頃

「あれ、スマホが落ちてる上に、着信が着てます」

「すいませんが龍音さん、出てください、出たらわたしが対応します」

「わかりました!!」

どうやら、トリック・ザ・ハードはスマホを落として光になって消えて逝ったのだった。

そのスマホに着信が入ってきたので龍音が会話ボタンを押して、ローエンが会話することになったのである。

「もしもし、トリック様、陽動作戦うまく行きました!!」

「ほう、それは良かったですね」

「誰だ!!」

「これはわたくしとしたことが、わたしはローエン・J・イルベルトと申します」

「トリック様はどうした!!」

「それなら、戦死になられましたよ、最後は有終の美を飾られましたよ」

「そんなバカな!! 陽動作戦がばれてたのかよ!!」

「情報をアイさんに流してわたし達に伝えた瞬間にこれがプラネテューヌを陥落させるための陽動作戦だと三女神様以外のみなさんはお気づきになりましたので、わたしどもが残って、あなた様の上司を迎え撃ったまでのこと」

「マジック様に報告だ!!」

「さてと、青年たちが戻って来るまで、くつろぐとしますかね」

「そうですね」

「もう、お姉ちゃん達も片付いた頃なので、お願い!!」

「はい、畏まりました、マスター!!」

リンダは陽動作戦を逆手に取られたことを知らない上にトリック・ザ・ハードはもう美龍飛達の手によって葬られたことを知らないで、携帯でトリックの番号に掛けたら、ローエンが出て戦死したことを告げられて、通話を切って、最後の一人、マジック・ザ・ハードのいるプラネテューヌの平原に向かっていったのだったのである。

「マスター、龍音さんから通信が着きました!!」

「わかったよ、イルミナル、繋げて!!」

「お姉ちゃん、こつちも片付いたよ」

「おっさん以外は生きてるみたいだな」

「青年!! 酷い!!」

「あのこれはと言うことなのかしら?」

「説明して」

リーンボックスで陽動作戦に引つかかったことにされている龍姫達とユーリ達とジュード達の元に龍音の次元デバイス「玄武」から龍姫の次元デバイス「イルミナル」に通信が着いたので、早速スクリーンを表示して、お互いに現状報告を行なっていたら、納得のいく説明を三女神とアイエフが求めてきたのであった。

「アイのことだからあっさり陽動作戦に引つかかるだろうと思って」

「おっさん達を残してきたってわけ」

「それじゃあ、わたし達は」

「うん、龍姫達とユーリ達とジュード達に嵌められていたってこと」

「敵を欺くにはまず味方からって、諜報部で習わなかったのかよ」

「裏切り者!! (; . . .) !!」

「カロールより頭が悪いんだね」

「そうですね」

「これはティポに同意するしかありませんね」

アイエフが陽動作戦にあつまり引つかかったことにユーリが茶化して、ティポからカロールより頭が悪いと言われてしまった三女神とアイエフだったのであった。

スキット：組織相手

アイ「裏切り者!!」

ユーリ「おまえが悪いんだろぅが!!」

ルドガー「情報を鵜呑みにする方が可笑しいと思うが」

ネプ「そうですね」

龍姫「アイって、騙されやすいんだね」

エステル「そうみたいです」

リタ「アンタ、諜報部やめたら!!」

龍菜「これは救いようが」

神子龍「ないですわ」

黒衣の断罪者が選んだ道

龍姫達とユーリ達とジュード達はプラネテューヌ教会に戻ってきてレイヴンとローエンと美龍飛達と合流をしていたのだったのである。

「フレン!!!」

「すまない、遅くなりました」

「フレンさん、どうしたんですか?」

「実は、ザウデを調査していた部下から、アレクセイが生きている可能性が出たと言う、報告があつたんだ」

「なんだと!!」

「アレクセイって誰?」

なんと転送装置からフレンが現れてザウデ不落宮を調査していた部下から元騎士団長閣下ことアレクセイが生きている可能性が出てきたと言うのである。

その理由はあの時確かにユーリが斬り捨てたのをこの目で見ていた龍姫達も、アレクセイの遺体を確認していないのだからである。

海も探したが、鎧の欠片も見つからなかったと言うのである。

「アレクセイは、フレンさんの前の騎士団長だった人だよ」

「そうなんだ、さつき遺体がどうか」

「そうだな、全員いるみたいだからな」

「まさか、ユーリ!!」

「どうせ、話さなきやいけねえと思ってたからな」

ユーリはあのことを話すことにしたのであった。

そう、気に入らないと言うだけで部下まで殺して、その遺体を魔物のエサまたは売りとばし、重税を払えないものまで魔物のエサにした執政官ラゴウト、始祖の隸長を倒してくるようは無理やり灼熱の砂漠に丸腰の大人を置き去りにした、騎士隊長キユモール、そして先ほど名前が挙がった、エステルを命を脅かし、街を滅茶苦茶したアレクセイ、そして、そのアレクセイに孫が嵌められて、切腹を余儀なくされたドン・ホワイトホースを斬ったことを、集まったメンバーに明かしたのだった。

「だからって、殺す必要があったの」

「おまえら、人の心を奪い合った挙句、その所為で何人の命が死んでいったのかわかってるのかよ、それに三年前、マジック・ザ・ハードを殺しに行ったの忘れたのか」

「わたしはみんなと仲良くしたかったのに、シエアなんていらなかった」

「ネプテューヌ、何言ってるの!! わたし達は女神で、シエアがなかったら生きていけな

いのよ!!」

「おまえら、一つ聞いていいか、法で裁けず、殺さないと助けられない命に、いつか法を正すから、今は我慢して死ねって言うのか!!」

「!!」

ユーリは三女神とアイエフに法で裁くことが出来ない悪党を斬ったら助けられる命に、いつか法を正すから、今は我慢して死ねって言えるか問いたただいたのであった。

ネプテューヌ又は気楽に生きていた上にシエアの所為でシエアが空っぽになったら女神が死ぬことに疑問に思っていたのだった。

三女神とアイエフは落胆してしまったのであった。

だがそれを聞いたジュード達はユーリに

「それは、そいつらが罪と言う意識がないのだろう」

「悪いのに法で裁けないのはおかしいよ」

「これからも、協力してよ!!」

「おまえら、ったく」

右手を差し出して握手をしたのであった。

「大変だよ!!卵が!!」

「まさか、孵化するの!!」

なんとセドナがツクヨミから預かっていたあのハート模様の卵が今にも孵化しようとしていたのだった。

しばらくして、卵に罫が入り、そこから光が漏れ出して

「ネプギア!! 美龍飛!! 姫龍紗!! 光ってるよ!!」

「あわわ(ノ口)、(。(口。≡。口。)/ (口。))!! 助けてお姉ちゃん!!」

「おまえらが、落ち着け!!」

別次元のネプギア同士の体が光り出して、落ち着かせて、しばらくして卵が孵化したのである。

「じろじろ見ないでよ!! そのエロおやし!!」

「見かけによらず、小さいドラゴンのリタだね」

「アタシとあのチビドラと一緒にしないでよ!!」

「わたしはシヨコラ!! よろしくね」

「よろしく、シヨコラ!!」

こうして龍姫達とユーリ達とジュード達に額にハート模様の黄色い小さな龍ことシヨコラが流星の絆の一員として仲間になったのだった。

この後お互い自己紹介を行なったのであった。

ユーリの罪はテルカ・リユミレース現皇帝ヨーデルと副帝エステルの恩赦もあり、無

罪放免になったことも説明したのであった。

気になったこと

ユーリが選んだ道を聞かされた三女神とアイエフは意気消沈してしまったので、マジック・ザ・ハードとの決着を明日にして、その場で解散したのであった。

今龍姫達とユーリ達とジュード達は龍姫達が生活をしている次元のゲームギョウ界のプラネテユーヌ教会に集まっていたのだったのである。

「そう言えば、なんでいーすんだけギョウカイ墓場に三年間幽閉されたこと知ってんだろ?」

「ボクも思ってたよ!!」

「確かに、龍姫とジュードの言う通りだな、プラネテユーヌの転送装置を使って行つたからそこまで気にはしてなかったが」

「それと、ファルコムに会った時に、剣をいーすんに作ってもらつたつて言うから見せてもらつたら、何処となく、アレクセイが持っていたあの剣に似てたんだよね」

「なんだ、気づいてたのね。おっさんも初めて会った時に気になってたわよ」

「それにさ、ゲームギョウ界を乗っ取るんだつたら、三年前に全員を殺した方が手っ取り早くない?」

「レイア!! それだよ!!」

「確かに、ゲームギョウ界を乗っ取るのだったら、女神達を殺した方が手っ取り早いはずだ!! どうして、幽閉したんだ? ユーリ達は三年前、何か気になったことあるか?」

会議室で龍姫達とユーリ達とジュード達はお互いに気になったことを話し合っており、レイアが何故圧倒的に女神達を叩きのめしたのに、その場で殺していれば、ゲームギョウ界を我が物にできたのに、三年間もギョウカイ墓場で幽閉していたことに疑問に思っていたらしく、その場にいた全員が頷いたのだったのである。

「確か、オレとフレンが騎士団に入隊して」

「わたしとフレンが出会ったのも、二〜三年前で」

「それから、オレはすぐに退官して」

「それぐらいしか思い当たらないな」

「そうか」

ミラはユーリ達が三年前に気になったことを教えてほしいと言うのでユーリ達が覚えていたことを事細かに説明したのであったのである。

「なるほど、そういうことでしたか」

「ローエンさんも気づいたんですね」

「ローエン、龍姫、つべこべ言わず話せ!!」

「これはあくまでわたしと龍姫さんの推測なのですが、三年前と言うのが、キーワードになつてたようですね、あと四ヶ国の教祖様の内、プラネテューヌだけが人工生命体なのかも気になつておりました」

「それに先代の女神様の顔、天界に問い合わせて見たんだけど、ゲームギョウ界に女神が国を統治したのは、ここ数年だったよ」

「なるほどな、つまり元々、女神など必要でないのに、国を統治させて、シエアの奪い合いをさせて、ネプテューヌとネプギアを軟禁して、何百年生きたと言う記憶を刷り込ませたのだな」

「その事に気が付いたネプテューヌはホワイトディスクにキラーマシンを封印させたんだ」

「そして、ギョウカイ墓場で幽閉された」

「こうなつて来ると、本気でアレクセイが生きているみたいだな、なんせテルカ・リュミレースの全体図とあつちのゲームギョウ界の全体図照らし合わせて見たら」

「似てるんです」

「おまけにザウデ不落宮がある場所にギョウカイ墓場があつた」

「ここまで偶然には出来すぎる」

「うーん」

「グダグダしてても仕方ない、マジック・ザ・ハードから聞きだした方が早い!!」
「そうですね」

「それでは、各自解散にする」

「あのくお願いがあるんですけど」

「わかってるよ!! 龍姫達が女神だったこと、あの子達には」

「内緒にして欲しいんだね!!」

「うん!!」

龍姫とローエンは四人いる教祖でプラネテューヌだけ人間ではなく人工生命体のイストワールだったのか気になっていた上に、ユーリ達、テルカ・リュミレース組はテルカ・リュミレースの全体図とあつちの次元のゲームギョウ界の全体図を照らし合わせてみたら、似ている点が多すぎると言うのである。

しばらく考えていたのだが、答えが出てこなかったので各自解散にして、龍姫達、流星の絆が全員が龍の女神であることを黙って欲しいと龍姫がお願いしたら、快く承諾してもらい、各自の宿泊部屋に戻って行ったのだったのである。

スキット：まさか

ミラ「龍姫、驚いたぞ、まさか、キミも女神だったとは!!」

龍姫「ごめんなさい、騙すつもりはなかったんです」

ジュード「仕方ないよ、あの場所で女神だって言ったら、何されるかわからなかったんだから」

レイア「そうだよね、ただでさえ、女神達が三年間も不在だった場所で女神化したら、龍姫達が目の敵にされちゃうよ」

アースト「その通りだ、下手に身分を明かすのはまずいからな」

エステル「わたしも皇族ですから龍姫達の苦労はわかりますから」

ミュゼ「それにしても、龍姫は十人姉妹だったのね、龍菜には、双子の姉で勇龍がいるのね」

勇龍「それがわたしよ、けど、今はわたしが忙しいから、龍菜が次元探偵の仕事を代わりにやってもらってるの」

龍菜「双子なんだから、気にしなくてもいいのに、あなたは自分のことに専念しなさい」

勇龍「わかったわ、ありがとう」

フレン「お二方をよく見ると、ユーリの妹に」

ユーリ「見えねえよ!!」

ご対面

龍姫達とユリー達とジュード達はマジック・ザ・ハードとの決着のため、またあつちの次元のゲームギョウ世界のプラネテューヌに戻ってきたのだったのである。

向こうのパーティーメンバーと合流してマジック・ザ・ハードが待ち構えている平原へと向かったのだった。

「揃い踏みだな。 はるばる、こんな平原へようこそ、この傷の落とし前は着け差してもらう、その分だとトリックは役に立たなかったようだな」

「・・・死んだよ」

「最後までいいとは思ったが、見込み違いだったか」

「それと、どうして三年前にネプテューヌ達を殺さなかったのかな？」

「・・・」

「どうしたのかしら？ あれ程この世界を乗っ取ろうとした人が、言い返せないのかしら？」

「そんなこと、おまえらにはどうでもいいだろう!!」

「アレクセイ、知ってるよね？」

「何!!」

「どうしてそれをおまえらが、知ってるのだ!!」

「あれ、確か、アレクセイってユーリ達の世界の人だよ、どうして知ってるの?」

「いいだろう、あのお方こそ、二つの世界を変える存在なのだからな!!」

「なるほど、アレクセイは三年前にこの世界に来たんだね」

「ああ、その通りだ!!」

「そして、アレクセイはヘルメス式魔導器の知識を使つて」

「イストワールを作り、情報を他国に流さず、テルカ・リュミレースの自分に来るようにさせた。おまけに、3に関する数字を言っていたのは、準備に三年間も掛かるからじゃないかしら」

「そして、女神達を、いや、ネプギアにトラウマを埋め込ませて、三龍神の力を」

「封じさせた、けど、それをツクヨミは気づいてしまった、ツクヨミは自分が動いたらまずいと思ったから、わたし達、凛々の明星と、龍姫達、流星の絆に合同捜査を依頼した。それとマナに関する知識があるジュード達を此処に呼ぶため、クロノスにも応援を要

請した」

「そして、美龍飛と姫龍紗と真龍姫達が持つ「喚起」で二人は三龍神の力を解放することが出来た」

「こうなってしまった以上、おまえらには消えてもらうぞ!!」

なんとマジック・ザ・ハードがテルカ・リユミレースの前騎士団長閣下のアレクセイと繋がっていたのだったのである。

真実を知った龍姫達とユーリ達とジュード達を亡き者にするべく得物である大鎌を構えたのだった。

ユーリ&龍菜「世のためだろうが!! なんだだろうが!! それで誰かを泣かせてりや(たら)世話ねえぜ(ないわね)!! てめえ(あなた)を倒す理由はこれで十分だ(よ)!!」

「マジック!! おまえを倒す!! いくぞ!! ショコラ!!」

「シヨコットチェンジ!!」

「この刃はおまえを倒す色だ!!」

「みんな、行くよ!!」

「オウ!!」

ネプギアは霸王龍女神化をして、シヨコラは光になってネプギアの中に入り、バリアジャケットの赤紫色の水晶が付いた龍の角と天使の翼が付いたサークレットになってネプギアの頭に装着されていた。

愛刀は刀身が赤紫色になり、鐔が、六芒星の形になり、左腰にホルダーと鞘が付いて

いた。

龍姫達は敢て、女神化しないで一斉に得物を構えて、ユーリ達とジュード達も得物を構えたのだった。

マジック・ザ・ハードとの三年間に渡る戦いの火蓋が切つて落とされたのだった。

集え!! 三龍神

龍姫達とユーリ達とジュード達はマジエコンヌ四天王の最後の一人、マジック・ザ・ハードと火花を散らしながら激しい攻防を繰り広げていたのだったのである。

「伏せろ!!」

ふと高台に目を迎えるとデュークが宙の戒典を掲げて、マジック・ザ・ハードのオーラを掻き消して、いつの間にか姿を晦ましたのだった。

閑話休題

「霸道滅封!!」

「絶風刃!!」

「天光満ところに我はあり、黄泉の門開く時汝あり、出でよ神の雷!! インデイネイション!!」

「龍姫達がああの魔術をすると様になるね、三散華!!」

「そうだな、ウインドカッター!!」

「災害警報、お住まいの地域は雨模様!! テンペスト!!」

「我に仇名す敵を討て!! デイバインセイバー!!」

「蒼破!!」

マナと魔力を用いることが出来る龍姫達とユーリ達とジュード達とネプギアとユニはマジック・ザ・ハードを押し始めていったのだったのである。

「行くで!! 秋龍!!」

「オウ!! 貴様を屠る!! この一撃!!」

武龍&秋龍「クリティカルブレード!!」

「ぐッ!!」

武龍と秋龍の共鳴技が炸裂して、マジック・ザ・ハードに喰らわせて、此方に流れを
持ってきたのである。

「飛ばして行くわ!!」

「お姉ちゃん!!」

「おまえは我に負けたのを忘れたのか」

「確かに、こいつらはあんたに負けた」

「だけど、ボクたちが助けて、此処に居る」

「決める!!」

ネプテューヌは勝負を決めるためオーバーリミッツLv3を発動してマジック・ザ・ハードに仕掛けに行ったのだ。

「虎牙破斬!!」

斬り上げて斬り下ろす二連撃を繰り返して

「秋沙雨!!」

滅多刺しにしてメに斬り上げて追撃して

「猛虎連撃破!!」

虎牙破斬を八回繰り返して追撃して

「ユーリ直伝!! 腹括りなさい!! 天狼滅牙!!」

「様になつてるじゃねえか」

地面を叩いて怯ませて滅多斬りにするバーストアーツで追撃して

「ネプテューンプレイク!! 止め!!」

縦横無尽に切り刻んで最後は叩きつける自身の必殺技でめた。

「ぬ・・・う・・・おの・・・れ いいだろう、最後を共に見届けようではないか」

「やめなさい!!」

「馬鹿め!!」

「危ない!! ノワール!! キヤアあ!!」

「ネプテューヌ!!」

「お姉ちゃん・・・お姉ちゃん!!」

「ジュード!! エステル!!」

「はい!!」

「わかった!!」

マジック・ザ・ハードに止めを刺そうとノワールが斬りつけようとしたら、マジック・ザ・ハードの背後からビームが飛んできて、それに逸早く気付いたネプテューヌはノワールを突き飛ばして、代わりに、心臓辺りに無防備のまま喰らってしまつてそこから夥しい血が流れ出したので、ミラはジュードとエステルにすぐさま応急手当の指示を出したのだ。

「おまえは」

「久しぶりだね、ユーリ・ローウエル君」

「アレクセイ!!」

「そんな、確かに、あの時、ユーリが斬つたはず」

「どうやら、犯罪神はわたしに屈したようだ、それによつてわたしはこうして生きながらえているのだから、良い道化ぶりだったよ、三女神さま」

「なるほど、おまえが、イストワールを作つた張本人つてことか!!」

「いかにも、わたしがイストワールを作り、そして、この世界が女神がいなければいけないようにしたのもわたしだ、紫の女神を陥れたのも、わたしだ」

なんとあのユーリに斬られて聖核の下敷きになって死んだはずのアレクセイが姿を現したのだったのである。

「それって」

「第二のテルカ・リュミレースを作ることを約束しよう!! フハハは!!」

「お姉ちゃん!! お姉ちゃん!! 目を開けてよ!!」

「そんな、助けられなかった」

ノワールを庇ってビームを喰らってしまったネプテューヌは心臓を撃ち抜かれてしまった所為で、その場で息を引き取ってしまったのである。

「起きろ、起きろネプ子!!」

「起きてください!! ネプテューヌさん」

「いつまで寝ているつもりだ!!」

「うるさい!! わたしは死んだのよ!!」

死の狭間で赤い小きき龍と薄緑のロングヘアの女性と大剣を持った巨大な龍に起こされたネプテューヌは死んだと思い込んでいたのだった。

「相棒、死んでねえぞ!!」

「そうです、あなたは、確かに、女神としては死にましたですが」

「死んでもらったら、ツクヨミに顔向けできんぞ!!」

「死んでないってどういうこと?」

「おまえにはまだやるべき使命が残されている、ツクヨミは、おまえとネプギアをこの世界を調査するために送られたはず、それをアレクセイがイストワールを作り、この世界に女神と言う制度を設けたのだ」

「そうなの?」

「どうやら、あなたの記憶をイストワールが改ざんしたようですね」

「そんな」

まだやるべきことが残っていると大剣を持った赤い巨大な龍に言われたネプテューヌは自分が死んでいないことについて質問したのだった。

「名乗ってなかったな、おれはムゲンだ!!」

「わたしは、精霊、マーテルです」

「我は三龍神の一柱、アルティメット・ジークヴルム・ノヴァ」

小さき赤き龍ことムゲンと精霊マーテル、そして三龍神の一柱、アルティメット・ジークヴルム・ノヴァは小さな光になってネプテューヌの中に入っていったのだったのである。

「何!! ネプテューヌが光り出した!!」

「お姉ちゃん・・・」

「みんな。心配掛けちゃったわね。もう大丈夫よ」

「お姉ちゃん!! お姉ちゃんだよね!! お化けじゃないのだな!! ちゃんと影あるのだな!!」

「生きてる生きてるわよ!! だから離れなさい!! 痛いわ!!」

「ごめん!!」

「これだから、相棒は」

「おまえ誰だ」

「おれは、ネプ子の相棒、ムゲンだ、よろしくな!!」

ネプテューヌは三龍神の石柱、アルティメット・ジークヴルム・ノヴァの力とマーテルの力で息を吹き返し、光に包まれて、光が収まると、身長が175cmまで伸び、胸がベール以上まで大きくなり、プロフェツサーユニットから零れ落ちそうになるとこだが、青紫と赤紫色のインナーウェアで麗しいボディラインを象っていたが、大きくなった胸の隆起を抑え込んで変身前のぺったんこに見えるまでに薄紫色の軽鎧の胴丸を装備しており、左腰に二本差し出来るようにベルトとホルダーが装着して、両腕の肘の手前まで手甲が付いた籠手が装備しており、両足に紫色のレガースが付いたガーターベルトも付いたロングブーツを履き、踵に半透明のレーザーブレードが付いており、首に二本の紫色の帯状の紐が襟からでており、重かった翼がなくなり、小回りが利くよう

になり、もちろん空を飛ぶことが可能である。

髪を二つの十文字の髪飾りでツインテールに結って、服装が黒と青と竜胆色の長袖のジャケットの上着に、前が開いたロングスカートを履いて、カーゴパンツを履きボーイツシユな出で立ちになっており、露出が全くなくしたのである。

赤い小さな龍ことムゲンも仲間入りして、ムゲンはネプテューヌとユニゾンして、龍姫達とユーリ達とジュード達はマジック・ザ・ハードとの二戦目に突入するのであった。

紫の時空女神

ネプテューヌはアレクセイがマジック・ザ・ハードの陰からビームを放ち、ノワールに当たる寸前にネプテューヌが突き飛ばして、心臓を貫かれて、死んだのだが、三龍神の石柱、アルティメット・ジークヴルム・ノヴァと精霊マーテルの力で生き返り、真龍姫達同様に、リンカーコアに力を宿し、シエアの輪廻から解放されて、紫星龍の女神に覚醒したネプテューヌは、龍姫達とユーリ達とジュード達ともにマジック・ザ・ハードとアレクセイとの戦いの火蓋が切って落とされたのである。

「あの一撃で死なないとは」

「危うくご期待に沿えるところだったわ」

「マジック、後は頼んだ」

「戻って来い!! アレクセイ!!」

「ネプテューヌとネプギアとユニだけ!! ずるいわよ!!」

「今はそんなこと言ってる場合!! 来るよ!!」

「何度でも、殺してやる!!」

アレクセイはマジック・ザ・ハードに殿を任せて、あの時のようにテレポートして逃

げてしまったのだったのである。

ノワールは文句を言いたしたが、龍姫達とユーリ達とジュード達は聞き流して、マジック・ザ・ハードとの戦いにケリを着けるために一齐に得物を構えたのだったのである。

「そうだ!! ネプテューヌ!! これ使って!!」

「ありがとう!! 龍姫」

「我に、付け焼刃など通用しないことをその身に刻んでやる」

「けど、その付け焼刃が、案外、通用するんだぜ!!」

「悪いけど、ボクたちは負けない!!」

龍姫はアイテムパックから、日本刀を一振りを鞘ごと取り出して、ネプテューヌに向かって投げて渡したのだったのである。

それを器用にキャッチしたネプテューヌは左腰に装着されているホルダーに帯刀して、左で抜刀して、真龍姫達同様に二刀流の状態で、左半身に構えたのだった。

「虎牙破斬!!」

「三散華!!」

「魔神剣!!」

「霸道滅封!!」

「紅蓮翔舞!!」

「覚悟はできた? デモンズランス!!」

龍姫達とユーリ達とジュード達は、復帰したネプテューヌと一緒に怒涛の快進撃を始めたのである。

やはり三女神とアイエフ達について行くのがやっとだったのである。

「ぐ!! ありえん!! 三年前、この我に屈したはず」

「見苦しいよ!! これが現実だから」

「悪いが此処に居る三女神以外は一度決めたら、諦めが悪いのだからな」

「なんか、わたし達、遠回しに、足手纏いにされているわよ」

「仕方ないですわ、受け入れるしかないのですから」

マジック・ザ・ハードは自分が膝を付かされたことを受け入れない様子で、追い打ちがてら、龍姫達とユーリ達とジュード達は諦めが悪いと答えたのだった。

「今度こそ、飛ばして行くわ!!」

「二度も同じことが通用すると思っっているのか」

「身の程を知らぬようだな」

ネプテューヌは先ほどの攻撃で体内に闘気が貯まったのでオーバーリミッツLv3

を発動してマジック・ザ・ハードに特攻していった。

マジック・ザ・ハードは先ほどのネプテューヌと同じだと思い込んでいたのだったのである。

「死ねええ!! 何!!」

「勘弁してくれよ!! 今度プリン作ってやるから」

「ごめんなさい、あなただけに」

「格好いいとこ」

「見せれませんから!! 連牙弾!!」

龍姫・ユーリ・龍菜・ジュードがマジック・ザ・ハードの得物の大鎌を砕いて、丸腰にさせたのだ。

「約束、守りなさいよ、ユーリ!! 爆炎剣!!」

右の刀を振り下ろして火柱で攻撃して、

「閃空裂破!!」

回転斬りで巻き上げて斜めに急降下しながら突きを繰り出して追撃して

「鳳凰天翔脚!!」

回転蹴りで蹴り上げて、到達点で鳳凰の炎を纏い、地上に向かって特攻して

「焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

「足で踏んづけるのか」

「あれは、武術の「震脚」または「踏鳴^{ふみなり}」とも言うんですよ。 あーやって、気を足に集中させて、思いつきり踏み込むんですよ。 慣れたら、わずかな動作で高威力が出るようになりますよ」

「なるほど、二刀流だから足で地面を踏み鳴らして衝撃波を発生させるわけか」
「騎士団では習わないよ」

本来なら左拳で叩いて怯ませるのだが、二刀流なので龍姫の「天龍凰虎」同様に、震脚で怯ませて滅多斬りにして斬り上げるバーストアーツで追撃して

「これでお終いにしましょう!! 覚悟!! 虚空蒼破斬!! 空間翔転移!! はあああ!!
止め!! 天龍!! 次元!! 滅牙斬!!

「この我があああ!!」

「以前、闘技場で戦ったことのあるあの剣士の技を」

「さすが、天武の才はあるようですね」

「あれが、互角だったネプテューヌなの(。ω。ノ」

「お姉ちゃ〜ん!! 戻ってきて!!」

光の光弾を巻き上げ斬撃を放った後、時計を象った魔法陣に捉えて、空間転移でマ

ジック・ザ・ハードの死角である頭上に移動して、龍虎滅牙斬をお見舞いする秘奥義で引導を渡したのだった。

本来は「エターナルブレイド」と言う技名なのだが、ネプテューヌは龍姫達が漢字の技名を多用するので、勝手に「天龍次元滅牙斬」と命名したのである。

三女神とアイエフは腰を抜かして、そのまま石化して、あつちの世界に行ってしまったので、ユニが迎えにいったのだったのであったのは言うまでもない。

マジック・ザ・ハードの末路

ネプテューヌは三年前のリベンジを果たしたのであった。

その時、マジック・ザ・ハードは

「フハハは!! これで勝ったつもりか」

「知ってるよ、マジック!!」

「悪いが、オレたちの目的は」

「端から、犯罪神だったのだからな」

「何!! それを知っていて」

龍姫達とユリー達とジュード達を嘲笑いながら、勝ち誇っていたのだが、龍姫達とユリー達とジュード達は元より目的は犯罪神を倒すことだと言い負かしたのである。

「あなた達、わかって言ってるの!!」

「わかってるからこそ、アタシたちの知識が役に立つんだから」

「それを先代の女神、いや、満月の子が命を犠牲にして、星喰み同様に、封じていたのよ」
「どうして、異世界から来たあなた達がその伝承を知っているのですの!!」

ノワールは龍姫達とユリー達とジュード達にわかっているのか問いただしてのだが、

それをリタがわかってるいる上で、以前、星喰みを倒した知識を役に立つと言い、ジュデイスがゲームギョウ界に伝わる伝承とテルカ・リユミレースのミヨルゾに伝わっている伝承が似ていたことを思いだして、明かして、それを聞いたベールが度胆を抜かれていたのだったのである。

「絶対的な死は来る。誰にも逃れられん。フハハは!!」

ユーリ&龍菜「いい加減、黙つときな(さい)!!」

「ぐ!!」

「もつとも愚かな・・・道化・・・それが我と三女神とは、な」

アレクセイに見限られたことに気づいたマジック・ザ・ハードは錯乱状態に陥って、龍姫達とユーリ達とジュード達と三女神とアイエフ達を尻目に哄笑し出したので、堪忍袋の緒が切れてしまったユーリと龍菜がニバンボシで斬り捨てたのだ。

マジック・ザ・ハードは道化は自分とネプテューヌを除く、三女神だと言い残して光になって消えて逝ったのだった。

「もう、心配したぞ」

「そうです」

「念のため、病院へ行ってください」

「それもそうだな、心臓を撃ち抜かれて、生きてる奴知ってるの、フレンドだけだと思った

けどな」

「ユーリ、からかっている場合じゃないよ」

「ボクが、病院へ連れていきます」

「わかったよ、教会に戻ろうよ!!」

心臓をアレクセイに撃ち抜かれ、死んで、紫星龍の女神に覚醒したネプテューヌは龍姫達とユーリ達とジュード達に散々な言われようだったのであった。

龍姫達とユーリ達とジュード達は一旦、作戦を立てるために教会に戻るのであった。

「ネプテューヌさん、しばらく、念のため、検査入院をして、何も異常がなかった場合は、五日で退院できます」

「やだ〜入院!! いや〜!!」

「お姉ちゃん!! ダメだよ、お姉ちゃんの看病はわたしが付きつきりでやってあげるから」

「ネプギアが言うなら、検査入院するよ」

「そうだ、この服、わたししておくね」

「このサイズはお姉ちゃんには、大きすぎるんじゃないか」

「覚醒した副作用のこと忘れてないかな」

「あ、そうでした」

龍姫は生き返ったとはいえ、あのまま覚醒して、秘奥義まで繰り出してしまったネプテューヌを、かかりつけ医がいる天界の病院に連れて来ているのである。

医師はしばらく検査入院をするように、ネプテューヌに告げたら、ネプテューヌは嫌がってしまったのでネプギアはセドナに仕事を代行してもらって、病院で姉の看病をすることを決めて、龍姫と別れて、龍姫は、メンバーの下へ戻るのであった。

スキット：ネプテューヌの能力

ミラ「ネプテューヌは戦いの中で強くなるのだな」

龍姫「違いますよ、あれはラーニングって言う、能力です、早い話が、見たり、聞いたりしたことを、その場で習得する能力です、自分で言うのもなんですが、ボクもネプテューヌ同様にラーニングで術技を習得してるようなんです」

ユーリ「さすが、龍姫だな」

レイヴン「何言ってるの、青年もそのラーニングっていう能力持ってるじゃない」

エステル「そういえば、書物を読んだだけで、その場で技を習得しましたね」

ユーリ「それがラーニングってやつか」

フレン「ラーニングできる君がうらやましいよ」

ユーリ「ガキの頃からオレに負けたことのないやつが言うセリフか」

ギア「なるほど、お姉ちゃんはラーニング能力を持っていたんだ」

龍姫「これは代々プラネテューヌの女神、パープルハートに先天的に受け継がれるんだって、ツクヨミ様から聞かされたから」

ローエン「なるほど、そんな能力をお持ちだったんですね」

ノワ「ありえないわ」

伝承

マジック・ザ・ハードを倒して、後は犯罪神を残すのみになったのだが、ネプテューヌが心臓をノワールを庇って、アレクセイに撃ち抜かれて、死の淵を彷徨って、生き返ったのはいいのだが、あの後、龍姫のかけりつけ医がいる天界の病院で検査入院を余儀なくされてしまったので、龍姫達とユースリ達とジュード達は、フレンが騎士団に戻らなければならぬので、別れて、プラネテューヌ教会に集まっていたのだったのである。

「ユニ様!!」

「アンタ誰よ!!」

「わたしはイアンと申します、今日から、ユニ様直属の執事を応接かっています」

「わかったわ、よろしくねイアン」

プラネテューヌ教会の会議室に入ったらそこに青い小さい龍が待つており、ユニのことを様付で呼んだので、ユニは名を聞いたのである。

小さな蒼き龍はイアンと名乗り、本日付でユニの直属の執事を受けた回ると告げて、ユニは承諾したのだった。

「さてと、話してもらおうわよ」

「何を？」

「どうして、異世界から来たあなたの方がゲームギョウ界の伝承を知っているのですの？」
「そんなことかよ、オレたちが住んでる、テルカ・リュミレースのミョルゾつて所に、似たような伝承が残されてたんだよ」

「そうなのか!!」

「ええ、わたしの種族、クリティア族の言い伝えに書かれているの、テルカ・リュミレースでは、女神のことを、満月の子と呼ぶのだけど、あなた達のように変身は出来ないわ」
「そこには、こう書かれてました」

ノワールはユーリ達が何故ゲームギョウ界の伝承に詳しいのか疑い出したので、ユーリがいつものように、答えたのである。

ジュード達はテルカ・リュミレースの伝承がゲームギョウ界の伝承に似ていることに驚いた。

テルカ・リュミレースの伝承に詳しいジューディスが付け加えて、エステルが解説を買って出たのである。

「クリティア族こそ知恵の民なり、大いなるゲライオスの礎、古の世の賢人なり、されど賢明なる知恵は禍なるかな、我らが手になる魔導器、天地に恵みをもたらすも、星の血なりしエアルを穢したり、エアルの穢れ、嵩じて大いなる災いを招き、我ら怖れもてこ

れを星喰みと名付けたり此処に世の悉く一丸となりて星喰みに挑み、忌まわしき力を消さんとす、世の祈りを受け、満月の子らは命燃え果つ。星喰み虚空へと消え去れり。です」

「そんなことつて」

「なるほど、ゲームギョウ界とテルカ・リユミレースは」

「繋がっていた」

「エアルをシエアに置き換えて、満月の子を女神に置き換えて、星喰みを犯罪神に置き換えて、魔導器をマジコンに置き換えて見たら」

「強ち間違つてませんね」

エステル直観像記憶能力であの伝承を一字一句間違えないで、暗記していたことにその場にいた一同が驚きを隠せないでいたのだが、それを聞いた三女神は意気消沈していたのだった。

スキット：ムゲン・シヨコラ・イアン

ムゲン「やつと戦えるって言うのに、相棒の奴!!」

イアン「何を言っているのですか、あなたの主は、心臓をアレクセイに撃ち抜かれたのですよ、生き返れただけましだと思つてください」

シヨコラ「しよこ?」

テイポ「ボクも、エリーゼとユニゾンするぞ〜」
龍姫「無理だと思っよ」

黒の三龍神の魔王の成長

ネプテューヌとネプギアを除いた三女神はテルカ・リュミレースの伝承を聞かされて、言葉を失ってしまったのであった。

「アレクセイは、デュークさんが持っている、宙の戒典の複製を作ろうとしてたんじやないかな？」

「なるほど、それも一理あるわ」

「確かに、アレクセイは、ラゴウ・バルボスを使って、魔核を集めさせてたからな」

「それだったら、女神をあそこに幽閉する理由が出来るね」

「けど、諦めて、エステル使ったけどな」

「そうですね」

龍姫達とユーリ達はアレクセイが三年前に女神達をギョウカイ墓場に幽閉ししていた理由を話し合ってたのだった。

「うっ!!!」

「ユニ!!! どうしたの!!!」

「ユニ様!!! まさか!!!」

「なんか、出てきたわよ!!」

「これ、リンカーコア? なんか、形が」

「こうしちゃいられない!! ほい!!」

「それ、龍姫達がいつも着ている服」

その時だった突然、ユニが胸を抑えて蹲ってしまったのだ。

そしたらユニの体からリンカーコアが飛び出してきて、形が六芒星を立体化した形に変化して、ユニも黒い炎に包まれ出したので慌てて星龍はアイテムパックから今着ている白と黒の戦闘服の予備をユニに向かって投げたのだ。

しばらくして炎が収まるとそこにいたのは

「ユニっち〜!! おっさんの胸に飛び込んでおいで〜」

「エッチ〜!!」

「ぎゃああ〜」

「ごめん、男性の方は、外で待てくれるかな」

「うん」

「レイヴン、行くよ」

なんと、身長がボールと同じくらいに成長して、胸もミラとミュゼとジユデイスに引けを取らないほど大きくなっていったのだが、星龍がああ戦闘服を渡してたおかげで全

裸は回避したのだが、レイヴンが早速セクハラを実行してしまったが、案の定ユニの左拳のから繰り出された、ユース並の正拳突きをお見舞いされてそのまま気絶してしまったので、男性陣はレイヴンより先に回れ右をしていたのだったのである。

成長したユニを着替えさすために、男性陣には外で待つてもらおうことにしたのだった。

「これでよし!!」

「ごめんなさい、大事な話し合いの最中だったんですよ、それと服まで用意してもらっちゃって」

「気にしなくてもいいのよ」

「そうです」

「今まで着ていた服だと、多分サイズが合わないからね、ちょうどアイテムパックに予備の衣類が入ってて良かった」

「さすがに、執事でもイアンは男だからな、まあ、レイヴンを見張ってもらっているがな」
「取り敢えず、大きくなった胸はこのソルーションインナーで小さく出来るから、戦闘の邪魔にならないようになってるから」

「それは便利だな、わたしも着けた方がいいか?」

「そうしなさい、ミラ、あなたは剣士でほかの剣士達ともに前衛をしないといけないか

ら、剣を振り回しやすくなるわよ」

「だから、龍姫達はユーリ達みたいなことできるんだね」

「わたしも、バリボーになったらつけます!!」

「ありがとうございます、それにしても猫の絵柄がかわいいです」

ユニを龍姫達が愛用している衣服に着替えさして、大きくなった胸は龍姫達同様に戦闘の邪魔にならないようにぺったんこに抑えているのだが、息苦しくないのである。

長くなった黒髪は先ほどのリボンで邪魔にならないようにツーサイドアップのロングタイプに結っていた。

ミラはユニの大きくなった胸がぺったんこまで見せていることに興味を示したので、ミュゼが龍姫達に予備のインナーを持っていないか尋ねてきたので、仕方なく、龍姫はアイテムパックからあの黒猫が描かれた黒色のソルーションインナーをミラにあげたのであった。

スキット：女の象徴

ミラ「これは便利だな、剣も抜きやすい」

ジュード「あれ、ミラ、小さくなった?」

ミラ「いや、龍姫にからもらったインナーと言うものを着てる所為で小さく見えてるだけだ。そのおかげで前より動きやすくなったからな」

ジュード「そうなの!!」

龍姫「気に入ってくれて良かったです」

ミラ「龍姫には感謝してるよ」

ティポ「ティーチ!! カヴァー!! ミー!! バリボー!!」

龍音「ティポ? 何言ってるの?」

エリーゼ「目指せ!! プルルート越えのバリボー!!」

プルルート「頑張って〜」

レイヴン「おっさんも応援してるわよ!!」

リタ「おっさんは応援しなくていい!!」

レイヴン「ぎやあああ!!」

ローエン「男は傷ついて成長するものです」

満月の子

成長したユニの着替えが終わったことを龍姫が外で待っていた男性陣を呼びに行き、話し合いを再会したのである。

「気になったんだけど、どうしてネプテューヌとネプギアは離れて、しかも手足だけ縛られてたんだらう?」

「そうだよね、三人は一か所に身体中をこれまでつて言うぐらい縛り上げられてたのに」「アイから聞いた話だと、ネプギアは両手だけコードで吊るされていただけだったって」「ネプ子のご丁寧な手足だけだったな」

「あと、あの夢でやられ方が三人は得物でやられているのに、ネプテューヌだけ素手で首を絞められて、そのまま気絶させられてましたし」

「エステル、それよ!! アタシも気になってたわ。 それにアレクセイが三女神は道化に過ぎないって言ってたわよね!!」

「なに、わたし達はアレクセイの道具ですって!!」

「そういうことではないですよ」

龍姫達とユーリ達とジュード達はこの世界に来る前に見た三年前のマジック・ザ・

ハードとの戦いでネプテューヌとネプギアだけが倒され方が違ったことを思いだして、幽閉のされ方も違っていったのも気になり、アレクセイとマジック・ザ・ハードが言い残した三女神は道化に過ぎないと言う言葉が頭をよぎったのである。

「やはり、教えなければいけない時が来たようですね」

「あなた誰？」

「わたしは次元探偵に仕事の下請けをしてもらっている、女神、ツクヨミと申します」

「あなた様が、龍姫さん達と凛々の明星の皆様には依頼してツクヨミ様ですか。 わたくしはローエン・J・イルベルトと申します。 気軽にローエンと呼んでください」

「俺はアースト・アウトウェイだ。 挨拶に来たわけではないのだろう」

「はい、もちろんです。 みなさんはテルカ・リユミレースの伝承に記されている満月の

子は知っていますか？」

「それならエステルが教えてくれたわ」

「それでしたら話は早いですね。 実はネプテューヌさんとネプギアさんとユニさんは、満月の子の転生者なんです。 ゲームギョウ界の女神として、それと三龍神に選ばれ、リンカーコアのおかげでシエアに影響されないようにしたのも、わたしと天照大御神様がそう作ったのです。 ですがあくまでもわたしは転生させただけです」

「それと、アレクセイが関係あるの？」

「はい、実は三年前、わたし達の部署もギョウカイ墓場に行くことにしたんですが、アレクセイに阻まれてしまったんです。 どうやら、宙の戒典を作ろうとしてましたから」

「なるほどな、オレたちは騎士団に入隊した頃にそんなことがあったんだな」

「はい、それとアレクセイはイストワールを通じてアイエフさん達を取り込んで、ギョウカイ墓場に行かせないようにした上に、ほかの女神候補生にも知らせなかったのです」

「けど、アレクセイは、エステルで代用した」

「なるほどな、エステルがダメだった場合の保険を確保したんじゃないかな」

「そして、四女神とギアを三年間、四天王に見張らせたわけか」

「はい、テルカ・リュミレースの伝承とゲームギョウ界の伝承が似ていたので、それに、マナを生み出すには、マジコンを精霊化させなければいけない上に、ゲームギョウ界の女神は各国の国民が考えている姿だったので、自分で体を作ってもらおうようにしたんです。 その仕組みに詳しいミラさん達を送ってもらうために、クロノスさんに応援要請をしました」

「なるほど、わらわがああの方から満月の子の反応が出たのはそういうことか」

「それって、わたし達は」

「はい、シエアがなければ死にます」

「そんな〜」

「お姉ちゃん・・・」

龍姫達とユリー達とジュード達が考えていたら、ツクヨミが現れて、ネプテユーンとネプギアとユニが何故リンカーコアを体内に宿していることに説明したのである。

なんと三人はエステル同様に満月の子の力を持った女神としてゲームギョウ界に降臨させたと言うのである。

おまけにシエアに影響を受けないと言うことを聞いた三女神はその場で燃え尽きていたのだった。

スキット：精霊の体のつくり方

ユニ「ミラさんとミュゼさんの体はそうやって出来てたんですね」

マクスウエル「その通りじゃ」

ユニ「誰ですか!!？」

ジュード「ごめんね、ダメだよ、急に出てきちゃ」

マクスウエル「すまんかった、わしはミラとミュゼを作った、精霊、マクスウエルじゃ」

ユニ「よろしくお願いします、どうして、胸を大きくしたんですか？」

ミラ「その事か、簡単だよ、世界の半数の男性を悩殺するため、自分でこの体を作っ

た。女神は国民任せだったことは驚いたぞ」

ユニ「アタシも女神化している間だけでも、胸を大きくしたかったです。なのに、

逆に小さくなるなんて」

ミュゼ「それは、この世界にマナが存在しなかったから、けどミラとわたし達がマナを分けてあげて」

龍華「アタシが魔力を少しだけ分けて」

ユニ「このダイナマイトボディを手に入れたんです!! ありがとうございます!! ミラ様!! ミュゼ様!! 龍華!!」

ミラ「別に様はいらん」

ミュゼ「そうよ、国民の意志で体を作るなんて間違ってるわよ!!」
ノワ「これじゃ、姉の威厳が〜」

紫の満月の子

龍姫達とユーリ達とジュード達はツクヨミからネプテユーヌとネプギアとユニは満月の子の転生者であることを教えられたのであった。

ネプテユーヌとネプギアが合流するまでの間、ジュード達はそれぞれの仕事があるらしく、エレンピオスと言う場所に龍姫と龍華と神子龍で送り届けたのであった。

「神子龍、交代ですわ」

「龍華も、後は任せないさい」

「お願いしますわよ」

「くれぐれも、ユーリさん達に迷惑かけないでね」

「もちろんですわ」

「当たり前よ」

龍姫と龍華と神子龍は自分が生活しているゲームギョウ界のプラネテユーヌ教会で、待っていた神子龍の双子の妹の翔龍と龍華の双子の妹の優龍華とバトンタッチをして、龍姫と共にユーリ達の下に戻るのであった。

ユーリ達と合流した翔龍と優龍華は各々に自己紹介をしたのであった。

ところ変わって天界の病院では

「お姉ちゃん、大きくなったよね」

「うん、胸がベール超えちゃったもんね!! ボイン!!」

「ダメだよ、胸揺らしちゃ。良かったよ、龍姫さん達から服譲ってもらえて」

「看護師さん達は驚いてたけどね」

「仕方ないよ、急に大きくなったんだから、それに明日には退院できるんだね」

「どうやら、ネプテューヌは身長が164cmまで伸び、胸がベールより大きくなっていたのだったのである。」

そのため患者衣を着替えさしに來た看護師が驚いたのは言うまでもない。

そして翌日

「魔神剣!!」

「蒼破あ!!」

「ふう、ごめんね、リハビリに付き合ってもらって」

「気にすんなって、オレはこういうことは好きだからな!!」

「そうだよ、ボクたちもちょうど」

「特訓してたから」

「別に、ネプテューヌが気にすることはないぞ」

退院したネプテューヌは早速、龍姫を筆頭に剣を扱えるメンバーにリハビリを手伝ってもらっていたのである。

今回は竹刀で二刀流の特訓も兼ねているのであった。

「みなさん、此処にいらしたんですね、ルドガーさん、これお渡ししますね」

「これは、オレの懐中時計!!」

「懐中時計がどうかしたのか?」

「実はあの時、時計だけ見当たらなかったんだ」

「はい、なぜなら、ルドガーさんの懐中時計はオリジンの審判で壊れてしまったので、天界の技術開発部が懐中時計の部品を拾ったらしく、新たに懐中時計を開発しましたのです」

「ありがとう、これで外殻を纏える!!」

「ルドガー青年の本気を見れるのね!!」

「ああ」

「ただでさえ、一人四女神やってるのにか、まあ、頼りにしてるぜ、ルドガー」

「任せてくれ!!」

ちようどそこにセドナが天界からルドガーの懐中時計が出来たとアタツシユケースに入れて持ってきてくれたのであった。

スキット：二刀流

ネプ「虎牙破斬!! 秋沙雨!! 霧沙雨!!」

ユーリ「やってるな!! 二刀流!!」

ネプ「うん!! だって大きくなったから、二刀流が出来るんだもん!!」

龍姫「まあ、無理はしないこと」

ネプ「わかった!!」

スキット：ネプテューヌの成長

ネプ「成長しちやったら、この服どうしようかな?」

龍姫「だつたら、ボクに任せて、イルミナル」

イルミナル（以後イル）「はい、マスター!! これで完了です」

ネプ「ありがとう!! 龍姫!!」

龍姫「どういたしましたして、これ気にいってた服なんだから」

レイヴン「あれが、ちっこいネプちゃんなのね、ネプちゃんのおっさんの胸に飛び

込んでおいで」

リタ「またセクハラを実行してるの!! このエロおやじ!!」

レイヴン「ぎゃあ!!」

ギア「お姉ちゃんは、病み上がりなんですかね」

レイヴン「はい・・・」
ルドガー「レイヴンはいつも通りだな」

紫の女神の悩み

ネプテューヌが成長して前線に復帰して、ルドガーが外殻を纏うためのアイテムである懐中時計をセドナから授与されて、教会に戻ってきたのである。

「そういや、ユーリってフレンとは幼馴染みなんだよね」

「それがどうしたんだよ？」

「わたしもノワールと幼馴染みなんだけど、ユーリとフレンみたいにはできなくて」

「そんなことかよ、まあな、ノワはどうも堅物で融通が利きそうにねえからな、その上、妹と違って、傲慢なところがあるからな、友達は選んだ方が良いぜ!!」

「けど、わたしと一緒に特訓付き合ってもらったことがあるんですけど、お姉ちゃんとは互角だったって言ってましたけど」

「ネプギア、それ騙されてるよ、そんなこと言う人に限って、負けることは隠したいんだから」

「確かにな、あいつの剣の腕は、ルブランの下かもな」

「だってノワールいつもわたしがユーリみたいに楽しんでやってたら、気持ち悪がるんだもん!!」

「そんなことだから、妹に先を越されるのよ、楽しんだ方がいいのよね」

「それに、あの子、ユーリの技をオーバーアクションにしてるから、隙が大きいことに気づいてないのよね」

「そう言えば、なんとなくユーリの技に似てる感じがしたね。ヴォルケーノダイブって言いながら、鳳凰天駆するんじゃないかって、飛びあがって物凄い爆砕陣だったからね、おまけに背後ががら空きだったしね」

「戦いの心得がなっておらんのか、ウチらが見た夢では動きが止まっておったからのよ」
「あれのどこがオレの技に似てるんだよ!!!」

ネプテューヌはユーリとフレンの幼馴染みの関係を見て、自分もノワールとの関係に悩んでいることを龍姫達とユーリ達に相談したのであった。

ユーリはそんなことは気にしなくてもいいのではないのかと、いつもの調子で答えたのである。

カロルは以前、ブレイブ・ザ・ハードとの一戦でノワールがユーリの技を改造して繰り出していたことを思いだしていたのだった。

「それに、ガキ頃から何やってもフレンには勝てなかったもんな。かっけこだろうが、剣だろうが、その上、余裕かまして、こう言うんだぜ？ 大丈夫、ユーリ？ ってさ」

「ユーリもそんな経験があったのね、わたしも真龍姫達に剣と格闘術では勝ったことな

いのよ、プルルートには、気迫で負けてるし、龍姫と龍音には手も足も出ないかった上に、お姉ちゃんには、開始約十秒くらいで、負けちゃったし、みんな揃って、大丈夫？
龍菜つてさ」

「ユーリには以前聞きましたけど、龍菜もそんな経験があったんですね。羨ましいです」
「そうなんだ」

「それに、おまえには、ギアって言う、女版フレンが妹なんだ、互いに手が届かないところがあるんだ、おまえはひとりじゃねえ」

「そうですね、なんとなくフレンさんを見ると、自分に似てる部分があるような気がします」
「まず」

ユーリは以前龍姫とエステルとラピード一緒に水道魔導器の魔核を取り返すためにクオイの森で言ったことをネプテューヌに話したら、龍菜も同じ経験したと話したのだった。

骸殻発動!!

ネプテューヌが龍姫達とユーリ達に胸の内に抱え込んでいた物をぶちまけて、犯罪神を倒すことを先決に準備をしながら魔物退治の依頼を凛々の明星が行い、書類関係は流星の絆とネプテューヌが行って行ったのである。

そして、犯罪神を倒すためにジュード達も駆けつけてくれたのであった。

「全員、揃ったようだな、これからギョウカイ墓場へ犯罪神を討伐しに向かう、皆の者、準備はできたか？」

「わかってんの、敵の本拠地に行くってことがどいうことか」

「わかってる」

「それでは、わたしが殿を請けたわります」

「セドナ、無理しないでね」

「それでは、出発しますよ」

転送装置の前で点呼を取り、全員がそろっていることを確認して、龍姫達とユーリ達とジュード達は再びギョウカイ墓場に犯罪神を倒すべく向かったのだった。

龍姫達とユーリ達とジュード達は道中、魔物を倒しながら、奥へと向かったのだった

のである。

そしてついに

「うおおお!! 全てを滅ぼす〜」

「なにこれ」

「行くぞ!! 遅れるなよ!!」

全員「オー!!」

龍姫達以外は初めて見る犯罪神のあの姿に一瞬呆気に取られたが、気を取りなして一斉に得物を構えたのだったのである。

「ぐおおお!!」

「こんだけ、デカけりや、当てたい放題だな!! 蒼破あ!!」

「キミはこんな時だと言うのに、魔神剣!!」

「霸道滅封!!」

「翔凰烈火!!」

「ジュード〜!! 頑張つて、天龍のあの技できないの? 三散華!!」

「さすがのボクでも出来ないと思うよ、輪舞旋風!!」

やはり戦闘好きが多数いるこのパーティーはほかのメンバーにも後れを取ることもなく、攻撃を仕掛けていったのだったのである。

「魔神連牙斬!!」

「紅蓮翔舞!!」

「仇名す者に聖なる刻印を刻め!! エクレールラルム!!」

「湧き出でよ、闇の腕。 脇役の手!! ネガティブゲイト!!」

「巻き起これ!! 春の嵐!! アリーヴェルデルチ!!」

「あれは、レイヴンの!!」

「ネプちゃん、に教えた甲斐があつたわよ!!」

「ピンクの花びらです!!」

こっちの部隊は龍姫・ネプテューヌ・エリーゼ・レイヴン・ルドガーのバランス型に構成されたので、前衛と後衛がお互いの足りない部分を補いながら攻撃を繰り出していたのである。

やはり三女神はついて行くのがやっとだったのであつた。

「ルドガー!! 決めろ!!」

「オウ!! うおおお!!」

「あれが骸殻って奴か」

「なんか、プロフェッサーユニットの軽量化版ですね」

ミラはルドガーに指示を出して、ルドガーは懐中時計を強く握りしめて、懐中時計が

光り出して、漆黒の鎧のような物を身に纏ったのであった。

そう、何を隠そう、これが骸殻と言う、龍姫達と言う、バリアジャケットのような物であった。

模擬戦と書いて決闘と読む

龍姫達とユーリ達とジュード達は犯罪神を鎮めるべく犯罪神との戦いに火花を散らしながら怒涛の攻撃を繰り返していったのだったのであった。

最後はルドガーが修理してもらった懐中時計を強く握りしめて、骸殻と呼ばれる鎧のような物に身を包み、攻撃を仕掛けていったのだったのである。

「蒼破刃!!」

青い斬撃を放ち

「舞斑雪!!」

槍に変化した武器で特攻して

「絶影!!」

犯罪神の頭上にワープして槍で串刺しにして

「ふっ!!てやつ!!はっ!!せいっ!! うおりやああ!! うおおお!! マター・デストライト!!」

無数の光の槍を投げつけて最後は槍で特攻する秘奥義をお見舞いしたのだったが

「!!」

「これは、実体を感じられないわ」

「ジューデイスが言うんだったら、間違いないないね」

「どうやら、オレたちにはここまでのようだな」

「これは一旦引き上げるよ!!」

「わかった!!」

やはり以前龍姫達が戦った時、同様に、犯罪神は脱皮して、立体映像と化してしまい、クリティア族特有のナギークを持つジューデイスが撤退を要請したので、龍姫達とユーリ達とジュード達は教会まで撤退を余儀なくされたのであった。

「やはり、犯罪神は実体化してなかったらしいな」

「まあいい、今度は倒してやろうぜ!!」

「そうだね」

なんとか教会まで戻って来れた龍姫達とユーリ達とジュード達は実体を持つまで犯罪神との戦いはお預けになったのだが、次こそは絶対に倒すと決意したのだった。

「あのくちよつとよろしいでしょうか?」

「どうしたの? セドナ?」

「はい、闘技場の再建が完了しましたことをお伝えしに、それと、明日、闘技場で三女神と手合せをよろしければやって欲しいのですけど?」

「あれ、なんで？ ネプテユーンが入ってないのかしら？」

「ノワール、考えたら、わかると思うけど」

「そうだね、龍姫ちゃん!!」

セドナが龍姫達とユーリ達とジュード達が犯罪神と戦っている間に闘技場の復興が完了したことを教えに来てくれたのである。

明日、闘技場で龍姫達とユーリ達とジュード達の中から選んで、三女神と実戦形式の模擬戦をして見たらどうかと提案してきたのだった。

ノワールがネプテユーンがそこに含まれていないことに意見したのだが、龍姫と星龍に茶化されてしまっていたのだった。

「取り敢えず、組み合わせは、わたしが決めさしてもらいましたよ」

「さすが、ローエンさん」

「どれどれ」

ローエンがいつの間にか明日の模擬戦の組み合わせを決めていたので龍姫達とユーリ達とジュード達は組み合わせを見せてもらうことにしたのだった。

「第一試合、ユーリVSノワール、第二試合、レイアVSベール。 第三試合。 秋龍VSブランつでよろしいでしょうか？」

「いいぜ!! それで、ちようど、黒の女神様にお灸を据えたかったからな」

「この女神であるわたしに剣で挑んでくるのね、いいわよ、受けて立つわ!! ユーリ!!」
「此処はジュデイスだとおもったけど、まあ、こんな経験あまり出来ないし、いっちょやり
りますか」

「レイア、受けて立ちますわ!!」

「やってみたかったわ」

「アンタね」

「ちようど、手合せ持ちかけようと思ってたところだったからな」

「来い!! 秋龍!!」

組み合わせが決まったので、お互い正々堂々とやり合うことを約束して各自解散になつたのだが、ユーリ同様戦闘狂のジュデイスはベールの相手に選ばれなかったのことに残念がっていたのだった。

黒衣の断罪者VS黒の女神

闘技場で三女神との実戦形式の模擬戦ガチバトルが決まって次の日。

龍姫達とユーリ達とジュード達は早速プラネテューヌ領にある闘技場に各自準備を済ませて向かったのであった。

闘技場に到着した龍姫達とユーリ達とジュード達は、治療術が使えるメンバーと医者であるジュードはいつでも治療できるように準備していたのだったのである。

一応、闘技場には医務室が備え付けられていることは龍姫がユーリ達とジュード達に教えてあるのであった。

「始めは、オレだな」

「本気で行かせてもらおうわよ!!」

「此処の闘技場は無殺傷の結果が張られるからね」

「ユーリ、手加減出来ないからね」

ユーリは颯爽とフィールドに立ち、ニバンボシをいつもの通りに鞘を飛ばして、肩に担いで構えたのである。

対するノワールは騎士剣を実体化して、突きだすように右半身に構えたのだったので

ある。

「エリーゼ、あとでこの模擬戦で気づいたこと教えてもらおうぞ」

「はい!!」

ミラはエリーゼに模擬戦で気が付いたことを聞かせてもらうことにしたのだった。

そして

「模擬戦、第一試合、ユーリ・ローウエルVSブラックハート!! ファイト!!」

無殺傷の境界が張り終わったので、音声ガイドから試合開始の合図が出たのである

「喰らいなさい!! パラライドフェンサー!!」

先手必勝ばかりにノワールは麻痺効果がある連続突きをユーリに仕掛けたのだ。

だがユーリはそれを

「おせえよ!! 牙狼撃!!」

「きゃん、だったら、レイシーズダンス!!」

「オイオイ、ダンスでも踊りに来たのか? 絶破!!」

ニバンボシで突きを繰り出してノワールの連続突きを止めて、右拳で殴打してダウンさせたが、ノワールはすぐさま体制を立て直して、サマーソルトした後、一旦着地して、飛燕連脚をして、薙ぎ払う技を繰り出したが、ユーリの速さの前では通用せず、ユーリは後ろに回り込んで、十文字の軌跡を描いて凍らせて、掌底で破壊して氷の粒で攻撃し

て、また吹き飛ばしてダウンさせた。

「あれじゃ、まるで」

「相手になつてない」

観客席から見ていたほかのメンバーはノワールがユーリの相手になつていないことに呆れていたのだった。

「わたしをコケにした代償は高いわよ!! アクセス!!」

「そこなくちゃな!!」

ノワールは焼きが回ったのか女神化して上から攻めることにしたのだが、ユーリは余裕の表情が窺えたのである。

「なんだって斬り捨てるのみよ!!」

「さすがのユーリでも、上から来られるのきついんじゃない?」

「それ覆すのが、ユーリなのじゃ」

「そうよ、ブランちゃん、まあ、見てなさいって」

ノワールは自身の必殺技で上空から急降下を何度も繰り返しながらユーリ目掛けて斬りつけていったのだったのである。

最後は剣士の命である剣を標的目掛けて投げつけて、指パッチンを決めたノワールだったが、この時ノワールは失念することを知る由もなかったのだから。

「どうした？ オレが負けた描写でも見たのか？ ほらよ!!」

「そんなのありえないわ!!」

「あの子、気づいていないのね、女神化すればユーリの速さに勝てると思ってみただけど」

「純粹な速さなら、ユーリの方が速いですから」

ユーリはノワールが急降下しながら斬りつけている間に、移動して、ノワールの一人舞台を觀賞していたのだった。

ユーリはノワールが投げた剣を引っこ抜いて、背後から近付いて投げ渡したのだった。

「こっちも飛ばして行きますか!! 斬!! 成敗!!」

「虎牙破斬なら、対策済みよ!!」

ユーリはオーバーリミッツLv3を発動して、ノワールに突撃して行き、斬り上げて、空中で薙ぎ払って、殴打したのである。

それをノワールはいつものように受け止めようと剣を構えたのだが、

「ゴン!!」

「お姉ちゃん!!」

「オイオイ、弱すぎんじゃねえか?」

やはり、ノワールはユーリの虎牙破斬の三連撃の内の左拳が頭部に直撃してそのまま気絶してしまったのだった。

「ユーリ!!」 医務室に連れて行きなよ!!」

「おう!!」

気絶したノワールは女神化が解除していたのでユーリはそのままお姫様抱っこして、闘技場の医務室に担ぎこんで行ったのだった。

スキット：模擬戦の感想

ミラ「エリーゼ、さっきの模擬戦でわかったことを聞かせてもらおうぞ」

エリーゼ「はい、ノワールさんは、どういわけか、左手を全く使っていませんでした」

ローエン「さすがですね、エリーゼさんは」

フレン「ユーリのような体を武器にする剣士を相手にする以上は、体全体を使わないと勝てませんから」

龍姫「自分の体をコントロール出来てなかった」

パティ「その分、足技で補っておったようじゃが、左が遊んでしまっておる」

ユニ「アタシが剣術下手だったのは、お姉ちゃんとの剣術が自分に合わなかったんですね」

「アースト「当たり前だ、人から教えてもらった剣では基礎に過ぎん、己にあった剣を見つけるのが剣術と言うものだ」

龍菜「その通りよ、わたしもお姉ちゃんから教わって、ユーリみたいに体術を織り込ませてのよ。まあ、龍姫達の古武術なんだから」

龍音「あの構えですと、斬り上げと突き以外は即座に繰り出せませんから、プロフェツサーユニットのあの翼は小回りが難しいですから」

ジュード「ボクも、見えて、重そうな翼だなど思ったからね」

龍姫「あと、相手を視覚に入れてなかった、おまけに相手に背を向けてしまっていました」

フレン「最後は、剣を投げつける暴挙まで犯した。あれなら、ユーリの方が幾分ましです」

ジューディス「剣は剣士の命のはずよね」

アースト「全くだ、三年前、負けて当然だ!!」

レイアVS緑の女神

ユーリの虎牙破斬を頭部にもろに受けて、そのまま気絶してしまったノワールをユーリがジュード共に医務室に運んでいる間、第二試合が始まろうとしていた。

「第二試合、レイア・ロランドVSグリーンハート!! f i g h t !!」

「行きますわよ!! ダージリンローデ!!」

「何のこれしき!!」

「わたしがやりたかったわ」

「まだ言ってるよ」

先に動いたのはベールだった。

だがレイアは手慣れた様子で棍で受け流して、ベールの背後に回り込んだのである。

やっぱりジュデイスが拗ねていたのだった。

「行きますわよ!! リンボックスの女神の力お見せしますわ!!」

ベールは短期決戦に持ち込むべく女神化したのである。

「ベール様……」

レイヴンはあまりのベールの露出度がすごかったので立ったまま気絶してしまった

のだった。

ほかの男性陣も目を逸らしたのであった。

「三散華!!」

「あくん、やりますわね!! ならシレットスパアー!!」

「こつちだよ!! 巻空旋!!」

「ベールが女神化しているのに追い着いてない」

「身の程を弁えないから、そうなるのじゃ」

「それ以前に、ベール、足技使ってないよ」

レイアは棍で素早く三連撃を繰り返したのである。

ベールは宙に浮いているのだが、レイアの動きに翻弄されていたのであった。

そしてベールは長引くと不利だと判断したのか

「あなたにはここで果てていただきますわ!! スパイラルブレイク!!」

自身の高速で縦横無尽に飛び回り最後は上空から槍を投げつける必殺技を決めに来たのだが

「危なったく もう少し反応が遅れてたら、わたし、負けてたよ。ほんじゃ、こつちから

行くね!! 瞬迅爪!!」

「ありえませんか!! わたくしの必殺技が」

「だって、あんなに長々とポーズ決めてたら、ばれるよ」

「おまけに、ノワールの必殺技を槍で行っただけだな」

レイアは母譲りの戦闘感が働いのか、ベールが必殺技をする態勢を見た瞬間に攻撃範囲から逃げて、ベールの一人舞台が終わるまで観賞していたのだったのである。

隙を逃すレイアではなく、すかさず棍で前進しながら突きを繰り返して攻撃を繰り返していたのだったのである。

「勝者!! レイア・ロランド!!」

「ワイイ!!」

「こんなの認めませんわ(; | ;) / ~ ~ ~」

「泣き出したちゃった・・・」

電光掲示板にレイアの勝利が決定したことが表示されて、ベールは負けたことが信じられなくてその場で泣きだしたのだった。

スキット：模擬戦Ⅱ

レイア「みんなく勝ったよ!!」

龍姫「レイア、浮かれてる場合じゃないよ」

ミラ「それにしても、技の連携がなってない」

ジュデイス「そうね、せっかく、飛べるんだから、上から攻めたらいいのに」

翔龍 「その通りですわね〜一緒に特訓しとけばよかったですわ!!」

光龍 「これには同意するよ」

龍空翔 「右に同じく」

白狐VS白の女神

レイアとベールの模擬戦はレイアの勝ちで幕を閉じていた頃

「うくん、此処は」

「まだ寝てなきやダメだよ!!」

「ジュード、痛!!」

「ユーリの虎牙破斬をまともに頭に喰らってそのまま気絶したんだよ。幸いにもたん瘤で済んだけど」

「そう言えば、ユーリの虎牙破斬でタイミングを間違えて、防御を解除したんだっけ」
「お、目が覚めたみたいだな」

ちょうどユーリの虎牙破斬の三連撃の内の拳をまともに頭部に喰らって気絶していたノワールが医務室のベットで目が覚めたのだったのである。

一応、氷枕で患部を冷やしていたのだったのである。

そこにちょうどユーリが医務室に入ってきたのであった。

三人は医務室に備え付けられているモニターで最後の模擬戦を観戦することにしたのである。

「第三試合!! 御子神秋龍VSホワイトハート!! fight!!」

「行かせてもらうぜ!! 魔神拳!!」

「いきなり、魔神拳かよ!! だったら、テンツェリントロンペ!!」

「技名は言いやすい方がいいのでは?」

「なんだろう、ボクに通じるモノを感じるよ」

「女神ってネーミングセンスはカロール並なのね」

試合開始のアラームが鳴り響いたので、開始早々、秋龍は左拳を振り上げ、衝撃波を牽制で放つたら、ブランはハンマーで防いで、そのまま回転して秋龍に突っ込んでいったのだったのである。

あまりにも言いにくい技名だったので、思わずエステルが突っ込んでしまい、カロールも自分に通じるモノを感じており、リタが呆れていたのだったのである。

「よっしゃあ!! プロフェツサーユニット装着完了!!」

「わたしも、飛ばして行きますか!!」

「ほう、秋龍さんも単独でオーバリーミッツを発動できるんですね」

「さすが、流星の絆の一員なだけある」

二人は勝負を決めるためブランは女神化して、秋龍は女神であることは伏せて、その

ままオーバリーミッツLV3を発動して迎え撃ったのである。

「これでも喰らいやがれ!!」

「斧、投げるなよ!!」

「おまけに地面に刺さってるよ」

「何のための斧だよ」

ブランが自分の必殺技を繰り出して、それを医務室のモニターで観戦していたユーリとジュードは斧を放り投げてそのまま地面に刺さったのを拾いに行くブランを見て呆れて

いたのだったのである。

「戦場で武器を失くすのは死を意味したんだよ!!」

「しまった!!」

「武龍のようにブーメラン出来るなら話は分かるけど」

刺さった斧を拾いに行こうとしたブランより先に刺さった斧の所に到着した秋龍は刺さった斧を自分の斧ではるか遠方に飛ばしてブランを丸腰したのである。

それを観客席から見ていた龍姫は武龍のように魔術で斧を自由自在に操れるなら話は分かると半ば呆れていたのだった。

「獅子戦吼!!」

秋龍は当身から青白い獅子の鬨気を叩きつけて、

「ホーリーランス!!」

オーバーリミッツのおかげで無詠唱で魔術で光の槍を飛ばして

「終わりにしましょう、嫌なことから逃げていればいいわ・・・!! プリズムデステロア
!!」

「わあああ!!」

「斧で秘奥義喰らうよりかはましだな」

「秋龍、術攻は流星の絆の中でも下から数えた方が速いですわ」

秋龍はブランに戦い方とはこうするものだど光の球を数十個生み出して、お灸を据えるため、光の球からレーザー光線を発射してオールレンジで攻撃する秘奥義をお見舞いしたのだ。

電光掲示板に秋龍の名前と顔が表示されて勝利が確定したのであった。

スキット：模擬戦Ⅲ

カロール「ブランは何がしたかったんだろう?」

フレン「斧を投げて、結局、走って拾いに行ったからね」

アースト「戦う以前の問題だな」

優華龍「そうですね」

ルドガー「確かにな」

模擬戦終了

三女神との模擬戦はユーリ達の全勝で幕を閉じたのだが、突然アーストが

「お前たち、三日後、また闘技場に来い!!」

「なんでよ!! こっちだってこうして時間を作って来て上げてるのよ!!」

「そうですわ!!」

「ネプテューヌと一緒にしないで」

どうやら、今回の模擬戦での三女神の戦い方が酷かったらしく、アーストは三日後また闘技場に来るように言い放ったのだが、三女神はいつもの通りに自己中心なことを言い出したのであった。

「酷い!! これで龍姫達と凛々の明星と一緒に特訓と魔物退治してるもん!!」

「あなたが、ととと特訓ですってΣ(。Д。)ありえないわ!!」

「今のおまえらはどうなんだよ!!」

「……」

「凶星なんだね」

ネプテューヌは今まで一緒にイストワールなどに監視及び軟禁されていた所為でぐ

うたらになつていたのだが、龍姫達と凜々の明星のおかげでイストワールとアレクセイが裏で糸を引いていたことが判明したことにより、セドナがプラネテューヌ女神首席に就任してから、気が合うのか一緒に魔物退治に行ったり、龍姫達と凜々の明星の術技に興味を示したので龍姫達と凜々の明星の修得している術技と戦闘術などをイストワールとアイエフ達の所為で宝の持ち腐れになりかけていた天武の才とエステル同様の満月の子の力で見た瞬間にテルカ・リュミレース式の戦闘術を全て会得したのである。

その事が信じられないノワールはその場で夜郎自大な態度を取ってしまったって、ユーリの権力者嫌いを加熱させてしまったことに気づいておらず、ユーリに凶星を指されて黙り込んでしまったのである。

「念の為、教祖様にはわたしから申しときますのでご安心ください」

「そう言うことだから、あなた達には拒否権はないわよ」

「そんな〜」

「自業自得なのじゃ」

ローエンが各国の教祖に三日後の許可を申請しておくことになり、止めの一撃がてらジュデイスが軽く三女神にお灸を据えたのであった。

それから各自解散になったので龍姫達と凜々の明星は下宿先のプラネテューヌ教会に戻るのであった。

スキット：料理龍姫編

龍姫「今日はナスのチーズ焼きにして見たんだけど」

ネプ「美味しい!! どうしてわたし、今までなす食べれなかったんだろう」

ユーリ「まあ、どうせ、アイエフ達に無理矢理ナス喰えって言われたんだろう」

ネプ「うん、ネプギアは好き嫌いがいいから、お姉ちゃんのわたしが嫌いなものがあつてどうすんですって言っていーすんに無理矢理食べさせらたんだっけ」

ルドガー「兄さんを思いだすな。兄さんもナスが嫌いだったし」

ユーリ「そうか、でも、オレがお世話になつてる女将さんは料理は愛情で作るもんだつて教えてくれたからな」

レイヴン「そう言えば、青年はそんな事言つてたわね。けど、龍姫ちゃん達の料理はあれだね、脂っこくないから、おっさんでも食べやすいわよ」

龍菜「お姉ちゃん達は、低カロリー、高タンパクの料理を作るのよ。もちろんわたしも作れるわ」

カロール「お肉だと思ったら、豆腐でハンバーグ作つたりしてるよね。ボクも龍姫達で作つた豆腐ハンバーグは好きだよ」

ゲームギョウ界に舞い降りた帝国騎士団隊長首席

闘技場で三女神との模擬戦からアーストが提示した三日が経ったのである。

龍姫達とユーリ達とジュード達はいつもの通りに闘技場の観客席に座って、三女神達を待っていたのだが、

「あいつら、俺との約束を破る気の様だな」

「アースト、落ち着いて!!」

「ちよつと、おっさん、そこら辺、うろつてくるわ」

「ちゃんと、戻って来てくださいね」

「大丈夫よ、呼ばなくて来る人だから」

待ちぼうけを喰らって、アーストの背後に鬼の顔が浮かびあがっており、三女神が来るまでレイヴンは散歩に出かけてしまふ始末だった。

おまけにユーリは寝転がって昼寝をし出して、レイアとエリーゼはガールズトークをし始めたのであった。

三女神に呆れ果てていた龍姫達とルドガーであった。

「お待たせ!!」

「仕方なく、来てあげたわよ!! 仕方なくなんだから!!」

「早くして欲しいですわ!!」

「ほう、俺達との約束に遅れてきた上に、その態度とは、どうやらおまえたちにはお灸を据えたりん様だな」

「ノワール!! アーストに土下座して謝った方がいいよ!!」

「取り敢えず、おまえら、下に降りろ!!」

三女神「はい!!」

しばらくして三女神がやってきたのだが、アーストが鬼の形相で迫ってきたので、ネプテューヌが土下座をして謝った方がいいとノワールに忠告したのだが、聞く耳を持たなかったたので、アーストが三女神に一喝して、三女神はフィールドに降りて行ったのである。

「ワン!! ワン!!」

「どうしたの? ラピード、急に吠えて?」

「おっさん、やる気だな」

「誰?」

「・・・やはり犬の鼻はごまかせんか」

「あなた・・・レイヴン!!」

「まるで別人ですわ!!Σ(。D。)」

フィールドに降りて行った三女神の前に姿を現したのは紅緋色の鎧を纏い、髪を下ろした男、またある時は胡散臭いおっさん「レイヴン」、しかしその正体はテルカ・リユミレースの元騎士団隊長首席「シュヴァーン・オルトレイン」その人であった。

もちろんこのことを知っている龍姫達とユーリ達は薄ら笑いをして、ジュード達とは三女神はプラネテューヌの女神並の変貌ぶりに呆氣に取られていたのである。

「男性版のネプテューヌですわ!!」

「ありえないわよ!! あの胡散臭い人が!!」

「俺の任務はおまえたちとおしゃべりをするのではない」

ノワールとベールは目の前にいる人物がちやらんぼらんのおっさんのレイヴンだと思っておらず、レイヴン事シュヴァーンはおしゃべりをしに来たわけではないと答えて、無言で剣を抜刀して構えて、

「帝国騎士団隊長首席。 シュヴァーン・オルトレイン、．．．．．参る」

「わたし達をどこまで愚弄すればいいのかしら、あなた様は」

「自分で考えなさい!!」

ノワールは自分の立たされている立場がわかっておらず、龍姫達とユーリ達とジュード達に逆切れし出したので、龍菜が自分でやったことを考えろと言って退けたのであ

る。

ここに三女神対テルカ・リユミレース帝国騎士団隊長首席のエキビシションマッチの戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

反省

今闘技場で三女神とテルカ・リュミレース騎士団隊長首席との模擬戦と言う名の訓練を行っている最中だったのである。

「どうした!! それでも女神か!!」

「く!! ありえない、わたし達、三人でも歯が経たないんって!!」

「お姉ちゃん達、遊ばれてるわよ」

「うん・・・」

「だって、レイヴンがああの格好になったらマジック・ザ・ハードより遥かに強いからね」

「スゴイです!!」

「ユーリ達から聞いていましたけど、これほど強い方だったんですね」

三女神はレイヴンことシユヴァーンに、三年前同様に手も足も出なかったのであつた。

それを観客席から見ていた龍姫達とユーリ達とジユード達はそれぞれ思っていたことを述べていたのである。

「こうなったら、アクセス!! 女神の力見せてあげるわ!!」

「プロフェツサーユニット装着完了!!」

「リーンボックスの女神の力お見せしますわ!!」

「来い!! その、まやかしの力で掛かって来い!!」

「まやかしの力ですって!! いいわ、後悔させてあげるわ!!」

三女神は一斉に女神化をして、変身完了したので、そのままシュヴァアーンに仕掛けにいったのだったのである。

「トルネードソード!!」

「そんな技が俺に通用すると思ったか」

「なら、これはどうです、キネクトダンス!!」

「踊りにきたのなら、戦う資格はない!! 風よ斬り刻め!! ウインドカッター!!」

「あーん!!」

「これでも喰らいやがれ!! アインシユラーク!!」

「遅い!!」

「うわあ!」

「やはり、戦いを楽しんでないのね」

ノワールは剣で薙ぎ払って来たが、シュヴァアーンは素早く移動して、躲していて、ベルはその場で胸を揺らして一閃したのだが、戦う資格はないと言われて、鎌鼬の魔術で

攻撃されて、ブランは斧を振り上げて氷の槍で攻撃したが、速さで負けて、シュヴァー
ンに剣で攻撃されて、吹き飛ばされていたのだ。

「どうした？ 今までの威勢は？」

「まだよ！！」

「わたくしたちを」

「甘くみんじゃねえ！！」

「悪いが、此処でしばらく頭冷やせ！！」

シュヴァーンは三女神にさっきまでの威勢はどうしたのか問いだしたのである。

それでも三女神は立ち上がり、啖呵を切り出したのだが、どうやら頭を冷やす為
にシュヴァーンはオーバリーミッツLv4を発動して

「この命燃やし、敵を討つ！！ ブラストハート！！」

「キャアアア！！」

「お姉ちゃん！！」

「しばらく、反省してろ！！」

秘奥義でまとめて三女神を気絶させたのである。

シュヴァーンは剣を鞘に納めて、フィールドを出て行ってしまったのであった。

「これでしばらく大人しくなるだろう」

「そうですね」

「ふうくあれ？ もう終わったの？」

「自分でやっておいて」

「まあ、いいじゃねえか、久しぶりにおっさんの本気が見れたから良しとしようぜ」

「そうだな、滅多に見れそうにないですから」

龍姫達とユーリ達とジュード達はいつの間にかいたレイヴン共に闘技場を後にする
のであった。

「ネプテューヌとネプギアとユニに負けたくないのに・・・」

ノワールは悔し涙を流しながら、ネプテューヌとネプギアとユニに先を越されたこと
で、どうすればいいのかわからなくなっていたのであった。

黒の女神、消えゆ

三女神に戦いとは何かと叩き込んだシユヴァーン・オルトレインことレイヴンは龍姫達とユード達とジュード達と合流して、いつもの通りに宿泊部屋のあるプラネテューヌ教会に戻るのであった。

ジュード達はそれぞれまた仕事があるので、エレンピオスに戻って行ったのである
そして翌日

「はあ、はあ、ラストেশションが・・・」

「ラストেশションがどうかしたの？」

「なんかすごいことになってるんだよ!!」

「おい!! あれまさか」

「あれがシエアだって言うの!!」

「ネプギア!! わたしを召喚しろ!!」

「はい!! 聖龍皇アルティメットセイバー、召喚です!!」

「急いでわたしに乗り込め!!」

「わかった!! いくぞ!!」

「凛々の明星、出撃!!」

「流星の絆、いざラストイシオンへ」

ネプテューヌが血相を変えてリビングでくつろいでいた龍姫達とユリー達にラストイシオンが可笑しいと言うのでプラネタワールの展望デッキに全員が向かったら、ラストイシオンがまがまがしい黒い靄に包まれていたのだったのである。

ノワール達の安否が気になってしまったのである。

ネプギアに自分を召喚しろとカードの姿で語り掛けてきたので、ネプギアはカードになった聖龍皇アルティメットセイバーを掲げたら、羽衣を纏った赤い巨大な龍が現れて、龍姫達とユリー達は背中に乗ってラストイシオンに向かったのであった。

「おまえたち!!」

「デューク!!」

「どうやら、ラストイシオンのシエアエナジーが暴走したようだ。おそらくアレクセイだろう」

「ネプギア!! お願ひ、お姉ちゃんを助けるのに協力して!!」

「当たり前だよ!!」

「それじゃあ、行くぞ!!」

ラストイシオン全域が黒い靄に包まれており、聖龍皇アルティメットセイバーが靄を

掻き消して、そのうちに中に潜入した龍姫達とユーリ達を先に到着していたデュークがどうやらラストイションのシエアが暴走してると言うので、ユニと合流して教会に向かったのだった。

デュークはルウィーに行くと言つて龍姫達とユーリ達と別れたのである。

「キヤアア!!」

「お姉ちゃん!!」

「やはり来たか」

「ノワ返してぶっ飛ばされんのと、ぶっ飛ばされてノワ返すのと、どっちか選びな」

「いいとも」

「お姉ちゃん?」

やはり教会の屋上にアレクセイがエステル同様、聖核の代わりにアンチクリスタルでノワールを捕らえており、ユーリは前に言ったあのセリフを言い放つたら、今回はすんなりノワールを下ろしたのだが、目に光がなかったのだ。

「うお!!」

「ノワール!! どうしたの!!」

「まさか、操られてるの」

「お姉ちゃん!!」

「取り戻してどうする？ ブラックハートはもう本人の意思ではどうにもならん。我がシステムによって制御している状態なのだ。暴走した道具を止めるには破壊するしかない。諸君ならよく知っているはずだな」

「あなたなら、ラストイシヨンの鉄壁のセキユリティシステムなんて無意味だからね」
「これでも、ユニの姉なのよ、その子は!!」

なんとそのまま女神化して剣で斬りかかってきたのだった。

前にいたユーリがニバンボシで受けて止めて、アレクセイはノワールを物呼びわりし出した。

「その剣は、まさか!!」

「そう、女神殺しと異名を持つ魔剣、ゲハバーンだったか？」

「やめろ、よせ、ノワ!! くっそおお!!」

なんと宙の戒典の代わりにゲームギョウ界で女神殺しの魔剣と恐れられているゲハバーンをいつの間にか手に入れたらしくアレクセイがそれを鞘から抜いたのである。

仕方なく龍姫達とユーリ達はノワールを正気に戻すべく戦うことにしたのだった。

「ノワール!! 目を覚ましてよ!!」

「お姉ちゃん!! 戻ってきて!!」

「ノワ!! 目覚ませ!!」

「お願いします、戻ってきてください!!」

結局戦うしか道が残されておらず、龍姫達とユーリ達は殺さない程度で攻撃を繰り返していたのだったのである。

そしてアレクセイがゲババーンを掲げたら

「どういう事!!?」

「どうして!! 此処ゲームギョウ界ですよ」

「諸君らは何を言ってるのか、此処は、ザウデ不落宮を経由して繋がっているのだよ」

なんとギョウカイ墓場からテルカ・リユミレースのザウデ不落宮が浮かび上がったのである。

「これ以上・・・誰かを傷つける前に・・・お願い・・・わたしを殺しなさい」

ユーリ&龍菜&龍姫「今・・・楽にしてやる(あげる)」

「ユーリ!!」

「龍菜!!」

まだ正気に戻っていないかったので龍姫と龍菜とユーリが戦うことになったのである。

「ノワール!! 戻ってきてよ!! そのまま道具として死ぬつもりなの!!」

「わたしは、まだ生きていたいのよ!!」

なんとか正気に戻せたのだが、

「なら、紫の女神様について来てもらおうとするか」

「ネプテューヌ!! 危ない!!」

「しまった!!」

「邪魔だよ!!」

アレクセイがネプテューヌを連れ去ろうし出したのである。

しかし龍姫達とユーリ達はシエアの所為で動くことが出来なかったのだった。

そして

「ノワール・・・」

「ネプ・・・テユ・・・ヌ・・・ごめんなさい、本当は悔しかったの・・・」

「しゃべらないで」

「戻って来なさい!! アレクセイ!!」

ネプテューヌとアレクセイの間に、正気に戻ったノワールがネプテューヌを突き飛ばして、アレクセイのゲババーンに心臓を貫かれたのである。

すかさずエステルと龍姫達が駆け寄り、治療術で治療し出したのだ。

「ユニ、ネプギアと仲よくするのよ・・・」

「お姉ちゃん・・・お姉ちゃん!! 目を開けて!! お姉ちゃん!!」

「そんな、また助けらなかった」

「お姉ちゃん。。。(〇)。。わん!!」

しかしエステルと龍姫達の治癒術の甲斐も空しく、体が粒子化していき、光になって消えて逝ったのだった。

そこにユニの悲痛な叫びと涙が流れたのは言うまでもない。

しばらくして、ラストイションの教祖のケイが駆けつけてきたのだが、龍姫達とユリー達は事情を全部話した。

「キミたちはノワールを助けようとしてくれた。ボクにキミたちを責める権利なんてないからね」

「けど」

「ネプテューヌさん、お姉ちゃんに叱られますよ」

「うん・・・ノワールの剣とリボン、もらっていいかな?」

「いいですよ、その方が、お姉ちゃんが喜びますから」

ケイはラストイションの防衛システムに頼っていた自分に腹が立っていたのだが、それを抑えて、龍姫達とユリー達を責めるつもりはないと言ってくれたのであった。

ネプテューヌはノワールの形見の愛用していた片刃の剣とクリアリボンをもらうことにしたのだった。

龍姫達とユリー達は悔しさを抑えてプラネテューヌ教会に戻るのであった。

スキット：アレクセイの暴挙

龍姫「アレクセイ!! 絶対許さない!!」

真龍姫「お姉ちゃん、落ち着いてよ」

リタ「落ち着けつてのが無理よ!!」

エステル「アレクセイは、許しません!!」

ギア「ユニちゃんの大切なお姉ちゃんだったんだ!! 許す気なんてない!!」

ユーリ「ギア、女神化してないのに、その声出るんだな。ああ、アレクセイ、おま

えはやりすぎだよ」

パティ「そうじゃ!! アレクセイは魚が腐った奴じゃ」

ネプ「わたしの所為で」

龍音「ネプテューヌさん・・・」

ルドガー「ああ、俺もアレクセイは許さない!!」

記憶を失くした黒の女神

アレクセイはゲババーンをいつの間にか手に入れて、ラストイションのシエアを暴走させて、龍姫達とユーリ達をノワールと戦わせて、満身創痍になったところでネプテューヌを連れ去ろうとしようと、歩み寄って行ったが、間にノワールが立ちふさがって、アレクセイはゲババーンでノワールの心臓を貫いて殺害して、サウデ不落急にレポートして逃走したのだ。

龍姫達とユーリ達もアレクセイが向かったザウデ不落宮に潜入しようと教会にある転送装置を使ったのだが、転送先のザウデ不落宮側の転送装置を停止されてしまって、手詰まりになってしまったのである。

それから二日が経とうとしていたのであった。

「ノワールさん」

「うゝん、誰？ わたしは誰なの？」

「わたしはツクヨミと申します。どうやら、死んでしまったシヨックとネプテューヌさんに対する嫉妬心とユニさんに先を越された劣等感と女神であることに対する重圧に耐えきれずに、記憶喪失に陥っているようなんです。これは我々天界の女神達でも治す

「ことが出来ないんです。ごめんなさい」

「ノワール、それがわたしの名前、ユニって誰？」

「ユニさんは、ノワールの実妹ですよ」

「わからない、どうすればいいの!!」

天界の転生の間にアレクセイに命を奪われたノワールが目を覚めたのだが、どうやら精神崩壊に陥ったらしく、今まで築きあげてきたすべての記憶を失くしてしまったのである。

いわゆる記憶喪失である。

ツクヨミはノワールにユニと言う実妹がいることを教えたのだが、ノワールは頭を抱え込んで、声を上げていた。

「ノワールさん、これを差し上げます」

「綺麗」

「それは武醒魔導器と女神デバイスと次元デバイスの機能を併せ持つ、インテリジェントデバイスなんですよ!! 名前は「玉依姫たまよりひめ」です。龍姫さん達、流星の絆のみなさんも着けていますよ」

「インテリジェントデバイス、玉依姫」

「では、これでは、今から元の次元のゲームギョウ界に転生を開始します。ご武運を」

「わかった・・・」

ツクヨミは記憶喪失では不便だと思い、ノワールにユーリの武醒魔導器と同じ腕輪型のインテリジェントデバイス「玉依姫」をノワールの利き手である右手首に装着させて、もと居た次元のゲームギョウ界に転生させたのだった。

「此処が、わたしがいたゲームギョウ界」

「ウウウ〜!!」

「え!! そんな、わたし、また死ぬの、誰かー!! 助けて〜!!」

もと居たゲームギョウ界に転生したノワールはバーチャルフォレストのネプテュー又達の秘密の場所に降り立ったのでしばらく道なりに進んでいたら、フェンリスヴォルフに襲われてしまい、今のノワールには戦う術がなかったので、ノワールは逃げたのだが、行き止まりに行き当たってしまい、その場で腰を抜かして、大声で助けを求められなかったのだった。

一方その頃

「助けて〜!!」

「ワン!!」

「どうしたの? ラピード」

「ワン!!」

「もう、待ちなさい!! みんなは先に戻ってて」

「わかった」

あれからラステイションの女神の席は空席のままになっており、ユニが代行しているのだが、それでも手に負えないようで、優華龍が住み込みで手伝っているのである。

閑話休題

今龍菜は、ユーリと星龍と愛犬の龍ラピードとでバーチャルフォレストに、書類関係が入って行けない龍姫達とネプテューヌの代わりに魔物退治に来ていたのだが、ラピードがいきなり走り出したので、龍菜はほかのメンバーに先に帰ってもらおうように言つて、ラピードが走って行った方向へ追いかけるのであつた。

「わおくん!!」

「キャ〜!!」

「ワオオオン!!」

「魔神剣!!」

「えっ!! 誰?」

「大丈夫? ってあなた、ノワール!!」

腰を抜かして動けないノワールを獲物だと認識したのか、フェンリスヴオルフはノワールに襲い掛かったのだ。

間一髪で龍菜とラピードが斬撃を放ってフェンリスヴォルフを止めたのだが、そこにいたのはアレクセイに心臓を貫かれて、粒子化して死んでいったノワールだったことに龍菜は目を疑ったのだった。

「ウウウ」

「そんなこと言ってる場合じゃないわね、仕方ないわね、こんな格下相手に、この戦闘術は使いたくなかったけど、飛ばして行くわ!!」

「何?」

「ごめんなさい、後で話してあげるわ（まさか、記憶喪失なの）」

龍菜の実力ではフェンリスヴォルフは造作もないのだが、ノワールを防衛しながら戦うのは長引けば不利だと判断して、オーバーリミッツLv3を発動して、即急に対処することにしたのであった。

記憶を失ったノワールはオーバーリミッツを発動して橙色の闘気を身に纏った龍菜に驚きを隠せないでいたのだった。

「ワオ〜ン!!」

「遅いわ!! 円閃牙!!」

「刀を回してるの!!」

フェンリスヴォルフが攻撃を繰り出してきたので、ラピードにノワールの護衛を頼

み、龍菜は愛刀で、ユーリとお揃いのニバンボシを斬りつけて、反動でキャッチして、逆回転させて斬りつけて、

「襲爪雷斬!!」

斬り上げて雷を落とし、斬り下ろす際にまた雷を落として

「嗚烈襲!!」

青と黒と白のタイラントフィストを装着した左拳で連続で正拳突きをお見舞いして

「腹括りなさい!! 天狼滅牙!!」

地面を叩いた衝撃で怯ませて滅多斬りを叩き込んで

「お終いにしましょう!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り裂き!! 仇名す

者を微塵に砕く!! 決まったわ!! 漸毅狼影陣!!」

「スゴイ・・・」

「あなた、歩ける?」

「え? うん」

「此処に居てもしかかないから、わたし達と一緒に教会に戻りましょう」

「うん、ありがとう」

龍菜の龍姫とユーリ同様、四方八方から陣を形成しながら斬りまくる秘奥義を喰らったフェンリスヴォルフは光になって消えて逝ったのを見届けた龍菜はニバンボシを左

腰のホルダーの鞆に納刀して、ノワールに手を差し伸べて、立たせて、歩けるか聞いた
ら、歩けると答えたので、仲間たちがいるプラネテューヌ教会に戻るのであった。

黒の女神、妹と再開する

龍菜は愛犬のラピード（超次元）ともにバーチャルフォレストから転生したノワールと一緒に教会に戻ってる最中だったのである。

「あら、あなた、手、怪我してるわよ」

「これくらい・・・平気・・・」

「ダメよ、ちよつと待つてなさい。聖なる活力、此処に来なさい!! ファーストエイド

!!」

「スゴイ・・・ありがとう・・・」

「どういたしまして」

どうやらさつきフェンリスヴォルフに追いかけていた時に転んで腰を抜かして手を擦り剥いて、血が出ていたので、龍菜は治療術を掛けて治して上げたのだった。

ノワールは龍菜にお礼を言つて、プラネテニュー教会に戻るのであった。

「お姉ちゃん!! 良かった、どうして生き返ったんなら、連絡してよね!! ラステイションに戻らないと」

「知らない・・・この子誰? 助けて・・・」

「どうしたの？ アタシよ!! 妹のユニよ!!」

「おい、まさか!! ノワちゃん」

「記憶喪失ね。それもかなり重症ね」

「そんなく 龍姫さん達はみなさん全員が回復魔法が出来るんですよね」

「ごめん、怪我は治療術で治せるけど、記憶喪失は治せないんだ」

「しばらく、わたしがノワールの面倒見てあげるから」

「はい、わかりました、お姉ちゃんのこと、お願いしました」

プラネテューヌ教会に戻ってきた龍菜とラピード（超次元）は記憶喪失で転生したノワールをみんながいる所に連れて行き、ネプギアがユニに連絡して、ユニが女神化して迎えに来たのだが、自分より背の高い妹を見て、龍姫達に助けを求めて泣き出してしまったのである。

仕方なく、ノワールの記憶が戻るまでの間、プラネテューヌ教会で預かることになったのである。

スキット：ノワールの記憶喪失

レイヴン「まさか、生き返ったのは良しとして、ノワちゃんが記憶喪失になってとは、おっさんびつくりよ!!」

カロール「そうだよね、妹のユニのことを怖がってたからね」

龍姫「さつき、ツクヨミ様に問い合わせたんだけど、どうやらアレクセイにゲババーンで殺されたシヨックで、記憶が消去されちゃったらしいんだよ。一応、体は造れたらしいんだけど」

ユーリ「ゲババーンって剣、女神の命で効果を發揮するって事は」

星龍「本来なら、ゲババーンで殺された女神は遺体が残らずに魔剣に吸収されるんだけど」

ジュデイス「なんとか、ツクヨミはノワールを生き返らようとしたけど、記憶はゲババーンに吸収されてしまった」

ネプ「それって、つまり」

ギア「ゲババーンを破壊すれば、ノワールさんの記憶が蘇るんですね」

ラピード「ワン!!」

龍菜「多分、もうゲババーンを破壊したところで、アレクセイがゲババーンの力を使ったら」

真龍姫「ノワールの記憶は元に戻らない」

ルドガー「もう、ザウデ不落宮を呼び出した時点で、ノワールの記憶は消えてしまった」

ユーリ「だが、アレクセイはオレたちが倒す!!」

ウラヌスに

アレクセイに記憶喪失にされたノワールを保護した龍姫達とユーリ達は、しばらく、ノワールが落ち着くまで、預かることになったのである。

今龍菜とネプテューヌが一緒にお風呂に入っているのである。

レイヴンが覗きに行かないわけがなく、ユーリとカロールとルドガーの三人がかりで下宿部屋に連行していったのである。

閑話休題

「龍菜とネプテューヌって着痩せしてたんだ。大きくなるかな・・・」

「胸のこと気にしてるのね、大丈夫よ!! わたしもね、数か月前まで、あなたほどの大きさしかなかったのよ」

「わたしも、つい最近、大きくなったばかりだから」

「そうなんだ・・・」

「どうやら、龍菜とネプテューヌが着痩せしてたので、胸が自分より大きいことに、コンプレックスを抱いていたのだが、龍菜とネプテューヌが励まして、お風呂から上がることにしたのだった。」

そして

「一緒に寝ましょう」

「うん、お姉ちゃん」

「お姉ちゃんはおちよつと、龍菜って呼んでほしいかな」

「わかった 龍菜」

今日は龍菜とノワールが相部屋になって、一緒に寝床で就寝することにしたのだった。

そして翌日

作戦会議を行うために、ジュード達とほかの女神達がプラネテューヌ教会に集合していたのだったのである。

「あのう、よろしいでしょうか？」

「どうした、話してみろ」

「ウラヌスをご存知でしょうか？」

「確か、犯罪神との戦いで、封印した時に、肉体を失くしたプラネテューヌの女神でしたよね」

「はい、龍姫さんが言った通りです。今も魂だけはギャザリング城に残っているらしいんです」

「つまり、ウラヌスにあつてこればいいのだな」

「はい」

ミナが龍姫達とユーリ達とジュード達にウラヌスと言う、魂だけの女神が今もギャザリング城に存在すると言うので、早速、ギャザリング城に向かったのであった。

「待ちくたびれたぜ、坊主」

「おい、なんでアンタが此処に居るんだ？」

「ユーリさん、此方の方は」

「わりい、オレは、ホワイトホースだ。 ドンって呼ばれてるがな。 それと」

「痛て!! 何すんだ!! 爺さん!!」

「おめえは地獄にも送れねえのか!!」

「ミイーもイマゝス」

「イエガー!!」

「そうだ!! これお返しします」

ギャザリング城でなんとユーリに介錯されたドン・ホワイトホースとザウデ不落宮で死んだイエガーが待ち構えていたのであった。

龍音はドンに小太刀を返したのだが、

「これは、おまえさんが使つてやつてくれ」

「はい、分かりました」

ドンは龍音に小太刀を譲って、一緒にウラヌスに会いに行くことにしたのだった。

「おまえたち」

「デュークさん、相変わらずですね」

「龍菜・・・この人誰？」

「まさか、おまえ、アレクセイに」

「ああ、記憶を消された」

「やはりか、魔剣ゲババーンを手に入れていたか」

しばらく龍姫達とユーリ達とジュード達は通路を真っ直ぐ魔物を倒しながら進んでいたら、デュークも来ていたらしく、ノワールが龍菜の背後に隠れたのを見て、アレクセイに記憶を消されたことに気が付いたのだった。

そのまま進んでいたら、

「そんな、ありえない」

「確かに、おまえの手でオレは殺された、どうやら、犯罪神はオレとドンたちを生き返らせたようだな、敵対させるために、だが、犯罪神に屈したつもりはないぞ。俺も共に、

行くぞ!! あ、申し遅れた、オレはルドガーの兄で、ユリウス・ウィル・クルニクスだ。ユリウスでいい」

「はい、ボクは流星の絆の鳴流神龍姫です」

「凛々の明星のユーリ・ローウエルだ」

なんとルドガーが話してくれた人物で、ルドガーの兄であるユリウスが待ち構えていたのだが、生き返った経緯を話してくれて、龍姫達とユーリ達とジュード達に協力すると言うので、龍姫達とユーリ達は自己紹介をして、ウラヌスに会いに行くことにしたのだった。

ウラヌスの助言

犯罪神が蘇らせた三人を連れて龍姫達とユーリ達とジュード達はウラヌスがいます場所までたどり着いたのであった。

「ウラヌス様、居るんでしたら、返事をしてください!!」

「ほう、男が来るのは珍しいのくそれと精霊が二人、女神が八人・・・いや・・・二十八人もおるのか」

「女神? おい、女神ってなんのことだ!!」

「ホワイトホースと言ったか、そこに居るだろう、おう、紫龍の女神、鳴流神龍姫よ」

「お見通しって訳か」

「龍姫さん達が!! 女神!!」

「ごめんね、黙ってて、セツトアップ!!」

「えええ!! 龍姫なんだよね? 女神だからって」

「まるで別人ね」

結局、この次元のウラヌスにも龍姫達は正体を見抜かれてしまったので、龍姫はドンが女神を知りがあったたっていたので、その場で女神化をしたのだが、龍姫の女神の姿を初め

て見たジュード達とドン達は開いた口が塞がらなかつたのであった。

「それと、この姿での名は、紫龍の女神、パールハートの姉で秘書兼副守護女神パールドラゴンハートと申します。お見知り置きを」

「龍姫、格好いい!!」

「ティミーバリボー!!」

「ミーはハッピーデース!!」

「龍菜・・・ネプテューヌ・・・」

「大丈夫、わたしも女神なのよ。けど安心して、あなたの記憶が戻るまでわたし達がちゃんと面倒見てあげるからね」

龍姫は女神としての名と、自分が別次元の守護女神の姉であることと、秘書兼守護女神代行であることをジュード達とこの次元の守護女神に明かしたのである。

龍姫の女神の姿を見たノワールは怯えだしたので、龍菜は自分も女神であることを明かして、記憶が戻るまで面倒を見てあげると言って落ち着かせなのである。

「お願いがあるんです」

「犯罪神はもう、あの男の手に墜ちたも同然じゃ。だがおまえたちが力を合わせれば、出来ぬことはない」

「ああ、やってるさ」

「ここまで来て、ダメだったなんてカッコ悪いからね」

「わらわが手を貸そう」

「期待している」

「そうと決まれば、一旦戻るよ!!」

龍姫は元の姿に戻り、ウラヌスから、アレクセイを倒してくれてと言われてしまったのであった。

龍姫達とユリー達とジュード達は一旦、教会に戻ることにしたのだったのである。

スキット：龍の女神

ミラ「龍姫の女神の姿は、驚いたよ」

レイア「そうだよ、身長だって、ジュードと同じくらいだったし」

ジュード「それに、装備もかっこよかった」

アースト「それと、いい業物を持っているのだな」

ローエン「生きてる間に、龍姫様達の女神の姿を拝めるとは、感激いたしましたよ」

ルドガー「それに、骸殻みたいな装備だったな」

ジューディス「龍姫には負けるわ」

ブラン「あの胸、あの鎧に収まっているのかよ!!」

ミュゼ「軽そうな装備だけど、プロフェッサーユニットだっけ、あれより軽くて防御

力も倍以上らしいわ」

リタ「その上、あれはバリアジャケットって言うらしいんだけど、龍姫達は魔力で好きな形に形成してるわよ。人の手でなく、自分で作れるらしいわ」

龍姫「一応、プラネテューヌの女神だから、紫系統を選んでバリアジャケットを構成してるんです」

ミラ「そうなのか」

四天王が復活

ウラヌスとの対談が終わった龍姫達とユーリ達とジュード達はプラネテューヌ教会に戻ってきていたのである。

「アレクセイの野郎は、イストワールって奴で、三年前からこの世界を乗っ取る気だったのか」

「ああ、それもエステルを助けに行こうとした時に、機械兵が何の前触れもなく帝都の前に出現したのよ」

「真龍姫達から聞いたけど、ゲームギョウ界にいる機械兵に似てたって言ってたんだけど」

「そうだろうね、アレクセイの大将、マジエコンヌ四天王のマジック・ザ・ハードと繋がっていたしね」

「アレクセイは女神達のキャッチに協力する見返りに、あの円盤を受け取ってマース・ミーにシークレットデース」

「わたくしたちが三年間いない間に、テルカ・リユミレースではそんなことがあったんですの」

今アレクセイが三年間で行ってきた、悪行を纏めていたのであった。

そんなこんなで各自解散になったので、各々、下宿部屋に戻ろうとしたら

「はあ、はあ、大変です!!」

「どうしました?」

「各地にマジエコンヌ四天王が復活したと各国から通達がありました!!」

「なんだと!!」

「それと、マジエコンヌ四天王から十日間の猶予も各国に通達したもう様です!! では、

これで報告は終わりです」

「十日、オレたちもなめられたもんだな」

「このメンバーなら一日で出来るよね!!」

「この次元でもマジエコンヌ四天王は復活するんだね」

「龍姫達も苦労してるね」

プラネテューヌ教会職員が血相を変えて龍姫達とユーリ達とジュード達がいる部屋に勢いよく入ってきたので、セドナが落ち着いて、訳を聞いたら、四ヶ国にマジエコンヌ四天王が復活したと言う知らせが舞い込んだのである。

以前龍姫達も同じ目に会ったことを思いだしていたのだった。

「マジック・ザ・ハードはボクたちが行きます!!」

「オレは、ブレイブ・ザ・ハードの所だな」

「いいの、カロールたちのところ行かなくて」

「大丈夫だよ、武龍達が一緒に来てくれるんだから」

「任せとき!! この白龍の夜天女神が一緒なんやで、安心して、ブレイブ・ザ・ハードに正義つてもんを叩き込んでくださいな」

「わたくしたち、神楽堂家は、ジャツジ・ザ・ハードを担当しますわ。協力してほしいのですわ、ジユデイス、レイア」

「ええ、もちろんよ、翔龍」

「ほんとこいだよ!!」

鳴流神家とミラ・ジユードと紫の女神はマジック・ザ・ハードを担当することになり、獅子神家とユーリとアーストと黒の女神達はブレイブ・ザ・ハードを担当することに、カロールと御子神家とリタとエステルとエリーゼとルドガー組はトリック・ザ・ハードを神楽堂家とベールとジユデイス・レイア組がジャツジ・ザ・ハードをそれぞれ担当することになったのだった。

「ジユード、このアルヴィンを忘れてもらつちや困るぜ!! この俺に黙って、かわいいこちやんとイチヤイチャしやがって、ずるいぞ!!」

「アルヴィン!!」

「俺だけじゃねえぜ!!」

「ルドガーのバカッ!! 生きてたなら、なんで教えてくれなかったの!!」

「エル。ごめん」

「嬢ちゃん、泣かすんじゃないよ!!」

なんとジュード達の仲間で元傭兵で今はスーツ姿で商売をしている男、アルヴィンと、ルドガーが話していた少女ことエルがこの次元のゲームギョウ界にやってきたのである。

龍姫達が自己紹介をしたのであった。

スキット：女神になった理由

レイア「龍姫って、元の世界で一度死んで、ゲームギョウ界に転生したんだよね、その時から女神になったの? 嫌なら、忘れて」

龍姫「ううん、違うよ、人間として此処とは違うゲームギョウ界に転生させてもらったんだ。その時はまだ女神とは無縁だったから」

ミラ「それはどうことだ?」

龍姫「たまたま、受けたギルドのお仕事で、エンシエントドラゴンていう魔物を退治をするために、とある洞窟に行ったときに、初めて女神とご一緒したんです」

真龍姫「わたし、その時、まだネプテューヌって名乗って、プロフェッサーユニット

で戦ってたんだけ」

龍菜「勇龍がノワールと名乗って、左腕の骨折って、腰抜かして、真龍姫が防戦を強いられたのよね？」

真龍姫「うん、お姉ちゃんの漸殺狼影陣が炸裂して、エンシエントドラゴンを葬ったんだよね」

ミラ「なるほど、それで、龍姫は守護女神の秘書になったわけだな」

龍姫「しばらくして、勇龍以外がマジエコンヌって言う人にアンチクリスタルの結界に閉じ込められたんです」

レイア「もしかして、助けるために」

エリーゼ「女神になったんですか!!」

龍姫「それしか、方法がなかったから、それと、美龍飛を聖龍皇に覚醒できなかったからね」

ユーリ「なるほどな、龍姫はダチ助けるために、腹決めたわけか」

龍姫「はい、もう老いることが出来なくなっただけですけどね。女神になった時点で成人として扱われるんですけど、まだお酒はご遠慮します。ボクはシエアエナジーでは無くて魔力で変身出来るんで、テルカ・リユミレースに飛ばされた時も女神化できたんだ」

レイウン「おっさん、感激したわよ、あの時、正体を明かしてくれたことは忘れない」

のよね」

リタ「龍姫達は、ずっとその姿なのよね」

星龍「そうだね、皆とは、一緒にいられない、けど、今を大切にすればいいんじゃないかなのかな」

エステル「ですね、龍姫達と一緒に旅できたことは絶対忘れないように、本に書いていいですよね？」

うずめ「もちろん、良いぜ、楽しみにしてるからな」

ジュード「ボクも忘れないようにしないと」

マクスウエル「そうじゃな」

スキット：三年前

アルヴィン「ジュード、あの子達って」

ジュード「あ、アルヴィンは知らなかったね、この世界では女神達がそれぞれ国を統治してるんだよ」

アルヴィン「何!! つまりこの世界はかわいいこちゃんが多いのか!!」 そういや、ギョウカイ墓場に三年間も幽閉されてたらしいじゃねえか。 どうして誰も三年前に助けに行かなかったんだ？」

ジュード「それが、イストワールって言う人工生命体のプラネテューヌ教祖がアレク

セイさんって人と裏で繋がって、アレクセイが犯罪組織を仕切ってたんだ」

アルヴィン「オイオイ、確か、ユーリ達の住んでる世界の、確かテルカ・リュミレーズだっけ、どうして誰も疑わねえだ、普通に怪しいだろうが」

ミラ「簡単なことだな、それだけ、人望があつたかな、イストワールとアレクセイは」
ユーリ「真面目な奴は、疑いを持たねえからな」

龍姫「おまけに、気づいた時にはもう、堀を埋められていたと言うわけで」

リタ「諜報部まで、いいようにされてたことに気が付いてなかったのよ!! 偽の情報流して他国を混乱させてどうすんの!! ったく女神とシエアに頼りすぎなのよ!!」

アルヴィン「なるほどな、各国の争いを見ながら、漁夫の利をしたわけか」

ローエン「その所為で、候補生の関係は悪化しました上に、交流も禁じられてたようでした」

ネプ「わたしはネプギアにはほかの国に行っても良いって、言ったんだけど」

アルヴィン「イストワールって野郎が、禁じたんだな」

アイ「どうして、よってたかって、イストワール様を批判するのよ!!」

アースト「今まで、友を見捨てた奴が、何を今更、言っているのだ。おまえたち諜

報部の所為で、どれだけの被害が被ったかわかっているのか」

アイ「それは・・・だってギョウカイ墓場に討伐に行くって決めたの、ネプ子達よ!!」

ユーリ「それがどうした!! どうして三年前、一人でもネプ子達を助けにいかねえ!!」
アイ「それは・・・」
アルヴェイン「これだから、こういう教会を皮を被った武装集団は」

前略 温泉銭湯

マジエコン又四天王が復活したと知らされた龍姫達とユーリ達とジュード達にセドナは

「こんな時ではあるんですが、みなさんには、わたくしたち、プラネテューヌ教会から、プラネテューヌの露天風呂を貸切させてもらいましたので、みなさんにはこれまで溜まった疲れを癒して、貰いたいのですがよろしいでしょうか？ もちろん混浴もある温泉施設です」

「なななに〜!! 混浴だど〜!!」

「何!! おっさんの前で言ってるのよ!!」

「ワン!!」

「ワン!!」

「龍ラピさんとラピードさんは責任を持って、わたし達が預らせてもらいます」

プラネテューヌの露天風呂を貸し切ったことと混浴がある温泉施設だと、明かしたら、レイヴンとアルヴィンが黙っていないわけがなく、まるで子供のようにはしやぎだしたのでリタがセドナに注意して、龍ラピとラピードはプラネテューヌ教会職員が預か

ることになったのである。

そういうわけで龍姫達とユーリ達とジュード達はセドナともにプラネテユーンの温泉施設に向かったのであった。

もちろん、後でフレンも駆けつけて、ユーリとルドガーとカロルの四人がかりでレイヴンとアルヴィンを男風呂に連行したのは言うまでもなかったのであった。

「ジュード!! 混浴はあつちの様だな、行くぞ!!」

「ちよつと!! ミラ!! ボクは〜!!」

「アースト、行くわよ!!」

「お、おう・・・」

ミラはジュードを無理矢理、混浴風呂に連行して行き、ミュゼもアーストに迫って、顔を引きつりながらアーストも一緒に混浴風呂に行ったのである。

そんなこんなで女風呂はと言うと

「エステル、大きいね」

「はい、龍姫の力のおかげで少しですけど、大きくなりました。それにしても、リタも大きくなったんですね!!」

「アタシは、こんな大きい胸なんか、いらぬのに、これも龍姫が魔力なんか放出した所為だからね!! 新しく服買ったんだからね 龍姫のバカ!!」

「わたしも龍姫の側にいけばバリボーになれるんですね」

エステルとレイアとエリーゼはお互いの胸を比べて、龍姫の魔力がエステルが吸収していたようで、一ヶ月で少しかだけ大きくなった言うのであった。

リタも龍姫の魔力を吸収した所為で、背も伸び、胸も一気に大きくなってしまったことを僻んでいた。

「おい、別次元のわたし、いい武器ムネ持ってんじやねえか、寄越しやがれ爰(???)益(???)!!」
「悪いわね、これは努力の賜物、あなたにあげるわけにはいかねえよ、悔しかったら、魔力を手に入れな!! プスプス!!」

ブランは別次元の自分の秋龍のボールに匹敵す胸を見て、寄越せと言いだしたが、秋龍は軽くあしらったのであった。

「気持ちいい……」

「お姉ちゃん……」

「龍姫ちゃんから聞いてたけど、ほんとに記憶喪失なんだね」

「うん、雷華も協力してね」

「もちろん、そのために、此処に来てあげたんだよ、もう姉妹のようなもんなんだから、遠慮はいらないよ」

「ありがとうございます、龍菜さん、雷華さん、絶対にお姉ちゃんの記憶をよみがえらせ

て見せませす」

記憶喪失のノワールは龍菜の胸を触りながら、温泉に浸かっており、龍菜はまだ獅子神家の養子縁組を終わらせていないが、別次元から急遽、ノワールのDNAで天界で体を造ってもらった、瓜二つの容姿をもつ雷華を呼んでいたのであった。

あれから体も成長したので、今では龍菜と瓜二つに見えるまで成長したようで、もちろん、あつちの次元のゲームギョウ界のノワールも一緒に成長して、コスプレ衣裳などの衣服を龍姫達が贈呈したのは言うまでもない。

ユニは姉の記憶が逸早く戻ることを祈って、ネプギアの所に向かったのであった。

「ネプ子とネプギアの裏切り者（；；、ム・ム）へウラギリモノ！！」

「ダメな人だね……」

これでも大型二輪の免許証が取れる年齢なのだが、周りがエリーゼとブランとエル以外、160cm以上で胸も自分より大きい持ち主だらけだったので、アイエフは一人夜空に向かつて吠えた後、僻んでいたのがあった。

それを傍から見ていたエルはダメな大人だと思い、将来、こうはなりたくないと思っていたのだった。

「ユニちゃん、大きいね」

「ネプギアも大きいでしょう」

「此処るところ、ゆつくりできなかつたからな、癒されるぜ」

「気持ちいいわね」

「プルルート、女神化してどうするんだ」。(D)ノベし!!」

ネプギアのユニは二人だけの世界に行ってしまった、うずめはオヤジくさい言動を言いながら、一糸まとわなないで、温泉に浸かっていたら、プルルートが女神化して、同じく一糸まとわなないで温泉に浸かっていたのであった。

「龍姫もですけど、翔龍もわたくしより大きいですわね。(||。ω。)ノ!!」

「この美の象徴を拝んでいいのですよ」

「翔龍お姉ちゃん」

「ほどほどにしてあげたら」

ベールは別次元の自分の翔龍の胸を見て、鳩が豆鉄砲を食ったようになり、言葉も失ってしまった、翔龍が惜しみなく見せびらかして調子に乗り出したので、輝龍・飛龍が注意したのであった。

もちろん輝龍・飛龍も胸と背が大きくなったのである。

「龍姫!! 喰らえ!!」

「ちよつとネプテューヌ!! まあ、気にしてないけど」

「お姉ちゃんは相変わらず、胸を触られるんだね」

「いいじゃない、龍姫は、乙子オトコなんだし」

「それにしても、セドナも大きいよね、なんかエステルに似てるような」

「それは当然です、わたしも満月の子の末裔の女神ですから、それとエステルさんとは、遠縁ですよ」

「そうね、言われてみれば、真龍姫達もそうだけど、何処となくエステルに似てるわね、目元とか」

「確かに言えてるね」

ネプテユーンは自分の胸ではなく、一糸まとわらないのロングヘアの龍姫の絹のような透き通った白い肌に似つかない豊満な胸を後ろから驚掴みにして、それを見ていた龍音・ジユデイスは龍姫とネプテユーンのスキンシップを觀賞していたのだった。

真龍姫・龍空翔・龍愛翔・光龍はセドナの体つきを見て、褒めていたら、セドナからエステルの遠縁で、満月の子の末裔の女神であることを明かされたのであった。

前略、温泉戦争&龍菜が選んだ道

男風呂に入っているメンバーは露天風呂を堪能していたのだった。

「アルヴィン青年、聞いたわよね」

「ああ、この耳でしかと聞いたぜ!!」

「大きくなったって!!」

レイヴンとアルヴィンがエステルとリタが大きくなったことを盗み聞きしていたよ
うで、二人は女風呂を覗く気満々だったのである。

どうやらアルヴィンも相当スケベだったようであった。

「レイヴンさん!! ダメですよ!!」

「フレン、おっさん達がこうなったら誰も手が付けねえよ」

「おやおや、お二人は仲がいいようで」

「ボク、知らない」

フレンは二人を注意したのだが、ユーリは呆れて、カロルは知らない振りをしていた
のだった。

もちろんレイヴンの心臓魔導器のことは全員が教えられたのであった。

「これでいいのか」

「ルドガー、黙って見守ることにしよう」

「うん」

「レイヴンの野郎、無類の女好きだからな、ギャハハ!!」

「YOUはそういう人でーす」

ルドガー達は呆れていたのだった。

で結局、

「レイヴン〜!! しっかりしろ〜まだライフはあるだろうが〜!!」

「さすが、龍姫ちゃん達のドラゴンダイナマイトナイスバディ〜」

レイヴンは女風呂を覗いた瞬間立ったまま気絶してしまったのであった。

そんなこんなで露天風呂を堪能した一同で会ったのだった。

この後、レイヴンをプラネテューヌ教会に運んで行ったのは言うまでもなかったのであった。

そして翌日

「蒼破刃!! 気合十分だな!!」

「まだよ!! 魔神連牙斬!!」

「スゴイ、斬撃を一度で六発纏めて放ってるのか」

「わたしも出来るかな・・・」

「出来るよ、それまで、ボクたちの特訓を見学して、何か思いだせたら、言ってね!!」

龍姫達とユウリ達は空いた時間はバーチャルフォレストの秘密の場所で術技の特訓及び、ノワールの記憶の再生を行っているのである。

今回はクルニクス兄弟もエルを連れて一緒の特訓をしているのであった。

しばらくして、いい頃合だったので、各自解散にして、龍菜とノワールは近くの大木に腰を下ろして話をすることにしたのだった。

「龍菜・・・って女神なんだよね」

「そうよ、けど、別次元のあなたでもあるの」

「だったら・・・知ってること・・・全部・・・教えて・・・」

「知ってどうするの、知ったら、あなた、立ち直れないわよ」

「わかった・・・」

ノワールはウラヌスから龍姫達、流星の絆が全員が女神であることを聞かれたことを思いだしていたのだった。

龍菜は自分が別次元のノワールだったことを明かしたら、ノワールは以前の自分ほどのようなことをしていたのか、教えて欲しいと言ったのだが、龍菜は今の状態で、以前、龍姫達に傲慢な振る舞いをしていたことを知ったら、立ち直れないと思い、断ったので

ある。

「だったら、わたしが女神に成りたて頃のお話をしてあげるわ。 あれは忘れもしない、とある日のことだったの、わたしはいつものように自分が生活している次元のゲームギョウ界のプラネテューヌの森でクエストをやっていたの」

「うん」

「そしたら、空から龍姫・真龍姫・美龍飛・うずめ・龍音が落ちてきたんだけど、真龍姫はわたしの上に落ちてきて、わたしの胸を鷲掴みにしていたの、それで龍姫達をプラネテューヌ教会に案内して、龍姫達が別次元から来たって言うから疑ってかかったんだけど、プルルートが龍姫達の身の潔白を証明したの」

「そうなんだ」

龍菜は覚醒する前の女神になったことをノワールに教えていたのである。

「そして、龍姫達がマジエコンヌって言う七賢人からわたしを助けるために女神化して、真龍姫が秘奥義決めて、女神メモリーをもらって晴れて女神になったの、けど、知らず知らずに傲慢で、気に入らないって理由だけで、部下をクビにしちやったり、悪口とか言っちゃったりしていたの、プルルートにお置ききされてもやめれなかった、そんな時だった、わたしの国の工場が七賢人のコピーリーエースって奴に襲撃されて、工場を廃墟にされたの、その時、わたし、どうして龍姫達の到着を待てなかったんだろうって、け

ど気が付いたらコピーリーエースと女神化して戦いを挑んでしまった。」

「まさか……」

「そうよ、自分でも敵わないのに、一人で挑んで、負けて、見せしめに上から瓦礫を落とされて、生き埋めにされて、天界から女神の力を剥奪された上に誰も助けに来なかったの」

「……」

「その時、皆から幻滅されて、見放されたんだって思った、両手足の骨もバキバキに折れちゃって、このまま死ぬのかなって思っていたら、龍姫達の声が聞こえてきた。あれ程、傲慢に振る舞ったに、まだわたしのこと仲間だと言ってくれたことは今でも思いだすの、そのあと病院に搬送されて両手足にギブスと包帯をグルグル巻きにされて、顔の右半分に包帯巻いて、泣いていたら、龍姫達がお見舞いに来てくれて、その時にお姉ちゃん達に会ったの、ツクヨミ様にわたしを女神に戻れるように頼んでくれて、獅子神家に養子にしてくれたのよ。それと、このインテリジエントデバイスのイザナミをもらえた」

「そうだったのか」

「!!」

「わarii、盗み聞きするつもりはなかったんでな」

「だから、決めたの、変わろうってね!!」

龍菜は以前、自分が傲慢で、下手すれば、ユーリに斬られていた上に、女神を剥奪されたことも話していたら、呼びに来てくれていたユーリ達に話を聞かれていたのだが、そのまま話をノワールに聞かせたのだった。

そして話を切上げて、教会に戻るのであった。

スキット：龍菜ノワールの選んだ道

ユーリ「それにしても、そんな経緯があつたんだな」

龍菜「そうよ、だから、わたし達が住んでる次元のゲームギョウ界は、二つのゲームギョウ界が統合してるのよ、この服をもらつて、このニバンボシをプレゼントしてもらつた以上は、変わらないといけないと思つたから」

レイヴン「それにしても、青年の服と剣、誰からもらつたの?」

龍菜「この服は、ツクヨミ様から勇龍と一緒にもらつて、この刀は龍姫が企画書を書いて、打つた刀よ。もちろん、わたしの住んでるゲームギョウ界では普通に武器屋で売られているわ」

エステル「以前、龍姫に聞きました。ゲームギョウ界では企画書を書いて、書かれた素材を集めたら、その場で完成して、お店に並ぶと」

ユーリ「なるほどな、ツクヨミは龍姫にこの刀を作らせて、オレの今着てる服を勇龍

達にあげたってわけだな」

龍菜「もし、龍姫達より先にユーリ達に会ってたら、キュモールみたいに、ユーリに斬られてた」

ユーリ「運が良かったな、龍姫達が先に会えて」

龍菜「そうね、もう、ノワールって名前、あの日の自分の影と一緒に捨ててきたわ!!

こうして、獅子神龍菜としていられるのだから」

ノワ「わたし・・・変われる・・・かな？」

ジュデイス「どうかしら、それはあなた次第よ」

ノワ「うん・・・わかった・・・」

あの男

マジエコンヌ四天王が復活して、翌日、今龍姫達達とユーリ達とジュード達はいつもの通りにやれることを行っていたのであった。

もちろん猶予のことも忘れてはいないのである。

やはり、龍姫達とユーリ達とジュード達は今日も事件に巻き込まれてしまうのだった。

「大変です!!」

「どうした!!」

「何があつた?」

「実はキュモールと名乗る男がラスティション教会に武装した兵を連れて乗り込んできました!! ただちに応戦を・・・」

「これは失礼、無駄な抵抗するんじゃないよ!!」

「わかった・・・(防衛システムは無意味なのか、クソ!!)」

どうやら、アレクセイは犯罪神の力でキュモールを生き返らせて、キュモールにラスティション教会を襲わせたのである。

運よく、優龍華・ユニはプラネテューヌ教会に龍姫達とユーリ達とジュード達と一緒に戦闘術の手ほどきを受けていたので、助かったのだが、教祖のケイがキュモールに人質にされてしまったのであった。

「どうしたの？ ええ!! わかったわ、大変よ!! ラステイション教会にキュモールと名乗る男が立てこもってるって」

「あの野郎、死んでもバカが治ってないのか!!」

「ユーリ!!」

「わかっている、殺すつもりはねえよ。ゲームギョウ界の法ならあいつを裁けるだろう」
「そうと決まれば、さっそく向かうぞ」

「おっさん達は留守番してるから、青年達頑張つて〜」

ラステイション教会が落とされたことは流星の絆のインテリジェントデバイスに天界から通信が入ったのである。

それを聞いたユーリはキュモールに怒りをあらわにしたのでフレンが落ちかせて、レイヴンとアルヴィンとローエンと真龍姫と龍空翔はセドナと一緒にプラネテューヌ教会で殿がてらお留守番をすることにしたのだった。

もちろん、ドン達も一緒にお留守番をしているのであった。

ネプギアに聖龍皇アルティメットセイバーを召喚してもらい、ラステイション教会に

向かったのであった。

「やはり、街の中に騎士達が配置されているみたいだな」

「あの鎧からすると、キュモール隊ってことは予測できるな」

「仕方ない、この手段は使いたくなかったけど、セットアップ、猫フォーム!! アーストさんかユーリかフレンさん、あそこの窓に」

「では、俺がやろう」

「ただ龍姫が猫に」

「なっっちゃった」

「どうしたんです? リタ?」

「にゃ〜!!」

「それじゃあ、行ってくるね」

「しゃべれるのかよ!!」

ラスティション教会に到着した龍姫達とユーリ達とジュード達はキュモールの部下の騎士達の所為で潜入できずにいたのであった。

なぜならラスティション教会の入口は橋を渡らないと行けないようになっており、そこに二人の騎士が見張りに立っていたのだった。

もちろん、東西南北の入口の橋、すべてに見張りがいたのだった。

で、龍姫達とユース達とジュード達は聖龍皇アルティメットセイバーで教会の屋上に降り立ったのだが、ドアが内側から鍵がかけられていたので、さすがのカオルもお手上げ状態で、破壊するわけにはいかなかった。龍姫がツクヨミからもらった能力で黒と白の猫の姿に変身して、一番背が高いアーストに近くにあつた窓から中に入れてもらって、

「これでよし、行きますよ」

「龍姫姐達には敵わないのじゃ」

「さっさと行くぞ!!」

龍姫が元の姿に戻り、中から鍵を開けて、潜入したのだった。

スキット：潜入

龍姫「人質を取って、立て籠もるなら」

龍菜「執務室ね、一応、バルコニーから直接入れるけど」

アースト「キュモールに人質を殺される可能性がある」

フレン「どうやら、屋上には見張りを付けてなかったようです」

ユース「ま、キュモールのことだ、態と見張りを付けなかったか」

ジュード「あるいは、この建物を把握してなかった」

ミラ「どちらにせよ、人質救出が最優先だ」

ユニ「待ってて、ケイ」

人質救出

キュモール隊によってラストイション教会が落とされて、教祖のケイと教会職員が人質にされ、龍姫達とユーリ達とジュード達は人質を救出するため、二手に別れて、執務室に向かったのであった。

「ちよつと、いいかな？ 人質とキュモール、何処にいるかわかる？」

「人質なら・・・執務室つてとこだ・・・」

「ありがとう、しばらく寝ててね!!」

「ゴン!!」

龍姫と龍菜とノワールとユーリとラピードは通路の陰から単独行動をしていた騎士の背後から龍姫が小太刀を突きつけて脅したら、予想通り執務室に人質と実行犯のキュモールが立て籠もっていたのだった。

そのまま龍姫が左手で手刀を叩き込んで騎士を気絶させて、合流地点の執務室に向かったのであった。

「どうやら、此処の様だな。鍵はこつちからでも開けるのだな」

「ボクが、やるよ・・・はい!! 開いたよ」

「流石、鍵開けやらしたら、ピカイチのカロルだ」

「さてと、どうしたものか」

「此処はオレがやる・・・」

「だが、失敗は許さない」

「わかつているさ」

合流地点でみんなと合流した龍姫達とユーリ達とジュード達は執務室の扉の鍵をカ
ロルがお得意のピッキングで開けて、ユーリが単独で中に入ったのであった。

いつでも突入出来るように、龍姫は猫に変身して、ユーリの後ろから付いて行き、人
質にされているケイの所にキュモールに見られないように向かったのであった。

「また、会えたね、ユーリ・ローウエル」

「おまえ、いい加減、舞台から降りてくんねえかな?」

「こつちには人質がいるんだよ、武器を大人しく捨てるんだ、さもないと」

「さもないと、どうなるのかな?」

「何!!」

「今だ!! 突入!!」

ユーリは自分に目を向けさせるために、キュモールに言い放ったあのセリフを言っ
て、まんまと口車に乗せたので、龍姫は猫から元に戻り、小太刀で人質の縄を斬り、キュ

モールの首筋に小太刀を突きつけて、隠れていたメンバーに突入させたのである。

「観念しな、キュモール!!」

「悪いけど、この前のボクと一緒にしてもらったら困るよ、ボクにはこれがあるんだよ!!」

「それは、懐中時計!! やめろ!!」

「オイオイ、確か、あれって」

「ああ、オレの一族、クルスニクにしか使えないはず」

「そうさ、けど、犯罪神のエアルで、クルスニク一族出なくても使えるのさ。ギヤハハ」

追い詰められたキュモールは懐からまがまがしいオーラを放っている懐中時計を取り出した。

そしたら、懐中時計が光り出し、まがまがしい紫色のルドガーの骸殻のような物を纏ったキュモールが現れたのである。

手には剣が握られていた。

龍姫達は人質を奥の部屋に逃がして、一斉に得物を構えたのだった。

震天裂空・・・

人質を解放することに成功した龍姫達とユーリ達とジュード達は懐中時計で骸殻を纏ったキュモールと、教会の屋上で戦いを繰り広げていたのだった。

「これでも、喰らえ!! 下民!!」

「遅いぜ!! キュモール、剣の腕、そのままみてーだな!!」

「こつち・・・幻狼斬・・・」

「お姉ちゃん、体が覚えてるのね!! 耐えられるかしら? デモンズランスレイン!!」

「そんな、借りものの力でボクたちに勝てると思った!! 三散華!!」

キュモールは以前同様、剣の腕が全然ダメだったので、龍姫達とユーリ達とジュード達が本気を出さなくても、実力の差が雲泥の差だったのだったのである。

「そんなはずは・・・」

「見苦しいよ、これが現実だから!! 魔神剣!!」

「ぎゃああ!!」

キュモールは骸殻を纏っているのに、龍姫達とユーリ達とジュード達に一方的にされていることが受け入れなかったようで、錯乱していたのであった。

「さっさと、終わらせんな!! 飛ばして行くで!!」

「ボクは、このラストイシヨンの王になる、キモール様だ!!」

「殺すなよ!! 武龍!!」

「了解や!! 崩襲脚!!」

武龍が畳みかけるためにオーバーリミッツLv3を発動してキモール目掛けて、左に斧を、利き手の右に小太刀を持ったまま、インテリジエントデバイス「白虎」で無殺傷にして攻撃を仕掛けたのである。

頭上から蹴り落とし

「来るな!!」

「ちよつと頭冷やさんかい!! 氷月翔閃!!」

冷気を纏わせて斧で月を二回描いて、

「闘覇絶衝刃!!!!」

蹴りながら斧と小太刀で攻撃して小太刀を納刀して

「腹括らんかい!! 天狼滅牙!!」

「ユーリのバーストアーツ、女神様のお墨付きみたいだね」

「おまえもだろ、フレン」

叩いた衝撃で、怯ませて滅多斬りにして追撃をして

「続けて、喰らわんかい!! 震天!! 裂空!! 斬光!! 旋風!! 滅碎!! 神罰!! 割殺撃うつ!!」

「武龍く長いよ!!」

「まさか、あれが技名なんでしょうか?」

立て続けに怒涛の連続攻撃を叩き込む秘奥義を叩き込んだのである。

「そんな・・・この骸殻・・・を手に入れた・・・ラステイションを統治する、キュモール様が」

「観念するんだな、キュモール」

「キュモール、あなたを、拉致及び監禁等の罪で逮捕します!!」

キュモールの骸殻は木端微塵に碎けて、キュモールはその場で両膝をついて、呆然としていたのだった。

こうして、ラステイション教会は、解放され、キュモールの部下の騎士達は、龍姫達に捕らえられて、天界の刑務所に放り込まれたのであった。

「それじゃあ、帰るぞ!!」

「ネプギア、お姉ちゃんのこと、頼んだわよ!!」

「うん、聖龍皇・・・」

「待った!! 今度はわたしが、アルティメット・ジークヴルムノヴァ!! 召喚!!」

「わたしの背に乗るがいい」

「ご協力感謝します」

プラネテューヌ教会に帰るためにアルティメットセイバーを召喚しようとしたネプギアを止めて、ネプテューヌがポケットからカード化したアルティメット・ジークヴルムノヴァを召喚して、背中に乗ってプラネテューヌ教会に帰るのであった。

スキット：震天裂空・・・

ミラ「武龍、なんだ、あの長い技は？」

エステル「まさかとは思いますが、技名です？」

武龍「その通りや!!」

ユーリ「いくらなんでも、あれは」

フレン「長すぎますよ」

エリーゼ「そうですね」

スキット：武龍の戦い方

ミラ「武龍は斧と剣を同時に扱えるのだな」

武龍「それがどないしたんです？」

ユーリ「オレも、斧を扱えるが、同時には扱えねえから」

ジュデイス「そういうえば、前に、ユーリに両方に持てばいいじゃないって言っていた

の思いだしたわ」

ユーリ「そーいや、そんなことあったな、それしても、武龍は、器用に斧ぶん投げて、そのまま好きな方向に軌道修正しちまうんだからな」

武龍「褒めても何もでやしませんで〜!! 一応、メインは秋龍同様に斧ですさかい、脇差は保険です」

エステル「そうなんですな」

この世に悪があるとするなら

キュモールからラストイション教会を奪還に成功した龍姫達とユーリ達とジュード達は、プラネテューヌ教会に戻ってきていたのであった。

スキット：ノワールの記憶その2

ジュード「話に聞いてたけど、ノワール、本当に記憶喪失なんだね」

龍姫「アレクセイに、ゲババーンで殺された時に記憶だけ、奪われたらしいんだ。

魂だけは何とか回収できたけどってツクヨミ様から教えられたんだ。けど、もう記憶はゲババーンを破壊しても戻ってこないって」

レイア「そんな、わたし達のこと一生思い出せなんて」

エリーゼ「そんなの、悲しいです」

星龍「けど、コスプレが好きなのと、ボクが教えてあげてる古武術は覚えてるんだけど」

ミラ「記憶と言うものは、本人の意思でしか手に入れないのだからな、此処は気長に待つしかない」

ネプ「戻ったら、ぼっちを治してあげようっと」

龍姫「そうだね、また傲慢になったら、ボクたちが叱咤してあげよう」

「気になったんだけど、どうしてルウィーとリーンボックスには攻めてこないのかしら？」

「簡単だよ、ルウィーは雪が一年中降り積もつてるところであるのと魔法が主流、プラネテューヌとラストイションは技術者が多いからね、リーンボックスは島国だから、交通手段が確保しにくんだよ」

「なんですって!! わたし達にケンカ売ってるのか!! あのアレクセイの野郎!!」

「確かにな、マジック・ザ・ハードは真つ先に此処を落とそうとアイエフ達に偽情報を掴ませたが、オレたちを甘く見て、陽動を逆手に取ったわけだ」

「そうだったのか、つたくこの世界の野郎ども、女神とシエアだったか、それに頼りすぎなんだよ、この老いぼれが鍛えてやらんとな」

「天界もそのことを気にしていますから、この世に悪があるとすれば、それは人の心だから」

「流星、戦闘狂ぞろいの女神達を束ねる、流星の絆の主女神ホスだな」

アレクセイがルウィーとリーンボックスは攻め込まないことに疑問を感じていたプランは、アレクセイがプラネテューヌとラストイションの技術力を欲しがっていることを龍姫が説明してあげたら、アレクセイに馬鹿にされていたことに気が付いたようで、

此処にはいないアレクセイにキレていたのである。

ドンが鍛えてやると言い、龍姫が天界が女神に依存するゲームギョウ界の人間に頭を抱えていたことと、この世に悪があるとするとするなら、それは人の心だと、述べたのである。

これにて話し合いが終了したので、各自解散になり、また明日、復活したマジエコン又四天王討伐隊を再編成を話し合うことにしたのだった。

記憶の試練

復活したマジエコンヌ四天王の提示された猶予、残り八日になった、翌日のとある日「こうかな・・・聖なる活力、此処に　ファーストエイド・・・」

「荒削りですけど、まずまずのできです」

龍姫達はノワールの記憶の手助けになると思い、いつもの通りにバーチャルフォレストの秘密の場所で術技の特訓をしているのであった。

今、エステルがノワールに初歩の治療術を手解きしていた最中だったのである。

インテリジェントデバイスのおかげで、ノワールは龍姫達とユーリ達とジュード達の術技の中で自分が好きな技を選んで行った結果、なんとかバーストアーツまで修得して、改めて剣術を龍姫達から教わったので、利き手でない左手を使いながら術技を出来るまでに至ったのだが、それでもまだ、記憶が戻ってこないのであった。

そんなこんなで特訓を切り上げて教会に戻るのであった。

「ユーリさん、お時間ありますか？　ユーリさん指名の依頼があるんですけど？」

「確か、ゲームギョウ界では直接、依頼人を指名できるだっけ」

「なんで、オレだけなんだ？」

「この依頼は、ユーリさんとノワールさんの二人だけでしかお受けできないんです。お都合が悪いなら」

「良いぜ、受けてやるよ。悪いな、カロール」

「気にしないでいいよ、それより、準備しないと行けないんじゃない」

「わかった・・・」

「それと、この水晶をお持ちください、これは今回の依頼場所への道標のような物です」

「まるで、麗しの星じやの」

「ほんじゃ、ちよつくら行ってくる。留守番頼んだ」

教会に戻ってきたところでセドナがある依頼を持ってユーリにギルドから直接依頼が舞い込んできたのだが、ノワールと二人だけしか組めないと言うのだが、ほっとけない病で好奇心が強いユーリが断る訳がなく、二つ返事で承諾して、グミなどの回復アイテムの確認をして、渡された黒水晶を持って教会を後にしたのだった。

「ユーリ・・・水晶・・・光ってる」

「ん？ ほんとだな、こっちに行けっか」

指定された場所に行くための入り口がある方角を先ほどセドナから渡された黒水晶から光がその方角に指しているの、その方角に向かったのであった。

「(イ)(イ)・・・みたいだよ・・・」

「確かに、術式みてえだな、水晶もこれを指してるみてえだし、行くしかねえな」

「うん・・・」

「大丈夫だ」

そこは初めてネプギア達と出会った場所で、そこには転送用の術式が描かれた魔法陣があり、黒水晶もそれを指していたので、二人はその魔法陣の上に立って、どこかへ転送されたのだった。

「(っ)っ・・・(っ)っ?」

「大丈夫か?」

「うん」

どうやら、辺りが真っ暗なところに転移したようで二人は位置確認を行っていたらしばらくして、急に光が灯されのだったのである。

「ようこそ、記憶を失くした黒の女神そして、ユーリ・ローウェル、わたしは女神の力を修復させる者」

「つまり、ノワの記憶を蘇らせるのか」

「はい、そうです、今回の記憶の試練はあなたとノワールさんの二人が受けてもらいます。よろしいですか?」

「オレは構わねえけど」

「わたし・・・知りたい・・・自分がどんな事してたか」

「それでは、御二方の試験の承諾を確認、では、御二方の覚悟を試さしてもらいます!!」
そこは神殿の内部で、ちょうど二人は部屋の真ん中に転移していたようで、目の前にフードを被った女性が現れて、二人の覚悟を試したいと言って、姿を消したと思ったら「なるほどな」

「誰?」

「誰って、あなたよ、ラストイシヨンの女神、ブラックハート、ノワールよ、それにしても、わたしもなめられたものね。まあいいわ、あなたを殺して、本物になってあげる、そして、ネプテューヌも殺して、ゲームギョウ界を統治してあげるわ!! アクセス!!」

「本物になってあげるだ? ふざんけんなら、よそでやってくれ!!」
「知りたい・・・だから・勝つ!!」

光の粒子が集まってしばらくして、ノワールの姿になって女神化まで行い、二人に戦いを挑んで来たのだった。

ユーリは慣れた様子で、ニバンボシを抜き、構えて、ノワールも愛用していた細剣ではなく、龍姫達同様に、黒い拵えの日本刀を左腰の鞘から抜刀して、構えたのであった。

蘇れ!! 黒の女神!!

ユーリとノワールは天界の試練で偽ブラックハートと火花を散らしていたのである。

「おまえの方が、こいつより、ネプ子のダチに相応しくねえよ!!」

「今の、あの子に何が出来るかしら、本当の気持ちを、大好きな妹とネプテューヌに言えないで、自分を偽ってきたあの子が、今になって記憶喪失ですって、笑わせてくれるじゃない。それと人まではキュモールだったわね、あの騎士のように傲慢に振る舞っていた癖に!!」

「わたしは・・・わたしは・・・!!」

「ノワ!! 吞まれてどうすんだ!!」

言葉を交わしながらユーリは偽ブラックハートの剣を捌いて、ネプテューヌの親友はこの記憶喪失のノワールだと言い放ったのである。

ノワールは吞まれかけたが、ユーリが櫂を飛ばして励ましたのであった。

「だったら、あの子から殺してあげるわ!! え!!」

「悪いけど、人間の男をなめんなよ」

「どうすれば・・・いいの・・・このままでは・・・ユーリの足手纏い・・・だよ」

偽ブラックハートはノワールに斬りかかったのだが、ユーリが間に割って入ってニバンボンで振り下ろされた剣を受け止めて、ノワールはこのままではユーリの足手まといでしかないと思ひ込んでしまっていたのだった。

その時だった、ノワールの脳裏にある光景が蘇ったのである。

「此処はラステイション教会？ あそこにいるの・・・ネプテューヌとわたし？」

「ノワール!! ノワールたら!!」

「嫌よ、自分で行きなさいよ!!」 なんでわたしまで行かなくちゃいけないのよ!! わたしはね、あなたみたいに国の経営を押し付けて遊んでいる暇なんてないの!!」

「良いもん!!」 だから、ぼっちなんでしょう!! バイバイ!!」

そう記憶をアレクセイに奪われる前、親友で気ままに生きてるネプテューヌに嫉妬した上に遠ざけた光景だったのである。

「わたしだって、あなたのこと好きなの、けど、わたしはラステイションの女神、ブラックハートの責任がある以上、人前では自分の心を偽らないといけない、だって私は女神、ブラックハートだから」

「わたし、自分から遠ざけてたんだ・・・妹も、ネプテューヌも、もう、終わりにしよう、女神としてではなく、一人のヒトとして、やり直せるよね、まだ、間に合うよね、ネプテューヌとユニこと、だって、わたしは、ネプテューヌの一番の親友でいたいから、お

願い、ネプテューヌ、ユニ、龍姫達とユーリ達とジュード達、わたしに本当の友達を作る力を貸して!!」

「今頃になつて、ネプテューヌと親友でいたいですつて、国を捨ててまで、作る意味なんじゃないわ、裏切られて、国を奪われるのがオチよ!!」

「そうかよ、だったら、おまえはどうなんだ? 今のおまえ、ひとりじゃねえかよ」

「それがどうしたのよ!!」

ノワールはもう心を偽るのを辞め、ネプテューヌと親友としてやり直す決意をし、ユニと仲直りをするこゝも、そして、龍姫達とユーリ達とジュード達に傲慢に振る舞ったこゝも謝罪すると決めた瞬間、ノワールのインテリジェントデバイス「玉依姫」のコアが輝きだし、それに応えるようにユーリに武醒魔導器の魔核も輝き出したのである。

そしてついにノワールは

「これが、わたしの、本当の女神の姿……ごめんなさい、今まで、傲慢に振る舞ったわがしが悪かった、ユーリ、お願い、今だけでもいい、一緒に戦ってくれませんか?」

「思いだしたみてえだな、つたく、いいぜ、後で、ほかの奴らにも謝つとけよ!! 特に、アーストにはな」

「わかった、行きましょう、ユーリ!!」

「ああ、行くぜ!!」

「今更、遅いのよ!!」

身長が175cmまで伸び、胸も満月のように真ん丸に大きくなつたが、その隆起を抑えるため、白銀の武士甲冑のような胴丸が装備されてぺったんこにして、左腰に刀を差しておく剣帯が付いておりそこに鞘が差してあり、得物の日本刀は巨大化しないでそのままの長さでちゃんとした日本刀の形になっており、下に黒のインナーウェアで青と白のラインが入っているのを着ているので露出がなく、その上からユーリの今着てる服をモチーフにしたバリアジャケットを着て、頭に兜の代わりに、猫耳のカチューシャが装備されて、青と黒と白の混合色のレギンスを履き、その上から脛当てをモチーフにした黒・白・青の混合色のロングブーツを履き、髪は銀髪でツインテールで、なぜか青い半透明のレンズが付いたスカウターが右側に備え付けられているが、今は閉まっている状態である。

もちろん空も飛ぶことも可能で、両腕に黒の手甲が装着されていたが、左腕の手甲は龍が模られていた。

口調が以前よりネプテューヌのように少しだけ砕けたのだった。

「わたしが、変わってあげるって言ってるのよ!!」

「もう、自分を女神だつて言うの辞めたから、だつて、自分のこと女神だつて思う子つて必ず怠惰か傲慢になつちやうから、自分で踏み出さないと、誰も繋がるうと思わない、そ

れに、お互い手が届かないところがある、だから、わたしは一人じゃない!! お願い、今だけでもいい、飛ばして行くわ!!」

「そうこなくちやな」

ノワールは今までの自分を変えるためにオーバーリミッツLv3を発動し、偽ブラツクハートに仕掛けたのである。

「ありえない、そんなことって!!」

「はあああ!! 虎牙破斬!!」

ユーリとは違い、龍姫達同様に斬り上げて、斬り下ろして

「秋沙雨!!」

連続で滅多刺しにして最後に斬り上げて追撃して

「囓烈襲!!」

「オレの技!!」

ユーリ直伝の正拳突きを連続で左の龍を模った手甲でお見舞いして

「焼き尽くす!! 天狼滅牙・飛炎!!」

先ほどと同じくユーリ直伝の叩いた衝撃で怯ませて炎を纏った刃で滅多斬りに追撃したのち、

「お終いにしましょう!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇も鋭く切り裂き、仇名す者

を微塵に砕く!! 決まったわあ!! 漸毅狼影陣!!」

四方八方から敵を斬りつけながら、陣を形成しながら最後は背後から一閃して、指パツチンのアレンジでべる秘奥義で終止符を討ったのであった。

「いやああああ!! わたしは、わたしは、死にたくないのに!!」

「さようなら、わたしの影」

偽ブラックハートは光の粒子になって消えて逝ったのであった。

「何、この光は、これは龍姫達の技?」

「大丈夫か?」

「大丈夫」

消えて逝ったと思った偽ブラックハートは光の粒子になってノワールの中に入って、ノワールは龍姫・ユリー・ネプテューヌが持っている潜在能力「ラーニング」を取得したのだった。

試練を乗り越えた結果

見事、記憶と試練を乗り越えたユーリとノワールは得物をしまつて、

「はいよ!!!」

「はい!!!」

ハイタッチをしていたのだったのである。

そしてノワールは女神化を解除して、ユーリに面と向かつて、

「ユーリ、今まで、自分勝手に、振る舞つてごめん!!」

「つたく、オレより、謝る奴がいるだろ、顔あげろよ、それにしても、素だと龍姫達みたいになるんだな」

「けど、人前だと、どうしても、弱さを見せたくなくて、つい、傲慢になつちゃうだよ」
「まあ、オレは気にしてねえからな」

これまで記憶喪失になる前に龍姫達とユーリ達とジュード達に傲慢に振る舞つたことについて深々と頭を下げて謝つたのである。

ユーリは自分より謝らなければ行かない人物がいるはずだといひ、ノワールの猫かぶりからかっていたのだったのである。

「どうやら、試練を乗り越えたようですね」

「それはそうと、なんでオレしか同行出来ねえんだ？ 別に龍姫達でもできただろう？」

「それは、あなたが一番、「友情」に詳しい人材だとこちらで判断させていただきました」

「フレンのことか、まあ、確かにガキの頃から一緒だったからな、今は別々だがな」

「そういうえば、エステルからそのこと聞いてたけど」

先ほど二人の力量を計るため、偽ブラックハートを喚びてきた白いフードを被った女性二人の目の前に姿を現したのである。

「どうやら、ノワールに人の友情とは何かを伝えるために、ユーリを指名したと述べて、ユーリは龍姫でもいいのではないのか思っていたのだった。」

「ノワール!!」

「はい!!!」

「ノワール、黒の大地ラステーションの守護女神ブラックハートの任を、この場を以つて、解任処分とします」

「それじゃ、わたしは」

「今までのことを考えたら、記憶喪失など差し引いたとしても、賢明な判断だな、天界の女神さんよ」

「此れしきの変装では、見破られて、当然ですね、そうです、わたしは天界の女神、イズ

ナと申します、ラストレイションの守護女神の任を解かれただけです。天界は、ゲームギョウ界のシエアの奪い合いを辞めさせるため、そして、人間たちが自分の足で時代を切り拓いてもらうためです。それにまだ、あなたに、試練を乗り越えた、証を渡します」

「わたしのデバイスが光ってる」

イズナはノワールに守護女神の解任を言い渡して、試練を乗り越えた、褒美を渡したのである。

「もう、これでシエアと言う人の信仰心を用いないで、女神化が可能になります」

「ありがとう、イズナ様」

「ノワールさんにもリンカーコアを授けました、それでは、ご武運を」

試練を乗り越えたユーリとノワールは、元の次元のゲームギョウ界の転移した場所に戻されたのであった。

ノワールのこれから

天界からの試練を乗り越えたユーリとノワールはゲームギョウ界戻って来れたのであった。

二人はギルドに報告して、報酬を受け取り、教会に戻るのであった。

「ユーリ、ノワール、おかえり」

「ワン!!」

「すいませんでした、急に天界からユーリさん指名の依頼がギルドに出されていたので」

「まあ、オレは楽しかったからいいけどな」

「わたしも指名の依頼来ないかしら」

「ジユデイスはいつもの通りなんだ」

セドナはユーリにいきなり依頼を頼んだことを申しわけないように、言っていたら、ユーリは気にしなくてもいいと言い、ジユデイスはユーリだけしか同行出来なかったことに拗ねていたのだったのである。

そして

「お姉ちゃん……」

「ユニ〜!! ただいま〜!! ごめんね、今まで、押し付けちゃって」

「ユースリ!! ノワールがキャラ崩壊してるよ!! どう言うこと?」

「なるほどね、ボクじゃなかった理由がわかったよ、ノワールは人の接し方を知らなかったから、ボクよりユースリの方が、適材適所だった」

「なるほど、確かに、龍姫ちゃん達でも良かったけど、ノワちゃんは自分の弱さをネプちゃんにユニつちに見せれなかった、青年は自分の弱さを認めるしね」

「そうじゃの、ユースリは誰に対しても、自分を見失わないからなの、ユースリとデートしたいのじゃ」

ノワールは妹のユニに、身長差もある上に、人の目も憚らないで、思わず抱きついたので、それを見たネプテューヌはあまりの変貌ぶりを見て、驚きを隠せないでいて、星龍が何故、ユースリがノワールの試練の同行者だったのか述べて、レイヴンが付けくわえて、パティは頷いたのだった。

「みんな、わたしが、今まで、傲慢に振る舞って、ごめん!!」

「ノワール、顔あげてよ!!」

「ノワール、確かに、おまえは自分の弱さを認められなかった、三年前の敗北は、それが原因である」

「うん、わたしは、いつの間にか、女神の責任に押しつぶされそうになっちゃったてたんだ」

「わかったんだったら、いいじゃない」

「龍菜、ありがとう」

「どういたしまして」

ノワールは龍姫達とユウリ達とジュード達の前で、今まで傲慢に振る舞ったこと対して頭を下げて謝罪した、アーストはノワールの心の弱さを認めたことで、水に流すと言い、龍菜が手を差し伸べて、その手をノワールが取り、立ち上がらしたのである。

「ネプテューヌ、後で二人だけ、話があるんだけど、いい？」

「うん」

ノワールはネプテューヌと二人だけで話があると言って、部屋を出て行ったのだった。

そして、その日の夜、

「ノワール、話って何？」

「単刀直入に言うね、わたし、ネプテューヌのことが好きなの!!」

「ねぷく!! ノワール、ジュードに諺てもらった方が」

「わたしは正気よ!! けどあなたのことが好きでしょうがないの、今まで女神だからって言い聞かせたけど、もう天界からラスティションの守護女神の権限を剥奪されちゃった」

「つまり、ノワールは」

「うん、龍姫達・ユニと同様に龍の力を授けられたから、もうシエアに囚われないの」

龍姫達とユーリ達とジュード達が就寝してる頃を見計らって、二人はプラネタワールの展望デッキに出て、ノワールはネプテューヌに親友としてだと思いが、好きだといい、そして自分が守護女神の任を解かれたことと、シエアを用いないで女神化できることも明かしたのを聞いたネプテューヌはいきなりのことだったので、驚いてしまったのだが、持ち前の明るさで持ちこたえたのだった。

「わたしと一緒になんだ!! 気にしてないよ」

「ありがとう、ネプテューヌ」

「ノワール、近いよ!!」

ネプテューヌも龍姫達とユーリ達とジュード達のおかげで、三龍神の力に覚醒したことにより、シエアがなくても女神として生きていけることを告げたら、ノワールはネプテューヌに近付て、

「ノワール、責任取ってよ、わたしのファーストキスが」

「もちろん、そのつもりだよ」

なんとノワールはネプテューヌの唇を奪ったのである。

二人は、部屋に戻ったのである。

「良かったね!!」

「そうだね、龍姫ちゃん」

その様子を物陰からこっそり見ていた龍姫と星龍であった。

巫女？

復活したマジエコンヌ四天王から与えられた猶予残り七日になった今現在、龍姫達とユーリ達とジュード達はそれぞれ各自の役割をしていたのだった。

もちろん、ノワールは記憶が戻って、ラストেশションの守護女神の職を解かれた身の上であるが、ラストেশションに戻って、妹に任せきりだった執務などを、別次元の自分である龍菜と天龍共に行っていたのであった。

龍菜が書類などの処理を代行しているのであった。

その理由は、どうやら、三年間、幽閉されたのと、記憶喪失になったことによる、書類の処理速度が著しく低下してしまったのである。

当の本人は自分を追い詰めてしまいそうになってしまったが、龍菜がこう言ったのである。

「一人の人が出来るのはきつと些細なことよ、でも人はお互い協力し合えるのよ。それと、自分の進む道は自分自身でしか決められないの、あなたは、あなたのペースでやればいいのよ、他の人に合わせる必要なんかないわ」

「ありがとう、龍菜、天龍」

「もう、あなたは一人じゃないから」

「お姉ちゃん、この書類整理で三日分だからね」

「ありがとう、ユニ」

龍菜は自分が女神に成りたての頃、プルルートのお仕置きでも、傲慢な性格が治らなかつた自分と照らし合わせていたのだったのである。

そんなこんなでラストイシヨンの書類を終わらせたのであった。

ところ変わってプラネテューヌでは

「大変です!!」

「どうしたの?」

「はい、実は闘技場でミラ様と叫んでる男が暴れていると言う、報告が寄せられたので、ご報告に参りました。闘技場の者が対応に当たってるのですが、防衛組が突破されるのが時間の問題です。直ちに赴いて欲しいとのことです」

「ミラ、まさか」

「皆、言わないでくれ」

「ボクが行くよ!!」

「龍音、無茶はしないでね」

「龍音の嬢ちゃんだけじゃ、荷が重いんじゃないかねえか、おい!レイヴン!!」

「レイヴンさんなら、真龍姫とユーリ達一緒に龍音の後追いかけて行きましたよ」

闘技場でミラの名前を大声で叫んで大暴れている男がいるらしく、どうやらジュード達の知り合いだったのだが、代わりに龍音が闘技場に確かめに行ってしまったので、ドンがレイヴンを助手として向かわせようとしたら、真龍姫と凛々の明星共に闘技場に向かったことを龍姫がドンに報告していたのだった。

「すいません、暴れるなら、ほかの場所ですてくください」

「そんなこと知るか!!俺は、ミラ様のお世話役の巫女、イバルだ!! 図が高い!!」

闘技場に到着した龍音達はどこかの民族衣装風な服装に似合っていない蝶ネクタイに短剣を二振り持った男は龍音に直ちにやめるように言ったのだが、その男はミラの側近で巫女だと言いだして、龍音に向かって図が高いと言いだしたので、

「どうやら、人の話を聞く気がないみたいだよ・・・」

「しゃねえな」

「ユーリさん、此処はボクが」

「けど、龍音は一応、女神候補生でしょ、それこそ僕らの信用が」

「少年、俺様達は、できることをしよう」

「そうね、まず怪我人の確認をしましょう」

「龍音、気を付けてね」

「わかった、真龍姫姉」

「巫女である、このイバルをコケにした落とし前、付けてやる!!」

ユーリがニバンボシを抜刀しようとしたところをすかさず龍音が大小の刀を抜刀して、前に出たので、残りのメンバーで人命救助に向かったのであった。

魔神煉獄殺

そんなこんなで龍音は成り行きとは言え、巫女イバルと言う男と一対一で闘技場のフィールドでやり合う羽目になってしまったのだった。

一応、オペレーションルームのオペレーターによつて無殺傷の結界が張られているので、二人とも真剣でやり合っているのがあった。

「幻影刃!! ミ(ノ) | (ノ) || 3 ドテツ!」

「こつちですよ!! こちらも幻影刃!!」

「ぎやああ!!」

「やっぱり、イバルだったんだ」

「これは、龍音に任せよう」

イバルが龍音とは逆に左手に順手に持ち、右手に逆手に持った短剣で斬り掛かってきたのだが、遅れをとる龍音ではなく、そのまま縮地で回避したら、イバルがコンクリートの地面に向かって顔面からダイブしてコケていたので、龍音も形が違うが同じ技名を売り出して、斬り捨てたのだった。

そこにちょうどジュードとミラが到着してイバルに呆れてしまったのであった。

「クソク!! 巫女である俺がこんな奴に」

「あのくいい加減に、投降してくださいよ」

「俺にも巫女と言うプライドがある以上、此処で負けるわけには」

「はあく仕方ない、これはしたくなかったけど、いい気にならないでください!!」

「なんだと!!」

龍音にコテンパンされてるのが余程悔しかったらしく、まだ諦める気配がなかったもので、龍音はさっさと終わらせて、教会に戻りたかったので、エレンピオスでは単独で出来ないテルカ・リユミレース式戦闘術のオーバーリミッツLv3を発動して、イバルにお灸を据えに行ったのである。

「地転蹴!!」

「虎牙破斬!!」

「ぎやああ!!」

「イバル、相手の力量を考えようよ」

イバルは龍音の足を払おうとしてきたので、龍音は飛び上がりながら斬り上げて斬り下ろして攻撃したのである。

「月閃虚崩!!」

そのまま龍音は月の軌跡を二回描いて追撃して

「崩龍斬光劍!!」

「ジュード、あの技どうやるのだ?」

「ボクに劍術聞かないでよ」

「すまない、後で本人に聞くとしよう」

Z字を描くように切り刻んだのを見たミラは龍音の崩龍斬光劍の動きについてジュードに聞いていたのだが、ジュードもわからないと言うので、後で龍音に聞くことにしたミラであった。

「巻き上がれ旋風!! 光翔戦滅陣・旋迅!!」

「くあwせd r f t g y ふじこ!!」

「お、あれはフレンのバーストアーツだな」

「龍音ちゃんらしく、二刀で斬りまくってるわよ」

竜巻を起こして巻き上げて、そのまま追撃していたのを人命救助に当たっていたユリとレイヴンは龍音のバーストアーツを見て、評価していた。

「目障りですよ!! いい加減に、大人しく投降してください!! 魔神!!煉獄殺!!これでわかりました?」

「ぎゃあああ!!」

「龍音、やりすぎなような・・・」

「これぐらいでちようどいいだろな、イバルなら」

右で持ってる童子切安綱で斬りつけて、闇の紫色のオーラで巻き上げて、そのまま斜め上に向かって連続で飛燕連斬を叩き込んで、到達地点の所から、下に向かって特攻して、二刀を振りかぶって、そこから斬りつけて、瞬迅剣で貫く秘奥義でイバルを気絶させた。

「イバル、おまえは何をしているのだ？」

「ミラ様!!」

「悪いですけど、ご同行お願いしますね」

「オレは巫女だ!!」

そんなこんなでイバルは龍姫達の生活しているゲームギョウ界の役人に逮捕されたのであった。

ガツトウーゾ現る

ジュード達の知り合いの巫女イバルの騒動は龍音の制裁と言う形で幕が下りたのであった。

幸いにも怪我人は出たものの、真龍姫と後から駆けつけてきてくれたジュードとエステルと龍音のおかげで、その場で完治したのであった。

そんなこんなで出動したメンバーは教会に帰還したのであった。

復活したマジエコンヌ四天王から提示された猶予残り六日

「アイちゃん!! 龍姫ちゃん達に言わなくてもいいんですか!!」

「いいのよ!! どうせ、お荷物扱いされるのが目に見えてるわよ!!」

どうやら、初対面の時に龍姫達とユース達とジュード達にパーティメンバーに入れてもらえなかった事と、自分が龍姫達とユース達とジュード達に利用されて、犯罪組織の陽動作戦を潰すために騙されたことを今だに根に持っていたらしく、龍姫達とユース達とジュード達に内緒でバーチャルフォレストに魔物退治の依頼にコンパを連れてやってきたのなのである。

「アイちゃん、龍姫ちゃん達は、そんなことないです!!」 話せばわかってくれるですよ

!!」

「それだったら、コンパは戻っていいわよ」

「嫌です!! ここまで来て、戻ったら、示しがつかないです!!」

「はあく、わかったわ、危なくなったら、逃げるわよ!!」

「はい!!」

コンパは龍姫達なら話せばわかってくれると言ったのだが、アイエフは、気に障ったのか、コンパに一人でやると言い出したので、コンパは帰ったら、何しに来たのか示しがつかないと言って、一緒に依頼を遂行することにしたのであった。

そんな時だった

「グルルルツ〜!!」

「何、この魔物、見たことないわ!! 下がって、コンパ!!」

「はいです!!」

アイエフ達は魔物に出くわしたのだが、その魔物が、あのテルカ・リュミレースの花の街、ハルルを襲った、フェンリルが足元に及ばない、あの鋭い毒の爪を持つ魔物「ガトウーゾ」であることをアイエフ達が知る由もなかったのであった。

ところ変わってプラネテューヌ教会では

「これで、最後の書類だから、しばらく休暇が出来るけど、最終日は作戦実行だからね」

「うん、はい、お終い!!」

「龍姫達も終わったんだな」

「そうだけど、それがどうしたの?」

「いや、ゲームギョウ界の女神様のお仕事はどうものかを拝見しにな」

龍姫達は三年間溜まってたと言うより、イストワールの処理速度が人間以下だったせいで溜まってしまった処理を今終わらせたのだった。

ちようどそこに、ユーリがノックして入ってきたのだが、女神様の仕事を見学しに来たのだった。

「これで、溜まっていた書類は片付いたよ」

「ユーリさん達のおかげです、魔物退治押し付けちゃったんですから」

「気にすんな、オレたちは戦うのが仕事だからな、ほっとけない病だな」

「そうですね」

ネプギアは凛々の明星に寄せられた魔物退治を請け負ってもらっていることに申し訳なかったのだが、戦いが好きなユーリ達はまんざらでもなかったのだった。

スキット：やり方

ネプ「これで、いろいろ専念出来る」

龍姫「ネプテューヌ、最終日は作戦決行だよ」

ユーリ「女神の仕事って、どう見ても、ヨーデルの仕事と変わんねえな」

ギア「そうなんですか？」

ユーリ「あ、オレたちの住んでるテルカ・リユミレースの皇帝陛下様もあんな仕事やってるんだぜ」

龍姫「ヨーデル殿下は、自分が戦いに向いてないって仰ってからね、人にはそれぞれ
のやり方がある、けど、いーすんは、ネプテューヌに自分の女神の理想を押し付けてた」
ネプ「どうして、龍姫達に怒られても嫌にならないのに、いーすんに怒られると嫌に
なるんだらう？」

龍姫「簡単だよ、ボクはね、自分が出来ないことは、他人に求めないって決めてるか
らね」

龍音「その通りだね」

ネプ「だから、龍姫と一緒に手伝ってくれるんだね」

龍姫「いーすんは、ノワールが自分の気持ちを押し殺して女神を演じてることに気が
付いてなかったから、いーすんには真面目に見えたんだよ、この世に完璧な人なんてい
ないから」

ユーリ「龍姫の言う通りだ」

ネプ「ありがとう、龍姫、ユーリ」

「大変です!! バーチャルフオレストに未確認の魔物の反応が出ました!! 至急、討伐隊の編制を」

「わかった!! 全員で行く必要ねえな」

「俺が行こう」

「わたしも行くわよ!!」

「ボクも一緒に行くよ!!」

「おっさんも行くわよ」

書類整理が終わって、ユーリがネプテユーンとの約束で作ってくれたプリンを食べながらくつろいでいたら、セドナを通して、バーチャルフオレストに未確認の魔物が現れたと言うので、全員で行く必要がなかったのだ、回復役兼戦術師の龍姫はじめとする、ユーリ・ジュデイスの戦闘マニア組とアーストとレイヴンで現場に急行したのだった。

龍姫はネプテユーンに英気を養って置くように言って、討伐のパーティーメンバーに合流したのだった。

アイエフ救出

バーチャルフォレストに未確認の魔物が現れたという知らせを受けた龍姫達は目撃情報とラピードの嗅覚を頼りに急行したのである。

遅れてジュードとミラとレイアとミュゼと光龍も駆けつけてくれたのであった。

「おまえも・・・落ちてこい・・・」

「アイちゃん!!」

「ワン!!」

「ラピード、そつちか!!」

ラピードが悲鳴が聞こえてきた方角に走り出したので、龍姫達もその方角に向かって走って行ったのである。

そこにはアイエフが血を流して気絶して、その傍らにコンパが身を挺して魔物の前に立ちただかっていたのだった。

「グルルルツツガウ!!」

「魔神剣!!」

「ジュード、龍姫はげが人の手当てを、ユーリ達は俺と一緒にこの魔物を片付ける」

「こいつ、確か、ガットウーゾじゃねえか!!」

「とりあえず、片付けましょう」

ガットウーゾがコンパに襲い掛かったので、龍姫が抜刀して斬撃を放って攻撃を中断させて、ジュードと一緒に負傷したアイエフの治療を行うことにしたのである。

残りのメンバーはガットウーゾの討伐に入ったのであった。

「うおおおくん!!」

「遅い!! 覇道滅封!!」

「爆炎剣!!」

「天月旋!!」

「瞬迅爪!!」

「爪竜連牙!!」

このメンバーの敵ではなく、攻撃をかわしながら、ガットウーゾに攻撃を叩き込んだのである。

「う・・・う・・・」

「アイ、今、手当するね、命を育む女神の抱擁、キュア!! 毒も解毒しないと」

「あの魔物、毒を持つてるの!!」

「うん、爪に猛毒があるんだ、ここもボクに任せて、卑しき闇よ、退け!! リカバー!!」

「ありがとう、うぐっ!!」

「まだ動いちゃだめだよ」

負傷したアイエフの手当てを龍姫がエステルほどではないが、治療術で傷を癒し、ガットウーゾの爪からもらった毒も解毒した。

アイエフが立ち上がるうとしたので、ジュードと龍姫がしばらく寝てるように言ったのであった。

「お姉ちゃん直伝!! 屠龍閃!!」

「ファイアーボール!!」

「虎牙破斬!!」

ガットウーゾは立て続けにアースト達の攻撃を受けて、絶命したのだった。

「まさか、ゲイムギョウ界でこいつと、また戦うことになっちゃうなんてな」

「どうやら、そちらは無事に手当てが終わったのだな」

「はい、ですが、病院に運ばないと、的確な治療が出来ません」

「そうだな、おっさんも手伝えよ」

「おっさん、やるわよ!!」

龍姫が治療術で応急手当てを施して、ジュードに簡単に診察したとはいえ、念のため、プラネテューヌの病院にアイエフを搬送したのだった。

た。そのあと龍姫がイルミナルでネプテューヌに連絡して、病院に来てもらったのだっ

事情聴取

ガットウーゾに襲われて応戦して負傷したアイエフは龍姫達に応急手当てを施されて、病院に搬送されて、今、緊急手術が行われていたのであった。

しばらくして、手術が終わった合図のランプが消灯したので、執刀医にアイエフの容態を尋ねたら、幸いにも龍姫達の応急手当てが速かったおかげで、命に別状がなかったのだが、全治二ヶ月の両手足の靱帯断裂と骨折と診断されたのだった。

一緒にアイエフ共にバーチャルフォレストでガットウーゾに襲われて、龍姫達とユリー達とジュード達が助けに来た瞬間に安堵で気を失ったコンパに事情を聴くことにしたのだった。

「なるほど、ボクたちに咎められたこと、まだ根に持ってたんだ」

「わたしは、龍姫ちゃん達に言われたことは理解してたんです」

「聞いて呆れてきたよ」

「全くだ」

アイエフは龍姫達とユリー達とジュード達の戦闘力がゲームギョウ界では手に入れないことに対して劣等感を抱いてようで、一人で依頼を受けて行くつもりだったらし

うに姉妹の部屋に侵入していたのであった。

どうやら、ネプテユーンは龍姫達と真龍姫達と同じ心を許し合った者の力を呼び覚ます能力「喚起」をネプテユーンは知らず知らずに、あの時、アレクセイがノワールに不意撃ちしてきた時に庇って死んで息を吹き返した時に覚醒していたようで、別次元のノワールでもある龍菜と同じ隠された能力「統制」と言う味方の術技を少しの間だけ強化出来る能力を覚醒した副作用で、夜中の間で、ノワールは体が成長していたのであった。身長が、ネプテユーンと同じ164cmまで伸び、胸も同じ大きさに成長していたのだが、いつもの黒と白の胸元が開いたクリアドレスを着ていたので、クリアドレスのサイズが合わなくなって、ほぼ全裸のに近かったのだった。

こういうことに感が働くあの集団が黙っているはずがなく

「ノワちゃん!! おっさんの胸に飛び込んでおいで〜」

「ノワールちゃん。女の子の付き合ひしようや〜」

「このアルヴィンと・・・」

「ノワール!! 突撃!!」

レイヴンは本能のままセクハラを実行して、武龍に至っては、自分が女であることを良いことにレイヴンと同じくセクハラを実行しようとしており、アルヴィンはナンパをし始め、真龍姫達はノワールに突撃していたのであった。

もちろん、

「エツチ〜!! 変態〜!! 龍菜直伝!! ファイアーボール!!」

レイヴン&アルヴィン 「ぎやあああ!!」

「レイヴンとアルヴィンはいつもの通りなんだね」

レイヴンとアルヴィンはノワールの魔術を喰らって廊下にぶっ飛ばされて気絶して
いたのであった。

ノワールの新しい服

覚醒して成長してしまったノワールは、今着ているクリアドレスが身長も伸びた所為でちんちくりんになってしまい、胸も大きくなったので、全裸に近い状態のためネプテューヌとネプギアの自室から出て来れなくなってしまうので、レイヴンとアルヴィンの悲鳴を聞きつけて龍姫達は、駆けつけてくれた男性陣に気絶しているレイヴンとアルヴィンを運んでもらっているうちに、龍姫達が、ノワールの私服をその場でインテリジェントデバイスのリライズ機能なので、着ていた黒と白のクリアドレスを今のノワールの体に合わせて作り上げたのだった。

「ありがとう、龍姫、けど、この姿で刀を抜けるかな？ それに、今になって、恥ずかしくなってきたよ」

「そうね、わたしも、ジュディスみたいな服着てたから分かるわ、怪我が完治して、そのあとにお姉ちゃんに女の子なんだから、この服着なさいって言われて、くれた服が黒と白と青のエクエステイオーって言う、露出しない可愛いフリルが付いたドレスよ、まあ、こういう仕事をする時はこのユーリのお揃いを着てるんだけどね」

「そうなんだ」

「そうだ、この下着、あげるよ」

「ありがとう、大事にするよ」

以前のノワールなら胸元が開いていたあのクリアドレスから胸の谷間を惜しみなく見せつけてきたのだが、龍姫達とユーリ達とジュード達に対する劣等感がツクヨミに生き返らせてもらったおかげで、自分が傲慢に振る舞って龍姫達とユーリ達とジュード達に不快感を与えてしまったことに気づいた上に、ユーリ達とジュード達と関わっている都合上、レイヴンとアルヴィンのような、下心丸出しの男性の目が気になってしまったらしく、今になって、胸がボール以上の大きさになったことにより、羞恥心が芽生えてしまったらしく、龍姫から連絡を受けて駆けつけてくれた星龍達から、かわいい猫がデザインされた、和服など、胸が大きい人が付ける新品の黒の和装の下着をノワールにあげたのである。

和装下着をもらったノワールは早速着けてみると、あれ程、ボール以上の大きさだった胸が、ぺったんこに見えるまで小さく見せれるのであった。

「龍菜、その服、着てみたいんだけど、予備持っていないよね？」

「そんな事だろうと思って、前以て、買ってあるわよ。その前に、このインナー着なさい」
「ありがとう、龍菜、こんなにしてもらって」

「いいのよ、困った時はお互い様よ」

ノワールも龍菜の着ているユーリのお揃いの服を着たいと言うので、龍菜は予め、住んでいる次元のゲームギョウ界のシヨップで予備として購入していたので、ノワールにミッドナイトブルーのインナーもあげることにして、着させてあげて、その上から、ノワールも、あの服を着たのである。

「こうして、鏡で見ると、ユーリに見えてくるね」

「今、此処に新たな黒衣の断罪者が誕生したのであった。それより、朝ごはん、食べようよ!!」 わたし達の分、ミラに食べられちゃうよ!!」

「そうね、ミラならな、ありえるわね」

「ネプテューヌ!! 龍菜!! ご飯、食べちゃってよ!! 食べてくれないと片付けられないよ!!」

「わかった!! 今行くわ!!」 ノワール、一緒に行きましょう」

「うん、龍菜」

ノワールも髪を結っていたクリアリボンを解き、ロングヘアにして、

先に食堂に向かっていた龍菜が、ネプテューヌ達を呼んだので、ネプテューヌ達は急いで食堂に向かったのであった。

この後、ユーリ達とジュード達が、ノワールも、ユーリのお揃いの服を身に纏っていたことに、驚いたのと言うまでもないのであった。

久しぶりの白の大地

早朝からノワールの潜在能力が覚醒して、体が成長してしまい、いつも着ていた胸元が開いたクリアドレスがちんちくりんになってしまった所為で、胸がとんでもないことになり、履いていた下着もすごいことになってしまつて、レイヴンとアルヴェインのセクハラ及び、武龍と真龍姫達の突撃部隊が突入したりと朝から騒がしかったのは言うまでもない。

そんなこんなで朝食を食べ終えて、教会に寄せられた依頼を確認するのであった。

「教会に寄せられた依頼は、この三つですね」

「坊主ども!! ちゃんと帰つて来いよ!!」

「ルドガー、帰つて来てね」

「大丈夫だ、無事に連れて帰つて来てやるよ」

セドナからギルドから寄せられた依頼の内容の書かれた紙をもらつて、ドンの見送りとエルの約束をして、龍姫達とユーリ達はギルドに向かったのであった。

「さてと、オレたちは、この依頼だな」

「ボクたちはこつちの依頼だよ」

「ほか、二つは場所が一緒だね」

ギルドで依頼を受けて依頼書を拝見したら、プラネテューヌ領とルウィー領の二か所だったので、凛々の明星に星龍・真龍姫・龍菜・ネプギア・ユニが同行者として、プラネテューヌのレツゴウアイランドへ向かい、龍姫達はルドガーを連れて、ルウィー教会に三姉妹を迎えに行つたのであつた。

「龍姫お姉ちゃん達だ」

「ごめんね、今日はお仕事で此処に来たんだ」

「そうでしたか、今日はこの子達とブラン様とご一緒に依頼を遂行するんですね」

「そうだよ」

「あのノワール様、なんか成長して、キャラ崩壊してるような・・・」

「してるんじゃないくて、もうしてるんです」

「来たの・・・おまえ誰だよ。(。D。)ノへダレよ!!」

「誰ってノワールだよ」

教会に入った龍姫達をロムとラムが出迎えて来てくれて、後からミナが遅れて出迎えてきて、ノワールが下に黒のインナーを着て、胸を小さく見せているがユーリのお揃いの服を着て、龍菜から龍ラビを任せられていたのと、以前の傲慢さがどこへ行つたのかと言うくらいのアウトローな態度と龍姫達並の砕けた口調でしゃべり出したので、一同が

揃いも揃って、呆然と立ちく尽くして、石化して、ブランがそこにやって来て、ノワールの成長した出で立ちを見て、突っ込んだのであった。

役者が揃ったので龍姫達は依頼書に書かれていた三つの内二つの依頼のルウィー領のアタリー湿原に生息している、絶対神の下僕とメタボスライヌを討伐しに向かったのであった。

スキット：ノワールのキャラ崩壊その一

ノワ「ネプテューヌ♡!!」

ネプ「ノワール♡!!」

ブラン「なんか、落ち着かねえ!!」

ロム「なんか、やりづらい・・・」

ラム「ロムちゃんに賛成!!」

ルドガー「いきなり、ノワールの今まで押し殺してきた部分が出てきたんだ、仕方ない」

龍姫「ボクは、傲慢が治ってくれて良かったです」

うずめ「俺も、お姉ちゃんに同意」

プル「わたしも」

龍音「そうだね、ネプテューヌさんとは、夫婦同然だもんね!!」

龍
ラビ
「ワ
ン!!」

穿て!! 烈穿!! 無限の拳閃

龍姫達はルウイー領のアタリー湿原でメタボスライヌと絶対神の下僕を、ブラン達の特訓がてら同時に行うのであった。

そんなにも時間も掛からずターゲットを発見できたので

「三人とも、あれから新しい技とかできた?」

「ギクツ!!」

「はあくそなんだから、ネプテューヌ達に先を越されるんだ」

「わたしは、忙しんだよ!!」

「ほう、ブランちゃん、後で、ボクとO・H・A・S・H・Iしようや」

「武龍、背中から、黒い物出てるよ」

ネプテューヌは徐にブラン達姉妹に、新しい術技を修得したのか尋ねたら、三人そろって、黙り込んで、ブランがいきなりキレ出して、武龍が後で顔を貸すように言って、背後から黒いオーラを出しながら、ターゲットの一体の絶対神の下僕に得物を構えて一斉に攻撃を繰り出して行ったのである。

やはりブラン達は全くレイヴンのもう一つの顔のテルカ・リュミレース帝国騎士団隊

長首席「シユヴァーン・オルトレイン」に扱かれても何も変わっていないかったのだった。

「蒼破刃!! そっちに行つたよくネプテューヌ」

「OK!! 魔神連牙斬!!」

「そうだ、この魔法なら、エステルお姉ちゃん直伝、光よ!! フォトン!!」

「ロムは、あれから、自分なりに、特訓してんだな、轟臥衝!!」

「次元斬!!」

「ぶくぶく!!」

記憶が戻り、自分の気持ちを押し殺す事がなくなったのか、三年前のマジック・ザ・ハードとの戦いの時の連携から、天界から試練をユーリと言う人間の男性と共に乗り越えたおかげなのか、すっかり女神版のあのコンビさながらの息の合った連係を繰り出し、ターゲットの絶対神の下僕を追い詰めて行っているネプテューヌとノワールに、ロムは以前、姉達を助けるために、エステルから教わった光属性の下級魔術で、サポートに周り、それを見たルドガーは感心しながら、絶対神の下僕の頭上から両手に逆手に持った小太刀で、串刺しにして、龍姫は、そのまま刀身に闘気を纏ませて虎牙破斬の要領で斬り上げて、斬り下ろしていたら、ラムがヤキモチなのはたまた龍姫達に嫉妬しているんかご機嫌が斜めだった。

そろそろいい頃合だったので、

「今回はわたし〜が〜決めるね〜、飛ばしていくよ〜」

「大丈夫なのか？」

「ルドガーさん、あれでも、流星の絆の一員ですよ」

プルルートの女神化しないでオーバーリミッツLv3を発動して、絶対神の下僕に突撃しに行ったのを見てルドガーは大丈夫なのか心配していたら、龍姫が大丈夫と答えて、援護に回ったのである。

「ぎゅう!!」

「遅い〜、虎牙破斬!!」

絶対神の下僕に、刀で数回攻撃して怯ませて、斬り上げて、斬り下ろして

「秋沙雨!!」

流星の絆の剣士共通で修得している連続で滅多刺した後、 \times に斬り上げて追撃して

「光翼天翔〜!!」

「プルルートの背中から光の翼が生えた!!」

「流星の絆のプルルートの固有奥義ですから」

「スゴイ〜」

刀を粒子化して光を纏って舞い上がり、到達地点で背中からプラネテューヌの女神らしく紫色の半透明の翼を出現させて攻撃を繰り返して、

「ユーリちゃんくのスバーストアーツく、腹括つてねく、天狼く滅牙く!!」
「なんでだろう、プルルートのから、すごいオーラが出ているんだが」

叩いた衝撃で怯ませて滅多斬りして斬り抜けて追撃していたプルルートを見たルドガーはプルルートのサドのオーラを感じていたのであった。

「リミット解除!!」 穿て!! 烈穿!! 無限のく拳閃!! 蒼空をく駆けよ!! ゼロ・ディゾルヴァー!! さようならく」

「スゴイ、得物を持たなくても、この威力なの(。ω。)ノ!!」

「プルルート、以前はぬいぐるみだったからね、ボクが古武術軽く教えてあげたら、刀を得物にしたり、リストとレガースでジュードみたいに格闘術で戦えるようになったんだ!! それとこの秘奥義は今の所しかプルルートしかできないオリジナル秘奥義だよ」

無数の紫色の閃光を飛ばして、自らも飛びあがって縦横無尽に空中で攻撃した後、真下からジュード顔負けの臥龍空破を叩き込む秘奥義で絶対神の下僕を光にして、葬ったのを見たネプテューヌとノワールは、プルルート凄さを身を持って知ったのだった。

閃く刃は勝利の証

絶対神の下僕をプルルートの秘奥義で止めをして、もう片方のターゲットのメタボスライヌを探して、道なりに奥へと進んでいった龍姫達と、同行者のルドガーであった。

「ヌラク!!」

「ワン!!」

「いつ見ても、デケエな!!」

「だが、油断は禁物だ!!」

「はい!!」

それほど時間も掛からないで、討伐対象のメタボスライヌを発見したのであった。

それもそのはず、ただスライヌが巨大化しただけなので、誰でも簡単に見つかるのである。

龍姫達は一斉に得物を実体化させて、自己流の型で構えて戦闘態勢に入ったのである。

「ヌラク!!」

「光と消えやがれ!! 極光蓮華!!」

「スゴイ、うずめは分身が出来るのか!!」

「ルドガーさん、あれは、万華鏡の原理で、分身しているように見せてるだけですよ。もちろん、分身にも攻撃判定が出て、うずめの間合いなら、攻撃範囲は無限ですよ」

「うずめに、負けてられないよ!! 魔神剣!!」

「古に伝わりし、浄化の炎・・・落ちろ!! エンシエントノヴァ!!」

うずめの光を利用した分身して、メタボスライヌを斬り刻んでいく様子を見たルドガーは、その場で二刀小太刀を持ったまま、呆気に取られていて、ノワールも負けじと、斬撃を放ち、ネプテューヌも、魔術を詠唱して、天空から、高熱のレーザー光線を落とすとして、爆風を熾してメタボスライヌを攻撃して行ったのである。

「わたしも・・・剣に秘められし七色の裁きを受けて・・・プリズムソード!!」

「ヌラッ!!」

「ナイスフォロー!!」

ロムも魔術を詠唱して、天空から七色に光る剣を降らさせてメタボスライヌを攻撃していた。

「今回は、俺が、決めさして、もらうぜ!! 調子に乗るんじゃねよ!!」

「うずめは、どんな秘奥義を見せてくるのか楽しみだな」

さっさと終わらせるため、うずめがオーバリーリミッツLv3を発動して、刀を納刀し

たままメタボスライヌに攻撃を仕掛けに行ったのである。

ルドガーは援護に入るついでに、うずめの秘奥義に興味津々であった。

「ヌラ姫ラララ!!」

「効かねえなつと!! 虎牙破斬!!」

メタボスライヌの攻撃を受け流したうずめは、連続で数回斬りつけて怯ませながら、斬り上げて、斬り下ろして

「邪霊一閃!!」

「スゴイ、格好いい!!」

「ロム、戦闘中だよ!!」

兜割りから右に、乙字を描くように斬り抜けて追撃して

「牙連光波刃!!」

「何!! 光属性の蒼破刃も修得済みなのか」

踏み込みながら滅多斬りして、メに光の斬撃を放って更に追い打ちを掛けたのを見たルドガーは感心していた。

「焼き尽くすぜ!! 天狼滅牙・飛炎!!」

「うずめもユーリのバーストアーツを修得しているのか」

叩いた衝撃で怯ませて刀身に炎を纏ませて滅多斬りして最後は斬り上げて

「終わらせてやるぜ!! 閃く刃は、勝利の証!! 白夜殲滅剣!!」

「うずめお姉ちゃん、お侍みたいで、格好いい(☆▽☆)」

「スゴイ、アーストがいたら、見惚れていたな」

うずめは水面に映った満月の光で刀の刀身を照らしながら抜刀して、メタボスライヌをその場で滅多斬りして、最後は斬り抜けて、納刀と同時に空間ごと満月を粉碎する秘奥義をお見舞いしたのだった。

それを見たロムは目を輝きながらうずめをテレビでやっていた時代劇の侍に見えて、ルドガーも見惚れていたのだった。

ザギ

依頼を無事に終えた頃、凜々の明星と一緒にレッツゴウアイランドにアイスフィンリルと言う大型の犬型の魔物を討伐しに、龍菜を筆頭とした女神達で来ていたのである。

「ウウウウウ〜!!」

「ワンコ、気合入ってるわね、おっさんもがんばっちゃうわよ!!」

「レイヴン、涎、垂れてるよ」

「今日は、わたしもいるんから、一緒に頑張ろうよ〜!!」

「頼りにしてるぜ!!」

それほど時間も掛からないで討伐対象のアイスフィンリルを見つけたラピードは唸りながら威嚇し、レイヴンが涎を出しながら、一斉に各自得物を構えたのであった。

「ワオオン!!!」

「これは戦い甲斐があるな!!」

「そうね」

「魔神剣!!」

「グラウンドダツシャー!!」

「おっさん、仕掛け終わったわよ!!」

「チユドーン!!」

流石、戦い慣れているだけあって、全員で攻撃を行ったので、そんなに時間も掛からないで討伐対象のアイスフィンリルを片付けたのであった。

そんな時だった、討伐対象のアイスフィンリルを光になって消えて逝ったのを見届けていたら、あの男が、海の方から現れたのである。

「見つけたぞ!! ユーリ・ローウエル!!」

「オイオイ、此処、テルカ・リュミレースじゃねえぞ!!」

「誰ですか?」

「なんだ、妹が増えてるじゃねえか、それでもオレは構わねええええ!! 何人でも掛かってきな!! でないと、上りつめれねえええからなあああ!!」

「いつから、わたしが、ユーリの妹になっているのかしら（*・・*）怒」

「そんなこと言ってる場合!! 来るよ!!」

そう、あの時、タルカロンからユーリが落とされた赤い髪に金のメツシユの暗殺者ザギが、二刀短刀を抜いて、黒髪長髪と言うだけで、龍菜達をユーリの妹と認識して、一行に襲ってきたのである。

一斉に戦う構えを取って、女神達は女神化をしないで、戦闘態勢に入ったのであった。

「久しぶりだなああ!! ユーリ・ローウエル!! 楽しもうじゃねか!!」

「こっちは、さつさと帰りたいんだがな」

「いい加減にしなさい!!」

「ちよつと、頭冷やそうか・・・絶空龍影刃!!」

「星龍、女神化してないのに、怖い・・・」

相変わらず、ザギは言動があつち方面に逝つていた上に、ちよこまかと攻撃を仕掛けて来たので、星龍がジト目になってしまい、ザギにお灸を据えて、それを見ていたカールは女神達を怒らしたらいけないと誓つたのであつた。

「勝負、あつたな!!」

「まだ、終わつちやいねええ!! そこを動くな!! じつとしてろ!!」

「いい加減に、しなさい!! 獅子戦吼!!」

「龍菜ちゃん、やるわね〜!!」

あまりにもしつこかつたので、とうとう、堪忍袋の緒が切れてしまった龍菜が、敢て、狼の鬨気でなく、黒い獅子の鬨気を叩き付けて、ザギを遥か彼方にぶつ飛ばしたのだつた。

予想がいの出来事に遭遇したが、無事に依頼を終えた一行は、報酬をもらって、下宿

している教会に戻ったのであった。

スキット：ザギ

ギア「誰なんですか？」

ユーリ「あいつはザギって言ってな、フレんとオレを間違えて、そのままオレに戦いを挑んで来た馬鹿だよ、龍姫達も数カ月前に一緒に旅してた時に、あいつと戦ったことがあるからな」

雷華「もう、いや!!」

ユニ「アタシも賛成です」

レイヴン「おっさんも」

龍菜「そうね、けど、この調子だと、また出てくるわよ」

星龍「そうだね・・・」

ラピード「ワン!!」

神劍

暗殺者ザギに襲われるというハプニングに見舞われたが、無事に撃退して、プラネテューヌ教会に戻ってきたのであった。

待機していたメンバーに報告を終え、翌日、残り猶予四日

今日はどうやら、セドナから話があるらしく、全員が会議室に集まっていたのであった。

「つまり、そこに、オルティナが使っていた剣、ラグネルとエタルドがあるんだね」

「はい、それと、マーニ・カティと言う、片刃の剣も一緒にあるんです、それを龍姫さん達の刀に鍛え治す必要があるんです。手に入れるパーティメンバーにこの水晶を持って行ってください。神劍のある場所まで導いてくれます、わたしが直々に行くのがいいのですが、生憎、復活したマジエコンヌ四天王と昨日、ユーリさん達を襲った暗殺者のことで、わたしが此処を離れるわけには行かなくなつたので」

「わりいな、エルの嬢ちゃんのこともあるんでな」

「ルドガー、みんなと一緒に行ってくれ!! エルのことは俺に任せろ」

「と言うことは、わたしに専用の得物が手に入るんだ!!」

「わかった、では、今から、ラグネル・エタルド・マーニ・カティを回収する班を編成する」

「わたくしが、組みわせてみました、みなさん、これを見てください」

「流石、ローエン、仕事が早いな」

どうやら、今回は天界から戦乙女オルティナが戦いで使ったとされる、ラグネル・エタルドの二振りの剣と精霊の剣と謳われる、マーニ・カティを回収して、日本刀に鍛え治すために集められていたのであった。

フレンは騎士団の任務などで昨日のうちにテルカ・リュミレースに帰ってしまったのである。

ローエンがいつの間にか、パーティーメンバーを編成してくれていたらしく、全員に編制したパーティーメンバーが書かれた紙を渡していったのである。

組み合わせは、龍姫・星龍・龍音・天龍・ネプテューヌ・ノワールで行くことになり、ほかのメンバーは各自、準備などを行うことになり、その場で解散となり、

「では、この水晶をお渡しします」

「ありがとう、行くよ!!」

「うん!!」

「わたしも行きたかったわ」

「アンタね・・・」

セドナから水晶を受け取った龍姫達は各自得物などの準備をして、教会を出発したのであった。

一緒に行きたかったらしく、ジュデイスは拗ねていたのであった。

こうして、龍姫達は神剣を回収にむかったのであった。

受け取った水晶から一筋の光が伸び、龍姫達は光が差す方へ歩みだしたのであった。

「此処って、忘却の遺跡だね」

「これ、転送の術式だよ」

「それじゃあ、行くよ!!」

「おう!!」

水晶が指示した方角にそのまま進んで行ったら、忘却の遺跡に辿り着いたので、そのまま中に潜入して、進んで行ったら、ちょうど行き止まりになっている部屋に辿りつき、そこに転移魔法陣があったのである。

その魔法陣に乗って龍姫達は転移して行つたのであった。

黒衣の断罪者VS冒険家

龍姫達が天界からの依頼で出かけている頃、ほかのメンバーは各自、得物などの確認を行ったり、自主的にギルドに行つて、依頼を行つたりと、それぞれができることをしていたのであつた。

「そつち、行つたのじゃ!!」

「任せろ!! 円閃牙!!」

「如月!!」

凜々の明星とパティは特訓がてら体を動かしかたつたのらしく、ちやうど教会に寄せられていた魔物退治の依頼を行つていたのであつた。

やはり、戦い慣れたいたので、それほど時間も掛からないで、終わらせて、下宿しているプラネテューヌ教会に戻ることにしたのであつたのだが、

「久しぶりだね、凜々の明星」

「確か、犯罪組織に故郷をたつた一人で防衛していた」

「ファルコムだよ、凜々の明星に、いや、ユーリ・ローウエルに、個人的に、頼みたいことがあるんだけど?」

「なんだ、オレに頼みたいことって」

「わたしと手合せをして欲しいだ、今じゃなくてもいい」

そこに以前犯罪組織に占拠されそうになっていた島を防衛していた赤い髪に青いジャツケトを着て、バイオリンケースを担いだ、女冒険家で自己流八葉一刀流を名乗っている女性、ファルコムが教会に戻る凛々の明星の前に現れて、ユーリにお手合せを依頼していたのであった。

戦うことが好きなユーリが断る訳がなく、

「いいぜ!! 闘技場に来な!!」

「ありがとう、闘技場で」

「ウチへの挑戦状なのかの?」

「わたしも戦いかったわ〜」

あつさり承諾して、闘技場で落ち合うことにして、街に戻ることにしたのである。

パティはユーリを盗られると思ひ込んで、ジユデイスはファルコムと余程戦いたかつたらしく、拗ねていたのであった。

教会に戻ってきた凛々の明星は休憩を挟んだ後、約束通りに闘技場に向かったのであった。

もちろん、アースト達も観戦するため一緒に同行しているのである。

「来たぜ!!」

「それじゃあ、お願いします!!」

「来な!!」

「凛々の明星、ユーリ・ローウエルVSファルコムのエキシビジョンマッチを開始します、それでは、スタート!!」

颯爽とフィールドに登場したユーリは得物のニバンボシを抜刀して、構えて、それに応えるためにファルコムもイストワールからもらったと言う片手剣を構えて、オペレーターかの無殺傷の結界が展開されて、試合開始のブザー音が鳴ったと同時に、双方が勢いよく床を蹴って、

「左利きの剣士と、お手合せできて光栄だね、聞いたよ、ブラックハート様に勝ったって、噂されてたから、もしかしたらってね!!」

「それは、光栄だね!! だからって、手加減出来ねえぜ!! 斬!! 成敗!!」

「うわあ!! こんな技、ゲームギョウ界じゃ見たことないよ!!」

「流石、ユーリさんですね」

「ゲームギョウ界じゃあ、虎牙破斬修得してるのって、龍姫達くらいだね」

ファルコムは初めて左利きの剣士のユーリと手合せが実現したのが余程うれしかったらしく、対するユーリは、いつの通りに、手合せを楽しんでおり、ファルコムはゲイ

ムギョウ界では見たいことない、斬り上げて、薙ぎ払って、殴打する虎牙破斬を見て、呆然としたながら、楽しんで行つたのであつた。

「そんじゃあ、飛ばしてきますか!!」

「何!! まさか、シエアエナジーを纏っているの!!」

「青年、飛ばして行くわね」

ユーリは勝負を決めるべく、オーバーリミッツLv3を発動させたのである。

それを見たファルコムはオーバーリミッツを発動したユーリが、シエアエナジーを纏っていると思ひ込んでいたのであつた。

「こつちから行くぜ!!」 円閃牙!! 円閃襲落!! 峻円華斬!! 腹括れえよ!! 天狼滅牙!!」

「こんな、剣を回転させる技、見たことない!!」

「容赦ないな、ユーリは」

「下手に手加減するのは相手に失礼だからな」

ユーリはお得意のジャグリングを駆使して、ニバンボシをバトンのように回転させて、攻撃を仕掛けに行つたのである。

やはりファルコムはゲームムギョウ界の剣技では見たことない動きだったので、防戦一方だつた。

「奥の手!! 月竜剣!!」

「余裕!!」

「そんな、わたしの奥の手を、こうもあっさりと、防ぐなんて!!」

ファルコムは奥の手の技を繰り出したのだが、ユーリにあっさり防がれてしまい、
「奥の手って言うのはな、これの事を差すんだぜ!! お終いにしようぜ!!」

「しまった!!」

そうあの龍姫を筆頭に修得している秘奥義で、バーストアーツから連携するのは勝利が決定したも同然だったことに失念していたファルコムだったがもう既に遅しだったのである。

「閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り裂き!! 仇名す者を微塵に砕く!! 決まった!! 漸毅狼影陣!!」

標的を中心として、死角から縦横無尽に斬りつける秘奥義で、最後は背後から一閃して、そのまま振り返ったユーリは、

「負けたよ!!」

「当然だ!! いつでもリベンジ受け付けるぜ!!」

手を差し伸べてお互いに握手を交わして、模擬戦に幕を下ろしたのであった。

オルティナ

ユーリがファルコムと模擬戦を繰り広げていた頃、龍姫達は忘却の遺跡に出現していた魔法陣で、とある場所に転移していたのである。

龍姫達は辺りを見渡したら、真つ暗な場所に出たようではばらくお互いの場所を確認していたのだ、そして、辺りが光に包まれて、初めてそこが、神殿の内部だったことを知った龍姫達なのであった。

「あれ!! ラグネルじゃない?」

「エタルドっぽい剣もあるよ」

「マーニ・カティもあるけど、もう一振りは、聞いてないよ」

龍姫達は近くに台座を発見したので、近付てみると、そこにセドナから教えられた三振りの剣が祀られていたのであった。

なぜか、四振り目の剣も一緒に祀られていたのである。

「龍の女神達よ、我の名は、オルティナ、この神剣にそれ相応の力量があるのか、試さしてもらうぞ」

「試すって、まさか」

「戦うに決まってるじゃない!!」

しばらくして、声が聞こえてきたと思ったら、龍姫達の目の前に古の英雄と謳われた、
が現れて、龍姫達の力量を試したために、あの二振りの剣、ラグネルとエタルドをそれぞれ
れ持ち、構えたのである。

龍姫達は一斉に抜刀して、試練に挑むのであった。

「魔神剣!!」

「何!! これはシエアエナジーではないのか、これは興味深い、はああ!!」

「余裕☒ 円閃牙!!」

「魔王炎撃波!!」

「虎牙破斬!!」

「三散華!!」

龍姫は、斬撃を放って牽制したら、オルティナは龍姫達が女神の力の源であったシエ
アではなく、魔力で、術技を繰り出していたことに興味を示して、斬りかかってきたの
だが、龍姫はいつ通りに、躲して、龍菜が、斬りつけて、反動で戻ってきたユーリの愛
刀だが、龍の絵が刻まれているニバンボシを左手でキャッチして、逆回転させて、それ
に合わせて天龍も炎を纏させた刀身で薙ぎ払って、龍音が、左で持っている小太刀で斬
り上げて、右に持っている天下五剣の一振り「童子切安綱」で斬り下ろして、ノワール

も、龍菜がプレゼントした防具でもある龍の頭を模った黒い手甲「ドラゴンファンク」で殴打して、お得意の蹴りを入れて、最後は左足で踵落としをお見舞いしたのである。

「久しぶりに、ボクが決める!! ボクの本気見てみる?」

「星龍、援護するよ!!」

「いいだろう、来い!! 黒龍の女神!!」

星龍がオーバリーリミッツLv3を発動して、勝負を決めるべく、オルティナに仕掛けに行つたのである。

龍姫達も援護することにしたのである。

この時、龍姫達は女神化を行っていたのであった。

「虎牙破斬!!」

「ぐ!!」

星龍はオルティナの双剣の間を縫って、斬り上げて、斬り下ろして、

「秋沙雨!!」

すかさずオルティナに反撃の隙を与えないように龍姫からもらった天下五剣「大典太恒次」から繰り出される、連続で、滅多刺しにする、突きを叩き込んで、メに斬り上げて

「獅吼爆炎陣!!」

「爆風だけ、普通の色なんだ」

黒い獅子の鬨気を叩き付けた後、そのままの勢いで、兜割りで追撃して、爆風を熾し、荒ぶる大地!! 光翔戦滅陣・震斬!!」

ロックブレイクの要領で岩を出現させて、そのまま斬りつけて、

「お終いにするよ!! はああああ!! 光竜滅牙槍!!」

「見事だ、龍の女神達」

「あれ、フレンさんの秘奥義」

「けど、ラストイションカラーの黒龍なんだけど、あれでも光属性だから」

刀身に光を溜めて思いつき突きだし、フレンとは違い、黒龍の女神らしく黒龍を数匹飛ばして攻撃する秘奥義を叩き込んで、見事オルティナに実力を認められたのであった。

精霊刀

龍姫達はオルティナの試練を無事に乗り越えてのであった。

そして

「そなたらに、この双剣とマーニ・カティ、対になる、剣、ソーニ・カティを授けよう」

「ありがとうございます」

「ワイイ!! わたしだけの武器になるんだ!!」

「ただ、マーニ・カティは使い手を選ぶ、そのため、鞘から抜いた者にしか、その剣を使うことが出来ぬ」

オルティナにそう言われた龍姫達は、早速、順番にマーニ・カティを抜刀することにしたのである。

「龍姫でも、抜けないなんて!!」

「ボクでも抜けなかったよ」

「最後はネプテューヌだよ」

「うん、わたしが抜けなかったら、後はユーリ達だね」

なんと、あの龍姫でもマーニ・カティを鞘から抜くことが出来なかったのである。

最後はネプテューヌだけとなってしまうので、もし抜けなかったら、ユーリ達に譲ることにしたのである。

「行くよ!! ねぶく!! 抜けたよ!! おまけに光ってるし、龍姫達の刀みたいにきれいだよ!!」

「どうやら、そなたを主に選んだようだな、それを抜いた者を見たのは、かれこれ、何十年も昔だ」

「けど、わたしには、もう二本も刀を持っているんだけど」

「ネプテューヌ、良く見たら、刀身が折れてるよ」

「ナンダツテく!! これ、龍姫がプレゼントしてくれた、方だよ!! 許して!! 龍姫!!」
「別に気にしなくたっていいよ」

ネプテューヌの二刀の内、龍姫があの時あげた刀の刀身が先ほどの戦いで真ん中ら真つ二つに折れてしまったようで、龍姫は気にしてないと答えて、ネプテューヌは改めて、夜空に輝く星のような白銀の刀身と鞘と十文字の鏢の拵えを持ち、何十年経った今でもその輝きを失っていない日本刀である、精霊刀「マーニ・カティ」の使い手に選ばれたのであった。

もちろん、ノワールが以前使っていた片刃の片手剣は龍姫に日本刀の知識を伝授してもらって、刀身を日本刀にして、鎧に部分に龍を刻み込んで、名を「不動正宗」と龍姫

が命名した、柄をそのまま代用している上に、鞘は藍色で、龍が描かれて、折れていないのであった。

「わたしも、折れてみたい」

「だったら、こつちの刀にしたら」

「そうするよ!!」

ノワールも、同じく、先ほど戦闘及び、ユーリと一緒に行った試練での戦いで、得物にしていた黒の拵えの無銘刀の刀身が真つ二つに折れてしまったので、マーニ・カティと遜色ない拵えでの打刀「ソール・カティ」を新たな得物にして、残りのラグネルは龍姫が日本刀に鍛え直すことにして、エタルドはまだ誰が使うか決めてないのである。

「では、元の世界に返してやる」

オルティナがそう言ったら、龍姫達の周りに魔法陣を展開して、龍姫達は光に包まれて、元のゲームギョウ界の忘却の遺跡に戻って行ったのであった。

名刀

無事に神剣を手に入れることが出来た龍姫達は、ゲイムギョウ界の忘却の遺跡に戻って来たので、その足で教会に戻ることにしたのであった。

「そうだ、龍姫、マーニ・カティじゃあ、刀らしくないから、名前付けてよ!!」
「わたしも、付けて欲しいな、星龍に」

「それじゃあ、マーニ・カティ改め、月光龍つてどう? マーニは、北歐神話で、月の女神の名前なんだよ」

「そうなんだ!! カッコイイ名前だね!! 今日から、マーニ・カティ改めて、月光龍だ!!」

「そうだね、ソール・カティ改め、天道龍つてどう? これも北歐神話で、太陽神の名前なんだけど、日本では、天照大御神とアメノホヒつて言う、神様が、太陽神つて言われてるんだよ」

「それ、かつこいいいから、このソール・カティは天道龍つて名前にするよ!!」

ネプテューヌとノワールは龍姫達の愛刀のような、刀に名を付けて欲しいと言ってきたので、龍姫がマーニ・カティを北歐神話で、月の神の名にちなんで、月光龍と付けて、

星龍がソール・カティを北歐神話で、太陽神の名が「ソール」と言う女神だったので、日本で天道と言う、神様が太陽神と崇められていたことを思いだして、天道龍と名を付けて上げたのであった。

もちろん、教会に到着次第、開発室で、日本刀に鍛え直すことになっているのである。

「そういえば、龍姫つてもう、二振りの刀持つてるけど、ラグネルはどうするの?」

「そうだったね、一応、ラグネルを日本刀に鍛え上げた後で考えるよ」

「そうなんだ!!」

教会に帰っている道中で、ネプテューヌは龍姫が大小合わせて四振りの日本刀を装備していることに気が付いて、神剣ラグネルをどうするのか、聞いたら、龍姫は、刀に鍛え直してから決めると答えたのであった。

それを聞いたネプテューヌは納得して、教会に歩みを進めたのである。

「ただいま!!」

「みなさん、お疲れさまでした、ほかの方々は各自で、いろいろ準備を行っています」

「ありがとう、セドナ」

「はい、どういたしまして」

「相棒!!」

「お姉ちゃん!!」

「ネプギア、ムゲン、シヨコラ、ただいま!!」

「お帰り!!」

教会に戻ってきた龍姫達をセドナが出迎えてくれて、ユーリ達は各自で休んでいることを告げられていたら、奥から、ネプギア達が出迎えてくれたのだったのであった。

「帰って早々、悪いけど、開発室借りていいかな?」

「遠慮はいりませんよ、龍姫さんも女神なんですから!!」

「一応、断つとかないとね」

龍姫はネプギアに教会にある開発室を貸して欲しいと頼んだら、遠慮せずに使つていいとネプギアに言われたので、龍姫は入手した神剣を持って、開発室に向かったの
であった。

たたら製鉄

今龍姫はプラネテューヌ教会の開発室で手に入れた神剣ラグネルを自分が扱いやすいように、日本刀に鍛え直していたのである。

何回も、熱したラグネルの刀身を折り返し、また折り返しをかれこれ、あれから十五回ほど行い、心鉄を組み合わせようとした所に

「へえ、龍姫達の刀って、そうやって、作ってるのね、おっさん達、手伝えることない？」
「それに、龍姫は女神だけど、一応、女なんだし、それに、ボクの方がハンマーの扱いに慣れてるから」

「けど、日本刀は、騎士が使っている剣より、打つの難しいから」

「つたく、おまえ、神剣、手に入れるのに、オルティナと一戦やっただらう？ 尚更、休んどけって」

「そうです、此処はユーリ達に任せて、龍姫は休んでください!!」

「わかったよ、日本刀製作工程は、この画面に表示されるから、失敗は許さないからね」
「わかったぜ、こりや、大仕事になりそうだな、カロール」

「別に構わないよ、けど、失敗は許させれないってことは覚えておいてね」

「了解!!」

龍姫達が得物にしている日本刀の製作工程に興味を持った凛々の明星のメンバーが開発室に見学しに来たのである。

男性陣は龍姫に休むように言って、龍姫は日本刀の製作工程を近くに映し出されたスクリーンに表示して、開発室を後にしたのである。

カロールが大槌で、ユーリが小槌で、レイヴンが火ばさみで挟んだ先ほど龍姫が心鉄と皮鉄と地鉄を包んで熱した鉄をお互い声を掛けながら交互に叩いて行ったのである。

そして、

「これが、龍姫達が使っているのと同じものなんだ」

「それにしても、龍姫ちゃんの刀は、目を見張るもんがあるわね」

「ああ、全くだ」

「ほう、それが龍姫達と同じ製法で打った刀か？」

「まるで、刃紋が龍のような、模様ですね」

「後は、龍姫に任せるしかないな、なんせ、柄とか、騎士の剣より、難しいらしいからな」
「その通りだ」

遂に、両刃長剣だったラグネルを見事、日本刀に鍛え直し終わったのである。

ゲームギョウ界の技術を使ったとはいえ、そこいらの業物にも遜色ない出来で、満月

のような金色の片刃に仕上がっており、ちゃんと龍姫達と同じ日本刀の刀身になっているのである。

そこに龍姫達と同じく日本刀を得物に使い、自身も刀に詳しい、アーストと、ローエンがやって来て、完成した、刀身を見て、高く評価していたのであった。

鞘などの細かい部分は、明日龍姫達に任せることにして、開発室を後にしたのであった。

復活したマジエコンヌ四天王から言い渡された猶予残り四日

次元断「絆龍」

翌朝、復活したマジエコンヌ四天王から言い渡された猶予三日、姫達とユーリ達とジュード達はいつもの通りに起床して、朝食を取って、龍姫は開発室に行き、日本刀に鍛えていた神剣ラグネルの仕上げに向かったのであった。

「ちゃんと、日本刀になってるね、鎬・刃紋・峰良しと、長さも、ちょうどいい長さだね、さてと、拵えを作ったら、エタルドだね」

「お姉ちゃん、手伝うよ!!」

「それじゃあ、企画書通りに、素材を揃えてくれるかな?」

「わかった!!」

いつも使っている刃渡り70cmで、全長が三尺二寸の本造りの刀身に、自分の名と、凛々の明星と言うギルド名を専用の道具で彫っていたら、ちょうどいいところで、真龍姫達がやってきたので、鞘・柄・鍔などの拵えを作るのを手伝ってもらったのである。

もちろん企画書を作成してあるので、それほど時間も掛からないで、

「出来た!! これがああ両刃剣だったラグネルなんだね」

「鍔のデザインも、柄巻の色も、下緒も、いい出来だよ!!」

「そうだ、お姉ちゃん、その刀、名前を新しく、付けたら」

「そうだね、それじゃあ・・・」

「絆龍ってどうです？」

「エステル!!」

「すいません、驚かせてしまって、次元さえ超えて「絆」を紡ぐ、「龍」の女神達の刀、龍姫達にピッタリだとおもったんですけど、どうです？」

「気に入ったよ、今日から、ラグネル改め、次元断「絆龍」にするよ!! ありがとう、エステル!!」

「喜んでもらってうれしいです!!」

柄には藍色の紐が巻かれており、四葉のクローバーをモチーフした十文字の形にした龍が刻み込まれた鍔と、金色の龍と猫の装飾が施された鞘に納められて、下緒は瑠璃色にした、神剣ラグネルを日本刀にした刀に、銘を彫ろうとしたらそこにエステルが開発室にやってきて、絆を紡ぐ龍の女神達という意味で、絆龍とエステルが命名するように龍姫に提案してきたので龍姫はその銘が気に入ったので、次元断「絆龍」と専用の道具で刀身に刻み込んでいったのであった。

「そうだ、龍空翔、まだ自分だけの、刀、持つてなかったよね、これ、あげるよ」

「ありがとう、お姉ちゃん!!」

「つまり、龍姫は、その絆龍を今日から、使うんですね!!」

「そうだよ」

龍姫は今まで使っていた柳生十兵衛が使っていた刀と同じ名の「三池典太」をまだ自分の愛刀を持っていなかった龍空翔に譲って、絆龍を新たにもう一振りの愛刀にしたのであった。

龍姫達は人海戦術でエタルドの日本刀に鍛え直すための企画書作成をするのであった。

そんな事、エタルドの日本刀に鍛え直すための企画書が完成したのだった。

日本刀の説明

龍姫は新たな愛刀「次元断絆龍」とエステルが凛々の明星同様に名付け親になってくれて、柳生十兵衛が使っていた愛刀の内の一振りをもチーフにした紫の拵えに、龍をあしらった小判型の黒色の鍔に、柄に巻かれている紐は白色にして、鞘には龍が描かれていた名刀「三池典太」をまだ愛刀を持っていなかった龍空翔に託したのであった。

今、エタルドを日本刀に鍛え直すための企画書作成に取り掛かっていたのであった。先ほどより時間も掛からなかったので、すぐに取りかかるのであった。

「これが、日本刀なんですか、綺麗です!!」

「エステル、ユーリがいつも使ってたのも、日本刀だよ、テルカ・リュミレースじゃ、珍しいからね」

「そういえば、そうでした」

「ごめんね、エステルまで、手伝ってもらって」

「何言ってるんですか、わたし達は、たとえ、種族が違えど、親友なんですから、遠慮はいりませんよ」

「そうだったね」

企画書の通りに素材を、アイテムパックから取り出して、たたら製鉄で、鍛錬して、心鉄を入れ、皮鉄で包み込んで、見事な、刃渡り70cmで、全長三尺二寸の刀身が完成したのであった。

親友とは言え、テルカ・リュミレースの副帝であるエステルに申し訳なそうに、謝罪したら、エステルから遠慮はいらないと言われてしまい、笑みをこぼして、拵えを製作することにしたのである。

「これが、龍姫達がいとも戦いで使っている「日本刀」って剣なのだな」

「はい、日本刀は、ボクが転生する前に居た世界で、太陽系第三惑星の「地球」に平安時代から江戸時代後期までいた「侍」が使っていた武器ですよ」

「日本刀、日本古来から伝わる製法で作られた刀剣類を指し、両刃剣は突き技に適している反面、斬ることに適しておらず、また、サーベルなどの片刃の剣は斬ることに適している反面、突き技に適してない、それを日本と言う国は、鍛冶師によってさまざまな製法で、その両方を合わせて、作ったものが、日本刀言う、または日本の外から見た場合の呼称である、扱い為、素人から玄人まで愛用されているです。龍姫達がわたしに話してくれたことですけど、どうです?」

「それで大体は日本刀の説明になってるよ」

「流石、エステルだな、いつの間に、龍姫達から聞いてたんだ?」

「秘密です」

「エステル、なんであたしに声掛けてくれなかったのよ!!」

「みんなでやっちゃいますか」

ちょうどそこに、ミラが開発室にやって来て、出来立ての日本刀の刀身を見て、見惚れていて、エステルが以前に龍姫達が日本刀の誕生秘話などを教えてもらったことを思い出して、ミラに日本刀の説明をしてあげていたら、ユーリ達とジュード達も開発室にやって来て、リタがエステルに声を掛けてもらえなかったことに怒っていたのだった。

星覇龍

今エタルドが日本刀に生まれ変わろうとしているのである。

そしてついに

「これが、龍姫達が居た世界で、存在した侍の刀か」

「如何にも、業物だな」

「そういえば、龍姫、この刀に名前つけて決めてるんです?」

「まだ決めてないよ」

「でしたら、星覇龍ってどうです? 「星」に導かれ、「覇龍」の刀」

「星覇龍か、いい名前だね、それに決めたよ、この刀は七星剣「星覇龍」だね」

完成したのである。

拵えは、柄を菖蒲色の紐を巻き、鐔は先ほどと同じく四葉のクローバーの形にした金色に二匹の龍が刻み込まれて、星空のような刀身に北斗七星を刻み込まれており、薄紫色の鞘にも龍があしらわれている、この刀にエステルが、星覇龍と名付けて、龍姫達も二つ返事で承諾して、七星剣「星覇龍」と名付けるのであった。

「この刀は龍愛翔が使いなよ!!」

「あれ？ユーリ達じゃあないの!!」

「それはおまえの刀だ、龍愛翔」

「そうだね、この刀は、わたしの、愛刀だ!!」

「エルも刀欲しい!!」

「エルにはまだ早い!!」

「ルドガーの言う通りだ」

龍姫は七星剣「星覇龍」を龍愛翔に渡そうとしたら、ほかの剣士達じゃないのかと聞いて来たので、ユーリが龍愛翔が使うように言つて、それを聞いた龍愛翔は快く承諾して、粒子化してしまったのだったのである。

ルドガーの相棒でもあるエルも刀を欲しがっていたので、まだ早いとルドガーが言ったのである。

スキット：龍姫達の愛刀

アースト「それにしても、龍姫達の愛刀はどれも、業物に匹敵する物ばかりだな」

龍姫「そうですか、いつも使っていますから、気にしてないんですけど」

エステル「その美しい刀身の刀で、バッサ!! バッサと、魔物を成敗する龍姫達は、みんなの憧れなんですよ」

エリーゼ「わたしも、剣士になればよかったです」

「今日も、魔物退治の依頼が、一件だけ寄せられているんですが、龍姫さん達が御受けになられるのなら、お願いしたいんですけど」

「別に構わないよ!! 行くよ!! 龍愛翔、龍空翔!!」

「龍姫達だけいい思いはさせねえぜ!!」

「もう、ユーリは」

「それこそが、ウチが惚れた理由じゃ」

「わたしも行くわ!!」

どうやら、教会にギルドから一件だけ魔物退治の依頼が寄せられていたので、龍姫・龍愛翔・龍空翔は新しく愛刀にした刀の実戦での投入がてら受けることにしたら、戦うと聞いてユーリとジユデイスが黙っておらず、一緒に同行すると聞かなかったので、一緒に、プラネテューヌ領にある、廃工場の魔物退治に意気揚々と回復アイテムなどの確認をして、ギルドで龍姫名義で受けて、向かったのであった。

再会？

龍姫達の新たな愛刀を試すべく、プラネテューヌ領近郊の廃工場の魔物退治の依頼に、ユーリとジユディスとルドガーと一緒に来ていたのであった。

「ユーリ、あれ!!」

「あいつら、何してんだよ!!」

「助けた方がいいのじゃない?」

「そうだね、行くよ!!」

「シユヴァーン隊の名に懸けて、退けん!!」

依頼されていた地点に差し掛かった所で、どう言うわけか、あのユーリの顔なじみでレイヴンことシユヴァーン・オルトレインの直属の部下である、ルブランとあの二人が魔物の群れに囲まれていたので、龍姫達は一斉に得物を構えて、助太刀に入ったのである。

「魔神剣!!」

「まったく、おまえら、ここで何やってんだ?」

「おまえは、ユーリ・ローウエル!!」

「ユーリ、知り合いなのか?」

「こいつは、犯罪の常習犯である!!」

「いつの話ですか!!」

再会して早々に、ユーリを犯罪者扱いし出したが、龍姫が突っ込みを入れて、魔物を片っ端から倒して行ったのであった。

そんなこんなで魔物退治の依頼を同時に片付けたのであった。

とりあえず、此処に居ても埒が開かなかったので、三人を保護して、ギルドで報酬を受け取って、教会に戻ろうとした時だったのである。

急に龍姫が立ち止まって、

「マスター!!」

「わかってる!!」

「待て!! 龍姫!!」

「お姉ちゃん!!」

どうやら、何か感じいたらしく、龍姫は、インテリジェントデバイスに入った反応があった方角に走って行ってしまったので、慌ててユーリと龍愛翔達も走ったが、人混みで見失ってしまったのであった。

ところ変わって反応があった方角の森バーチャルフォレストの秘密に場所では

「此処はどこでございやすか？」

紺色の髪を龍姫同様にポニーテールに結っており、瞳の色は狐色で左眼の下に泣き黒子があり、龍菜のバリアジャケットのように黒と青と白を基調にしたプロフェツサーユニットのような武装を装備し、龍音と同じくらいの年ごろの女の子がそこに現れたのである。

「真那・・・」

「あなたは、龍姫姉様!! 死んだと聞かされていたんですよ!! さあ、一緒に、兄様の所へ」

「ごめん、それは出来ない、だって、ボクは地球じゃ、生きれないから」

「ですが!!」

なんと、龍姫のことを姉さまと呼んだのである。

一緒に地球に帰還するように、龍姫に頼んできたが、当の龍姫本人は、地球に帰れないと断つたのであった。

そんな時だった

「グルルル〜!!」

「こんな時に、此処は真那が全力全壊でいやがります!!」

「ごめん、下がって、セットアップ!!」

「龍姫姉様、そのお姿は・・・」

「これが、今のわたしの姿なんだよ、ごめんね、虎牙破斬!!」

二人が話している所にバーチャルフォレストの危険種である犬型の大型の魔物フェリスヴォルフが現れたので、真那が龍姫に下がるように指示を出したのだが、龍姫は真那の秘密を知ってるようで、龍姫は悲しい表情をしながら、真那の目の前で女神化したのである。

龍姫の女神姿を見た真那はその場で自分の目を疑っていた、それもそのはず、自分が憧れていた黒髪ポニーテールから、一瞬で薄紫色のリボンでハイブリッドツイントールに、前髪に付けていた十字キーの髪飾りも左右対称に装着し、身長も175cmに伸びたのだから、驚くのも無理はなかったのである。

龍姫は一瞬で抜刀して、飛びあがりながら斬り上げて、斬り下ろして、フェリスヴォルフを一刀両断にしてフェリスヴォルフを光の粒子に変えたのであった。

「それじゃあ、龍姫姉様は、精霊になったんです?」

「違うよ、この世界、ゲームギョウ界の龍の紫の女神になったから」

「では、真那はどうすればいいのです」

「わたしと一緒に、来ない?」

「けど、真那には狂三を追うと言う使命が」

「もう、その必要はないと思う、真那、龍音達も一緒に、この次元に来てるんだよ」
「龍音が、わかりました、残りの十年を龍姫姉様に捧げます」

「ありがとう、けど、十年と言わず、何十年、何百年と生きないとね、これあげる」
「これは、なんですか？」

「これは、わたしが女神になる時に使った、女神デバイスだよ」

「姉さま、知っていたんですね、真那のこと」

「うん、あの時に、気づいてたんだ、一緒に、教会に帰ろう、真那に紹介したい人たちがいるんだ」

「はい、龍姫姉様!!」

真那は龍姫が精霊になったと勘違いしたので、龍姫が女神であると言うことを教えて、事なきを得て、真那と一緒に来ないかと誘ったら、狂三を追うと言いだしたので、龍姫が優しく咎めて、真那に龍音達も一緒にいることを告げたら、一緒に行くことを承諾して、武装を解除して、龍姫に忠誠を誓いだして、龍姫は真那に生きて欲しいと思い、ツクヨミから報酬でもらっていた菱形の紫紺色の女神デバイスを渡して、女神化を解いて、教会に戻ったのだった。

エーリエント

龍音と親友で、元DEM社のエーリエントで戦闘員で、龍姫幼馴染みでもある五河士道の実の妹で、少しだけの間だったが、ラタトクスの特務機関で過ごしたことがある、龍姫達の事を姉と慕っている淡い紺色の長髪を龍姫同様にポニーテールに結っている女の子の崇宮真那と再会を果たしてしまった龍姫は、黙ってパーティーから離れたので、説教覚悟でプラネテューヌ教会に戻ってきたのであった。

「ただいま、戻りました!!」

「龍姫、どこ行ってたんだよ!!」

「あのお、確か、龍姫姉様には兄様はいなかったはずですけど?」

「龍姫、その方は誰です? わたしは、エステリーゼ・シデス・ヒュラツセイんと申します、長いので、エステルって呼んでください!!」

「どうもご丁寧に、自分は、崇宮真那と申します!!」

「真那って言うんですね!! また同年代のお友達が出来るんですね!!」

「オレは、凛々の明星って言う、ギルドのユーリ・ローウエルだ、龍姫達の兄貴じゃねえからな」

「すいませんでした!!」

帰ってきた龍姫にユーリは怒っていたが、龍姫はみんな心配かけたことを謝罪していたら、後から真那がユーリを見て、龍姫の兄だと勘違いし出したので、すかさずユーリは自己紹介をして、龍姫の兄でないことを教えて、エステルが、本名を名乗って、真那に略称のエステルと呼ぶように言って、真那も自己紹介をしたのであった。

真那は後からほかのメンバーにも自己紹介をしたのであった。

「龍姫達って、転生する前って」

「ラタトスクって言う、対次元震又は空間震及び精霊との話し合いで解決する組織の特務エージェントだったんだ、いつか話さないと行けないと思っていました、今まで黙っていて、すいませんでした!!」

「お姉ちゃん、わたし達は気にしてないよ!! むしろ、お姉ちゃん達が特務エージェントだったからこそ、来れたんだから!!」

「真龍姫の言う通りだ、キミは気にすることはない!!」

「つたく、騎士団の奴らにも龍姫達を見習ってほしいぜ」

「貴様の方が見習え!!」

「これからも、わたしの親友でいてください!!」

「みんな、ありがとうございます!!」

龍姫達は転生する前、ラタトスクの次元空間震対策科の特務エージェントだったことを凛々の明星とジュード達に打ち明けたら、逆に、協力して欲しいと頼まれてしまったのであった。

スキット：ラタトスク

ユーリ「龍姫達が、エージェントだったとはな」

エステル「びっくりです」

レイヴン「おっさんもよ、それより龍姫ちゃん、ラタトスクって、具体的にどんなところ？」

龍姫「早い話が、精霊と話し合いで平和的に解決する組織ですね、ボクが転生する前にやっていた仕事は、DEM社からの離反者などの保護活動をしてました」

真那「真那も、以前DEM社所属のエージェントだったです」

真龍姫「お姉ちゃん達は、大変だったんだね」

龍の姫の女神降臨

龍姫達が転生する前、ラタトスクと言う組織で、特務エージェントとして、精霊との平和的、対話をすることをモットーに、空間震と次元震の被害状況の報告及び、幼馴染みの五河士道の精霊との説得の場を整え、または、避難誘導などを行っていたことを凛々の明星とジュード達に明かしたのであった。

「つまり、士道は、精霊の力を封じることが出来るのか」

「しかも、よりによって」

「精霊の唇を」

「奪うなんて」

「もちろん、女精霊だけですけどね」

「当たり前だ!!」

龍姫から士道が精霊の唇を奪うことで力を封じて、精霊の力を使用することが可能であることも明かしたのであった。

同じく精霊である、ミラとミュゼは驚いていたのは言うまでもなかったのであった。

そして、真那の名字が違うことが気になったいたエステルと真龍姫達に真那から自分

が幼少期にDEM社に引き取られた際に、実の家族と離れ離れになったことを明かして、なぜ龍姫達が転生する羽目になったことは真龍姫達と凛々の明星は知っていたのだが、詳しく説明することにしたのである。

「龍姫は避難誘導をしていた時に、たまたま、龍音を狙って、自動車が信号無視して、突っ込んで来て、龍音を庇って」

「うん、後は、以前、皆に話した通りだよ」

「けど、龍音は、龍姫が庇ったけど、運悪く、植物状態に、陥って、そのまま、ゲームギョウ界に転生された」

「うん」

「真那が離反しなければ、龍姫姉様達が死ぬことがなかったんです!!」

「なるほどな、つまり、反ラタトスクのDEM社の仕事ってことになるのね」

「真那さん、自分で抱え込まないで下さい、今は、わたし達が居ますから」

「その通りです、この戦いが終わったら、龍姫達の次元のゲームギョウ界に亡命申請して」

「はい、プラネテューヌ教会で、龍姫姉様の専属のエージェントになります、兄様には、会えないですけど」

「それと、あなた、DEM社で、人体改造されているわね!!」

「どうして、それを!!」

「ジユデイスはクリティア族特有のナギークって言う機関で、物質の流れや、思考を読むことが出来るんだ」

「それじゃあ、真那ちゃん、もう寿命が」

「はい、長くて、約十年しか生きられません、いつでも、死ぬ覚悟は出来ています!!」

やはりクリティア族のナギークを使えるジユデイスには龍姫達が隠していても、真那が人体改造されており、レイヴンに寿命がないことを見抜かれてしまったので、真那はエージェントとして、ミュゼと同じ声の精霊の時崎狂三を刺し違えて、死ぬ覚悟があることを、みんなの前で、宣言してしまったのであった。

以前、エステルが、フェローの前で死んでもいいと言ったことを思いだしてしまったユーリは真那に歩み寄って、

「精霊と刺し違えて死ぬ覚悟はいつでも出来てますって? ふざけてんのか?」

「・・・すいませんでした」

「二度と言うなよ」

「真那が、死んじやったら、士道達が悲しむよ」

「そうですね」

「ジユード先生、治せないんですか?」

「ごめん、ボクでも人体実験の治療は出来ないんだ」

「一つだけ、方法があるにはあるんだけど」

「精霊でも治せないなら、真那を、女神になってもらえばいいのよ!!」

「死んで転生するのを待つか、今この場で、女神になるか、決めるのは、真那だ」

「真那が、決める・・・」

叱咤して、真那はもう二度と死ぬと言わないことを誓い、ネプギア達が医者である、ジュードに治せないかと、聞いたら、もう精霊と戦うために人体実験をされた肉体は、ミラとミュゼを含んだ、十四体の精霊でも治せないと言い、龍姫が一つだけ方法があると、言ったら、ジューディスが代弁して、ユーリが真那に自分が決めるように言って、真那はしばらく考えた後、

「真那は、生きたい、まだ人として、そして兄様に、もう一度、会いたいです、だから、女神になります!!」

「真那なら、女神になることを選ぶと思ってたよ、女神デバイスを強く握って、自分の女神の姿を想像するんだよ!!」

「おっさん達は、女神の味方だからね」

「流石、シユヴァーン隊長!!」

「隊長、言うな!! 俺様はただのレイヴンよ」

「失礼しました!! レイヴン殿!!」

女神になって不老長寿の道を選択して、龍姫から女神デバイスの認証の仕方を教わっていた側で、レイヴンと愉快なルブラン達とのじゃれ合いが終了して、

「おい、嬢ちゃん」

「いきなり、ライトアップしちゃってマースけど」

「止めなくていいのか?」

「龍姫姉様、怖い」

「大丈夫だよ」

「はい!! 夜刀神十香・・・折紙姉様・・・琴里・・・龍姫姉様の女神形態!!」

ドン達は初めて目にする女神誕生を見て、目が鳩が豆鉄砲を食ったようになっていたのだが、真那の脳裏に、自分があったことのある人物が、映り、そして、光が収まっ
て行き、

「これが、真那の女神の姿なんだ!!」

「やっぱり、女神になると、体が成長して、性格が別の意味で、180度変わるのね」

「真那ちゃん、今の、胸のサイズ、教えて、おっさんの胸に飛び込んでおいで!!」

「ついでにこのアルヴィンにも・・・」

「触っていいのは、お兄ちゃんと女の人だけ!! 龍姫お姉ちゃん直伝!! 獅子戦吼!!」

レイヴンよアルヴイン「あqwse d r f t g yふじこ!! (。D。)ノ〜!!」
 「シユヴァーン隊長!!」

「それじゃあ、早速、お姉ちゃん達と良いことしようや、(*・・*)〜!!」
 「武龍と真龍姫達は、女版レイヴンだよ」

身長が173cmで、胸が以前のノワールほどしかなかったのだが、女神に覚醒したおかげで、ジュディス・ミラ・ミュゼなどの豊満な胸を持つ並居る人物を抑えて、龍姫が女神化した大きさまで成長して、髪が龍姫達同様にリボンでツインテールの紺色のメツシユが前髪に入った銀と夕日のような色で、毛先だけ、紫色に結っていたのだった。

武装はスカート丈が膝まである紫を基調にしたドレス型のバリアジャケットで、大きくなった胸の隆起を薄紫と黒と水色の胴丸に、頭に猫耳と龍の兜が合体したカチューシャと言う、重装備に見えるが、エステルが装備している軽鎧より軽く、防御力も優れていて、翼がなくなっているが、空も飛ぶこと可能である。

武器はまだ決めてなかったの、丸腰の状態、露出は全く失くしているのである。

口調が、先ほどの砕けた口調とエステルのような丁寧語から、うずめのような、はちやつけた口調になっていたが、女神デバイスから、龍姫達の修得している術技を読み取って、その場で修得して、セクハラを本能のまま実行した二人に青紫色の獅子の鬨気を素手で叩き込んで、ぶっ飛ばして気絶させたのであった。

「真那、女神での名前を覚えてよ!!」

「だったら、プリンセスドラゴン!!」

「真那らしいですね」

「城でエステルがいつも着てる服に似てるしな」

「そうですね、それにしても、かわいいです」

「龍姫を、英語に直しただけだね」

龍姫は真那に女神としての名を尋ねたら龍姫にあやかっ
て、龍姫を英語に直してプリンセスドラゴンと名乗ること
になったのであった。

真那、成長する

新たな女神が誕生したのを見届けた一行は、真那が女神の証である、ハートを名乗ってなかつたので、聞いて見ると、自分がまだ、龍音達を差し置いて、守護女神同様の名を持つわけにはいかないと言うので、しばらくは龍音達のパーティーメンバーに所属する自由女神と言うことで、手を討ったのであった。

元の姿に戻ったのだが、女神になったおかげで、DEM社に施された人体改造で得た、対精霊の能力が無くなったのと、女神の不老長寿を得たことによって、もう寿命で死ぬことが出来なくなったのだが、

「真那ちゃん!! 胸と背が!!」

「真那ちゃん!! おっさん達の胸に飛び込んでおいで!!」

「このエロコンビ!! ファイアーボール!!」

「ティポ戦吼!!」

レイヴン&アルヴィン「あqwse drft gyふじこ!!」

「二人とも、いい加減に学習しなよ・・・」

「確か、女神は、成長しないはずでは!!」

「多分、ボクたちもなんだけど、女神になって、リンカーコアが形成された所為で、成長しちゃうんだよ」

「龍姫姉様」

「真那、このインナーウェアを着れば、大丈夫だからね」

「後、人体改造が施されていたのだがなくなっただな」

身長が、龍音と天龍と同じくらいまで伸びて、胸も、同じくらいの大きさになってしまったので、白いワンピースに、水色パーカを着ていたが、やはり、綺麗な形に象られていたので、レイヴン&アルヴィンがセクハラを実行しようとして、リタとティポが制裁をして、龍音が、アイテムパックから、インナーなどの衣類を取り出して、男性陣は、外で待機してもらったのである。

「申し訳、ありませんでした!!」

「お気になさらないでください」

「はい!!」

「真那、もう、戦いで自分の存在意義を示すのはやめてね、真那は、ボクたちの仲間なんだから」

「狂三は精霊と言ったな、安心しろ、精霊の王である、わたしが責任を持って、探してやる」

「ありがとうございます」

龍姫達が着ている、戦闘服の水色に着替え終わったので、外で待っていた男性陣に入って来てもらい、龍姫は、戦いでしか、自分を表現出来ない、真那に、普通の女の子として、スカウトして、保護したルブラン達に話を聞くことにしたのであった。

「なるほどね、でかした!!」

「ルブラン、感激しました!!」

「ヘラクレスと帝国で禁止された、魔導器の開発に」

「プラネテューヌとラストেশヨンの技術者が関わっていたなんて」

「ルウィーとリンボックスの女神は、利用されただけ」

「発展国である、プラネテューヌを完全に、乗っ取るために、選抜隊に」

「わたしだけ、候補生から、選ばれた」

「でなきや、あんな大きいの、たった数年で、出来るわけないよ!!」

「海凶の爪と」

「ウチの海精の牙にしか、テルカ・リュミレースでは、銃の知識を得られんのじゃ」

「youの言う通りです!! わたしは、アレクセイに教えてませくん」

なんと、以前龍姫達がユーリ達と乗り込んだテルカ・リュミレースの移動要塞ヘラクレスの建造にプラネテューヌとラストেশヨンの技術者が関わっていたことを、教えら

れたのであつた。

スキット：真那

龍姫「真那、女神は、確かに戦うことがあるけど、人なんだよ!! だから、もう使命に囚われないでね」

真那「はい、真那はもう、ヒトとして、生きていくことを、この場を持って、誓います」

ユーリ「気楽に行こうぜ!!」

レイヴン「そうよ」

エステル「そうですよ、わたし達は、もう友達なんですから、敬語はいりませんよ」

龍音「昔みたいに、遊ぼうよ、この世界でのお仕事が終わったら」

天龍「勇龍お姉ちゃん達も会いたがってたからね」

翔龍「わたくしが、ゲームを教えて差し上げますわ!!」

エリーゼ「そうです!!」

真那「ありがとう、みんな」

真那、侍になる

テルカ・リュミレースで禁止されていた魔導器の開発にこの次元のゲームギョウ界のプラネテューヌとラスティションの技術者が関わっていたことをルブラン達から聞かされたのであった。

ルブラン達がどうやってこの次元に来た方法は、たまたま、下町の見回りを行っていたらしく、下町の住人から、路地裏に空間の歪が起きていたらしく、誤って、吸い込まれたらしく、日ごろの行いが良かったのか、はたまた、三人の悪運が強かったのか、龍姫達がいる次元に飛ばされられて、魔物の群れに囲まれていた所に、龍姫達が教会に寄せられた魔物退治の依頼にやって来て、今に至るのである。

初めて、テルカ・リュミレースの騎士を見た真那は、本物の鎧兜を見て、はしゃいでいたが、すぐに素に戻って、顔を赤くしたのは言うまでなかったものであった。

龍姫はルブラン達をテルカ・リュミレースの帝都ザーフィアス城に送り届けて、戻ってきたのであった。

閑話休題

「真那、武器はどうする？ 一応、日本刀と槍とかあるけど」

「龍姫姉様、何言ってるんですか、ユニットに備え付けられていますけど」

「だから、今まで使っていたユニットおよび、武器が、女神になっちゃったから、使えないんだよ」

「それじゃあ、真那は、みなさんの足手纏いじゃないですか」

「ユニット、使つてるとき、どんな武器使ってたんだよ？」

「剣と、ミサイルなどですね」

「剣は兎も角、ミサイルはちよつと」

「なんだ、剣術出来るなら、龍姫達かユーリかアーストに教わつたらどうかしら？」

「そう言われたら、龍姫姉様達は、戦場の舞い降りた、龍姫、りゅうひめまたは、龍神と恐れられていましたの、すっかり忘れていました」

「今じゃ、本物の龍神だな」

「なので、龍姫姉様、日本刀で、サポートします!!」

「それじゃあ、どの日本刀がいい？」

龍姫は、真那が、今まで使っていた武器が、女神になったことよって、人体改造の効果がなくなくなったので、使用不可になったことを、真那に教えたら、足手纏いだと、一人で抱え込んでしまったのだが、幸いにも、龍姫達を筆頭に、あらゆる流派の剣士が集まっていたので、真那は、転生する前、戦闘員じゃなかったが、一度、日本刀を抜刀し

たら、精霊でも、歯が断たないくらいに戦闘力があつたことと、龍姫達の二つ名を思いだして、龍姫が、予備で持っていた、テルカ・リユミレースと、自分が住んでいるゲイムギョウ界の日本刀を、アイテムパックから取り出して、並べて見せたら、

「この日本刀にします」

龍姫達の刀と同じ刃渡り72cmで、紺色の拵えに、二匹の龍が描かれた、鰐の日本刀で、龍姫達のオリジナルで、刀身に、龍が彫つてある、日本刀を選んだのであつた。

大豆料理

真那が龍姫から、龍が彫られた、刀をもらって、粒子化の手ほどきを受けて、龍姫達は昼食を取ることにしたのであった。

「久しぶりに、真那と料理作るんなんで」

「この真那、体まで治してもらっただけでなく、女神に、してもらって、不老長寿を授けてもらったんですから、感激です（；|；）／＼／＼」

「ったく、大げさだな、龍姫は、ほっとけない病だからな」

「ユーリ、ほっとけない病って前から言ってるけど、どんな病気だ？」

「簡単に、説明しますと、困ってる人を見過ごせない、病気です」

「それ、お人好しって、言わないか、それと、俺のことはルドガーって呼んでくれ、さんは付けなくていいから」

「まあ、龍姫は、真龍姫達の姉さんと秘書だからな、それに、一応、ジュード達と同年だもんな」

「そーいや、そうだったな」

「ユーリに、敬語辞めさせられるまで、敬語だったからね、真龍姫達が、敬語、苦手なの

で」

料理が得意な、龍姫・ユーリ・ルドガーは台所で、昼食を、全員分作っていたら、真那が手伝いに来てくれたの一緒に、作ることにしたのだった。

ルドガーは、ユーリがいつも、口に行っているほっとけない病とは何かと、質問したので、龍姫が簡単に説明したら、お人好しと言って、ルドガーは、自分も、ユーリと同じく、呼び捨てで構わないと言ったのであった。

そんなこんなで、昼食が出来たので、みんなの所へ運ぶことにしたのであった。

「これが、大豆で作ったパンか、うまい!!」

「ミラ、いくらなんでも、一斤は食べすぎよ!!」

「しかし、龍姫さんは、大豆などで、料理を作るのが、お上手ですね、このローエン、感激しましたよ」

「おっさん達は、この野菜を使った、シフォンケーキは、おっさんでも、いけるわよ、青年なんて、バクバク食べてるけど」

「わりいかよ!!」

「ユーリも、甘い物に目がないんですから」

「エルでも、トマトのシフォンケーキ、食べれる」

「何!! 龍姫!! 作り方、教えてくれ!!」

「ルドガーさん、落ち着いてください!!」

並べられたメニユーを見た一同は、龍姫達の料理のレパートリーの多さに驚いていたのであった。

ミラは、一目散に、いただきますと言って、龍姫が焼いた、大豆の食パンをあつという間に一斤、ペろりと平らげてしまったので、ミュゼが注意して、甘い物が苦手なレイヴンは龍姫と真那が焼き上げた、ほうれん草と人参と小松菜とカボチャとピーマンの色のどりのシフォンケーキを、高く評価して、甘いに目がないユーリは、目も暮れず、シフォンケーキに、生クリームをたっぷり乗せて食べていたら、レイヴンがからかい出して、トマトが嫌いなエルにも、トマトを使ったシフォンケーキは大絶賛だったので、ルドガーが龍姫に、レシピを教えて欲しいと、言ってきたのだった。

全ての粉もんは、殆どが大豆で作ったものだった。

暗殺者ザギ、再び

真那をメンバーに入って初めての昼食のメニューは、異世界のジュード達にも好評だったのであった。

念の為、いつでも戦闘出来るように、待機をしていたら、セドナに、職員から、ある報告が入ったのだった。

「大変です!!」 ルウィーで、大暴れしてる、双剣を持った、暗殺者が、今、ブランさんと交戦中と言う、連絡が入りましたので、至急、わたしと一緒に、ついて来てくれる人を選抜してください!!」

「どうやら、ユーリのこと、まだ根に持ってるみたいだよ」

「ユーリお兄ちゃん!! お姉ちゃん助けて・・・(; | ;) / ~ ~ ~」

「泣くな、おまえの姉ちゃん、助けてやるからな、つたく、ゲームギョウ界まで、追っつくつるなよな!!」

「此処は、龍姫、真那、ユーリ、ジュデイス、ジュード、アルヴィン、ルドガーで、セドナと俺共に、ルウィーに乗り込む、準備は出来てるな?」

「はい、いつでも、行けます!!」

「死ぬんじやねえぞ〜!!」

なんと、今度はルウイーでザギが大暴れしているようで、ブランと一騎打ちをしていると龍姫達にセドナとロムとラムが協力を求めてきたので、真那の実戦経験を積まずため、アーストは真那を含めた、九人でブランに助太刀を決行することにしたのであった。やはり、ほつとけない病の真龍姫達と美龍飛達から、代表で、龍空翔と姫龍紗とネプギアも同行することになり、ネプギアがアイテムパックからカード化した聖龍皇シャイニング・セイバーを召喚してルウイーに向かったのであった。

到着したので、地上に降り立った龍姫はすぐさまブランが交戦してる現場に急行していたら、突然、国内無線が入って、

「ユーリ・ローウエル!! 今すぐ、来い!! 出ないと、のぼり詰めれないからなああああ!!」

「おたく、相当、気に入られてるみたいよ」

「しつこいと嫌われるぞ!!」

なんとザギが国内無線をハイジャックして、ユーリを呼ぶために、ルウイー中にユーリの名が響いたので、一行は国内無線がある教会に向かったのであった。

「遅かったなああ!! さあはじめようぜ!! ユーリイイイ!!」

「ブラン!! しつかりして!!」

「これは、酷い、両足骨折に、左腕の複雑骨折が見受けられます」

「ジュード!! おまえは、ブランの治療に、入れ!!」

「わかった!!」

「ジュード先生!! 真那が、お手伝います!! エステル姉様、直伝!! 彼の者を死に淵より呼び戻せ!! レイズレッドです!!」

「ありがとう、ぐっ!!」

「ダメだよ!! まだ安静しないと!!」

ザギは教会の屋上で、龍姫達が来るのを待ち構えており、そこには、血まみれにされ、骨を折られた無残な姿にされたブランが気を失って横たわっていたのである。

アーストはすぐさま、医者でもある、ジュードにブランに応急処置を指示して、真那と一緒に応急処置を行うことにしたのである。

真那が、エステルから治療術の手ほどきをいつの間にか受けていたように、戦場でエージェントとして戦っていたこともあって、慣れた様子で、詠唱して、治療術を発動させて、手当を施したのだが、まだブランは戦線に立つことが出来なかったのである。

斬り裂け!!

医者でもある、ジュードに従って、真那は、エステルから教わった治癒術を発動させて、ブランを回復させて、安全な場所に避難している間、暗殺者ザギを残りのパーティメンバーで相手をしていたのだった。

「久しぶりだなあああ!! こうして、楽しむのはああ!!」

「犯罪神の野郎、余計な奴、生き返らせやがって!!」

「ほっといたら、余計、被害が拡大するからな」

「虎牙破斬!!」

「龍姫達が一緒だから、治癒術での回復があるけど、油断大敵だよ」

やっぱり、ザギは左腕の魔導器が無くても、戦闘力は、以前戦ったことのある龍姫とユーリは、呆れて、ルドガーは、こんな奴がいることが信じられないと言う、表情を浮かべて、巧みに、双剣・鎧・二丁拳銃をシフトチェンジしながら、アーストはいつものように、龍姫達が使っている日本刀より長い大太刀で、アルヴィンは大剣とハンドガンで攻撃を仕掛けていたのであった。

「上がって来たあああ!!」

「いい加減にしてよ!! 魔神剣!!」

「いい攻撃だ、まだ、楽しもうぜえええ!!」

「キリがないよ!!」

今だにザギは退こうとせず、龍姫達の術技を喰らっていても、何度も立ちはだかってきたのであった。

そろそろ、ケリを着けようとしたら、ちょうど、そこに真那が負傷したブランをジュードに任せて、龍姫達に合流して、

「なんだ、もう援軍が来たのかよ、いいぜ!! こうでないと、のぼり詰めれないからなあああ!!」

「これ以上、龍姫姉様達のお手を煩わせるわけには、行きませんから!! ぶつつけですけど、真那の全力全壊です!!」

「普通にしゃべれるようになったんだな」

「人体改造の影響の副作用が無くなったおかげだろう」

なんと、その場で単独で、オーバーリミッツLv3を発動させて、龍姫からもらった同じ長さの日本刀を左腰の剣帯から抜刀して、構えたのである。

「楽しめそうだなああ!!」

「龍姫姉様、直伝!! 虎牙破斬!!」

真那は早速、龍姫が、フェンリスヴォルフを一刀両断した技である、斬り上げて、斬り下ろす、特技「虎牙破斬」を繰り出して、

「閃空裂破!!」

「アルヴィンのより、カツコイイから、こっちにしたらんだね」

「俺が、下手くそってことか!!」

「龍姫達の技は、男女供、魅了されるのだからな」

アルヴィンが繰り出している型ではなく、回転斬りで巻き上げて、そのまま兜割りで追撃する型だったので、アーストは、龍姫達の剣舞を高く評価していたら、アルヴィンがいじけていたのだった。

「獅吼爆炎陣!!」

「いつ見ても、この技は、スゲえよな」

「単独で、出来るのだからな」

紅緋・紫・黒の三色の獅子の鬨気を左の掌底で叩きつけて、そのまま上段に構えて、刀を叩きつけて、爆風を熾す奥義を見た、ユーリとルドガーは、見惚れていて、

「ユーリさん、直伝!! 水よ立ち昇れ!! 天狼滅牙・水蓮!!」

「バーストアーツは、スゴイ」

地面に刀を突き刺して、水の壁で追撃して、

「これで終わりです!! 斬り裂け!! 天駆!! 澄想刃!!」
「へえ、あれが真那の初めての秘奥義なんだ」

その場でザギを、回転しながら連続で斬りつけて、最後は、飛びあがって、魔神連牙斬をお見舞いする秘奥義でめたのである。

リーンボックスからの

真那に秘奥義をお見舞いされたザギはと言うと、まだ、諦めておらず、今だに、言動が酷い状態で、龍姫達の前に立っていたのであった。

「上がってきたっあああゝ!!」

「しつこいと嫌われるよ!! 行くよ!! 真那!!」

「はい!! 龍姫姉様!!」

龍姫&真那「獅子戦吼!!」

「もう二度と出てくんない!!」

仕方なく、龍姫は、真那に指示を出して、二人同時に色違いの獅子の鬨気を叩きつけて、遙か彼方に、ザギをぶっ飛ばしたのであった。

「お姉ちゃんゝ!!」

「大丈夫だよ、今、手術が終わって、寝ているから、そっとしておいてね」

「うん、わかった・・・」

ザギを龍姫達が追っ払った時、ちようど、ルウィーの病院に緊急搬送されたブランの手術が終わったようで、ミナとロムとラムに、一緒に、付き添っていたジュードから、手

術が成功したことを告げられて、そのまま、お辞儀をして、ブランの病室に向かったのであった。

その後、龍姫達と合流して、プラネテューヌに戻ることにしたのだった。

そして翌日、復活したマジエコンヌ四天王から言い渡された猶予残り二日に迫っていたのであった。

ブランが前線の復帰が間に合わない状態なのは、ザギに負わされた傷が、シエアエナジーで治癒できないようで、後は本人の自己治癒力で治すしかないと言う、ことだったのである。

閑話休題

「実は、こんな時に不謹慎ですが、リーンボックスから、今日、行われる、ライブに、龍姫さん達に、ご出演の依頼が、着てますけど、どうします?」

「わかったよ、夜空を駆ける流星の絆の名に懸けて受けてあげるよ」

「そうだな」

「エルも、ライブに行きたい!!」

「どうやら、ベール様から、VIP席に、皆様をご招待することでしたので」

「なら、自分も同行させてください」

「フレン!! 仮にも、騎士団長が、此処に来て大丈夫なのかよ?」

「実は、ヨーデル様から、凜々の明星に同行するように、言われてね」

龍姫達の下に、ベールから、今日、行われる、5 p b. のライブに、出演してほしいと、流星の絆に依頼をしてきたので、龍姫は、承諾して、リンボックスに行く準備をしていたら、ルドガーとエルがやってきて、ゲームギョウ界のライブを見たいとエルがいつていたら、ベールが、VIP席に招待してくれると言うことをセドナが此処に居るメンバーに教えたら、フレンが、到着して、一緒に行くことになったのであった。

ドン達も、ライブとは何かというので、一緒にリンボックスに行くことになったので、今回は、ネプテューヌが、カード化したアルティメット・ジークヴルム・ノヴァを召喚して、向かったのであった。

ライブ、前篇

復活したマジエコンヌ四天王から言い渡された猶予が残り二日

龍姫達は、リーンボックスで行われる、犯罪撲滅運動の一環の5pb.のライブに、出演してほしいと言う、依頼を、受けて、全員が、リーンボックス教会に集まっていたのであった。

「ベールちゃん〜!!」

「レイヴンさんは相変わらず、元気なんですねの」

「わたくし、アルフレド・ヴィント・スヴェンです、気軽に、アルヴィンとお呼びください」

「これはご丁寧に」

教会に入るなり、スケベ丸出しのレイヴン&アルヴィンは、下心丸出しで、ベールに挨拶を交わして、その様子を見ていた、ユーリ達とジュード達は、呆れていたの言うまでなかった。

「自分は、元DEM社エージェントにして、現在、紫龍の女神直属委託エージェント、崇宮真那と申します」

「わたくしは、此処、リーンボックスの女神、グリーンハートことベールですわ、気軽に、タメ口でお願いしますわ」

「そうだよ、真那、もう女神なったんだから、気を使うことはないんだよ」

「そうでした、改めて、よろしく、ベール」

「え、あなたも、龍姫達のように、女神になったんですの!!。(。旦。)ノ」

「ユーリ、彼女も、龍姫様のように」

「詳しいことは、ライブって奴が終わったら、話してやるよ」

真那は初めて、ベールに会うので、まだ癖が抜けてないかったので、堅苦しい自己紹介をして、逆にベールに注意されてしまったのであった。

そんなこんなで、龍姫達は、ライブまでの間、しばらく、休むことにしたのであった。

「これでいいかな?」

「流石、天下の猫の皮を被った龍神様だね」

「おまけに、犬の皮を被った聖龍霸王もいるからね」

「しかし、エルも、ライブに出て大丈夫?」

「大丈夫!! エル、自己紹介するだけだから」

しばらく、休んだ龍姫達は、ユーリ達とジュード達とは入り口付近で別れて、用意された更衣室で、ステージ衣裳に、パーカーとカーゴパンツから、着替えて、黒猫耳のカ

チューシャを頭に付けて、髪型をポニーテールからツインテールに結び直して、瑠璃色の、振袖の上着に、下は、フリルの付いた膝丈までの黒のスカートに、瑠璃色のロングブーツと言う出で立ちになっていたのであった。

龍音は、青と黒の色違いで、美龍飛達は、犬耳カチューシャに、色違いの真正面が開いたワンピースに、ミニスカートである。

「真那も出るんですね」

「真那ちゃん、似合ってるよ、ツインテール」

「まさか、あの義妹と同じ髪型をすることになるなんて」

もちろん、新規参入した真那も龍姫達共にステージ衣裳である、水色の着物ドレスに着替えて、頭に、龍姫のお揃いの黒猫耳のカチューシャに、ロングブーツと言う出で立ちであった。

もちろん、胸はぺったんこに見せるための下着を着用しているのは言うまでなかった。

ライブ後半

龍姫達は、ボールからの依頼で、5 p.b. のライブに、サブライズゲストとして、出て欲しいので、案内された更衣室で、ステージ衣裳に着替えている頃、VIP席のユーリ達とジュード達は、ライブが始まるまで、座って待っていたのだった。

「僕がこんなことしていいのか、やっぱり、入り口で、警備を」

「フレン、たまには、息抜きしないとね」

「ですが」

「レイヴンの良い通りだな、騎士の坊主よ」

やはり、真面目な性格のフレンはいつもの癖が出てしまった上に、今回もエステルが龍姫達と一緒にステージに立つことになったので、落ち着きがなかったので、レイヴンとドンが、論じて、フレンは座席に座ったのだった。

「みんな〜!! 元気にしてた〜!! 5 p.b. だよ〜!!」

「5 p.b. ちゃ〜ん!! 元気にしてました!!」

「おっさん達も〜」

そしてついに、5 p.b. のライブが始まったのである。

流石、リーンボックスの歌姫だけあって、歓喜の渦が起こり、声援が飛んで、それに便乗して、レイヴンも乗っていたのであった。

順調に、5pb. が持ち歌を披露して行つて、もうそろそろ、最後の曲が終わつたので、5pb. が、観客席に向かつて、

「みんな〜!! 実は、今日は、サプライズなことがあるんだけど、いいかな?」

「大歓迎です〜!!」

「おう、龍姫達の出番だな」

「エル、大丈夫かな?」

「保護者のおまえがそんなことでどうする」

サプライズゲストの龍姫達がステージに立つ口実を設けていたら、ルドガーは、エルのことが心配になっていたのだ。

そしてついに、

「イエ〜イ!! みんな〜!! 楽しんでる!! 流星の絆のリーダー、鳴流神龍姫だよ」

「ななな何〜!! 龍姫ちゃんが、ドレスだと!! (。D。) ノ!! カシャ!!」

「これはいいものを見せていただきましたよ」

「そうじゃな、龍姫姐達は、男も、女も、両方、落とせるからの〜」

「見惚れちゃうわね!!」

男装を見慣れていたので、龍姫達が、着物ドレスに身を包んでいたの、レイヴン&アルヴィンは早速、龍姫から、譲ってもらったNギアで、写真撮影をし始めて、パティが見惚れていたのであった。

「それじゃあ、自己紹介、お願いできるかな？」

「はい、エル、エル・メル・マータって言います!! エルって、呼んでください!!」

「おおおお!! エルちゃん!! マジ天使!!」

「自分は、崇宮真那と言います!! 真那って呼んでください!!」

「わたしは、海道セドナです、セドナとお呼びください」

龍姫達が二く三曲披露して、エルから自己紹介をしたのであった。

こうして、無事にライブが終わったのだった。

開始!!

犯罪撲滅を兼ねた、5 p b . のライブに急遽、出演することになった、龍姫達だったが、トラブルもなく、幕を閉じたのであった。

明日が、復活したマジエコン又四天王から言い渡された猶予最終日だったので、プラネテューヌに戻ることにしたのだった。

スキット：ライブその二

レイヴン「残酷なく天使のテくぜく☒」

アルヴァイン「少年くよくく神話になれく☒」

ミラ「どうやら、あの二人は、龍姫達の歌が気にいったようだな」

ジュード「そうだよね」

エリーゼ「わたしも、龍姫達から、色々、歌を教わりました」

レイア「そうだよね、龍姫達の世界の歌は、色々な種類があるらしいんだよね」

エステル「わたしも、龍姫達の歌のファンになりそうです」

フレン「自分も、聞いてましたけど、みんなに勇気を与えてるような、歌でした」

ユーリ「ホント、龍姫達はすげえよな」

ローエン「このローエンも、聴き言ってしまったよ」

戻ってきたので、全員、各自の下宿部屋で休むことにしたのであった。

復活したマジエコンヌ四天王から言い渡された猶予最終日

「此処の、守りは、この古いぼれがやってるやるから、てめえら、しっかりとやって来い!!」
「ルドガー、エルことは、俺達に任せろ!!」

「ミイーにまかせなさい」

「爺さん、はしやぎすぎて、またぼっくり逝くなよ」

「これより、復活したマジエコンヌ四天王との戦いに向かう、各々、決めれた、部隊で、現場に向かつてもらうことになっている、一言だけ言っておく、必ず生きて帰って来い!!」

全員「オウ!!」

復活したマジエコンヌ四天王との戦いの場に向かうため、全員が、プラネタワアの屋外展望台に集まっており、ドン達がプラネテューヌの守りを請け負ってくれたので、フレンは、ユーリ共に、ラストイションに居る、ブレイブ・ザ・ハードの討伐隊に入って、真那は、龍姫の部隊に配属されて、ネプテューヌ・ネプギア・ユニは、ポケットから、カード化された、三龍神を召喚して、

「ネプテューヌ、お願い、もう死んじやだめだからね!!」

「もちろんだよ、もうみんなを悲しむことはしないから」

「龍姫ちゃん、そこが激戦区だから、無茶はしないでね」

「星龍、このパーティーメンバーに無茶無理禁止は意味ないよ」

「それ、ユーリのセリフ」

龍姫達は、それぞれの無事を祈って、担当の部隊に戻って、戦場デイトスボットに向かったのであった。

そう、復活したマジエコンヌ四天王と、流星の絆・凛々の明星・精霊王の部隊・審判を超えし者との戦いの火蓋が切って落とされたのであった。

緑の戦乙女

復活したマジエコンヌ四天王の内、ジャッツ・ザ・ハードが待ちかえっているジユンクボックスと言うダンジョンに、神楽堂家とベールの案内の元、ジユデイス・レイア・5pb. が選抜メンバーとして、やってきたのだった。

そして、道中、魔物を倒しながら、突き進んでいくと、

「待ってぜ、はじめようぜ!! 暇でしぬうう!!」

「哀れね、戦いでしか、価値を見いだせないんって」

「そうですわね、今回ばかりは、わたくし達も、本気で行かせてもらいますわ!! 準備は

良いのです? 輝龍・飛龍・レイア」

「もう、準備は出来てますわよ!! 翔龍お姉ちゃん」

「負けるわけには、行きませんのですわ!!」

「この二人が、輝龍と飛龍なんだね、言われないと、分からないよ、けど、こっちだって、負けられないんだから!!」

「そうね」

ジャッツ・ザ・ハードとご対面を果たした一行は、神楽堂とベールは、一斉に女神化

して、ジュデイス・レイアは、粒子化していた、得物を実体化して、構えて、戦闘態勢に入ったのであった。

「全てを斬り裂け!! サイクロン!!」

「嵐月!!」

「三散華!!」

「迅雷天翔撃!!」

「これだ、俺は、これ待ってんだよおおお! 楽しもうぜ!!」

「嫌だよ!! こんな楽しいもんじゃない!」

各々、得意の戦術を駆使して、ジャツジ・ザ・ハードに攻撃を叩き込んでいったのだが、ザギ同様に、思考回路が、あつちに言ってしまったので、別の意味で、手間取っていたのであった。

そんなことで、遅れを取る、メンバーではなく、

「皆さんに、わたくしの秘奥義を、お見せしますわ!! ジュデイス、今回ばかりは、決めさしてもらいますわ!! 本気で行きますわよ!!」

「それじゃあ、期待しているわよ!! 翔龍!!」

「わたしも、見てみたいな、神子龍は、見せてくれなかったし」

「わたくしも、秘奥義を修得しとけば・・・」

翔龍はさつきと片付けたかったらしく、オーバリーミッツLv3を発動して、ジャツジ・ザ・ハードに攻撃を仕掛けに行ったのである。

もちろん、バリアジャケツトは、戦乙女の鎧をモチーフにしているのであった。

「こけおどしは通用しねええ!!」

「遅いですわ!! 飛燕月華!!」

「あれ、ジュデイスの技だよ」

「ベールとは、大違いね」

翔龍は得物の槍で、女神化しているので、ユーリと同じくらいから繰り出した技は、槍で、敵を打ち上げる特技から入って、

「円月・鳶ですわ!!」

「ぐおお!!」

女神化しているので、そのまま空中で、槍で回転しながら連続で斬りつけて、ジャツジ・ザ・ハードが地面に墜ちたので、急降下して

「雷神月詠華!!」

「すごいわね、翔龍は」

「回し蹴りをしながら、逆立ちして、そのまま、蹴り上げて、メに落雷をお見舞いして、

「水玉、もろく弾けなさい!! 蒼華月瀑封!!」

「わたしの、バーストアーツね」

「わたしも、バーストアーツ、修得しないと!!」

ジャツジ・ザ・ハードを水の檻に閉じ込めて、そのまま、地面に叩きつけて

「行きますわよ!! あなたには、此処で果てていただきますわ!!」

「すごいわね、槍を、二本使うなんて」

「なんか、ルドガーの骸殻秘奥義だね」

翔龍は、ジャツジ・ザ・ハードに向かつて、光の槍を、ホーリーランスの要領で、連続で打ちこんで行っていたのを見た、ジュデイス・レイアは、感心していたのであった。

そして、そろそろ、止めを刺す頃だったので、翔龍は、持っていた槍と、魔術で作りに出した、槍の、二槍で、滅多斬りにしていき、

「これで終わりですわ!! はああああ!! 継牙・双針乱舞ですわ!!」

「この俺が、また消えると言うのかあああああ亜!!」

最後は、十文字に斬り捨てて、ジャツジ・ザ・ハードに引導を渡したのだった。

スキット：継牙・双針乱舞

レイア「翔龍、スゴイ!! ルドガーでも、同じ長さの槍を片手で、操れないんだからね!!」

ジュデイス「流石、龍姫達が、叩き上げで、鍛えてる人達ね」

翔龍「この二人に出会わなければ、秘奥義なんつて、修得してませんでしたから、それに、妹がいなかったわたくしに、神楽堂家に、養子のお誘いが、ありましたの」

レイア「それじゃあ、翔龍は、もちろん」

翔龍「はい、もちろん、この子達の姉になる覚悟は、出来てましたわ」

ジュデイス「それで、その秘奥義を、修得したのね」

輝龍「はい、それと、ジュデイスさんの秘奥義も、出来るようになったんです」

ジュデイス「それは、光栄ね、それと、わたしのことは、呼び捨ても構わないわ」

正義VS正義

ジュンクボックスでジャツジ・ザ・ハードを倒した神楽堂家とジュデイス・レイアは、輝龍・飛龍が女神化して、お姫様抱っこで、プラネテューヌに帰還している頃、ラストイシヨンの無限回路と言う、ダンジョンに待ち構えているブレイブ・ザ・ハードの下へ、ノワール達の案内で、獅子神家とユーリとフレン、アースト、ミュゼは、道中の魔物を倒しながら道なりに進んでいったのであった。

スキット：正義

フレン「力なき正義は、無力」

ユーリ「どうしたんだよ、一人で、呟いて？」

フレン「ああ、済まない、実は、ネプギア様が、霸王に覚醒した時に、聖龍皇が言っていたことを思い出してた」

ユーリ「なるほどな」

「待っていたぞ、ユーリ、いや、黒衣の断罪者と言った方がいいか」

「相変わらず、女神がやることが気に入らねえんだな、オレも同感だ」

「なら、どうして、おまえは、女神の味方をしているのだ？」

「簡単なことだ、オレは、ギルドの人間だ、依頼だってなら、女神でも、受けてやるさ、ウチのモットーは、義を以って、義を成せなんぞな!!」

「確かに、この世界の人々は、女神様を頼って、生きてきた」

「けど、もう終わりにする」

「お姉ちゃん、そうね、ケイには悪いけど、アタシも、獅子神家に、養子縁組することにするわ、まず、アンタとの」

「戦いに、終止符を討たしてもらうぞ!!」

「人間達の、新たななる、時代の幕開けを見るために」

「来い」

ブレイブ・ザ・ハードとご対面を果たして、ブレイブ・ザ・ハードは、権力者に嫌悪感を抱いているのにも関わらず、女神達に協力していることに興味を示して、ユーリに問いかけたら、ユーリは、いつもの通りに、答えて、愛刀のニバンボシを抜刀して、構えて、議論対決をし出したのだが、口がうまいユーリに、勝てなかつたようで、それに便乗して、フレン達も、得物を構えたのを見た、ブレイブ・ザ・ハードは、自分の得物である、両刃大剣を、構えたのである。

「どうした!!」 それでも!! 四天王かよ、蒼破刃!!」

「騎士団長として、あなたを倒す!!」

「余裕（＾＾）♪ 戦迅狼破!!」

「魔神剣!!」

「エイっ!!」

「鳳凰天駆!!」

「真空裂斬からのく、ヴォルカニッククレイジ!!」

「あの子、魔術を詠唱なしで、発動してるのね、けど、熱くないのかしら?」

「ぐッ!! これほどの、実力があるのか」

戦いの火蓋が切られたと同時に、一斉に、攻撃を繰り出して行って、ブレイブ・ザ・ハードも押され出したのであった。

この時、ブレイブ・ザ・ハードは知る由もなかった。

正義VS正義 後編

獅子神家とユーリ・フレン・アースト・ミュゼ、そして黒の女神は、復活したマジエ
コンヌ四天王の一人、ブレイブ・ザ・ハードと刃を交えていたのであった。

「何故だ!! おまえらは、女神に反感を抱いていたはず、どうして、女神の味方に付く?」
「さつきから、女神、女神って、馬鹿の一つ覚えみたいに、言ってる人には、一生わから
ないから」

「人間をなねんじやえよ!!」

「ゲームがどうした? 俺達は、ゲームの話聞きにいたわけではない!!」

「あなたを倒すために、この子達に協力する」

「そして、この世界が、女神がいなくても」

「やっていけるってことを」

「証明しに来たのよ!!」

ブレイブ・ザ・ハードは、ゲーム機で遊んだことのない、ユーリとフレンが理解でき
なく、おまけに機械音痴のアーストも、ブレイブ・ザ・ハードに呆れてしまい、ミュゼ
も賛同して、獅子神家一同は、一斉に女神化して、刃を交えていたのだった。

「ブレイブソード!!」

「魔王炎撃波!!」

「何!! 俺の剣を、しかも、左の剣だけで、受け止めただと!!」

「あれは、確か、神機と言う、変形が可能な武器だったな」

「ああ、刀身を着けかえれば、刀・野太刀・大剣・槍・鎌・斧に変更できるんですよ、それに、女である、わたしでも、片手で、軽々振り回すために、軽くて、丈夫な金属と、魔物の素材で出来てるんですよ!!」

「それと、盾も、合体してるのか!!」

ユニは、ブレイブ・ザ・ハードの薙ぎ払ってきた大剣を、左に持った、日本刀の刀身を着けた神機で、炎を刀身に纏わせて薙ぎ払って、防いだのを見た、フレンは、神機の凄さを知ったのであった。

そして

「ユニ、決める!!」

「わたしどもに、遠慮はいりません!!」

「此処は、おまえに譲る」

「はい!! わかりました、お願い、別次元のわたし、力を貸して!!」

「当たり前よ、行くわよ!!」

優華龍&ユニ「飛ばして行きますか!!」

「なんだ、そのオーラは!!」

「シエアエナジーじゃない、龍姫さん達から、教わった、戦闘術」

「オーバリーミッツよ!!」

ブレイブ・ザ・ハードとの決着を、優華龍とユニにさせるため、ほかのメンバーは援護に入って、二人は、その期待に応える形で、オーバリーミッツLv3を同時に発動させて、それを見たブレイブ・ザ・ハードは、二人が、シエアエナジーを放出していないことに、驚いていたのだった。

「崩龍無影剣!!」

「パティ直伝!! トリガーチューン!!」

「スゴイ、神機を、左だけで、変形させて、銃にしているのか!!」

二人とも、利き手である右手に、二尺五寸の黒色の拵えの野太刀に、左に、黒色の刀身の神機と言う、戦闘スタイルを駆使して、優華龍は、野太刀に冷気を纏ませて、特攻して、切り返して、また、特攻して、ユニは、以前、パティから、銃を扱う者同士で、話していた時に、パティから、伝授してもらった、連射する、技をお見舞いして、

「やっちゃんいますか!! ユニ、お先に、失礼するわ、それじゃあ、仕上げは、よろしくね

（）

「任せなさい!!」

優華龍&ユニ「バレット・クルシフィックション!!」

「散り際は美しくないとね（へー）——☆」

「あの男がするより、絵になるな」

「そうね」

優華龍が野太刀でブレイブ・ザ・ハードに特攻して、それに便乗して、ユニが、左の持つてる神機を、ライフル形態にして、追撃して、最後に、背中合わせで、銃モードにしている神機で、花火を打ち上げて、ブレイブ・ザ・ハードに引導を渡したのであった。

さらば、

復活したマジエコンヌ四天王、ブレイブ・ザ・ハードとの戦いに勝った、獅子神家とユーリ・フレン・アースト・ミュゼ、そして、黒の女神であった。

「もう少し、早く会えれば、良かったかもしれないな、そうすれば、おまえと、良き友として、会い見えたのだから、黒衣の断罪者、いや、戦友、ユーリ・ローウエル、そして、フレン・シーフォ」

「そうだな」

「だが、俺は、やってきたことの代償を払わなければならん、介錯を頼めるか？」

「アタシ・・・」

ブレイブ・ザ・ハードは、マジック・ザ・ハードより早く、ユーリ達に会えなかったことに後悔して、自分が犯した罪を償うことを、選んで、ユニに介錯を頼んだのだが、やはり、ユニは、躊躇していたので、

「オレが、やろう・・・」

「ユーリさん!! ダメです、此処はアタシが」

「いや、此処は、オレにやらせてくれ、おまえらを、血で塗られた、女神にする訳にはい

かねえ」

「わかりました・・・」

「さらば、黒の候補生、そして、黒衣の断罪者、騎士団長閣下、これをくれてやる」

「あばよ!!」

「ユーリ・・・」

「帰るぞ!!」

「ユニ、あなたの野太刀、刀身が折れてるわ」

「本当だわ、仕方ない、ブレイブ、アンタの剣、野太刀に打ち直さしてもらおうわ」

それに見かねた、ユーリは、ドン同様に、自ら損な役割を買って出て、ニバンボシを抜いて、ブレイブ・ザ・ハードを介錯を行って、ブレイブ・ザ・ハードの形見の大剣を、野太刀に改造するため、約束通りにプラネテューヌに帰還するのであった。

ところ変わって、ルウイーのアイシクルウォールと言う、ダンジョンに向かっている、御子神家とエステル・カロール・リタ・ラピード・龍ラピ・エリーゼ・ローエン・ロム・ラムは、奥で待構えているトリック・ザ・ハードを倒しに行くため、魔物を倒しながら進んでいたのだが、

「お姉ちゃん・・・」

「大丈夫です、お二人の姉である、ブラン様は、命に別状がなかったのですから」

「わたしが、プラネテユースに遊びに行きたいって言ったから、武龍お姉ちゃん達が、お姉ちゃんの護衛に着けなかつたからそれで・・・」

「ロム、一人で抱え込まないで、ボクたちがいるんだから、それに、ユーリと龍菜が、ラピードと龍ラピ、こっちに寄越してくれたんだからね」

「ワン!!」

「ありがとう、カロール君、ローエンさん」

やはり、ザギに重傷を負わされて、今も、入院中の姉のことが気になっていたらしく、ロムは、自分を責めていたので、ローエンとカロールがフォローして、元気づけて、先を急ぐのであった。

再会、四象衆の一人&変態と言う、馬鹿

御子神家を筆頭とする、トリック・ザ・ハード討伐隊は、アイシクルウォールと言うダンジョンをひたすら道なりに、魔物を倒しながら突き進んでいた。

そのまま進んでいたら、

「ええええ!!」

「まさか、エリーゼの嬢ちゃん、それに、指揮者まで、居るのか」

「誰ですか？ わたしは、エステリーゼ・シデス・ヒュラツセインって言います」

「それはご丁寧なこった、わしは、ジャオ、その二人とは、知り合いじゃ、おまえたちに、敵対する気は、これっぽちもない」

「わたし、ロム・・・」

「ラム」

「ウチは、パティ・フルールじゃ」

「リタ・モルディオ」

「ボク、カロール・カペル」

なんと、エリーゼとローエンの知り合いで、ジユデイス並に、動物と話すことが出来

る、大男のジャオと偶然にも犯罪神が生き返らせたようなのだが、どうやら、犯罪神は、イストワール同様に、人選を間違えたようで、ジャオは、ブランが抜けた穴を埋めるためにパーティーメンバーに入ってくれろと言っているので、初めて会ったメンバーは簡単に自己紹介を行って、先に進むのであった。

「なるほど、わしが知らん間に、そんなことがあったのか」

「はい、わたしどもは、結局四ヶ国回る羽目になりました」

「普通、主が捕まったなら、すぐに助けに行くのが、道理じゃろ」

「あのバカ教祖の所為で、いい迷惑よ!! クビにされて当然ね、今まで、女神としか見てなかったんだから」

その道中、ジャオに、此処に至った経緯を簡単に説明していたのであった。

やはり、ジャオも、龍姫達同様に、一人でも助けに行かなかったことを咎めていたのであつた。

そして、

「ロムちゃんく、ラムちゃん!!」

「あれが、トリック・ザ・ハード」

「気持ち悪いよ!!」

「さっさと片付けるわよ!!」

最深部にトリック・ザ・ハードが待ち構えていたのだが、待ちに待った、ロムとラムに会えて、御子神家とエステル達が目に入ってなかったもので、リタが、合図を出して、一斉に得物を構え、女神化も行つて、戦闘の準備に入ったのであった。

「おまえだ誰だ!! おっさんに、興味はない!! それと、二桁は、ババアだ!!」

「ダメじゃ、守備範囲が狭い」

「とりあえず、茶々つ、片付けて、帰るわよ!! ファイアーボール!!」

「そうですね、槍よ貫け!! ホーリーランス!!」

「魔王地顎陣!!」

「湧き出でよ!! 脇役の手!! ネガティブゲイト!!」

「魔神剣!!」

「崩・・・襲・・・脚!!」

「光よ!! エステルお姉ちゃん直伝・・・フォトン!!」

「ワン!!」

「ワン!!」

「ぎゃああああ!!」

案の定、戦闘慣れしてる集団だったので、一方的にトリック・ザ・ハードをボコボコにしていったのであった。

背中、語れ!!

暗殺者ザギに深手を負わされて、パーティーメンバーに合流が危うい状況に、エリーゼとローエンの知り合いで、アーストより、背が高い、巨漢の大男、ジャオが、参戦して、トリック・ザ・ハード討伐に加わっているのであった。

「ほんじゃ、行きますか!! 変身!! くノ一、秋龍、見参ですよ!!」

「別次元のお姉ちゃん、狐さんに、変身できるだね・・・」

「こりゃあ、たまげた、今度は、狐に化けたのか」

「やつぱり、龍姫達は、敵わないよ・・・」

「でも、武器が、斧はどうなんです?」

「エステルさんは、いつも通りなんですな」

秋龍が、白金髪に、狐の耳が生え、毛先が白い、尻尾も生え、両目が碧眼で、紅葉が描かれた陣羽織に、武士が装備している、胴丸が装着されていたので、胸の隆起を抑えているので、ぺったんこして、戦闘の妨げにならないようになっていた。

声が、いつもは、ユーリ同様に、口が悪くなっていたが、この女神化では、ハイテンションになって、声が、高くなっていたのだった。

もちろん、斧にも、紅葉が描かれた、片手で振り回せるサイズの片刃である。

「こうなったら、どうでもいい、纏めて、相手してやる!!」

「後悔するなら、今のうちですよ、飛ばしてきますか!!」

「援護するのじゃ!!」

今、起きたことが、整理出来ないかったトリック・ザ・ハードは、焼が回って、此処に居る全員を相手にすると言ってしまい、妖狐女神になっている、秋龍は、オーバリーミッツLv3を発動して、斧を振りかぶったまま、攻撃を仕掛けたのであった。

「べろ〜ん!!」

「汚いですよ、爆碎斬!!」

トリック・ザ・ハードはお得意の長い舌で攻撃を仕掛けてきたが、秋龍は、振りかぶっていた斧を叩きつけて、石つぶてを飛ばして攻撃して、トリック・ザ・ハードに命中させて、

「続けて行きますよ!! 陽炎!!」

残像を残しながら、トリック・ザ・ハードの頭上から奇襲を仕掛けて、

「疾風怒濤ソニックバスター!!」

「斧の上に乗ってるわ・・・」

「スゴイ!! 別次元のお姉ちゃん!!」

「ぎゃああああ!!」

なんと、斧を投げて、その上に乗って、そのまま、特攻して、

「腹括つてください!! 天狼滅牙!!」

「ユーリのバーストアーツ!!」

着地して、拳で怯ませて、滅多斬りして、

「お終いにしますよ!! こういう時は、背中で語るんですよ!! ホワイトチーム!!」

「斧、いらないのじゃ」

「幼女、バンザイ!!」

「もう、出てくんない!!」

どう言う仕組みか、わからないが、秋龍は、トリック・ザ・ハードに背を向けた瞬間に斧をしまつて、仁王立ちで、背中から、ビームを放つて、トリック・ザ・ハードを倒したのだが、あまりにも、突っ込みどころしかなかったのであった。

一行は、ジャオをルウィー教会に送り届け、プラネテューヌに帰還していったのであった。

救いようがない

御子神家一行がアイシクルウオールでトリック・ザ・ハードを倒していた頃、ガベイン草原に待ちかまえているマジック・ザ・ハード所に向かっている、鳴流神家・ミラ・ジュード・レイヴン・ルドガー・ネプテューヌ・ネプギアは道中、魔物を倒しながら道なりに進んでいたのであった。

スキット：置いて来た

ギア「あのく、アルヴェインさん、置いてきましたけど、いいんですか？」

レイヴン「仕方ないのよね、ドンが、誰か一人、置いてけ言うから、アルヴェイン、寝坊してるしさ」

ミラ「いいのではないか、ドン達に扱き使われたら」

ジュード「そうだね」

「マジック様」

「おまえらは知らん」

「どうやら、このマジック様は別人でチューー!!」

「なるほど、分史世界から、此処に呼んできたのか」

ちょうど、マジック・ザ・ハードに下つ端のリンダ達をご対面を果たしたのだが、龍姫達は目の前のマジック・ザ・ハードが、分史世界のマジック・ザ・ハードだと、気が付いていたのであったが、リンダ達が一目散に逃げて行ったのを見計らって、

「やはり、来たか、女神ども」

「まだ、懲りてないのか」

「ふん、以前の我だと思ふな」

「悪いけど、本気で、行かせてもらうから、セットアップ!!」

「おっさんも、本気で行くのかな、マジっち、目的は、手段を正当化しねえよ!!」

「何故、人間である、おまえらが、女神の味方をする?」

「簡単だな、俺達は、女神ではなく、ヒトとして見てるんだから」

「女神も、人間も、心を持った人なんだ!!」

「もう、シエアとは、縁を切った!! マジック、あなたを倒す!!」

「来い、この場で、殺してやる!!」

龍姫達はマジック・ザ・ハードと討論合戦をしたが、やはり、女神であるにも関わらずシエアに影響していない、龍姫達を受け入れることが出来なかった、そして、龍姫達は一斉に得物を構えて、マジック・ザ・ハードと刃を交える覚悟を決めて、ムゲンとネプテューヌがユニゾンして、シヨコラとネプギアがユニゾンして戦闘態勢に入ったので

あった。

「魔神剣!!」

「覚悟はできたか・・・デモンズランス・ゼロ!!」

「蒼破!!」

「獅子戦吼!!」

「スプラッシュ!!」

龍姫達は一斉に、各々、修得した、術技の数々を、マジック・ザ・ハードに叩き込んでいったのである。

もちろん、マジック・ザ・ハードが龍姫達の術技をあの黒いオーラで防げる訳がなく、

「ぐツ!!」 ありえん、シエアではないのか：この世界に、シエア以外、あるはずが：」

「貴様が、逆立ちしても、一生、手に入らないものだ」

「龍音、女神化すると、口が悪くなるけど、上下関係は出来てるのがスゴイ」

「別に、呼び捨てにしてくれていいのに」

もろに喰らって、跪いており、客員女神になっている龍音から、追い打ちで、言い負かされて、その様子を見ていた、ほかのメンバーは、同一人物であることを認識したのであった。

華麗に

復活したマジエコンヌ四天王のリーダー、マジック・ザ・ハードと刃と拳と矢を交えている鳴流神家とミラ・ジュード・レイヴン・ルドガーは、これまで培ってきた物があるので、マジック・ザ・ハードに後れを取ることはないが、油断は禁物なの言うまでなかつたのだった。

「これで終わりだ!!」

「ムゲン、行くわよ!!」

「オウ、相棒!!」

「お姉ちゃん!!」

「ネプちゃん!!」

マジック・ザ・ハードはエグゼドライブを繰り出す構えを取つたので、ネプテューヌが龍姫から伝授されたあるカウンター秘奥義を思いだして、体から光を放つて、

「アポカリプスノヴァ!!」

「守る!!
エターナル・インフイニティ
極光波!!」

「まさか、打ち消したのか!!」

「やるわね、ネプちゃん」

「当然よ、別次元のわたし達なんだから」

「それと、回復してるのか」

境界を張って、マジック・ザ・ハードのエグゼドライブの攻撃を打ち消して、パーティーメンバーを回復させて、マジック・ザ・ハードとの格の違いを見せつけたのである。

「認めん!! 認めんぞおおお!!」

「マジっち、諦めが肝心よ」

「諦めて、降参したら」

もう、マジック・ザ・ハードは今の龍姫達に敵うはずなく、その場で絶叫して、今の自分を受け入れないのであった。

「今回は、おっさんが行っちゃうよ!! ガンガン行っちゃうよ!!」

「レイヴン、任せたぞ」

「人間風情に、このマジエコンヌ四天王のマジック・ザ・ハードが負けるはずが」

どうやら、今回ばかりは、お調子者のレイヴンもキレていたようで、オーバリーミッツツLv4を発動して、赤い色の闘気を身に纏って、お得意の弓で攻撃を仕掛けて行ったのである。

マジック・ザ・ハードは、レイヴンのもう一つの顔を知る由もなかったのは言うまでもなかった。

華麗なる弓による攻撃を連続で繰り出して、

「おっさん、行っちゃうよ!! 華麗に、ターゲット、オン!! クライシスレイン!!」

「認めん、この我がああああ!!」

「スゴイ、レイヴン、弓でも、強いのか」

「俺様に、惚れたの?」

「いや、違うから」

「さてと、片付いたし、教会に帰って、飯にしよう、バタン☒●●!!」

「ミラ!!」

「余程、お腹空いたんだね、急いで帰ろう」

「そうですね、聖龍皇、アルティメットセイバー、召喚!!」

前方回転しながら、変形した弓と小太刀で斬りつけて、魔法陣を展開して、マジック・ザ・ハードを閉じ込めて、そのまま頭上を取って、そこから矢を放って止めを刺して、帰ろうとした、どうやら、空腹に耐えきれなかったようで、ミラがその場で、倒れてしまったので、急いでプラネテューヌに帰還するため、ネプギアがアイテムパックからカード化したアルティメットセイバーを召喚して、乗り込んで帰還するのであった。

空想の魔物

復活したマジエコンヌ四天王を倒した一行は、拠点にしているプラネテューヌ教会に帰還して、急いで、龍姫達が昼食を作って、食べることにしたのであった。

なぜなら、今にも、ミラが餓死しそうな呻き声を上げていたのである。

そんなこんなで全員分の昼食が出来たので、昼食を取ることにしたのであった。

「ミラ、余程、お腹空いてたんだ」

「この嬢ちゃん、良い、食いっぷりだな」

「ユーリ、キミは相変わらず、龍姫様達のお作りになった、お菓子だね」

「悪いかよ、いい歳こいて、甘党で」

和気藹々と昼食を楽しんだのであった。

昼食の片づけが、終わった所に、セドナが、メンバーが集まっている所にやって来て、

「ちようど、良かったです、皆さんに、ご報告があるんですが」

「なんだ？」

「はい、龍姫さん達の次元のゲームギョウ界の闘技場に搭載されている、空想の魔物と戦える装置が、この次元のゲームギョウ界の闘技場に、設置が完了しました」

「ちようどいい機会だな、各自、休憩が終わり次第、闘技場に集合だ、特に、ボール、おまえは、絶対参加するように、いいな!!」

「はい!!」

なんと、龍姫達のゲームギョウ界の闘技場にプラネテューヌの技術者の手によって作られた、空想の魔物などと戦える装置が、設置されたことを、報告しに来てくれたのである。

それを聞いた、ユーリを筆頭とする戦闘集団は、十分、休んだ後、一目散に闘技場に向かったのだが、ボールは、問答無用に、アーストから、強制参加が言い渡されたのであった。

「なるほど、此処に、ボクたちのインテリジェントデバイスをセットすればいいんだね」
「はい、設置されている、インテリジェントデバイスは使用できませんが、戦闘メンバーに参加することはできますので、それと、空想世界では、女神化も可能ですが、それはあくまで、龍姫さん達、龍の女神限定ですのぞ」

「何、当たり前のことを言っている、女神の力に頼ってばかりでは、強くなれんぞ!!」
「それじゃあ、ボクのインテリジェントデバイス、セットするね」

闘技場に到着したので、早速、装置が設置されている部屋に、龍姫が行って、インテリジェントデバイスを装置にセットして、二つの次元の扉を出現させて、みんなの所に

戻って、金の扉は、ジュード達と神楽堂家・御子神家が入って行って、銀の扉は、凜々の明星とフレン・エステル・パティ・リタ・パール・鳴流神家・獅子神家が入って行ったのである。

「どうやら、到着したみたいよ、遺跡の中かしら」

「あそこに、箱があります」

「回復アイテムだな、ご丁寧に、全員分、用意されてるぜ」

「用心に越したことはない」

「どうやら、全員、無事に、空想世界の拠点に到着したので、近くにあった、巨大なボックスから、用意された回復アイテムを、各自に配って、奥へと進んだのであった。」

そこに待ち構えてるのは、知る由もなかった

遭遇、銀火龍

龍姫のインテリジェントデバイスを設置にセットして、銀色の扉を潜って、スタート地点に設置されている大きなコンテナから人数分の回復アイテムを配った龍姫達とユーリ達は、龍姫が、戦いたいと思っっている魔物が待ち構えている、場所に到着したのである。

「ここ、塔の頂上です、何か来ます!!」

「おい、カロール、あいつ知ってるか?」

「知らないよ!! それに、今ボクたちがいる場所って、龍姫がインテリジェントデバイスで作り上げた、空想世界なんだから、知ってるわけないよ!!」

「あれは、リオレウス希少種ですよ、爪に猛毒を持つてるんで、注意してください!!」

「ご説明、感謝します!!」

「おっさん、帰っていい?」

「ダメだよ、レイヴンさん、もう、入り口しまってますから、腹括ってください!!」

「雷華の言う通りだぜ、おっさん、こりや、楽しめそうだ!!」

「ユーリ、この状況で、よくそんなこと言えるね」

龍姫達とユーリ達は、空想世界の天高くそびえ立つ塔の頂上に出たようで、しばらく辺りを見渡していたら、エステルが、空から、銀の翼を持った翼竜が舞い降りてきたことに気づいて、自分の、剣と盾を構えて、戦闘態勢入ったので、龍姫は、愛刀「次元断絆龍」だけ、抜刀して、各々、戦闘の構えを取っていたら、レイヴンが逃げる気満々だったのだが、雷華が、此処に来た時点で、リオレウス希少種を倒すか、捕縛するかでしか、帰還できないと説明して、ユーリが、薄ら、笑みをこぼして、愛刀「ニバンボシ」を抜刀して、迎え撃つ準備を整えたのであった。

「ぐおおお!!」

「こいつ、デケエ癖に、早えな」

「その上、飛行能力も、持つてるいるからね」

「そのための、リタと龍姫達の魔術が、あるんだ、オレたちは、魔術が発動するまで、囷だな」

「はい、わかりました、捕食、行きます!!」

「神機から、魔物の口が!! その上、オーバリーミッツまで、行ってるのか!!」

「これ、受け取ってください!!」

龍姫達とユーリ達は、初めて相手をする銀火龍の名を持ったリオレウス希少種を相手に、いつのように、リタを筆頭に、魔術の詠唱が終わるまでの間、前衛組は、囷を請け

負って、隙を見つけて、優華龍&ユニが、左に持っている刃渡り二尺三寸の日本刀の刀身を搭載し、自分に合った銃の銃身を搭載した、見た目に反して、女性でも、軽々、片手で振り回すことが出来る神機で、リオレウス希少種に、向かって、魔物の顎のような物を繰り出して、オーバーリミッツLv1の状態で、素早く、神機を、銃形態に変形して、闘気の弾丸を放ったのであった。

「優華龍&ユニ、ありがとうな」

「なるほど、こうすれば、複数の人間が一斉にオーバーリミッツを行えるのか」
「どういたしまして!!」

放たれた闘気の弾丸は、龍姫とユーリに当たって、二人とも、オーバーリミッツ状態のなったのを見たフレンは、改めて神機の性能を評価していたのであった。

銀火龍!! 後編

優華龍&ユニから、リオレウス希少種から捕食した、闘気を受け取った龍姫・ユーリは、これに乗じて、攻撃を仕掛けに行ったのである。

「虎牙破斬!!」

「幻狼斬!!」

「行くよ!!」

「オウ!!」

龍姫&ユーリ「ピコ!! 成敗!!」

「ピコハンの意味、あるの・・・」

龍姫達がいるので、ジュード達が修得している、共鳴技を繰り出すことが可能なので、龍姫が、ピコハンをも、ユーリに投げ渡して、それをキャッチした、ユーリは、いつものように、打ち上げて、振り下ろして、殴打の連携を叩きこんでいたのだった。

それを見ていた、真龍姫達は、苦笑いをしていたのだった。

「ネプギア、フレンさん、尻尾狙ってください!!」

「わかりました!!」

「虎牙破斬!!」

「虎牙破斬!!」

「尻尾が切れたわよ」

「これで、攻撃範囲が狭くなったんだな」

すかさず、龍姫が、ネプギアとフレンに、尻尾を切断するように、指示を出して、二人同時に攻撃を繰り出して、見事、リオレウス希少種の尻尾を切断することが出来たのだが、

「グオオオオオ！」

「やっこさん、相当、気立ってるわよ!!」

「魔物の癖に、気が短いのじゃ!!」

「ボツサとしない!!」

リオレウス希少種の怒りが爆発してしまったのであった。

その時、優華龍&ユニに、ある感覚を覚えたのである。

「何、神機が、共鳴してるの!!」

「誓約完了・・・ブラット・・・レイジ・・・」

「優華龍姐とユニ姉から」

「翼が生えた・・・」

「それじゃあ、さっさと片付けますか!!」

なんと、神機の喚起率が一定以上に達した上に、先ほど決めていた誓約で、部位破壊を選んだことが良かったらしく、先ほど、ネプギア、フレンが、尻尾を切断したことによって、誓約が達成したので、血の衝動こと、ブラッドレイジが発動して、二人の背中から、半透明の金色の翼が現れたのである。

「あれは、ブラッドレイジ!!」

「血の衝動、要するに、あの二人は、自分の血の衝動を解放したのね」

「やっぱ、そう来なくちゃな!!」

「おっさん、帰っていい?」

「レイヴンさん、最後まで、頑張ってください!!」

龍姫は、二人が、ブラッドレイジを発動出来るまで、実力を付けていたことを評価して、ユーリとジュディスは、いつのようにな、楽しみだしたのだが、レイヴンが離脱しようとしていたので、天龍が注意したのであった。

「ワン!!」

「ワオオオン!!」

「タイダルウェーブ!!」

ラピードと龍ラピも、息の合った連携攻撃をしていって、先ほど、ブラッドレイジを

発動した、ユニは、詠唱は破棄して、魔術で、渦巻きを発生させて、リオレウス希少種を追い込んでいったのである。

「今回は、誰が決めてくれるんだ？」

「ボクが決めます!! 飛ばして行きますか!!」

「ボコボコにやっちゃって、木端微塵にしっちゃってね」

「なんだろう、プルルートから、ユーリとジユデイスと同じ物を感じるんだけど・・・」
「どうやら、今回は、天龍が、決めることになり、オーバーリミッツLv3を発動して、リオレウス希少種に突撃していったのだが、女神化してないとはいえ、プルルートもジユデイスとミユゼ同様に、S気があったので、カロールが感じ取っていたのは言うまてなかつた。

「ぐおおお!!」

「火は効きそうにないから、散沙雨!!」

リオレウス希少種の攻撃をかわして、耐性を持っている火属性が使えないので、お得意の連携が出来ないのだが、そんなことで後れを取る、天龍ではなかつた、すかさず、滅刺し、

「閃空裂破!!」

「兜割りなんだ」

そのまま回転斬りで舞い上がり、兜割りで追撃して、

「一回くらいいいよね、殺劇舞荒剣!!」

「天龍様、今消化します!!」

「フレン、大丈夫だ!!」

殴打・剣舞・蹴撃の炎の乱舞を叩きこでいたら、天龍が燃えていたので、フレンが、慌てていたら、ユーリが止めて、

「壮麗なる流れ!! 光翔戦滅陣・蒼弾!!」

「あれは、ボクのバーストアーツ」

天龍は渦巻きを発生させて、水玉を作り出して、破裂させて、

「はあああ!! 黒の龍の女神の力、その身に焼き付けろ!! 緋に染めらし刃は、緋王電王刃!!」

「カッコイイ!!」

「天龍ちゃん、刀はいるの?」

姉の一人である、勇龍と龍菜の、剣技を自分なりに改造して、編み出し、最後は、どつからともなく、夕陽をバックに、ライダーキックを決める秘奥義でリオレウス希少種を倒したのだが、思わずレイヴンが突っ込んでしまったのであった。

金火龍

天龍が修得している秘奥義で珍しく火属性を持たない「緋王電桜刃」でリオレウス希少種を討伐したのであった。

「何だ、銀火龍の厚鱗に、火龍の紅玉と天鱗？」

「どうやら、リオレウス希少種を討伐したことによって支払われる、報酬だよ」

「アタシも、紅玉が報酬に入ってるわ」

「おっさん、鱗ばかり」

「ごめんね、本当なら、普通の赤い個体なんだけど、エリアを移動することが多いから、手短かに、この個体にしちやって、ごめんなさい」

「顔、上げるよ、早く片付いたことに、越したことねえからよ、それに、オレは楽しめたからな」

「そうですよ、それに、良い訓練に、なりましたから」

「どうやら、ほかの魔物同様に、討伐したことによる報酬が、全員に配布されたのだが、やはり、各自での抽選確率が違うので、レイヴンだけ、鱗関係しか、報酬に提示されてなかったのであった。」

今回は、龍姫が、今のパーティーメンバーなら、リオレウス希少種を討伐できると思っ
て態と選択したことを、謝罪したら、逆にお礼を言われたのだった。

「ガクツ!!」

「優華龍、ユニ!!」

「ごめんなさい、ブラッドレイジ、今日が初めて、使ったので、まだ体が馴染んで無くて」

「よっこいしよつと!!」

「ごめん、龍菜お姉ちゃん」

「何言ってるの、わたしは、姉の義務を果たしてるだけよ」

「そろそろ、帰還の時間だね」

やはり、まだ血の衝動が体に馴染んでなかったので、優華龍とユニはその場で、両膝
を付いて、へ垂れこんでしまったので、龍菜とノワールは、立ち上がらせて、おんぶし
て、闘技場に戻ったのであった。

ところ変わって、金の扉を選択した、武龍達とジュード達は、討伐対象が待ち構えて
いるひとつ前の部屋で、戦闘準備を行っていたのであった。

「全員、いるか?」

「大丈夫です」

「それでは、巨大魔物の討伐訓練を行う、これを、本当の戦いだと思うこと、いいな?」

「はい!!」

どうやら準備が整ったらしく、アーストが号令を出して、パーティーメンバーが全員いるか確認して、巨大魔物が待ちかまえている、塔の頂上に向かったのであった。

「どうやら、此処が、討伐対象がいる所か」

「みなさん、来ましたよ!!」

「金色の、翼竜」

「武龍達は知ってるの?」

「うん、リオレイアの希少種だよ!!」

「これはまた、金ぴかのレイアなこった」

「酷い!! わたしは、人間だよ!!」

「茶番はそこらへんにして、来るよ!!」

やはり、奥から、金色の体を持った、飛竜種の魔物のリオレイアの希少種が、巨体を生かして突進を仕掛けてきたので、一齐に、回避して、ジュードが、武龍達に、知っているかと聞いたら、輝龍が、リオレイア希少種だと答えていたら、アルヴィンがレイアをからかい出したのだが、一齐に戦闘態勢に入ったのであった。

響け!! 集え!!

陸の金火竜の異名を持つ、翼竜のリオレイアの希少種と会い見えることになった、武龍達とジュード達は、得物を構えて、連携しながら、戦いを繰り広げていたのであった。

「幻龍斬!!」

「セドナ、スゴイです!!」

「何言ってるんや、セドナちゃん、女神やで、ボクも負けてられへんな、クロスウインド!!」

「武龍さん、斧と刀を同時に扱える上に、術も出来るとは、スゴイですね、爺も、行きますよ!! スプラッシュ!!」

「ボクたちだって、グランドクロス!!」

セドナも戦闘メンバーに入って、武龍達とジュード達の援護をしながら、リオレイア希少種を翻弄して行き、魔術の詠唱が完了した武龍が、魔術を発動して、それに合わせて、ローエンと飛龍が、同時に魔術を発動させて、足止めをしていたのだった。

「来ますわよ!! 姉妹の連携、徳とぐ覧あれですわ!!」

「わかった、翔龍お姉ちゃん!!」

翔龍&輝龍「衝破十文字!!」

「ぐおおお!!」

「今だ!! 弧月閃!!」

「虎牙破斬!!」

「これで、尻尾は切り落としたな、次は、角だ!!」

翔龍と輝龍の共鳴技が炸裂して、リオレウス希少種の尻尾が下がったのを見逃さなかった、秋龍が、すかさず、斧で斬りつけて、それに合わせて、龍琥も斬りつけて、尻尾を切断して、ミラが、角を折る指示を飛ばしたのである。

やはり、部位破壊の影響で、怒り状態になってしまったのである。

「きゃ!!」

「礼龍、お姉ちゃんが、治したる!! 聖なる活力来んかい!! ファーストエイド!!」

「サンキュー!! 武龍お姉ちゃん、怒ったんだからね、魔神剣!!」

リオレイア希少種が突進してきた余波で、吹き飛ばされた礼龍に、武龍が治癒術を發動して、傷を治して、礼龍が、斬撃を放ったのだった。

「わたしが・・・決める・・・調子に・・・乗らないでね!!」

「龍琥の秘奥義、楽しみ!!」

一気に畳みかけるため、龍琥がオーバーリミッツLv3を發動して、リオレウス希少

種に攻撃を仕掛けに行つたのを見たレイアは、龍琥の秘奥義が楽しみであった。

龍琥は、リオレイア希少種の爪などの攻撃をかわしながら、懐に潜り込んで、

「穿衝破!!」

右に持っている刀で突きを繰り出して、白と水色のタイラントフィストを嵌めている左で、アッパーをかまして、

「烈震・・・天・・・衝!!」

同じ動作で、今度は地面を抉るように左拳を突き上げて、

「閃光墜刃牙!!」

そのまま、回転斬りで巻き上げて、刀からビームを出して、

「腹・・・括って・・・天狼滅牙!!」

「あれ、ユーリの」

地面を叩いて怯ませて、滅多斬りを繰り出して、

「やってあげる!! これで決めてあげる、響いて!! 集いて!! 全てを滅する刃と化して!! ロスト・フォン・ドライブ!!」

「別次元のわたし、刀から、ビーム出せるんだ・・・格好いい」

白いオーラで巻き上げて、そのまま、滅多斬りした後、大上段から振り下ろして、ビームを放つ秘奥義でリオレイア希少種を倒したのであった。

密かに

闘技場で、空想の魔物と戦える装置の試運転を行った、パーティメンバーは、無事に離脱者もなく、討伐したことによる素材と報酬を受け取って、軍事拠点にしているプラネテューヌ教会に戻ってきたのであった。

スキット：手に入れた素材

龍音「お姉ちゃんも、天鱗と紅玉、手に入ったんだね」

龍姫「紅玉で思い出したんだけど、一回だけ、光龍がまだ守護女神していた分史世界に行つた時に、一緒に、宝玉、手に入れに行つたんだっけ」

ユーリ「そうだったか」

龍姫「うん、その時、まだユーリ達に出会う前だったから、アイが情報収集のやり方間違えて、ケイから、宝玉と血晶を持つてきたら、ゲームキャラの居場所を教えると言われて、まんまと、口車に乗せられて、ラスティションとプラネテューヌを往復する羽目になったんだよ」

リタ「馬鹿じゃない!!」

ミラ「そんなことがあったから、精霊のわたしとミュゼが呼ばれたのか」

ユーリ「そのおかげで、あの教祖様に、会うことなく、ゲームキャラに会えたんだかな、オレもあの教祖は好きになれねえな」

「二日後、アレクセイが待ち構えている、ザウデ不落宮に潜入する、それまで、各自、英気を養っておけ、これにて、解散!!」

「はい!!」

作戦会議で、三日後に、ゲームギョウ界のギョウカイ墓場に突如出現したザウデ不落宮に乗り込むことにした一行は、各自、下宿している部屋に戻ることにしたのだが、エステルが優華龍とユニの黒色の防刃素材で出来ているオープンフィンガーグローブをしている両手から、血が垂れていることに気が付いたので、思わず

「何するんですか、エステルさん、ぐっ!!」

「いい感じに血豆がつぶれてるね、まさか、二人だけで、特訓してたんだ、今度から、ボクたちに言ってるね、ケイみたいに、比べたりしないよ」

「待ってくださいいね、はい、これで治りましたよ」

「そうだよ、遠慮しないでいいよ」

「剣の相手なら、オレとフレンだっているんだ、遠慮すんな、あんな教祖の嫌味なんか、聞き流せばいいんだよ」

「ありがとうございます」

「銃のことなら、ウチが教えるのじゃ、大船に乗ったつもりじゃぞ」

二人のフィンガーレスグローブをはぎ取って、血豆がつぶれて出血していたらしく、治療術で治したのであった。

どうやら、二人は姉と比べられて育った影響で、陰で努力していることをケイに嫌味を言われてしまい、血豆が潰れるまで特訓してから、龍姫達に合流して、空想の魔物と戦える装置の試運転に参加していたのだった。

龍姫達は二人に遠慮しないで、言ってくれたら、協力すると言ったら、二人はお礼を言って、各自解散したのであった。

早速、手に入れた素材で、ユニは折れてしまった、野太刀を討つことにしたのである。「ブレイブ、アンタの剣、使わしてもらおうよ」

「ユニちゃん、手伝うよ!!」

「ボクたちも手伝うよ」

「でも・・・」

「遠慮はなしよ!!」

「ありがとうございます!!」

ユニが、ブレイブの形見の大剣を手に入れた素材で、野太刀に改造しようとしたら、美龍飛達を筆頭に、手伝いを買って出てくれたので、一緒に野太刀を打つことになったの

である。

以前、龍姫の刀を打った要領で、打っていったのである。

そんなにも時間が掛からず、

「出来た!!」

「これぐらいで、ちようどいいじゃない?」

「そうですね、名は・・・」

「勇黒龍つてどうです?」

「ユニつちにピツタリわね!!」

「ありがとうございます、エステルさん、よろしくね、勇黒龍」

二尺五寸の黒っぽい刀身が出来上がり、拵え全て、ユニの希望で、黒にして、名をエステルが「勇黒龍」と命名して、粒子化してしまって、ユニはお礼を言つて、部屋を出て行くのであった。

朝の鍛錬

空想の魔物と戦える装置の試運転で、金火竜と銀火竜を討伐した一行は、作戦会議を行って、各自解散にして、各々、下宿している部屋に戻って、就寝したのであった。

そして、翌日、龍姫達はいつもの時間に起きて、パーティーメンバーと一緒に、バーチャルフォレストの秘密の場所で軽い鍛錬に励むのであった。

「こうして、龍姫姉様に、劍の稽古付けて下さるので、三カ月前でしたね」

「そうだったね、だからって、負けてあげないよ!! 烈・魔神劍!!」

「龍姫!! 真那!! どっちか、紫と黒の女神達の相手をしてやってくれ」

「はい!! わかりました!!」

「いつ見ても、龍姫の劍術、劍という言うより」

「ダンス見てるようです!!」

久々に兄の幼馴染みの龍姫に、劍術を習って以来、ユーリなどの劍士相手にも怯まないようになっていたが、まだ、女神化しても、勝てなかったのは言うまでなかった。

龍姫の劍術を見ていた、女性陣は、騎士の劍とは違い、まるで、踊っているように見えたらしく、見惚れていたのだった。

「優華龍ちゃん!! ユニっち!! 今日はおっさんの技、教えてあげるわよ、取りあえず、あの丸太に注目!!」

優華龍とユニは、本来の得物である、ライフルで出来る技を修得しようと、レイヴンの弓技を参考に、ライフルの技にしようとしていたのであった。

レイヴンは、的が描かれた、建てられた丸太に向かって、いつものように、弓で矢を放つて、命中させ、しばらくすると

「チユドゥン!!」

「スゴイ、一本の矢で丸太が、木端微塵になった!!」

「なに、簡単よ、矢で、術式張りつけただけよ、優華龍ちゃんとユニっちは、銃に変形できる神機が、使えるから、やり方は、一緒よ、さあ、やってみよう!!」

「はい!!」

「どうして、レイヴンなんだ!!」

「すまん、俺が教えた」

丸太が木端微塵になったを見た二人は、レイヴンから教わることにしたのだが、戦闘スタイルが似ているのに、自分を選んでもらえなかったのが悔しかったのか、アルヴィンは落ち込んでしまったので、ルドガーが二人に教えていたことを明かしたのであった。

優華龍とユニは特技「時雨」を修得しました

「今日の、訓練はここまで、作戦決行の日まで、休んでおけ」

「はい!!」

そろそろ、いい頃合だったので、アーストが号令を出して、訓練を切り上げて、一行は朝食を取るため、教会に帰還することにしたのであった。

スキット：龍姫達の武術

エステル「それにしても、龍姫達の武術は師匠に教えてもらったのと、動きが違いますね」

真龍姫「お姉ちゃん達は、元特務エージェントなんだから」

龍姫「真龍姫、違うよ、ボクたちの剣術は、天然理心流が元になってるって、前に教えたよね」

真龍姫「そうだった」

フレン「天然理心流はどのような剣術の流派なのですか？」

星龍「フレンさん、天然理心流は、剣術だけじゃなく、格闘術と槍術もひつくるめた総合武術の流派なんですよ」

ミラ「何、そんな流派が、地球に存在するのか!!」

龍音「それと、新選組も、天然理心流を修得していたんですよ」
うずめ「確か、フレンの部隊みたいな、色の服着た集団だっけ、背中に、「誠」って描かれた服だったから覚えてるぜ」
ユーリ「正しく、フレン隊だな」

まさかの

朝の訓練を終えた龍姫達は、いつも通りに教会に帰還していたのである。

何事もなく、教会の扉を開けると、

「ダミュロン!!」

「ダミュロン? おっさんは、レイヴンよ」

「鳴流神龍姫と申します、失礼ですが、御名前をお聞きしてもよろしいでしょうか?

「わたしとしたことが、テルカ・リュミレース騎士団所屬、キャナリよ」

「オレは、ギルド、凛々の明星のユーリ・ローウエルだ」

「わたくしは、現テルカ・リュミレース騎士団、団長、フレン・シーフォと申します」

なんと、以前、レイヴンから人魔戦争で、遺体も見つからなかった、イエガーの恋人でもある、女性の、キャナリが、出迎えてくれたのである。

顔見知りのレイヴンは、照れくさそうに、レイヴンと名乗って、奥へと行ってしまい、龍姫達は簡単に自己紹介を行ったのであった。

「ちよつと、待って、あなたが騎士団長? 確か、アレクセイだったような」

「まさか、アンタ、犯罪神に生き返らせたんじゃないのか、アレクセイは、帝国にも内緒

で、悪事働いて、今、このゲームギョウ界の犯罪組織とつるんで支配する気なんだよ」
「それ、本当なの？」

「はい、ユーリさんが申しあげたとおりです」

「そうだったの、わたしは、確かに人魔戦争で、命を落としたわ、ツクヨミって人が、この姿のまま、生き返らせたのよ」

「なるほどね、天界は、女神がシエアなしで生きていけるように、導く人を派遣してくれただ」

「女神？ シエア？」

「説明するより、見た方が早い、龍姫達!!」

「わかりました!! セットアップ!!」

「ちよつと、彼女たち、いきなり、光り出したけど、大丈夫なの？」

キャナリはフレンが騎士団長と名乗ったので、アレクセイじゃないのかと言い返してきたので、ユーリが簡単に説明して、ローエンがユーリが言った通りだと言つて、キャナリは、ツクヨミにこの次元のゲームギョウ界に転生されたと告げて、女神を知らなかったたので、アーストが龍姫達に女神化の指示を出して、一斉に、龍姫達は女神化するため光り出したのを見たキャナリは驚いてしまったのだった。

「ええ!!」

「驚かして、すいません、この姿では、パープルドラゴンハートと申します」

「同じく、ブラックドラゴンハートです」

「ジュード、この娘たち、まさか」

「そういや、アルヴェイン、龍姫達の女神姿、初めてだったね」

「龍姫達、ひげヴェインよりカツコイイ〜」

龍姫達の女神姿を見たキャナリは、龍姫達の変貌ぶりを見て、腰を抜かしてしまい、真那以外の女神化を見たアルヴェインは、以前にジュードから教えてもらっていたが、龍姫達の女神姿を見て、驚いて、エルは、カツコイイと言っていたのだった。

ケジメと言うのも

レイヴンの顔見知りの女性で、人魔戦争で小隊長をしていた、弓の使い手の女性で、キャナリに、龍姫達が女神であることを明かして、シエアについても、説明したら、シエアの正体が、女神を信仰する、人間の心だと言う事実を知って、驚いていたのであった。「みんなが、女神を信仰してるわけじゃないのよ、人間は、自分で行動しないと行けないの」

「キャナリさん、ボクたちは、食事などで、魔力を摂取してるので、大丈夫なんですけど」
「それは、わかってるわ、それと、三年前、単独でも、助けに行くのが普通よ」

やはり、龍姫達とユーリ達とジュード達と同じく、人の心で命を保ってる、ベールとロムとラムに、キャナリは激怒しており、龍姫達は、きちんと一日三食食べていたらいように、リンカーコアで魔力を補充していることを明かしたのであった。

「みなさん、先ほど、コンパさんから、連絡があつて、アイエフさんの面会の許可が下りたと言うことです」

「さてと、せっかくだ、フレン、一緒に、説教、しに行こうぜ」

「そうだね、彼女は、許される範囲を超えてしまった以上、問い詰めない」と

「この老いぼれも一緒に行くぜ、あの小娘には、ケジメ付けてやらんとな!!」
「ドン、怪我人だよ」

そんな時だった、ちょうど、病院に居る、コンパから教会に、ガットウーゾにコテンパンにされて、入院させられているアイエフの面会許可が下りたことをセドナが龍姫達が集まっている会議室に知らせに来てくれて、見舞いに行くがたら、ユーリ・フレン・ドゥンが説教をしに行くことになり、ネプテューヌ・アーストを含めた、五人で病院に向かったのであった。

「はいつていいわよ!!」

「邪魔するぜ」

「アンタ達、見舞いに来たってわけじゃなそうね」

「おまえさんと、話をしに来たんだよ、おめえさん、ケジメを付ける覚悟は、出来てるんだらうな?」

「ケジメって、何よ? わたしは、何も悪いこと、してないわよ」

「何も、悪いこと、してないだと、そうかよ、三年前、ダチの癖して、ネプ子達を見殺しにした野郎が」

病院のアイエフの病室に到着した一行は、単刀直入に、アイエフの今まで、しでかしたことのケジメについて話をしに来たのである。

やはり、アイエフは、今だに、自分に非がないと言い放ったので、ユーリが叱咤したのであった。

「あれは、ネプ子達が・・・」

「また、あの嬢ちゃんに責任押し付けんのか」

「あなたは、ネプテューヌ様の友人でありながら、イストワールの側にいたにも関わらず、本性を見抜けなかった」

「だって、ネプ子達は女神なのよ、国の責任は、統治してる、女神が負うものよ!!」

「だから、その女神つてのが、間違っていることに、気が付かんのか!!」

「くだねえ。そんな話なら、コンパとでもすりやいいだろう、オレたちや、アンタの愚痴に付き合ってる暇ないんだよ」

「どうしてよ!!」 アンタ達は、シエア無くなってもいいって言うの!!」

「悪いが、シエアに頼るほど、落ちぶれてないんでな」

アイエフが、今だに、イストワールに服従しているのを見かねたドンとユーリは呆れて、ネプテューヌと一緒に、病室を後にしようとしたら、そこに

「エステル、ついて来たのか」

「はい、龍姫達に護衛をしてもらって、此処に、それと」

「わたしも、聞かせてもらった、シエアがこの世界に混乱を招いている以上、シエアでは

どうにもならん」

「だったら、なんで、ネプ子達に協力してるのよ!!」

「簡単だな、ほっとけない病なんだよ、オレは、目の前で、助けられる命をほっとけない病気なんぞでな」

「それに、キミは、理想化しすぎてる」

「アイ、これだけは言わせてね、自分に出来ないこと、他人に求めちゃ、ダメなんじゃないかな?」

「ワハハハ!! 娘っ子、良いこと言うじゃねえか、そういうこった、おめえさんは、あの嬢ちゃんの友でもねえ、イストワールって奴の、道具しかねえってことだ、責任の取り方はおめえさんが決めな!!」

「あなたに、女神の友を名乗る資格はありません!!」

エステルが龍姫に護衛をしてもらいながら、アイエフの病室に入って来て、後からデュークも入って来て、アイエフの概念を悉く、打ち砕いて、龍姫は、アイエフに、自分で出来ないことは他人に求めてはいないのかと、問い詰めたら、ドンは諭して、病室を後にしたのであった。

騎士団長との対談

アイエフのお見舞いっいでに叱咤していた一行は、教会に戻ってきたのであった。

ちょうど、昼食の時間だったので、昼食の準備に取り掛かったのだった。

「それにしても、龍姫達の大豆料理は、いつ食べても、うまい!!」

「おっさんでもいけるわよ!!」

「ダミュロン、自分でおっさん言っただうするの」

「結局、ユーリは、甘い物に目がないんだね、龍姫様特製の野菜てんこ盛り入った、ケーキに」

「フレン、それ、わたしが焼いたものなんですよ」

「ミラ、食べ過ぎよ!!」

「老いぼれでも食える飯作れるとはな!!」

料理の数々に舌鼓を打って、楽しい昼食が終わり、各自、作戦決行まで、休むことになり、下宿部屋に戻ろうとしたのだが、

「フレンさん、ちよつと、いいですか?」

「どうなさいました、ユニ様、自分でよければ、相談に、乗りますよ」

「ありがとうございます、フレンさんは、自分に、劣等感って抱いたことってありますか？」

「どうやら、ユニは、あの、皮肉屋のユーリの幼馴染みでありながら、騎士団長までのぼり詰めた、フレンに、相談を持ち掛けたのである。」

体が、ジュード並に成長して、コンプレックスだった胸も、ボール並に大きくなっても、内面的に、やはり、自信を持つことが出来なかつたのである。

「もちろん、ありますよ、騎士団長になれたのも、殆ど、ユーリ達のおかげなんですよ」「それって」

「はい、自分が、下手に動けない時に、ユーリが、自ら、損な役回りを買って出てくれたおかげで、騎士団長になれたんです、ですが、自分の功績じゃなく、ユーリ達の功績であるはず、ですが、ユーリは、賛辞を受けようとしなかつた、なぜなら、罪を犯した以上、賛辞を受けれないと、そして、おまえが、表舞台で、やってればいいと、言われてしまいましたっただす」

「やっぱり、フレンさんとユーリさんは、喧嘩しても仲がいいですね、以前のお姉ちゃん達なら、そうは、行きませんでした、けど、お姉ちゃんが、シエアに対するこだわりを捨ててくれた以上、自分もシエアに頼らないで行けそうです、すいません、相談を待ちかけてしまつて」

「別に構いませんよ」

「つたく、何、恥ずかしいこと、話してんだよ!!」

「そうだよ、ユニ、お姉ちゃんが、傲慢に振る舞っていた上に、龍姫達の気を損ねたんだよ、もう、本音で、話してね!!」

「ユーリ!! 済まない」

「うん、もうアタシ、素直になることにしたから、それと、自分のことは、今から、わたしって呼ぶ!!」

そこに、二人を呼びに来た、ユーリとノワールがやって来てしまい、話を聞かれてしまったのだった。

黒と紫、決意

内面的にコンプレックスを抱いて、今だに、自分に自信が持てなかったユニは、フレシに相談したことによって、今までの自分に踏ん切りが付けられたので、一人称が、「アタシ」から「わたし」になっていたのだが、たまたま、呼びに来た、ユーリと姉に相談内容を聞かれてしまったのであった。

そんなこんなで各自、解散になったのだが、ノワールは先ほどのフレシの話聞いて、ネプテューヌの部屋に向かったのである。

「ネプテューヌ、今、大丈夫？」

「別にいいけど、どうしたの？」

「此処では、ちよつと、闘技場に来て、但し、あなた一人で」

「わかった」

どうやら、自分でも、思い当たる節があったようで、ネプテューヌに一人で、闘技場に来て欲しいと言って、先に闘技場に向かったのであった。

「お姉ちゃん？」

「ネプギア、このことは、皆に内緒ね」

「うん」

ネプテューヌもネプギアに口止めして、闘技場に向かったのだが、

「あいつ、まさか」

「どうやら、お二人は、お互いのけじめを付けに向かったんだろう」

「仕方ない、お姉ちゃんとして、見守りに行きますか」

「賛成!!」

やはり、龍姫・星龍・ユーリ・フレンには、ばれていたようで、ラピードと龍ラピを連れて、二人に悟られないように、闘技場に向かったのだった。

「どうしたの、いきなり、闘技場に来て欲しいなんて」

「今まで、あなたを目の敵したり、自分より仕事が出来ないのに、国民から慕われてるあなたを馬鹿にしたこと、それに三年前、自分の所為で、幽閉されちゃったこと、そして、女神としての、そう、ノワール、いや、ブラックハートとしての最後の務めを手伝ってほしいんだよ」

「わかった、わたしも、ネプテューヌもとい、パールハートとして最後のお仕事手伝ってよね」

「いいよ、あなたが、わたしとするなら、これだね」

先に闘技場に到着していたノワールは、今までの贖罪を含め、謝罪をして、粒子化し

ていた愛刀「天道龍」を左腰から抜刀して、ユーリとは違い、鞘はホルダーに刺さったまま、剣先をネプテューヌに向けて、構えたのである。

「そうだったね、ノワールは、いやそうに、やってたくせに、思いは全部この刀に乗せる!!」

「・・・いいよ、来て!!」

「ふん、あいつら」

「どうやら、女神様も、対して、ボクたちと変わらないんだね」

それに応えるため、ネプテューヌは粒子化していた愛刀「不動正宗」と「月光龍」を左腰に二本差しにして、器用に抜刀して、左に持っている、月光龍を、構えて、無殺傷の結界がフィールドに張られて、そこに龍姫達が到着して、見守ることにしたのであった。

「此処が、ユーリとフレンが、やり合ったところなんだ」

「まさか、闘技場に、こんなシステムを搭載するなんて、龍姫達はすごいね」

なんと、結界の中では、あのテルカ・リュミレースの街、オルニオンの夕陽が立体映像で作られていたのであった。

誓い

ネプテューヌとノワールは、三年前、お互いの思いをぶつけるため、闘技場で、フィールドに、立体映像で、テルカ・リユミレースの街のオルニオンの夕焼けを再現して、お互いの剣術をぶつけていたのであった。

「ねえ、新しい、名前、考えたの？ 虎牙破斬!!」

「そういえば、決めてなかった、今は、楽しいもうよ！ 魔神剣!!」

ノワールは、龍姫達と同じく、剣術と体術とユーリの剣技を合体させて繰り出しており、対するネプテューヌは、龍姫から教わった、二刀流で、対抗していたのであった。

「ノワール様、いつの間に、君の技、覚えたんだ？」

「たぶん、天界の依頼で、一緒に行った時じゃねえ」

「こうして見ると、星龍と、やってた時、思い出すよ」

「龍姫ちゃんには、一度も勝ったことないからね」

二人の手合わせを見守っていた四人は、二人の剣技を見ながら、思ったことを述べていたのである。

「そろそろ、決めるよ、飛ばして行くわ!!」

「そうだね、わたしも、飛ばしていくわよ!!」

ネプテューヌとノワールはお互い女神化して、オーバーリミッツLv3を発動して、
「ノワールのバリアジャケット、ユーリの服をモデルにしているのね、鳳凰天翔脚!!」

「あなたは、侍みたいね、一応、かわいいドレスタイプも作ってあるわよ!! 峻円華斬!!」
ネプテューヌの二刀と体術が、ノワールの剣と拳が、ぶつかり合い、そして、

「これで決めるわ!! 駆け抜けること、雷光の如し!! 獣皇雷迅剣!!」

「お終いにしましょう!! 閃け!! 鮮烈なる刃!! 無辺の闇を鋭く切り裂き、仇名す者を微塵に砕く、決まったああ!! 漸毅狼影陣!!」

「あれは、ユーリの秘奥義!!」

「お姉ちゃん、何してるんですか!!」

「お前ら、なんでここにいるんだ?」

「だって、四人が闘技場に向かったって、街の人が教えてくれたんですよ」

時空翔烈紫龍女神に覚醒しているネプテューヌは雷を落としながら駆け抜けて、落雷を発せさせる秘奥義を、黒衣の断罪女神に覚醒したノワールは龍姫をはじめとする速さに自信がある剣士なら取得している、敵を中心に、四方八方から陣を描きながら、狼が獲物を襲うように斬りつける秘奥義で向かい打ったのを見たフレンは驚き、そこにネプギア達が到着したのである。

「わたしの負けだね、あのままだったら、勝ってた」

「悪いわね、自分が大剣が合わないから、二刀流に、転向した会があったわ」

ノワールが膝を付いたことよって、負けを認めたので、ネプテューヌは近づいて、そのまま寝ころんで、

「約束して、人の笑顔のために戦い」

「例え、歩む道が違ってても」

「背負うものが違ってても」

「賛辞を受けても、目の敵にされても」

「プラネテューヌもラスティションもそれは変わらない」

「わたしたちには互いに手が届かないところがある」

「だからわたしたちは・・・」

「一人じゃない!!」

「ワン!!」

「ユーリ!! それにみんな!!」

「二人で闘技場に行ったから、気づかないように後を着けたんだよね」

刀をぶつけて、お互いの誓いを建てていたら、最後の一言の部分でユーリ・フレン・龍姫・星龍が述べて、ラピードと龍ラピがちよこんと座って、全員がフィールドに降りて

いていたのである。

「龍姫さん・星龍さん、ユーリさん・フレンさんに、御二方は、影響されたんですね」
「帰ろうぜ!!」

「ホント、ユーリは、ツンデレなのね」

「悪かったな、そのツンデレで」

こうして、教会に帰還したのだった。

潜入!! ゲームギョウ界のザウデ不落宮

剣で語り合ったネプテューヌとノワールは、もう女神としてでなく、大切な親友としての誓いを建てて、教会に戻ってきているのであった。

スキット：友として

ネプ「そういえば、ノワールも、わたしも、アレクセイに殺されたんだっけ、生き返る代償として」

ノワ「以前修得していた技を封印された、けど、龍姫達の剣術を見て、ちゃんとした武術を取得し直したんだっけ」

ネプ「わたしは、龍姫達に教えてもらってたかね」

ノワ「わたしは、傲慢に振る舞ったツケで、闘技場で、ユーリに、お灸を据えられた」

ネプ「そうだったね、そのおかげで、今があるんだよ」

ノワ「そして、自分が、一人で抱え込んでいることに気づかせてくれた、もう、一人じゃない」

ネプ「うん、わたしや、龍姫達に、ユーリ達、ジュード達もいる」

ノワ「もう、あの頃、シエアで争っていたことが、馬鹿みたい」

ネプ「ノワール、親友でいてくれる？」

ノワ「何言ってるの、わたしたち、幼馴染みなんだよ」

ネプ「そうだった」

「今日は、疲れちゃったからね」

「そうだね、わたしも」

「さてと、ボクたちも休みますか」

流石に、疲れたらしく、今日は、ゆっくり休むことにしたのであった。

そして、翌日、

「みんな、揃っているようだな」

「いつでも、行けます!!」

「坊主ども、死ぬんじゃねえぞ!!」

「ルドガー、いつて来い!!」

「ダミユロン」

「これより、アレクセイ打倒作戦を決行する!!」

「アルティメット・サジット・アポロドラゴン!! 召喚!!」

アレクセイが待ち構えているザウデ不落宮に乗り込むため、選抜メンバーは全員、プラネタワーの屋外展望台に集合して、三龍神を召喚してアレクセイが待ち構えているザ

ウデ不落宮に乗り込むのだった。

もちろん、エルも一緒に行くことになってしまったので、ルドガーが責任者である。ドン達が防衛組を率いてくれることになっていたので、背後を突かれないのであった。

そんなこんなでザウデ不落宮に到着したパーティーメンバーは、真正面にアレクセイの部下たちが当たり前のように待ちかまえていたので、

「此処は、がら空きだな、カロール、頼んだ」

「任せて、これで潜入できるよ」

「みんな、行くぞ!!」

やはり、通気口の金網をカロールが外して、そこから中に潜入することにしたのであった。

ザウデ不落宮に潜入した一行は、凛々の明星の案内で、奥へと進んで行くことにしたのだが、

「かくれんぼって歳じゃねえだろう」

「待ってたぜ、暴力集団よ!! おまえらの所為で、こっちは、出番、削られたろうが!!」

そしてそこのおっさんにはマジック様の仇なんぞでな、アタイらを倒しな!!」

「いい加減に、目を覚ますんだ!! キミは、アレクセイにいいようにされてるだけだ!!」

「アレクセイって誰だよ!!」

「何? アレクセイを知らないんだ、ってことは」

「おまえ、捨て駒にされたな」

「好き勝手言いやがって、纏めて相手してやる!!」

以前、イエガーが待ち構えていた部屋に、リンダとワレチユーが待ち伏せして、龍姫達とユーリ達とジュード達にいちやもんをつけ出したので、フレンが説得したが、聞く耳を持たなかった挙句、マジック・ザ・ハードがアレクセイの捨て駒だったことを知らなかったらしく、おまけに、自分以外の犯罪組織のメンバーが全員アレクセイの部下になっていることも気づいておらず、その上、捨て駒にされていたことも気づいてなかったのだった。

アレクセイ、再び

ザウデ不落宮に潜入した一行を、しばらく顔を見せなかった、犯罪組織の下っ端こと、リンダとワレチュエーが、以前、イエガーが待ち構えていた部屋に隠れていたのだが、どうやら、アレクセイのことを知らなかったようで、個人的に、戦いを仕掛けてきたのが、「おまえたち、さっさと行け!!」

「此処は、任せるピョクソン!!」

「ありがとう、行こう!!」

「死んじやだめだからね!!」

「待ちやがれ!!」

なんと、イエガーの部下だった、ドロワットとゴシユが、リンダ達の相手を買って出してくれたので、その際に、龍姫達とユウリ達とジュード達は、先に進むことにしたのであった。

仕掛けは解除したままだったので、そのまま奥へと進んで行くことにしたのである。

そして、ついに、あの男との再会を果たしたのであった。

「また、揃いも揃って、はるばる、こんな海の底へようこそ」

「また、てめえとは、此処でやり合う羽目になるんだな、おまけに、クソ教祖まで、いるとはな」

「ネプテューヌさんには、幻滅させられました、三年前、ギョウカイ墓場にマジック・ザ・ハードを討伐に行き、そのまま、姉妹揃って、幽閉されたことは、驚きました」

「確かに、ネプテューヌは、怠惰だったけど、それは、いーすん所為でしょう、本当は知ってたんだからね、ユーリ達、いや、凛々の明星がこの世界に来ることを!!」

「どうして、それを!!」

「すいませんが、こちらで、勝手に調べさせてもらいました、凛々の明星のみなさん及び、エステルさんを含む、皇族関係者の個人データが、隠してあった、USBが見つかりましたので」

「なるほど、おまえはあの時、ユーリの顔を見るなり、顔色を変えたのは」

「ユーリが殺人をしたことを知っていた、それと」

「女神救出に行かせなかったのと、あの二人だけで、行かしたのは、あの二人は、捨て駒だったのね」

「悪いが、諸君には、しばらく次元旅行をしてもらおうとしよう」

「はい、ごめんなさい!!」

「そんな、レイ!! きゃあああ!!」

「パティ!!」

「エル!!」

アレクセイとイストワールとの再会を果たした一行は、討論を繰り広げていたら、アレクセイが、なんと、この次元にいるはずがないキセイ・ジョ・レイに指示を出した瞬間、いきなり、空間が割れて、一行を吸い込もうとし始めたので、龍姫達とユーリ達とジュード達は、しがみ付いたのだが、

「それでは、諸君、楽しみたまえ!!」

「アレクセイ!!」

「うあああああ!!」

やはり、そのまま吸いまれてしまい、龍姫達とユーリ達とジュード達は次元の亀裂に閉じ込められたのだった。

地球編

客員女神の幼馴染みとの再会

ザウデ不落でアレクセイ達との討論をした龍姫達とユーリ達とジュード達は、キセイ
ジョ・レイによって次元空間に放り込まれてしまったのである。

そして、

「うくん、みんな、いる？」

「大丈夫だよ、それより此処どこ？」

「どうやら、どこかの森の様ですね」

「龍姫、どうしたんだ？」

「そんな、帰って来ちゃった」

「帰ってきたって!! まさか!!」

「うん、ここ、ボクが生まれた、世界、地球だよ」

「こんな、形で、この世界に来るなんて」

どうやら、龍姫達とユーリ達とジュード達は森の切り拓いた場所に飛ばされたらし
く、幸い、無傷だったのだが、龍姫がある方向に向けて、帰ってきたと言ったので、ほ

かのメンバーは今いる場所が、何を隠そう、龍姫達が生まれて、一度死んだ世界、太陽系第三惑星の地球に飛ばされたことを知ったのである。

流星に、今の格好で街に行くのは不味かつたので、夜を待って、龍姫達の案内の元、とある人物に協力を求めるため、とあるファミリーレストランの近くの路地裏のマンホールから地下に降りて、あの組織に行くことにしたのだった。

スキット：マンホール

龍姫「ごめん、ボクはこの世界じゃ、死んだことになっちゃったから、こんな所から行くことになって」

ユーリ「気にすんなって、オレは、牢屋とか、入ってたからな、こんな場所なれてんだよ、けど、姫様には、キツイカモな」

エステル「わたしは、大丈夫ですよ」

フレン「すいません、わたくしが、鎧姿なせいで」

ミラ「フレン、仕方ないだろう、わたしたちは、異世界人である以上、見つかったら、何されるか、溜まったもんじゃやないからな」

カロル「そうだよ」

真那「なににせよ、あの義妹に会うしかないんですから」

「此処だよ、確か、これでいいはず」

「鳴流神龍姫、認証完了しました!!」

「さて、龍音の幼馴染みに会いに行きますか!!」

そんなこんなで道なりに進んでいった龍姫達とユーリ達とジュード達は、如何にも、秘密結社の扉を発見したので、ダメもとで龍姫が指紋認証をしたら、なんとか、扉のロックが外れて、扉が自動で開いたので、中へと入って行ったのである。

それほど、道に迷わずに、指令室の前までやってきたので、
「腹括って行きますか!!」

「オウ!!」

意を決して中に入ったのであった。

そこに待ちかまえていたのは、

「ようこそ、ラタトスクへ、わたしは、五河琴里よ」

「久ぶりだね、琴里」

「そんな、ありえない、だって、龍姫お姉ちゃんと龍音は」

「確かに、ボクたち姉妹は、一度、死んでるけど」

「転生されたんだよ、天界の女神様によって」

「わかったら!! 匿って欲しいんだよね!! いいよ、部屋、用意してあげるよ、龍姫お姉ちゃん達の部屋、あのままにしてあるから」

「ありがとう、琴里」

「サンキュー!!」 龍姫」

赤い髪をツインテールに結っており、白のブラウスに、ジャツケットを羽織った少女で、リボンが黒の時は指令モードになるのだが、龍姫が相手だと、年相応の性格で甘えだすようで、龍姫達とユースター達とジュード達を信用してくれたようだったが、念の為に武器を没収されたのは言うまでなかった。

地球でも・・・

キセイジヨ・レイに地球に飛ばされた龍姫達とユーリ達とジュード達は一刻も早く、ゲイムギョウ界のザウデ不落宮に戻るため、龍姫達が所属していた、組織、ラタトスクの最高司令官で龍姫達の幼馴染みである、五河琴里を頼ることにしたのであった。

龍姫達は地球では、死んだことになっていたりするため、今は、ラタトスクが所有する戦艦「フラクシナス」の用意された部屋で、待機させられていたのであった。

「なるほど、この世界は、各属性の精霊石で、精霊になるのか」

「はい、但し、女の子だけですけど」

「なんか、女神メモリーみたい〜」

「女神メモリーとは違って、適正が無くても、女性なら、誰でも精霊になれるんだよ、女神との違いは、シエアなしで、変身出来るんだけど、対応した属性でしか、術技が使えないんだよ!!」

「琴里さんは、精霊と言うことなんですネ」

「はい、みなさんがご存知の、火の精霊、イフリートなんです、琴里ちゃんは」

「ミラより、位は下になるんだ」

「どうやら、そうらしい、四大もこの世界でも、出て来れるみたいだから、後で驚かせてみるか？」

「ミラ、いたずらは程々にしなさいね」

ユーリ達とジュード達は、地球についてとラタトスクの最高司令官で龍姫達の幼馴染みである、五河琴里について質問しており、龍姫達が琴里が五年前に精霊になったことを教えられて、火の精霊である、イフリートであることを聞いた、ミラは、精霊の王の威厳を見せることに決めていたのを、同じく精霊で、双子の姉である、ミュゼに注意されていたのであった。

誰かが、呼びに来るまで、部屋で待機していたのだが、

「緊急警報!! 緊急警報!! 精霊を確認、直ちに、現場に急行せよ!!」

「やっぱり、楽できそうにねえな」

「お姉ちゃん、行くんでしよう、って、言っても無駄か」

「もう、みんな、待つて下さい!!」

「ローエン・エルは、ボール達の見張りを頼む」

「はい、かしこまりました」

「わたくしが、覚醒してないばかりに・・・」

いきなり、警報が鳴り響いたので、龍姫達が勢いよく飛び出したのを見た、ユーリ達

とジュード達は一緒に、部屋を飛び出して、転送装置がある場所に向かってしまったのだが、シエアがない地球に飛ばされてしまったので、人間の寄りになっていないベール・ロム・ラムは、寝込んでしまったので、アーストがローエンとエルに留守番を頼んで、龍姫達の下へ急いだのだった。

流石に、地球で、騎士の鎧では不味いので、フレンは、ラタトスクが開発した対精霊用に開発された服を着ているのである。

先ほど、各自の得物は返却されたので、粒子化して、携帯して、現場に向かったのだった。

遭遇、アンチスピリットチーム!!

ラタトスクに保護された龍姫達とユーリ達とジュード達は、緊急警報を聞いて、精霊が現れた現場に急行しているのである。

龍姫達はパーカワソピについているフードを深々と被つて、顔を隠して、現場に急行しているのである。

閑話休題

「あれ、十香だね、折紙までいるよ」

「おい、あの武装!!」

「プロフェツサーユニット!! まさか、折紙も女神なの!!」

「違うよ、アンチスピリットチーム、略して、ASTって言う、特殊部隊のエージェントなんだ、詳しい話は、後でしてあげる」

「その通りだ、取りあえず、あの、集団はオレが引き受ける」

「ユーリ一人じゃ、荷が重いよ」

「各自、一般市民の救出が最優先だ!!」

現場に到着した龍姫達とユーリ達とジュード達はふと見上げると、覚醒前の女神が着

ているプロフェツサーユニットに似ている武装をしている銀髪で、龍姫と同じくらしい年頃の少女の鳶一折紙と、龍姫と龍音とユーリと同じく、黒い長髪で、龍姫同様に、リボンでポニーテールに結って、紫色の鎧を身に纏った少女だが、精霊の夜十神十香が、龍姫達の幼馴染みで、真那と琴里の兄でもある、五河士道を護衛しながら、ある精霊と戦っていたのであった。

念の為龍姫達はフードで顔を隠して、逃げ遅れている一般市民を誘導しながら、ユーリとフレンとジュデイスが、アンチスピリットチーム、略して、A S Tの部隊を引き受けてもらっている間に、怪我人のトリアージなどを行っていたのである。

「貴様ら!! 何者だ!!」

「名前を聞くとときは、自分から名乗るもんだぜ!!」

「そうね」

「それに、僕らは戦う理由がない、此処は退くんだ!!」

「悪いが、精霊に協力するのなら、タダでは、返すわけには行かないな!!」

A S Tの部隊長らしき人物の説得に当たっていたユーリ達は、攻撃を、得物で受け流しなら説得を試みていたのである。

そんな時だった、

「死ねえええ!!」

「うわあ!!」

「しまった!! あつちには、士道が、ごめん、みんな!!」

「待ってください!! 龍姫姉様、変身!!」

「お姉ちゃん!! 待て!!」

ASTの隊員の一人が、問答無用にミサイルを発射してきたのだ。

飛んで行った方向を見た龍姫は、士道を発見してしまい、そのままだと、ミサイルが、士道目掛けて、飛んで行ってしまったので、正体がばれるのを覚悟に、女神化して、一目散に飛んで行ってしまったので、真那も女神化して、龍音も女神化して、士道救出に向かったのだった。

エステルの補助魔術も間に合わないのである。

「士道!! 魔神剣!!」

「え?、誰だ?」

「大丈夫? 士道?」

「まさか、龍姫、なのか?」

「話は後だよお兄ちゃん!! 逃げてく!!」

「士道さん、さっさと逃げろ!!」

「まさか・・・おまえ、真那か・・・それと、龍音・・・」

「此処は、言う通りにした方が、生存確率が上がる・・・」

「龍姫、後で、話を聞かせてもらおうぞ」

「いいよ、久しぶりに、十香と、一緒に、戦うんだから」

土道に、向かって飛んで行った、ミサイルは、龍姫が斬撃を飛ばして、全弾、撃ち落として、土道との再会を果たしたのだが、龍姫と真那は土道に逃げるように言ったのだが、頑なに聞かなかったので、仕方なく、防衛に入ったのであった。

爆誕!! 土織ちゃん

幼馴染みである、五河士道と再会を果たした龍姫だったが、アンチスピリットチームごとASTと一戦交えることになってしまったのであった。

「士道、わたしに構わず、逃げて!!」

「嫌だ、龍姫、おまえが死ぬところを、もう見たくないんだ!!」

「何、やってやがる!! さっさと逃げやがれ!!」

「此処は、僕らに任せて早く!!」

士道は、女神化して、自分を逃がそうと、戦っている龍姫達を置いて逃げるわけには行かないと、言って、頑なに、龍姫達を守ろうとしていたのであった。

フレンの説得及びユーリの指示も聞こうとしなかった。

逃げようとしないうちに士道に龍姫は、士道に、近づいて、

「わかった、今からわたしと戦デイトしよう」

「ありがとう、龍姫」

二人は面と向かってお互い顔を向いわせて、そして、

「!!」

「お姉ちゃん……」

「龍姫〜!!」

「龍姫姐、大胆なのじゃ……」

「いくらなんでも、今は、」

「戦闘中よ!!」

なんと、龍姫と士道は、お互いの唇を合わせて、公衆の面前で、キスをしたのである。もちろん、その場にいた、メンバーは、全員、呆然としており、一斉に突っ込んでいたが、龍姫と士道は、二人だけの空間を作っておりそして、

「何だ、俺の体が光って、うわああ!!」

「まさか、お姉ちゃんの女神の力を……」

「士道〜!!」

「お兄ちゃん〜!!」

どうやら、龍姫の紫龍の女神の力にも反応したようで、士道の体内に、龍姫の女神の力が流れ込んでしまったようで、いきなり士道の体が光り出したので、折紙を筆頭に、士道に近付いたのである。

そして、光が収まったら、そこにいたのは、

「あれ、みんな〜どうしたの?」

「まさか・・・」

「お兄ちゃんが、お姉ちゃんに」

「なんか、体が、あれ、ない・・・まさか、これ本物・・・わたし、女になってるのく!!」
身長はそのままだったが、髪が紺から、薄い水色に変わっており、髪型がツインテールで、胸が、龍姫に匹敵するぐらいになってしまい、右紫左金のオッドアイで、淡い紫を基調にしたワンピーススタイルのドレスに、その上から、龍姫のお揃いの紫色の胴丸を装着し、胸の隆起を抑え込んでいたのだ。

「また新たな精霊か、仕方ない、全員、撤退!!」

「落ち着け!! 士道さん、お姉ちゃんの女神の力を使えるようになったただけだ、元の姿をイメージしたら、元に戻る、こうやってな」

「うん、やってみる、ふくちゃんもと元に戻ってるな、龍姫」

「ごめん、士道、わたしは、この世界では・・・それにもう人間じゃないから」

「何言ってるんだよ!! 今の姿をひっくり返して、鳴流神龍姫だろう、琴理の所に行こう」
「そうだな、オレも疲れた、帰ろうぜ」

士道が女神に覚醒したのを見たASTは大勢無勢と判断して撤退を余儀なくされて、一目散にその場から逃げて行ったのを確認した龍音は、女神に覚醒して、てんやわんやになっている士道に、女神化の解き方を見せたら、飲み込むが早かったので、士道は、元

の男の姿に戻って、龍姫達と一緒に、琴理に報告しに行くことになったのであった。

士道と異世界人

なんとか、戦艦「フラクシナス」に戻ってきた龍姫達は、ラタトスクの最高司令官で火の精霊でもある琴理に報告した後、先ほど遭遇した精霊と一緒に、ロビーに全員が集まっていた。

「俺は、龍姫達の幼馴染みで、五河士道イツカシドウって言います」

「オレは、テルカ・リュミレースって言う異世界で、ギルドに所属してる、ユーリ・ローウエルだ、こっちがラピード」

「ボクはエレンピオスで、医学を研究してる、ジュード・マティス、気軽に、ジュードって呼んで」

「わたしは、夜刀神ヤトガミ 十香とおかだ」

「わたしは、鳶一折紙トビイチオリガミ、士道の恋人・・・」

士道達は、ユーリ達とジュード達とお互い自己紹介を済ませたのだが、折紙の恋人宣言を聞いて驚いていたのは言うまでなかった。

そして、保護した精霊と言うのが、

「まさか、おまえとはな」

「アンタなんつて、嫌いよ!!」

「分史世界のミラだよ・・・」

「どうして、次元震の反応が」

「つまりは、異世界から、来た場合は、次元震が起きるんじゃない、運よく、わたしたちは起きなかっただけ」

なんと、分史世界のミラだったのだが、龍姫達のパーティーメンバーのミラとは違い、服装が、民族衣装のような服装だったのであった。

そして、

「真那・・・」

「兄様、真那、もう」

「わかってる、人間じゃなくなつたんだろう、けど、それでも俺の妹には変わらない、それにしても、見ないうちに、大きくなつたんだな、お帰り、真那」

「ごめんなさいっ!! お兄ちゃんっ!!」

「大きくなつても、変わらないんだな、変身までして」

久々の兄妹の再会を果たした土道は、真那の心身ともに成長した姿を見て、心から再会を喜んでいたら、真那が、歓喜余つて、女神化して、そのままの勢いで、兄である、土道に、抱きついてしまったのだが、

「真那、胸が・・・」

「兄妹なんだからくいいじゃないく!!」

「土道から離れろ・・・」

「ダメだよ!! 十香ちゃん、折紙ちゃん!! 得物閉まってよ!!」

「仲がいいですね!!」

「エステル、この状況でも、マイペースなんだね」

やはり、真那の女神化して、更に大きくなった胸が、土道の背中に当たっており、十香と折紙は、自分より大きい胸を見せびらかされたのだが、悔しかったので、二人とも得物を構えてしまったので、星龍が得物をしまうように注意している横で、エステルが、いつのマイペースで見ていたのを、真龍姫が呆れてしまったのであった。

土道が女神化できたことについて教えることにしたのであった。

龍姫の経緯

龍姫達は土道達と話をした後、各自解散解散することにして、龍姫は、土道と、二人きりで、戦艦のロビーのベンチに座って、これまでの経緯を話すことにしたのであった。

「それじゃあ、龍姫は、ゲームギョウ界のトップクラスの待遇をされてるのか」

「うん、星龍達も、女神になったから、もう寿命で死ぬことが出来ないんだよ」

「そうだったのか、龍姫達も、生き返ってから、苦労したんだな、けど、俺は、龍姫達が生き返ってくれてうれしく思ってる」

「ありがとう、土道、そうだ、お願い、イルミナル、土道は、どうして女神化できたの？もしかすると、ボクと一緒に」

「はい、残念ですが、土道さん、あなたも、マスターと同じく、不老長寿になってしまわれた様です。天界に問い合わせた所、男性で、女神化が出来た事例は、土道さんが、初めてなのです。ですが、今まで通り、日常生活は可能です。天界から、連絡が入り次第、ご報告いたします」

「ごめん、土道、ボクが、キスした所為で」

「いいんだよ、龍姫が気にすることはないんだ、十香だって、琴理だって、折紙も、女神

になりたがってるんだ、真那の体を治すために、龍姫が、女神にしてくれておかげで、真那、もう寿命で死ぬことがなくなったんだからな、それに、おまえには、十人も妹がいるんだ、長女のおまえがそんなことでどうすんだ」

「そうだね、ありがとう、土道」

龍姫は、自分が、ゲイムギョウ界の守護女神の姉で、プラネテューヌ領の女神首席で、ひよんなことで、ユーリ達とジュード達と知り合いになり、そして、三年前、ギョウカイ墓場に幽閉された女神達を救出して、四天王を倒して、妹同然にかわいがっている真那に女神デバイスをあげて、真那が、ユーリに叱咤されて、自分の意思で、女神になったことを話して、アレクセイ達に、地球に飛ばされたことを話したのである。

龍姫は、自分のインテリジエントデバイスのイルミナルに、どうして、土道が女神化できたのか、尋ねたら、どうやら、龍姫の紫龍の女神の力が、キスした時に、土道が、誤って、少しだけ、吸収したことで、男でありながら、女神になったらしく、詳しいことは、後で報告すると言って、龍姫との通信を切って、龍姫は土道に、女神してしまい、自分と同じく、不老長寿にしまったことを、謝罪したが、土道は、逆に、龍姫に、お礼を言って、励ましたのであった。

「龍姫、おばさん達に、会って行かないのか？」

「ごめん、今日は、考えさせてくれるかな」

「ごめん、そうだった、それじゃあ、この事は、おばさん達には内緒にしとくからな」
「ありがとう・・・土道」

土道は、龍姫に、家族に会わないのかと聞いたら、まだ会う決心がついてないことを明かして、一晩考えさせてほしいと言って、土道とは、別れたのであった。

アンチスピリットチームの真実

龍姫は、幼馴染みである、土道と、二人きりで話した後、自室に戻って、家族に会うかどうか考えていたのであった。

「イルミナル、どのくらいで、あの次元のゲームギョウ界に戻れそう？」

「そうですね、後、三日です、やはり、ご家族に、会うことに、躊躇してらんですね、会う、会わないは、マスターのご意志です。それに、明日は、ASTのことを、皆様にお話しないといけないと行けないんですから、今日は、ゆつくり、お休みになってください」

「ありがとう、イルミナル、そうだよね、自分で決めないとね、それにしても、今日は、色々あつて疲れた、それじゃあ、お休みなさい」

龍姫は、インテリジェントデバイス「イルミナル」にアレクセイ達がいる次元のゲームギョウ界に戻るまで、どのくらい掛かるか、尋ねたら、およそ、三日だと応えて、イルミナルには、家族と再会するか悩んでいたことはばれていたようで、イルミナルから、自分の意志で決めたらどうかと言われて、今日は、就寝することにしたのであった。

そして、翌朝、

龍姫達はいつも通りに、着替えて、戦艦に、備えられている、トレーニングルームで、鍛錬をした後、琴里の計らいで、会議室に集まっていたのであった。

何を隠そう、アンチスピリットチーム、通称、ASTこと、武力で、精霊を討滅する部隊の説明をするのである。

「アンチスピリットチームは、簡単に説明しますと、武力で精霊と対抗する部隊ですね、もちろん、地球のあらゆる国にも、存在がしてます、ですが、適正者がどう言うわけか、女性が、大半を占めてるんです」

「なんか、男は、邪魔者扱いされてるんだね」

「仕方ないよ、こっち世界って、精霊って、女の子しか、いないんだよ」

「そうだったね」

アンチスピリットチームに所属してる者の半数が女性であることを明かしたら、女性のレイヴンとアルヴィンは興奮状態になってしまっていたが、ほったらかして、

「それと、女神が覚醒する前に、着ていた、プロフェッサーユニットと同じで、CR—ユニットって呼ばれてる者が適正者に与えられるんだ、ほら、真那が女神になる前に、着ていたのが、その、CR—ユニットです、それと、適正者は脳に直接、脳波増幅器が埋め込まれるんです」

「それって!!」

「まさか」

「うん、エリーゼの霊極機と同じものが、適正者の脳に、埋め込まてるんです」

「それじゃあ、真那が、女神になれなかった場合は、たった十年で」

「うん」

「人の命を、ごみ扱いかよ!!」

「けど、真那は脱退して、女神になったことで、脳に埋め込まれていた、増幅器は、粒子化できたので、問題ないんです」

「精霊と話し合いで解決できるなら、話し合いで解決するべきです!!」

「そうね、脳に、魔導器、埋め込んでるのと一緒よ、おっさんは、心臓だから仕方ないけど」

「おっさんも、同意!!」

アンチスピリットチームのＣＲ－ユニットの適正者は、直接脳に脳波増幅器を埋め込まれていることを知った、一同は、驚いていたのは言うまでなかった。

人の命を軽く考えてる、部隊に怒りを露わにしていたのだった。

十香の選んだ道

アンチスピリットチームが適正者の脳に、脳波増幅器を直接埋め込まれて、精霊と戦わされていることを聞かされた、ユーリ達とジュード達は、医者でもある、ジュードを筆頭に、驚きを隠せないでいたのであった。

スキット：脳波増幅器

ユーリ「あの集団、死ぬ気かよ」

エリーゼ「わたしも、適正者だったこと、ばれてたら」

リタ「もちろん、あいつらに捕まって、脳に、埋め込まれてたわね」

フレン「やはり、この世界の人々は、精霊との平和的解決が出来ないんでしょうか？」

正ミラ「精霊である、わたしも、心が痛むよ」

ジュード「自分で決めたことでも、いくらなんでも、自分の命を粗末にしちゃいけないのに」

ルドガー「俺も、世界とエルを救うために、オリジンの審判を終えて、此処にいるが、彼女たちはヒドイ」

レイヴン「おっさん、悲しいわよ、おっさんより若い子が、精霊と戦うだけに命を粗

末にできるんなんてね」

エステル「そうですね」

「すまない、龍姫、ちよつといいか？」

「どうしたの、十香？」

「此処では、ちよつと」

「なるほどね、わかったよ」

各自解散して、戦艦の自室に戻っていた龍姫を訪ねて、龍姫と龍音と同じく、腰まで伸ばしている黒い長髪をポニーテールに結った龍姫と同じ黒いの年頃の少女だが、精霊でもある、夜刀神十香が、やってきたのだが、どうやら、龍姫に、相談したいことがあったようで、学校が終わってから、やってきたのであった。

十香は龍姫と二人きりで話をしたかったらしく、それを察した龍姫は、ほかのメンバーに悟られないように、部屋を出て、今の時間なら、人がいない、龍姫の秘密の場所に向かったのであった。

その場所と言うのが、龍姫達が飛ばされてきたあの森の開けた所である。

「ねえ、話があるだよね？」

「ああ、単刀直入に言う、わたしも、女神になりたいんだ!!」

「そう来ると思ったよ」

「まさか、知ってたのか」

「うん、土道が、気づいてたから、ボクに教えてくれたんだ、どうして、女神になりたいの？　今でも、十分なのにな？」

龍姫が恐る恐る、十香に尋ねたら、なんと、十香も、真那と同じく女神になりたいと言いだしたのである。

龍姫は、十香に女神になりたい理由を詳しく行くことにしたのである。

「確かに、わたしは、精霊だ、しかし、龍姫達のような、戦闘力が必要になるかもしれない、わたしも、アレクセイの陰謀阻止に協力したいのだ」

「わかった、けど、女神デバイスを使ったら、もう」

「わかってる、精霊では無くなるのだろう、ユーリの言葉を借りるなら、選ぶんじゃない、もう選んだのだ」

「負けたよ、夜刀神十香、この女神デバイスを」

「ありがとう、龍姫」

十香も龍姫達共に、ゲームギョウ界を脅かすアレクセイの悪行を阻止に協力を申し出たのだが、自分がアレクセイに対抗するには、女神になるしかない、腹を決めていたのだ。

これには、龍姫も、折れるしかなかったのだ。

そして、天界から、自由女神の適正者を保護するため、龍姫は十香に、薄紫色の水晶がはめ込まれているチョーカー型の女神デバイスをあげたのだった。

精霊姫騎士女神、参る

龍姫は友達の夜刀神十香から、アレクセイ達の野望を阻止するために、合流してくれることを申し出てくれたのだが、十香は、自分の精霊の力が、アレクセイ達に通用しないかもしれないと、龍姫に、龍の女神のメンバーに入れてくれと言ってきたのだった。

そう、十香も、精霊でいる前に、一人の、龍姫達と同じ、女の子なのだから。

「二つだけ、警告しておくね、一応、精霊の力も使うことが可能だよ、けど、一度でも、女神なったら、二度と、元に戻れない、それでも、いい？」

「さつき、言ったはずだ!! 選ぶんじやない、もう選んだんだと!!」

「わかった、十香を止めれないみたいだね」

「では、お願いする」

「了解、行くよ」

「う!!」

十香は、精霊と女神の力を併せ持つ、精霊女神になろうと、龍姫から授けてもらった、女神デバイスを使ったのである。

女神デバイスを使い光り出した十香の脳裏に、映し出されたのは、

「士道、龍姫、真龍姫達……」

自分が大切に思っている者の姿が映ったのであった。

そして、

「これが、わたしの女神であり、新たな精霊の姿なんだね、ツインテールになって、おまけに、鎧が、軽くなったが、胸も大きくなって、髪が、銀のメツシユが入った黒髪になっている、服も、かわいい（*・▽・*）!!」

「おめでとう、今日から、女神だよ」

身長が155cmから、175cmまで伸び、いつもの騎士の鎧のような紫色のドレスタイプではなく、キュロットを履いて、紫色のロングブーツを履き、胸も大きくなっていったが、流石に戦闘をするので、隆起を抑えるために、紫色の巫女服をモチーフにした、ドレスの上から、紫色の胴丸が装備されていたのだった。

髪が、前髪に、青っぽい銀のメツシユが入った紫色の長髪を、いつも髪を結っているリボンと同じ色のリボンで、ツインテールに結っていたのだった。

声が、いつもの男言葉から、女の子らしい、声になっていたのだった。

両目が、士道と、同じ色の、瞳になっていたのだった。

もちろん、霊装も装備可能である。

「そうだ、女神としての名前を付けないと」

「だったら、プリンセスハートでいいじゃないか」

「土道!!」

「ごめん、十香が、龍姫達が女神になった経緯を知って、自分も女神になりたいって言い出したから、もしかしてって思っ、もちろん、ユーリさん達には内緒だ」

「ごめん」

「気にすんな、俺も、女神だからね、男で、女神だつて言うの、痛いよ!!」

「土道の女神の名は、ラタトスクハートでいいかな?」

「そうだね、女神として名前は、ラタトスクハート、取りあえず、戻っておく、ふう、やっぱり、元の姿に限るな」

十香の女神の名と、土道の女神として名が決まって、十香が元の姿に戻るために、女神化を解いたので、土道も女神化を解いたのだが、

「助けてくれ、土道、胸が成長して、服が!!」

「龍姫!! どうにかしてくれ!!」

「落ち着いて、お願い、イルミナル!!」

「了解しました、マスター!!」

「済まん、龍姫、服まで借りて」

「気にしないでね、その服、あと五着も、予備で持ってるから」

どうやら、毎度のことながら、十香の体が、成長してして、165cmまで背が伸びてしまった挙句、胸も、更に、二回りも大きくなったことよって、龍姫と同じ大ききになつてしまったので、着ていた、都立来禅高校の制服の上着のボタンが弾け飛んでしまひ、胸が大事な部分は隠れていたが、ボタンが閉まらなくなつてしまひ、その場から動けなくなつてしまったので、土道が、目を背けて、龍姫に、どうにかするよように言つて、龍姫は、冷静に、インテリジエントデバイス「イルミナル」にリライズで、自分の私服の、紫色のフリーサイズのパーカーを着せてあげて、事なきを得て、龍姫は戦艦に戻るこゝとなり、十香と土道は、戻るのであつた。

強がっていても

ところ変わって、美龍飛達は、リタたちと機械関係で気が合うらしく、真龍姫達は武龍共に、レイヴンとフリートークをして、龍菜と雷華は、ノワールとコスプレ話に花を咲かせて、龍音と天龍は久しぶりの戦艦の自室に戻って、自分が住んでいるゲームギョウ界の書類整理などをして、時間を潰していたのであった。

やっぱり、アルヴィンは形見が狭かったのであった。

閑話休題

龍音が書類を全部片付けて、備え付けられている、ベッドで寝ころんでいたらそこに、

「龍音、ちよつといい？」

「どうしたの？ 琴理？」

「今、龍音しかないわよね？」

「見ての通り、ボクだけだよ、天龍呼ぼうか？」

「呼ばなくていい、龍音に相談があつて……」

司令官モードの格好をした琴理が、龍音の部屋を訪ねてきたので、龍音は何の用かと尋ねたら、二人きりで話がしたいと言って、龍音を連れて、ある部屋に向かったのであつ

た。

「ここなら、大丈夫ね」

「別に、ボクの部屋でも良かったんじゃ・・・(・・・ω・・・)」

「誰かに聞かれたらどうするの、単刀直入に言うよ、胸を大きくしたいのと、わたし、女神になりたいの」

「えええええ(。口。口)ノ!!」

「声デカい(。口。口)ノ!!ベシ!!」

やはり、司令官モードでも、四家の前では、年頃の女の子なのである。

同級生でありながら、165cmの身長に、すらつとした体型に、二人のミラや、ミユゼや、ジユデイスにも引けを取らない胸を持ち、女神化すると、173cmの身長に加えて、胸も大きくなる、龍音達に、コンプレックスを抱いていたのであった。

龍音に女神なりたいと申し出たのである。

「ねえ、一つだけ言うね、精霊の力と共有できるけど、女神になったら、二度と元の肉体に戻れない、それでも、琴理は、選ぶの?」

「ユーリさんの言葉を借りるなら、選ぶんじゃない、もう選んだんよ!!」

「わかった、これ、以前、回収した女神メモリーと、とある依頼の報酬でもらった火竜の宝玉を合わせて作った、女神デバイスだよ」

「ありがとう、それじゃあ、早速、キヤアあ!!」
「琴理!!」

あまり使われていない、空き部屋で、琴理に、精霊女神なる決意を尋ねたら、どうやら、以前から、腹を決めていたようで、琴理の決意に根負けした龍音は、以前回収した、女神メモリーと、闘技場で、空想の魔物と戦える装置のテスターをやった時に倒したりオレウス希少種報酬として支払われた、火竜の宝玉を合わせて、作った、菖蒲色のコアがはめ込まれている、チョーカー型の女神デバイスを、琴理に授けたのである。

龍音からもらった女神デバイスを早速、琴理が、使ったら、琴理が光に包まれたのだった。

紅き精霊女神

龍音の恵まれた、体つきを見ていたこともあつて、琴里は、決意を新たに、龍音に土下座までして、自分を女神の一員にして欲しいと申し出たのである。

これには、流石の、客員女神であり、美龍飛達の妹である、パープルドラゴンシスター及び、紫電閃光の女神でもある龍音は、断る理由がなく、天界から、女神志願者が現れたて、それ相応しい、理由が示せて、尚且つ、自分の意志を見せられたら、授与しても良いとされている、女神に覚醒できる、菖蒲色の水晶が嵌められたチョーカー型インテリジェントデバイスを、琴里に授けたら、早速、琴里が、女神デバイスを使つて、女神に覚醒しようとしていたのである。

琴里が眩い光に包まれ出して、

「琴里、自分が憧れている、女神の姿を、思い浮かべて!!」

「うん、お兄ちゃん・・・龍姫お姉ちゃん・・・の女神の姿・・・」

龍音は琴理に、自分が想像している、女神の姿を思い浮かべるように指示を出したら、琴里の脳裏に映ったのは、兄の土道、自分が最も憧れており、将来の目標である、龍姫、の女神の姿が映し出されたのである。

そして、琴理を包んでいた光が収まりそこにいたのは、

「これが、わたしの、女神の姿……なんで？ 鎧を装備してるの？ ちよつと脱ぐよ……」

「これがわたしの胸？ 大きくなりすぎじゃないか？」

「普通、背が伸びたことに驚くよね……」

145cmの小柄な体型から、一気に、172cmまで背が伸び、ぺったんこだった胸も、龍音に匹敵するぐらい大きくなり、黒のインナーウェアの上から、龍姫同様に、色違いの、赤と白の腰丈までのミニコートを着て、淡い赤色の軽鎧で、戦闘の差支えないように、大きくなった胸の隆起を抑え込んでいたが、息苦しくなく、髪が、義兄、士道と同じく、水色で、前髪だけ、黒のメツシユが入り、赤黒い陣羽織を着て、下に、薄紫色のスタンダードの長ズボンを履き、レガースが着いた、ブーツと言う、姿になっていたのである。

もちろん、チャームポイントであり、お気に入りの髪型である、ツインテールに結っているのである。

女神に覚醒した琴里は、自分と龍音しかいなくことを確認して、装備された軽鎧を外して、大きくなった胸を実感していたのであった。

その光景を見ていた龍音は、辺りに自分達しかいなくことを確認して、その場で、軽く突っ込んで、呆れていたのであった。

こうして、新たな、女神が誕生したことに変わりはないのだが、また、一人、女神志願者が現れることは言うまでなかった。

成長期

琴里が、自由精霊女神に覚醒したことによって、また、新たな女神が誕生したのであった。

「琴里、女神になったら、女神の名を名乗るんだよ、教えて？」

「そうだな、エクレールシスターだ」

「いい名前だね、まあ、ボクも、客員女神だけど、表向きは、女神候補生だからね、元に戻ったら？ 変身は、魔力が消費するから」

「そうなのか、なら、戻るか」

龍音は琴里に女神の名を聞いたら、どう言うわけか、フランス語で、雷と言う意味を持ち、洋菓子子のエクレーアの語源である、エクレールに、英語で姉妹を表す、シスターを合わせて、エクレールシスターと言う女神の名を名乗ることした琴里に、龍音は魔力を消費することを教えて、元の姿に戻るように言ったのである。

そう言われた琴里は、猫耳型のカチューシャを装備した、男言葉話す状態の女神姿から元に戻ると、お約束で、

「あれ、龍音、小さくなった？」

「はあ、ボクが小さくなったたんじゃなくて、琴里が大きくなったんだよ。(。D。)ノ!!
ほら!!」

「これ、夢じゃないのよね・・・どうししよう、これじゃ、家に帰れない上に、学校に行けない」

「これは、ボクにも責任があるから、ボクから天界に、お願いして、学校に通えるようにしてあげるから」

「お願いだよ」

琴里も、体が成長してしまったようで、145cmから、162cmに伸び、わずかに膨らみがある程度だった胸が、戦艦の医療機関で寝込んでいる、ベールと同じくらいに、成長して、着ていた衣服が、ちんちくりんになってしまったので、全裸に近かったので、龍音が、インテリジエントデバイス「玄武」で、自分の今着ている、色違いで、紅白のパーカーと、黒のカーゴパンツをリライズ機能で着替えてもらい、龍音が、急いで、天界のツクヨミの部署に、連絡して、琴里が女神に覚醒したことの経緯を事細かに説明して、学校に、通えるようにして欲しいと頼んだら、天界は、快く引き受けてくれたので、琴里は無事に、明日も学校に通えることになったのであった。

「ありがとう、龍音、生き返って、帰ってきたばかりなのに、迷惑かけちゃって」

「別に気にしてないよ、もう、帰った方がいいんじゃない、土道さん、心配してると思

うし」

「そうね、それじゃあ、アレクセイ達打倒作戦の時ね」

琴里は、転生して、せっかく故郷の地球に帰ってきたばかりなのに、迷惑をかけてしまったことを龍音に謝罪したら、龍音は、気にしてないと言って、琴里に、土道が心配しているかもしれないと言って、琴里は、アレクセイ達打倒作戦に協力することを言つて、自宅に戻って行つたのであつた。

龍音も、誰もいないことを確認して、部屋から出て、何事もなかったかのように、自室に戻つて、休むことにしたのだった。

折紙の決意 前篇

琴里が蒼穹閃光女神に覚醒していた頃、星龍達は、トレーニングルームで、折紙と、ユーリ達共に、汗を流していたのであった。

「はあああ!!」

「余裕!! そんなんで、アレクセイに勝てるかよ!! 蒼破!!」

「男の精霊は、存在した例はない」

「キミは、スゴイ、勘違いをしてるんだ、ボクたちは、テルカ・リユミレースと言う、異世界から、ゲームギョウ界を経由して、この地球に飛ばされた、ただの人間だよ、ボクたちの世界では、訓練さえすれば、術技を修得できるんだよ」

「そうだったのか、済まない」

「気にすんな」

男でありながら、斬撃を放てるユーリ達を相手にして、精霊だと勘違いしていた折紙に、フレンが訓練さえすれば、術技を修得することが可能な世界からやってきたことを事細かに説明し、折紙は、自分が勘違いだったことを認めて、謝罪したのである。

もちろん、武醒魔導器のことも説明したのである。

そんなこんなで、特訓を切り上げて、各自解散したのだった。

星龍は、妹達を借りている部屋に案内して、戦艦の自室に戻って、くつろいでいたのだが、

「星龍、入っていいか？」

「入って、いいよ」

どうやら、折紙が部屋を訪ねてきたのである。

その理由が、予想通り、

「星龍、おまえは、精霊か？」

「違うよ、前にも説明したけど、ボクたちは、血が繋がってないけど、黒龍の女神だよ!!」

「そうだったな、星龍に、恥を忍んで、頼みたいことがある」

「何、頼みたいことって？」

何やら深刻そうな雰囲気を醸しながら、星龍に迫って、そして、

「わたしを、女神に入隊させてくれ、この通りだ——？——●——」

「ちよつと、折紙ちゃん、皆に聞こえるよ、場所変えよう」

「すまなかつた」

星龍に恥を忍んで土下座までして、女神になりたいと言いだしたので、流石の、友達である星龍でも、いきなりの暴露に一瞬、腰が引けてしまったが、流石に、今いる部屋

では不味いと感じた、星龍は、人気のない、食糧庫に向かったのであった。

「ここなら、誰にも、聞かれることはないね、折紙ちゃん、詳しい話を聞かせてくれる？
流石に、好き勝手に、女神にする訳には行かないからね、一応、折紙ちゃんも精霊の
端くれなんだから、分かるよね」

「ああ、認識している、今の肉体では、足手纏いになる可能性の方が大きい、精霊の力を
持っているが、アレクセイ達に通用する見込みは、薄い、お願いする、わたしを女神に
入隊させて欲しい、この通りだ——？——●——」

精霊「メタトロン」と言う精霊の力を持っている折紙だったが、根は、感情表現が乏
しい以外は、御年頃の女の子だったようで、龍姫達を筆頭に、ジュデイス・二人のミラ・
ミュゼと言う、恵まれた体型を持った面々を見たい所為で、自分に自信がなくなつて
いたようで、自分なりに考えた結果が女神に覚醒すると言う答えが出たらしく、土道の
幼馴染みであり、自分の恋敵になる可能が一番低いと判断を下した、星龍に、土下座ま
でして、頼み込んだのだった。

折紙の決意 後編

星龍に女神になりたいと暴露した折紙は、土下座までして、今の時間帯なら人気がない、倉庫で頼んでいたのだ。

黒龍の星の女神である、星龍も、友達に土下座をさせてるようで、取りあえず、折紙を立ち上がらせて、右腰の黒色で、蟻局を巻いた龍が描かれたアイテムパックから、黒色の水晶が付いたペンダント型で、使用したら、自動的に、専用のインテリジェントデバイスになる、女神デバイスを取り出して、

「折紙ちゃん、一つだけ、忠告するね、女神になったら、精霊の力と共有できるけど、二度と、歳を取ることが出来なくなつて、元の状態に戻れないよ、それでも女神の道を選ぶの？ どうして、龍姫ちゃん達じゃないくて、ボクなの？」

折紙に最終確認がてら、二度と肉体年齢が止まって、老いることが出来なくなり、元の状態に戻れないことを忠告したら、折紙の決意は変わらないようで、

「龍姫は、土道のファーストキスの犯人だと言うことがわかった、だから、わたしに害のない、星龍に頼むことにして、さっき、ユーリから、こう教わった、選ぶんじゃない、もう選んだ」

「わかった、これより、鳶一折紙を、新たな女神として、此処に誕生することを認める、はい」

「感謝する、ぐあああ！」

「大丈夫、折紙ちゃんの、女神の姿を思い浮かべて!!」

「わかった・・・土道・・・星龍に、十香・・・」

先ほど、龍姫にでも聞いたのか、あの決め台詞を言い放って、星龍から女神デバイスを受け取って、早速、女神になるべく、女神デバイスを使用し、折紙は光に包まれ出したので、星龍は、自分が、イメージしている、女神の姿を思い浮かべるように言ったのである。

星龍が言った通りに、折紙は女神の姿のモデルをイメージして、そして、折紙を包んでいた光が収まって、そこにいたのは、

「これが、わたしの女神の体なんだ!! この鎧、外していいよね?」

「えーと、うん、今誰も見てないから、外していいよ(折紙ちゃん、自分の背が伸びてることに気が付いてないのと、胸がボクより、小さいこと、悩んでたんだね)」

152 cmから172 cmまで背が伸びて、感情表現が乏しかった元の姿と打って変わって、龍姫同様に、感情豊かになり、性格も、冷静沈着から、活発なボーイッシュな性格

になり、髪が、土道の青っぽい髪色に、自身の髪色である、銀色交じりの前髪に、星龍と同じ、金髪のメッシュが入り、両目とも、十香と真龍姫達と同じく、淡い紫色の瞳になって、露出は全くないが、自分が戦闘で装着しているC.R.ユニットと同じ、灰色と、十香の霊装と同じく、紫色と、星龍達、黒の女神同様に、黒色に色のラインが入った、ロングコートを着用して、その下に、紺のアンダーウェアを着込んで、上半身には、龍姫達同様に、星龍と同じ大きさになった胸の隆起を抑え込む機能と、胸を保護するための、紫と黒と灰色で、龍が刻まれた装甲が付いた軽鎧を装備しており、下は、灰色のショートパンツに、両足に、銀色のレガースが付いた、黒のロングブーツを履いて、髪が、ショートヘアから、髪が伸びて、リボンでツインテールに結って、女の子らしい印象になっていたのだった。

折紙は、早速、自身の体の成長具合を確認するため、律儀に、星龍に、誰か見てないか確認するように、言い、星龍が、誰もいないことを確認して、装備している、軽鎧を慣れた手つきで、外して、成長した胸を確認していたのだった。

得物は、銃火器から、日本刀が得意武器になったのであった。

天使女神、降臨

折紙も、御年頃の女の子らしいく、龍姫達のように、誰にでも分け隔てなく、接して、感情表現が豊かなところを見ていたらしく、女神に覚醒し、性格が打って変わって、活発な元気印の女神に生まれ変わったのであった。

「そうだ、折紙ちゃん、女神としての名前、教えて欲しいな」

「うーんと、天使だから、エンジェルハート!!」

「今日から、ボクたち同じ、女神だよ、部下としてでなく、友達として、歓迎するよ」

「ありがとう!!」

「そろそろ、女神化解いた方がいいよ、魔力で変身してるから」

「そうだね、わかった」

星龍は、折紙に、女神としての名を尋ねたら、以前、男子生徒から、「天使」と言う異名で呼ばれていた事と、自身が、霊結晶で精霊になった時に付けられたのが、絶滅天使だったこともあり、龍天使女神「エンジェルハート」と名乗ることにしたのだった。

星龍は、折紙に女神化は、魔力を消費して行うことを説明して、女神化を解くように言って、折紙は、女神化を解除したのだが、

「星龍、このままでは、歩行が」

「折紙ちゃんの体に、リンカーコアが形成されたんだね、形成されると、魔力の容量を増やすために、体が成長するんだよ、折紙ちゃんは、元々、魔力を持ってたんだよ、只、折紙ちゃんはそのれに気付かずに、CR—ユニットで戦ってたからね、もう、CR—ユニットは使えないけど、代わりに、バリアジャケットが自動装備されるからね」

「それはわかった、これでは、歩行が出来ない」

「折紙ちゃんの胸でしょ、仕方ないな、お願い、アスタリア!!」

「了解!! マスター!!」

やっぱり、リンカーコアが形成されたおかげか、152cmの身長に、あまり大きいとは言えない、胸だったが、身長が、152cmから、10cm伸びて、162cmまで伸びて、ウエストはそのままだったが、ヒップが、一回り大きくなり、胸においては、ベールに匹敵するまで成長したのだった。

しかし、着ていた服が、学校の制服だったので、カッターシャツのボタンが弾け飛んでしまい、大きくなった胸が、着ていた下着を破壊して、かろうじて、カッターシャツで大事な部分は隠れていたのだが、折紙は、星龍に、大げさに、自力で歩行が出来ないと、言い出したので、星龍はインテリジェントデバイス「アスタリア」のライズ機能で、自分が、私服として、着ている、黒と白のパーカワンピに着替えさせて、折紙が着

ていた制服を、リライズ機能で、作り直して、胸の隆起を抑えて、ぺったんこに見せれる、サラシ型の下着を折紙に渡したのであった。

「星龍、何故、髪が伸びた？」

「別に気にするかな、髪が伸びたくらいで、やっぱり、折紙ちゃんは、髪が長い方が、可愛く見えるよ、絶対切っちゃダメだよ」

「どうやら、折紙は、女神に覚醒したことにより、自分の髪が、腰まで伸びて、ロングヘアーになっていたことを星龍に質問したら、星龍から、その方が、可愛いと言われているので、切らずに、そのまま、自宅に帰ったのであった。」

紫龍の女神、実家に帰る

折紙が、女神に覚醒して、心身ともに成長を遂げて、これで、三人の女神が降臨したことになったのだった。

そして、各自用意されている部屋に戻って、就寝して、夜が明けて、翌日の朝を迎えたのだった。

五河家は、朝から、

真那&琴里「お兄ちゃん!!」

「ぐ!! 真那、琴里、もう少し、優しく、起こしてくれ……って、琴里!! おまえ、なんで、女神化してんだ!! (。 皿。) ノ まさか、龍音を脅したのか?」

「脅すわけなからう、自らの意思で、女神になることを決めたのだ、男の癖して、女神化できる、者に言われたくない」

「それを聞いてよかった、真那も、女神化解いたら、疲れて、合流出来なくなるぞ」

「そうだった、兄様、朝ごはんが出来ておりますよ、一緒に、行きましょう!!」

実妹と義妹の女神化状態での、青春真っ只中の男子生徒から見たらご褒美のボディーパーレスで起こされた土道は、琴里が女神化していることに気が付いて、幼馴染みである、

龍音から女神デバイスを脅し取ったのか問いただしたら、自らの意思で女神になったことを説明して、三人仲良く、朝食を取ることにしたのであった。

真那は、アレクセイ達の陰謀を阻止した後で、正式に、学校に通うことにしたのだった。

ところ変わって、戦艦では、いつもの通りに特訓した後、食堂で、朝食を取った後、ゲイムギョウ界の次元と繋がるまでは、各自、部屋に戻って、休みことになったのだった。医学者のジュードは、地球の医学に興味があるらしく、戦艦にある地球の医学書を片っ端から本棚から取り出して、設置されている、テーブルの椅子に座って、読み漁っていたのであった。

もちろん、地球の言語は、龍姫達に時間が空いた時に、教えてもらったらしく、今では、エステル同様、日本語が完璧に解読出来るようになっていたのであった。

龍姫はと言うと、真龍姫達と美龍飛達を下宿している部屋に案内して、自室に戻ってきたのである。

「お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、元気にしてるかな？」

「やっぱり、マスターは、ご家族のことが気になるんですね」

「うん、お母さんが、ボクが小さい時に、仕事で、出て行つたきり、ボクたち姉妹を、おじいちゃんと一緒に、育ててくれたからね、それに、実家、武術の道場もやつてるから

ね、そうだ、あの姿なら」

「なるほど、猫の姿なら、大丈夫ですね」

「うん、猫に変身して、実家を見に行こう」

やはり、自分が死んだことになっているのだが、転生者になって、故郷に戻ってきてしまったので、龍姫は、実家の様子が気になるようで、みんなに悟られないように、部屋を出て、実家があるエリアに行くため、戦艦の転送装置の上に乗って、あの森に向かったのである。

「ワン!!」

「どうした？ ラピード？」

「龍ラピも？」

「星龍、ユーリ、お姉ちゃん知らない？」

「あれから、見てないよ・・・もしかして!!」

「待て!! しゃあねえな、行くぞ!!」

「うん、わかった」

どうやら、真龍姫が、龍姫に用があつたのだが、部屋にいなかったのだから、たまたま、口ビーでくつろいでいた、星龍とユーリ達に、訊ねたら、やはり、長年、幼馴染みをやっている、星龍には、龍姫が行き先が心当たりがあるらしく、そのまま勢いで、転送装置

に向かったの、ユーリとラピードと龍ラピと真龍姫も後を追いかけることにしたのだった。

紫龍の女神、実家に潜入

実家の様子が気になってしまった龍姫は、戦艦に設置されている、転送装置を使って、実家近くの人気のない公園の森に到着したのであった。

「さてと、変身、これで大丈夫」

「では、行きましよう、マスター!!」

流石に、自分が生きていることがばれたら、自分の周りの人たちに危害が及ぶと考え、白と黒の斑猫に変身して、実家に向かったのであった。

龍姫が猫に変身している間、イルミナルは鈴が付いた、首輪になっているのである。

「どこ行つたんだろう、お姉ちゃん? 星龍、龍音、行きそうなどこわかる?」

「多分、実家の様子を見に行つたんじゃないかな?」

「ほんじゃ、鳴流神家に行くとしますか」

龍姫が、実家に向かって、数分後、真龍姫・星龍・ユーリが、龍音に、龍姫の行きさうなところ心当たりがないか質問したら、半信半疑で、実家に向かった可能性を述べ、龍音も、龍音も、黒猫に、インテリジェントデバイス「玄武」で、変身して、星龍も、虎猫に、インテリジェントデバイス「アスタリア」で変身して、ラピードと龍ラピ

共に、鳴流神家に向かったのであった。

幸いにも、今時間帯は、あまり、人氣がなかったので、人に目立たないで、鳴流神家に向かえるのであった。

「はあ、帰ってきたのは、いいけど、どんな顔して、会えばいいんだろう？」

「今のマスターの状態は、ただの猫ですから、それに、此処は、マスターのご実家ですよ、取りあえず、あの、壁の穴から侵入できますよ」

「そうだよね、変身さえ、解かなければ、ただの猫だよね、それと、人語さえ、しゃべれなければいいだけだよね」

そんなこんなで、実家に戻ってきた猫に変身したままの龍姫は、家族に会うことをためらっていたのだが、イルミナルに、後押しされて、ちようど、猫なら、通れる、穴から、忍び込んだのである。

龍姫の実家こと、鳴流神家は、外壁が、コンクリート製の和風建築で、正面に、木造の大きな門構えで、裏に、木造の引き戸があり、敷地内に、一戸建ての住居と、武術の道場のある、一家の次女なのである。

「父さん、龍姫と龍音が、いなくなつて、あれから、三か月が経つんですね」

「そうじゃな、まだ、十六と、十四になつたばかりだとゆうののに」

「あれは、不幸な事故だった」

「龍姫く、龍音く(；|；)／＼」

「龍美、泣いてもしかなんだ」

どうやら、ちようど、居間で、家族が集まっていたようで、父方の祖父で、龍姫達に、武術を教え、隠居している、龍三、龍姫達の実父の龍雄、龍姫達の実兄で、龍姫の四歳上の龍翔、同じく、龍姫の実姉であり、美龍飛達と龍華達並のシスコンの持ち主で、二つ上でやはり血は争えないらしく、ミラ以上のスタイルの姉、龍美が話をしているのだった。

「みんな心配してるね、ボクはこの世界じゃ、死んだことになっているから、もうみんな所に戻らないと」

しばらく、家族の様子を見ていた猫に変身していた龍姫は、近くの垣根からその様子を隠れて見ていて、戦艦に戻ることにしたのである。

その時だった、

「出てきなさい、そこに隠れても無駄じゃぞ」

「にゃ〜!!」

「猫がどうしたんですか?」

「なるほど、そういうことか」

やはり、祖父の龍三には、龍姫が猫に変身していることを見破ったようで、出てくるよ

うに言われた龍姫は、猫の鳴きまねをしながら、垣根から出て行ったのである。

「いい加減、猫に化けるのは、疲れたじやろう、のう、龍姫、龍音、そして、星龍ちゃんだったかの？」

「龍音!! 星龍!! どうして? あ、ごめんなさい」

「だって、真龍姫お姉ちゃんが探してたよ」

「。。。。(((p (≡ □ ≡)))) 。 。 。 ウワーン!! 龍姫、龍音!! 星龍ちゃんく生き返つて来てありがとう!!」

「ごめん、家出じゃないことはわかって」

「わかってるよ、龍姫、龍音、星龍ちゃん、おかえり」

龍姫&龍音&星龍「ただいま!!」

「それと、おとなしく、出てきたらどう? 二人と、二匹」

「ねぷく!! はあく、なんだく、ばれちやつてたんだく わたし、真龍姫って言うんだ」
 「オレは、信じてもらえねえけど、異世界、テルカ・リユミレースからきた、ユーリ・ロー
 ウエルだ、こっちはラピード」

「ワン!!」

「ユーリ君は、本当に、異世界から来たのか、日本人と大差ないよ」

「いいじゃないか、今日は、遅いから、泊まって来なさい、実は、いつもの癖で、龍姫達

の分の料理を作ってしまったんだ」

「それじゃあ、お言葉に甘えて、お邪魔します!!」

結局、猫に変身していることがばれていたようで、仕方なく、変身を解いたら、龍音と星龍も、忍び込んでいたようで、一緒に、今まで実家に帰れなかったことを謝罪したら、何事もなかったように、龍姫の実父、龍雄は、笑顔で、出迎えてくれて、三人は、ただいまと言ったら、物凄い勢いで、龍姫の実姉の龍美が抱きついて来て、滝のような涙をこぼしていたら、龍翔が、垣根に隠れている、真龍姫達に、出てくるように言い、真龍姫達は自己紹介をして、お言葉に甘えて、鳴流神家に泊まることにしたのである。

やはり、ユーリを見た龍雄は、地球人と大差ないと言っていたのであった。

鳴流神姉妹

ツクヨミの力で転生して、ひよんなことから故郷の地球に戻ってきてしまった龍姫は、叱咤されるのを覚悟で実家に戻ってきたのだが、どうやら、そんな心配はないようで、無事に、実家に戻って来れたのであった。

流石に、アースト達に黙って実家に帰って来てるので、インテリジェントデバイス「イルミナル」で、美龍飛達にメールを送信したのである。

今現在、龍姫達は、美龍飛達に引けを取らないほどのシスコンぶりを発揮している、龍姫の実姉、龍美と、龍音・真龍姫・星龍共に、実家のお風呂に入浴しているのであった。「龍姫〜!! 龍音!! やっぱり、血は争えないんだね!! 見ないうちに、大きくなっただ（*ゝ*）」

「お姉ちゃん、相変わらず、そのしゃべり方なんだ」

「それにしても、お風呂、大きいんだね〜」

「おじいちゃんのこだわりらしいよ」

今だに、一人称が、龍姫達同様、「ボク」のままだった。

三ヶ月ぶりに実妹達に会えたことが心底うれしかったようで、やはり、血は争えない

ようで、龍美も、着痩せする体質を持っているようで、姉妹揃って、ミラに劣らない、肉体を持っているのであった。

鳴流神家のお風呂も、大きいようで、この人数が入っているのだが、まだ余裕があり、龍姫達が住んでいる次元のゲームギョウ界の教会のお風呂と同じく、檜風呂であった。

龍美は、姉妹の再会を祝ってなのか、龍姫の背後に回り込み、スキンシップを始め出して、その様子を真龍姫・星龍が見ていたのであった。

そんなこんなで、お風呂から上がって、ユーリと交代したのであった。

一方その頃

「輝龍!! 龍姫の実家はどこじゃ!!」

「落ち着いて、案内してあげるから」

「真龍姫だけずるい!!」

「もう、あの子つたら・・・」

「青年だけ、龍姫ちゃんの実家に行くなんて、おっさんも、行きたい!!」

「ユーリですから、心配はないと思いますけど」

やはり、ユーリも一緒に龍姫の実家にいることが、ユーリのが好きなパーティが黙っておらず、幼馴染みである、輝龍を半ば、脅し出して、てんやわんやになっていたのだった。

「明日、鳴流神家に、向かう、くれぐれも、失礼のないようにな!!」

「は、い!!」

結局、明日の朝に鳴流神家に行くことになってしまったようで、アーストが失礼のないように、言い、各自解散したのであった。

スキット：龍姫の実家

エステル「輝龍、龍姫の実家はどのようなことをなさっているんです?」

輝龍「龍姫ちゃん家は、武術の道場なんです、あと、おじさんと、龍翔さんと龍美さんは、一緒に、喫茶店「葵屋」を経営してるんです」

レイヴン「喫茶店?　なんか、青年が好きそうなところね」

天龍「そこで、食べれる、ケーキ各種は、地元では、評判なんですよ」

正ミラ「なら、行くしかないな、ジュール、ジュール」

フレン「ええ、お手合わせが楽しみです」

カロール「なんか、目的、忘れてない?」

分ミラ「カロール、聞いてないわよ」

黒衣の断罪者と紫龍の女神の兄

久しぶりに、実姉と一緒に風呂に入って、脱衣所で、寝間着に着替えて、実兄の自室で、実兄ともに一緒にいた、ユーリにお風呂に入るように言って、今現在、龍翔と一緒に、男の裸の付き合いをしていたのであった。

「テルカ・リユミレースって、物騒などこなんだ、妹達が世話になったみたいだね」

「それが、こつちが世話になっちまったからな、礼を言うのはこつちの方だ、何せ、日本語は喋れても、読めなかつたからな、それに、治癒術で、治してもらっちまったからな」
「そうなのかい、ASTが喉から手が出るほど、妹達をほしがったからね、おじいちゃん
と父さんが、念を押して、いたからね」

「だろいな、あの剣の腕なら、ASTじゃなくても、欲しがるだろうな」

龍翔は妹達を助けにくれたことにお礼を言ったら、逆に、ユーリから助けってもらったことを教えられて、龍美を含む、妹達をアンチスピリットチームが喉から手が出るほど欲しがっていたことを聞かされたユーリは、龍姫達の剣の腕前なら、アンチスピリットチームじゃなくても、欲しがるだろうと言い、男同士で仲良く語り合って、

「龍翔、おまえ、剣出来るのか？」

「何言ってるんだ、これでも、天然理心流を心得ているんだ、そういうえば、ユーリの知り合いも剣術をするのか?」

「ああ、いるぜ、ガギの頃から一緒に育って、今じゃ、テルカ・リユミレース騎士団、団長までのし上がった、フレンだな、ガギの頃から何やつても、フレンには勝てなかったもんな。かけっこだろうが、剣だろうが、その上、余裕かまして、こう言うんだぜ?」

大丈夫、ユーリ? ってさ」

「へえ、そうなんだ、俺なんか、学生時代で、俺を負かすやつなって、おじいちゃんと、父さんと、龍美と龍姫くらいかな」

「おいおい、兄貴のお前が、龍姫に負けてどうすんだよ、半分、自慢かよ」

「龍美と龍姫は、天武の才を持つておじいちゃんが言ってたし、今は勝てる気しないよ」

龍翔は、一緒に切磋琢磨した知り合いはいるのかと質問したら、ユーリは即答で、フレンの名を挙げて、幼いころから一緒にいた親友で、今では、テルカ・リユミレース騎士団、団長に、昇進していることを龍翔教えて、自分が幼いころからフレンには全く歯が立たなかつたことを暴露したら、龍翔も龍音・星龍・天龍には勝てるのだが、龍美と龍姫には一度も勝つたことがないと、暴露されたユーリは、あまりにも衝撃的な事実だったので、呆然とした後、龍翔に思わず苦笑いで返したのであった。

どうやら、歳が近いのもあって、気が合うのだった。

凜々の明星、鳴流神家に泊まる

ユーリと意気投合した龍翔は、和気あいあいとお風呂で裸の付き合いをして、話し合つて、お風呂を後にしたのであつた。

「この、服を、着ればいいのか？」

「ごめん、俺のお古で」

「いや、別に気にすんなつて、素っ裸にならきやいだけだからな、サンキュー」

ユーリが着ていた胸元が開いた黒い服は、洗濯機で洗濯して、ほされていたので、幸いにも龍翔と服のサイズがピッタリだつたらしく、用意された黒いTシャツと黒いズボン着用することにしたユーリだつた。

それは龍翔のお古だつたのだが、そんなことを気にするユーリではなく、龍翔にお礼を言つて、二人は台所に向かつたのであつた。

やはり、そこにいたのは、

「ユーリ!!」

「な!! なんて、おまえらがいるんだよ!!」

「青年だけ、鳴流神家で、ご馳走食べるなつて、ずるいから」

「すみません、いきなり押しかけてしまつて」

「ははあは、別に気にしなくても良い」

「大丈夫、凛々の明星と龍菜達できたから」

どうやら、明日まで待てなかつたようで、ユーリのことが好きでたまらないパティを筆頭に、凛々の明星と龍菜と優華龍と天龍で鳴流神家に突撃訪問をして、台所で、晩御飯の仕度を行っていたのだつた。

そんなこんなで、全員で晩御飯を食べることにしたのであつた。

「それにしても、一目でご兄妹ってわかりますね」

「そうね、そっくりね、ユーリが違和感がないし」

「確かに、初めて見たときは、甥っ子が来たのかと思つたよ」

「オイオイ、オレは、全くの、赤の他人だ」

偶然、鳴流神兄妹が並んで座っている所に、ユーリが並んで座っていたので、あまりにも特徴が似ていたようで、鳴流神兄妹のいところに見えてしまったようで、思わず、ユーリは軽くあしらつて、食べるのであつた。

そんなこんなで、楽しい夕飯が終わり、凛々の明星は泊めてもらうことになつたので、お礼で、食器を洗つて、食器棚に片付ける手伝いをしていたのであつた。

龍姫はその間、久しぶりに実家の自分の部屋に戻っていたのであつた。

「あの時のまんまなんだ、ゲームギョウ界で生活して、三ヶ月経ってるのにね」

自分が転生して、友好条約を結ばれたゲームギョウ界で三ヶ月も経っているのにも関わらず、そのままの状態で綺麗にされていたのであった。

龍姫は久しぶりの実家の、漫画など並べられた本棚などを見つめて、ベッドで寝ころんでいたのであった。

「今じゃ、自分が、異世界で、日本刀持って戦ってるなって、嘘みたい、けど、早く、アレクセイ達を止めないとね」

龍姫はベッドで寝転がって、アレクセイ達の野望を阻止することを強く心に決めていたら、

「龍姫お姉ちゃん、入るよ!!」

「真龍姫、どうしたの？ まさか、一人で寝れないの？」

「いや別に、一人でも寝れないわけはなんだけど・・・龍美お姉ちゃんが襲ってくるんだもん!!」

「と、言うわけで、今日は、この四人で寝よう!!」

「はあ、こうなるんだね(・ω・)」

どうやら、真龍姫がゲームギョウ界で鳴流神家に養子縁組されていることを龍姫から聞かされた龍美は、久しぶりに姉妹揃ったので、龍姫の部屋に乱入して、添い寝をする

ことになってしまったのであった。

一応、龍姫の部屋は、十分な広さの部屋だったので問題なかったのであった。

龍美の部屋は、エステル達、女性陣が宿泊することになっていたのである。

男性陣は空き部屋に布団を運んで、全員で雑魚寝で、獅子神家の面々は龍音の部屋で一泊することになったのであった。

朝の稽古

龍姫は久しぶりに実家に帰って来て、自分の部屋で姉妹揃って寝ることになり、翌日の朝を迎えたのであった。

「久しぶりだな、道場に行くの」

久々にサラシ型の下着であのまだ育ち盛りの大きな胸をぺったんこに潰して、中に黒のＴシャツを着込んで、上が白で、下が黒の剣道着に着替えて、美しい長髪の黒髪は紫色のリボンでポニーテールに結って、実家の庭に建てられた道場に向かったのだった。

龍姫は道場の中に入って自分の二振りの竹刀の内一振りを右手に持つて素振りしていたのである。

ちようどそこに

「朝から気合十分だな」

「おはよう、みんな」

「さてと、オレもやるとするか」

「はい」

「サンキュー」

凛々の明星と真龍姫達が素振りをしてる龍姫がいる道場にやってきたのである。

もちろん龍姫が道場は土足厳禁と言うことを昨日のうちに言っているのでユーリは借りていたつつかけを脱いで、龍姫と同じく裸足である。

龍姫から竹刀を受け取ったユーリはいつものように左で持ち、肩に担ぐように構えて、力いっぱい床を蹴って龍姫に仕掛けたのである。

「甘いよ!!!」

「おやおや、朝から元気なこった」

「おはようございます」

「まだまだ!!!」

龍姫とユーリが竹刀で打ちあっていたら、そこに龍姫の父方の祖父で、ローエンより若い、龍三がやってきたのである。

エステルも上下とも真っ白の剣道着に着替えておりしばらく龍姫とユーリの打ち合いを見物して、龍三に稽古をつけてもらうことになったのだった。

「まずは、ユーリと言ったかの、掛かってきなさい」

「ほんじゃ、鳴流神兄妹に叩き込んだ剣の腕前を見せてもらおうじゃねえか!!!」

「ユーリ!!! すいません、わたくしの友人が口の利き方になっていないばかりに」

「フレン!!! それにみんなまで」

「つたく、単独行動は程々にするよように」

「すいませんでした!!」

龍三はいつもの黒の胴着姿で道場の片隅にある竹刀立てから一振り竹刀を取って右に持ち、右半身で無構えでユーリを指名して掛かってくるようにいい、それに応えるためユーリも構えたのである。

相変わらずユーリは物応じない態度で、いつも通りにしゃべっていたら、ちょうどそこにアースト達がやって来て、フレンが道場の入り口で靴を脱いで、龍三にユーリの変わるに謝罪したのだが、龍三はこんなことを気にするような人物でなかったのでフレンに気にしていないことを言って、フレンも相手をすことを言って、フレンも剣道着に着替えていた龍音から竹刀を受け取って、構えたのである。

アーストは単独行動をした龍姫を叱咤して、龍姫は謝罪したのだった。

「円閃牙!!」

「刀は、回転させるもんじゃないぞ、ほれ!!」

「痛て!! 流石、龍姫達に武術を教えるだけはあるな」

「褒め言葉として受け取っておこうかの、次は、その金髪の坊主、掛かってきなさい」

「テルカ・リュミレース騎士団長、フレン・シーフォ、行きます!!」

「ほう、西洋剣術じゃな、じゃが、武士を甘く見るんじゃないぞ、足元がお留守じゃ!!」

「うわ!!」

「槍もいいのかしら、ジユデイス、行くわよ!!」

「天然理心流は、剣術に、槍術、体術に精通する流派じゃ、掛かってきなさい」

鳴流神兄妹に武術を教えていたようで、ユーリの我流の剣術をあっさりかわして、ユーリの腕を掴んで、そのまま足を払ってこかして、フレンを指名して、指名されたフレンは騎士団で修得した剣術で挑んだのだが、やはり、剣術ではあるが、体全体を使う流派、天然理心流のことはあつたようで、龍三にあっさり投げ飛ばされて、ジユデイスが入り口でサンダルを脱いで、竹で出来た薙刀を、竹刀立てからお借りして、龍三に手合せを申し込んだのであつた。

決戦編

シスコンは次元をも超える

ジュデイス・アースト・正史ミラ・獅子神家まで加わって、一緒に汗を流した一回は、一番大きな部屋である畳の大広間で朝食を取っていたのだった。

「青年達、いい具合に、扱かれたわね」

「孫も元氣いっぱいなら、じーさんも元氣だな」

「いい経験になりました」

「今思ったが、ユーリ、おまえさん、左利きなのか」

「確かに、剣は右に持つもんだからな」

結局、ユーリとフレンは龍三に完膚無きまでに扱かれて、至るところにアザが出来ていたの言うまでもない。

そんなこんなで、朝食を食べ終えたので、食器を片付けた後、龍三は、龍姫だけ声を掛けたのである。

「先に行つてて、すぐに行きますから」

「それじゃあ、先に戦艦に行つてるわよ」

龍姫はみんなにそう言って、自分の部屋に戻って、瑠璃色のパーカーとカーゴパンツに着替えて、道場に向かったのであった。

「おじいちゃん、話って何?」

「すまんな、一つだけ聞いていいか、龍姫、いや、龍音・星龍ちゃんからあるものを感じたのだ、もう隠す必要はないのだから」

「まさか、気づいてたんだ、ボクたちの秘密」

「何年、おまえのおじいちゃんをやっていると思ってるんじゃない」

「その通りだ、何があっても、おまえたちの味方なんだからな」

「お父さん、お兄ちゃん、わかった、セットアップ」

どうやら、龍姫が女神であることを感じ取っていたようで、龍姫に正直に話すように言い、龍姫は隠す必要がなくなったので、女神化をすることにしたのであった。

そして

「これが、ゲームギョウ界での、女神としての姿なの、ごめんなさい、もうわたしは人間じゃないの」

「何を言ってるんだ、例え、女神になったとしても、俺の妹に変わりないさ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「その通りだ、いつでも帰って来なさい」

「うん、それはそうと、お姉ちゃんは？」

「それが、朝食を食べてから、見てないんだ、龍美のことはこっちでなんとかするから、みんなの所に行きなさい」

「そうだね、それじゃ行つてきます!!」

「いつてらっしやい!!」

龍姫が心配することはなく、いつでも帰つて来るように言われてしまったのであった。

ふと、姉の龍美の姿が見当たらないので女神化を解いた龍姫は尋ねたら、朝食を食べながら見えていないと言うので、龍美のことは任せて、戦艦に向かったのであった。

龍姫はもしかしてと思いながら戦艦に入つて、パーティーメンバーが集まっている所に向かったのである。

そこにいたのは正しく

「お姉ちゃん!! それと、龍月さん!!」

「この龍月お姉ちゃんを差し置いて何処に行くのかな?」

「すいません、二人追加で、お願いします」

「ボクは、星龍達のお姉ちゃんの、獅子神龍月です」

「俺はアースト・アウトウェイだ」

「わたしは、エステリーゼ・シデス・ヒュラツセインと言います、長いので、気軽に、エステルって呼んでください」

龍姫の実姉の龍美だった、おまけに、星龍の実姉で、瓜二つの容姿に、長い金髪の長髪を一本結びにした、龍美の幼馴染みである、龍月までパーティーメンバーに入る気満々だった。

妹達を呆れさせて、そんなことに目も暮れず自己紹介をしていたのだった。

そして、

「五河士道、ただいま到着しました!!」

「新顔がいるのか、オレはユーリ・ローウエル」

「わたし、レイア・ロランドだよ!!」

「わたしは、八舞耶俱矢」

「八舞夕弦です」

士道達も戦艦に乗り込んできたのだが、八舞の二人もパーティーメンバーに参加することになってしまったので簡単に自己紹介を終えたのであった。

紫陽と黒月の女神

アレクセイ達のいる次元のゲームギョウ界に戻るべく、ラタトクスの所有する戦艦に乗り込んだ龍姫達は、龍姫の実姉で、龍姫と同じく、日本刀の一刀流と二刀流を巧みに使い分ける戦術を使いこなすことが出来る、鳴流神家、長女、鳴流神龍美と、その幼馴染みで同い年であり、星龍の実姉で、一刀流で戦う獅子神家、長女、獅子神龍月も合流することになってしまったのだった。

「まさか、ボクたちが心配で」

「当たり前だよ、だって、心配だもん!!」

「それと、もう隠す必要ないよ、龍姫達は、ゲームギョウ界じゃ、女神様なんでしょ」

「気づいてたんだ、ごめん」

「だって、龍姫達のお姉ちゃんなんだよ、それと、これ、もらうね」

「女神デバイス!!」

「やはり、血は争えないか・・・」

「龍姫と星龍が上と下の扱いに慣れていたのは」

「兄と姉がいて、更に、妹がいる、間っ子だったからか」

「どうやら、妹達のことを心配もといシスコンだったので、アーストに直談判をしてパーティーメンバーに入れてもらうことになったのであった。」

二人の武器は、予備で持っていたゲームギョウ界の日本刀を渡して、粒子化のやり方を教えたのだが、隙を付いて龍姫と星龍のアイテムパックから、龍美は、紫色の水晶が埋め込まれた腕輪型の女神デバイスを、龍月は、黒水晶が埋め込まれた腕輪型の女神デバイスを掠めていたのである。

「お姉ちゃん、いいの？　女神デバイスを使ったらもう人間には戻れない、それでも不老長寿を選ぶの？」

「もちろん、知ってるよ、もう妹達を死なすわけには逝かないから」

龍美&龍月「選ぶんじゃない、選んだんだよ!!」

「キミの言葉は次元を超えるんだね」

「そうみてえだな」

実妹である龍姫と星龍は、二人に女神になることは、人間の寿命を捨てることであることを明かして、選ぶのかと、質問したら、ユーリが天誅を決めた際にフレンに言い放ったあの言葉を言い放ったのだ。

それを聞いたフレンは、言葉は次元を超えることをユーリに言ったら、ユーリは照れくさそうにしていたのだった。

「それじゃあ、セツトアツプ!!」

「また、新たな女神が誕生するのか」

「おっさん、感激よ!!」

龍美と龍月は掠めていた腕輪型の女神デバイスを左手首に嵌めて、女神化をしたのであった。

そして、二人を包んでいた光が収まりそこにいたのは、

「これが、わたしの女神の姿なんだ、背も伸びてるし、胸も大きくなるんだ、この甲冑で胸を保護してるんだね」

「わたしも同じだよ、けど服が、お待さんの鎧だね、下はスカートだけど」

「確か、龍姫から借りた剣の物語に出てくる、登場人物の格好ですね、龍月もかっこいいですよ!!」

175 cmまで背が伸び、胸も一回り大きくなったのは共通していたが、龍美の女神の姿は、やはり姉妹揃ってツインテールに結って、黒のインナーウェアを着ている上から、紫色の胴丸が装着されて、両腕には手甲が付いた籠手が装備されて、下は足首まで覆っている紫色の巻きスカートになっており、スカートの中は、紫のレギンスにレガースが付いたロングブーツを着用していた。

龍月は漆黒の胴丸に、姉妹揃って銀髪 of 長髪をツインテールに結って、両手に手甲が

付いた籠手を装備して、ミニスカートに黒のレギンスを履き、レガースが付いたロングブーツを履いている姿になったのである。

龍美は、右碧左翠のオツドアイで、龍月は、右翠左紅のオツドアイになってしまったのだった。

再び、ザウデ不落宮へ

龍美と龍月も、もう妹を失いたくないがために、実妹のアイテムパツクから、女神デバイスを掠め盗って、女神になったのである。

「絶剣女神、パープルドラゴンハート!! 推して参る!!」

「黒剣月華、ブラツクドラゴンハート!! 見参!!」

「と言うことは、ボクは、パープルドラゴンシスターハート」

「長いですよ、言いやすい方がいいですよ、パープルドラゴンハートはどうです?」

「ありがとう、エステルさん、今日からボクの女神の名は、パープルドラゴンハート改め、パープルドラゴンハートだね」

「なんで敬語に戻ってるんですか?」

「いやあ、お姉ちゃんと同い年だから、つい敬語になっちゃった」

「そうだったわね」

姉が女神になったことにより今まで名乗ってきた女神の名が名乗れなくなったので、急遽、女神の名を改名することになり、エステルが地球の各国の龍の読み方をいつの間にか調べ上げていたようで、竜騎兵の意味を持つドラゴンに改名したのである。

もちろん、星龍もドラグーンを名乗ることになったのであった。

龍美と龍月は女神化を解いたのである。

スキット：龍美と龍月のバリアジャケット

龍姫「お姉ちゃんのバリアジャケット、まさか、あのラノベの!!」

龍美「うん、そうだよ!!」

ユーリ「ラノベって、小説のことだったよな、エステルが龍姫から借りて読んでたあの文字しか書いてない本か」

エステル「その通りですよ、龍姫に日本語の勉強をするために、ソード・オート・オンラインと言う、剣の物語の小説をお借りしたんです、龍美のバリアジャケットはその小説に出てくる、紫色の髪の子で、龍姫達みたいに、自分のことは「ボク」って呼んでいて、「絶剣」の異名を持ち、主人公が、得意の二刀流を使っても関わらず、二度も勝ったことのある登場人物だったんですよ。ユーリのような黒い服を着た二刀流が主人公なんですけどね」

星龍「お姉ちゃんも、まさか」

龍月「そうだよ!!」

正ミラ「確か、F a t e / s t a y n i g h tと言う小説に出てくる、セイバーの鎧に似ていたのだから？」

龍月「はい、当たり前です、本当は銀の鎧に、蒼穹のスカートなんですよ、黒の女神らしく、真っ黒にしました!!」

龍菜&ノワ「コスプレの参考にしよう!!」

「さてと、準備は出来てるわよ!! 忘れ物しても知らないわよ!!」

「現地調達が基本だ!!」

「それじゃあ、アレクセイ達のいるゲームギョウ界に、向かって、発進!!」

戦艦の次元転送の準備が出来たので、全員、席について、シートベルトをして、転送する際に発生する衝撃に備えて、アレクセイ達のいる次元のゲームギョウ界に転移したのであった。

龍姫達の今の女神の仕事

ラタトスクの所有する戦艦でアレクセイ達のいる次元のゲームギョウ界に戻ってきた龍姫達は、新しくパーティーメンバーに入ったメンバーにこれまでの経緯を教えてくださいたのであった。

「最低!! 三年間、助けに行かないんなんで、いくらなんでもひどすぎる!!」

「全くだ、犯罪組織如きに恐れをなすとはな!!」

「そうね、わたしなら、先に助けに向かわせるわね」

「今回は運が良かったに過ぎない、完璧にプラネテューヌを落とすことが目的のように見受けらる、天界に手を出させないために」

「ああ、犯罪組織の連中は、アレクセイ達に利用されたに過ぎんからな」

「これだから、組織つてのは嫌いなよ!!」

やはり、各国の不甲斐なさに呆れて物が言えなかつたのであった。

シエアが人間の女神の信仰心で出来ていることも聞かされた龍美達は、ゲームギョウ界が女神で成り立っていることを疑問に思っていたのであった。

「なんで、人間が、国を統治しちやいけないのかな? それになんでも出来ても楽しいの

？ 生きてる実感湧くの？」

「やっぱり、龍美の言う通りだね、つまらないと感じるなら、それは自分がもう満たされた証拠なんだね」

「その通りだ」

龍美は何でも出来ても、楽しくなくては、意味がないと論じて、ネプテューヌはその意見を受け入れて、自分が執務が嫌いな理由がわかったのであった。

そして、

「そうだ、龍姫達のゲームギョウ界はどんなところ？」

「ちやんと、シエアの奪い合いはどんな事してもやつちやいけない法が、テルカ・リュミレース皇帝陛下、ヨーデル殿下の立ち合いの下、可決したんだよ」

「だから、もう過去の過ちは起こさない、それに、女神は各国の象徴として、国政に手を出せないようになったの、それに伴い、各国の諜報部は解散して、各国の教祖が国を統治することになったんだ」

「二応、天界からの依頼が、今の仕事かな、あと、市井に自ら出向いて、生きた情報を手に入れることも仕事になってるね」

「そうなんだ、だから、龍姫達は女神なのに、シエアに左右されないんだ」

「シエアに左右されてんなら、今頃、テルカ・リュミレースに飛ばされた時点で、死んで

るぞ!!」

まだ、鳴流神家に養子縁組を終わらせてないネプテューヌは龍姫達の住んでるゲームギョウ界はどのようなところだと尋ねたら、シエアを捨て、女神と言う概念を捨て、代わりに国を教祖が統治すると言うことをテルカ・リュミレースの現皇帝、ヨーデル・アルギロス・ヒュラツセインの立ち合いの下に可決したことを明かしたのである。

「ザウデ不落宮に、明日に乗り込む、今日は、ゆっくりするように、各自解散!!」

「はい!!!」

完全にまとめ役になってしまったアーストから明日の朝にザウデ不落宮に乗り込むことにすることを伝達されたメンバーは各自解散しようとしたのだが、

「おまえ!!!」

「久しぶりです、陛下」

「よう、レイア、エロいことやってるか?」

「なんか、わたくしの声に似てますわね、それと陛下つてまさか」

「まさか、ベール、気づいてなかったの。(。口。)ノ!! ボクなんて、あつてすぐに気が付いたけど」

「わたしの名は、プレザ、そして」

「アタシは、アグリアだ、その連中とは顔見知りなんだな」

そう、アーストの部下で、ジャオと同じく四象衆で、声がベールに似ている、猫耳に、ベールに引けを取らないほどの胸をこれでもかど露出が多い服を着た女性、プレザと、レイアに合つて早々、下品な言動を繰り出した、銀髪に、赤い服の少女の、アグリアが現れたのである。

ベールは今まで、アーストが身分を隠していることに気が付いていなかったのであつた。

我、霸王なり

四象衆の二人、猫耳の女性、プレザ、天龍同様に、炎を巧みに操ることが得意な銀髪の少女、アグリアが、龍姫達にいる戦艦に現れたのであった。

その理由は、どうやら犯罪神に蘇らされて、アレクセイ達の悪行を止めて欲しいと言う、犯罪神に取り込まれた良心が助けを求めていたのであった。

「いい頃合だな、聞いての通り、俺は、リーゼマクシア王、字はガイアス、アースト・アウトウエイは、俺の本名だ!! だが、いつも通りに、アーストと呼ぶように、それと、態度も変えなくても、構わん!!」

「今更、呼び方なんて変えれないもん、くじけそうになったらよろしくね!! アースト!!」

「お姉ちゃん!! (。Д。) ノ!! 姉が失礼な態度を取ってしまったって

「いいじゃねえか、国王でも、皇帝でも、女神でも、結局、中身は一緒なんだな」

「ユーリ!! すいません!!」

「別に構わん、そんなこと、いちいち、気にしているようでは、王は務まらん」

アーストは自分がリーゼマクシアの王であることを暴露して、今まで通りに自然体で

接しして欲しいと釘を刺したのである。

やはり、女神でも惹かれる器は、龍姫には初対面の時に見抜かれたのである。

「そうだ、エリーゼと言ったか、龍美が、呼んでいた……」

「ありがとうございます、行つてきます」

「そういえば、ティポがいなかったね」

「実は、お姉ちゃん達が、ティポが、テルカ・リュミレス言う武醒魔導器の代わりをしているのはジュードに聞いたんだけど、武醒魔導器と違って、体に負担が出るらしいんだよ」

「それって、エリーゼの体に副作用が出るってこと!!」

「うん、この際、ダメもとで、村雨先生に協力を求めたら、快く協力を勝手出してくれたんだ」

「それに、お姉ちゃん達は、ジュードと同じく、飛び級で、医師免許も持っています、それと、インテリジェントデバイスの開発も出来るんですよ」

ラタトスクの解析官である、龍姫ほどの背丈の女性の、村雨令音がいつも通りにふらつきながらエリーゼを呼びに来たのである。

その理由は龍美が一目でティポが増霊極であることを龍姫の次に見抜いていたように、その上、増霊極が所有者に何らかの副作用が出ることも見抜いて、戦艦にある解析

室にティポをエリーゼの許可の下、持って行ってしまったのである。

呼ばれたエリーゼは早速解析室に向かったのである。

「なんか、龍姫達が強いのがわかった気がするよ」

「カロール、ボクはまだまだ、弱いよ、自分の弱さを見せることが出来る人は本当に強い人なんだよ」

「前の自分だったら、もう此処にはいない、けど、ユーリが教えてくれたから、此処に居れるんだ、龍菜もそうだったんだよね？」

「そうよ、入院中、ずっと自分の弱さを見せれなかった、けど、生まれて初めて、星龍お姉ちゃんに自分の弱さを出せたの」

カロールは龍姫達が強いと思っていたら、龍姫が、本当に強い人は、自分の弱さを見せることが出来るのが本当に強い人だと言ったのであった。

やはり、また、女神が降臨することは誰も知る由もなかったのであった。

村雨に呼ばれたエリーゼが戻ってきたのだが、

「まさか、ティポ？」

「そうだよ!! ティポだよ!!」

「妖精みたいですね!!」

なんとティポがあの人形から、イストワールくらいの紫色の髪を持った女の子の妖精

のような姿になっていたのである。

これにより増霊極の副作用の心配がなくなったのだった。

双子精霊、女神になる

アーストの正体がリーゼ・マクシアを統一している霸王であることがばれたのだが、龍姫には初対面で見抜かれたのは言うまでもないのであった。

アーストは部下の二人と作戦会議をするために教会の会議室に入って行ったのである。

龍姫達は言われた通りに明日に備えて各自解散することにしたのであった。

士道達は運よく明日から土日だったので、パーティーメンバーに参加が許されたのであった。

龍姫は、士道と二人きりで、プラネタワウの展望台に向かったのだが、折紙が龍姫を警戒していたが、龍姫の放つオーラに負かされて、離れて尾行していたのは言うまでもない。

そんな時だった、ある二人の人物が神楽堂家の双子を訪ねていたのであった。

「あのく翔龍さん、輝龍と飛龍、お借りしてもいいですか？」

「・・・すぐ終わりますので」

「いいですわよ、行ってあげなさい、お友達が、待っていますわよ」

「うん、行ってくる!!」

夕焼けのようなオレンジ色のロングヘアで、青い瞳を持った双子なのだが、胸の大きさが違うこと以外区別がつかない、八舞耶俱矢と、八舞夕弦の双子の姉妹が、緑龍の双子女神に話があるようで、その義姉である、翔龍に、二人を貸して欲しいと言ったら、快く承諾して、翔龍は、二人を送り出したのであった。

「輝龍と飛龍は、双子に生まれて良かったと思ってる?」

「急にどうしたの? 改まって、双子に生まれたことは、うれしいよ」

「実は、夕弦達は、元は、一人の精霊なのは知っていますよね」

「うん、まさか、それでボクたちに相談しに来たの? 龍琥ちゃんも礼龍ちゃんだっているのに?」

「だって、こんなこと、同じ年の輝龍と飛龍にしか、相談出来ないと思ったから」

輝龍と飛龍を人目が付かない場所である、教会の物置に連れ込んだ耶俱矢が、輝龍と飛龍に双子として産まれたことに喜びを感じているのかと質問してきたので、輝龍が即急に誇りに思っていると答えたのである。

夕弦は自分達が元々、一体の精霊であることを輝龍と飛龍に相談を持ち掛けたのである。

どちらかが吸収されるか争っていたのだが、お互い、このまま生きていきたいらしく、先

ほどユーリ達などに相談したのだが、やはり帰ってきた答えは、そのままがいいという答えだったのである。

そして今に至るのだった。

「わかった、二人が、このままでもいいんだよね、一つだけ方法があるけど」

「女神になることですね」

「・・・けど、女神になったら、二度と元の体に戻ることは出来ないんだよね」

「そう、ボクたちは大切な人を守るために女神になった、二人は、自分の意志で女神になる？ 決めるのは耶俱矢と夕弦だよ」

「何を聞いてるのです、もう決めました、女神になります。 そうでしょう耶俱矢？」

「うん、ユーリさんから教わった、選ぶんじゃない!!」

「選びました!!」

話を聞いた輝龍と飛龍は二人に一つだけ方法があると提案したのである。

夕弦は想像が付いたようで、女神になることで、もう吸収しなくても、お互いの存在が限界出来ることに気が付いたのであった。

輝龍と飛龍は女神になった理由を説明したら、二人は聞くまでもなく、女神になる決意をしましたのである。

「これが、女神に覚醒できる、女神デバイス」

「ありがとう」

「行きましよう、耶俱矢」

輝龍と飛龍からペンダント型の女神デバイスを受け取った耶俱矢と夕弦は早速、首からぶら下げて、右手で強く握りしめて、女神デバイスを作動させたのであった。

「・・・飛龍の女神の姿」

「輝龍の女神の姿です」

二人の脳裏に輝龍と飛龍の女神の姿が映し出されて、二人を包んでいた光が収まりそここにいたのは、

「胸が大きくなった!! 髪が緑にオレンジ色」

「お互い、胸が同じ大きさに大きくなったんだ!!」

「おめでとう、今日から二人は女神だよ!!」

二人とも身長が173cmに伸びて、胸もミラに引けを取らないほど大きくなったが、二人とも同じ大きさになっていたのであった。

耶俱矢は、露出が多かった霊装から打って変わって、紫色の軽鎧を装備しているので、大きな胸をぺったんこにして、両足に紫色のロングブーツを履いて、両手に籠手が装備されて

いたが、右の籠手には龍の顔が半分描かれていたのであった。

下は短パンである。

髪がオレンジ色と緑の髪を後ろで結び上げていた。

感情表現も豊かになったのである。

夕弦は耶俱矢と同じ武装であるが、髪は緑とオレンジに変化した髪を三つ編みに結っていたのである。

感情表現は以前と変わってないのだった。

「それじゃあ、二元に戻ったら、女神化は魔力を消費するから」

「そうだね」

輝龍は二人に女神化は魔力を消費することで可能であることを明かして女神化を解くように指示を出したら、二人は女神化を解いたのである。

もちろん、お約束の副作用が

「夕弦、胸が、大きくなった・・・」

「どうやら、同じ大きさに大きくなったようです、しかし服がきれいです」

「大丈夫、お願い、風神!!」

「雷神!!」

「OK!! マスター!! リライズ!!」

「ありがとう、輝龍、飛龍」

「どういたしまして!!」

耶俱矢は夕弦より胸が小さかったのだが、女神に覚醒したことによって、胸が、同じ大きさに、成長したのである。

夕弦も同じ大きさになっていたのである。

背も二人とも163 cm伸びた上に、胸も大きくなったので、着ていた服が入らないので、輝龍と飛龍はインテリジェントデバイスでお揃いのパーカーを着させてあげたのである。

二人はお礼を言って晴れて女神の仲間入りを果たしたのであった。

それぞれの決意

決戦前夜にまた新たな女神が誕生して、戦力補強に繋がったのであった。もちろん、八舞姉妹の自らの意志で女神になったのである。

閑話休題

決戦前夜であることもあって、各自別々の場所で、明日の意気込みを話していたのである。

「久しぶりだね、こうして、二人で隣同士に座ってるなんてね」

「ああ、明日はアレクセイ達に挑むんだよな」

「そうだね、士道は別に戦線に入らなくてもいいんだよ」

「何言ってるんだ、もうおまえを死なすわけには行かない、死なしてたまるか!!」

「ごめん、わかった、けど、無茶は程々にね!!」

「ああ、もちろんだ!!」

プラネタワールの展望デッキで、星空を見ながら座っていた龍姫と士道は、アレクセイ達の野望を阻止することを決意したのであった。

一方その頃、

「ネプテユーンヌ、わたし達が隣同士で座っているなんてね、夢みたい」

「そうだよね、いつもだったら、ノワール、いやがるのに」

龍姫と土道がいる反対側で、星空を見ながら以前、シエアの奪い合いをしていたことが嘘みたいにだと言って語り合っていたのであった。

ところ変わって別の場所では

「まさかアンタがアタシの……」

「見た目は誤魔化せても、龍姫達の故郷、地球の生物学には敵わない、これが真実」

「言っとくけど、アンタのこと、お姉ちゃんなんて呼んであげないから!!」

「言ってるそばから、言ってるじゃない」

教会の近くのベンチでリタにジュデイスがある事実を打ち明けたのである。

それは、テルカ・リュミレースで龍姫達と一緒に旅をした際に手に入れた魔導器に関する本を手に入れたのだが、その作者の名が、ヘルメスだった。

しかしオルニオンでジュデイスが自分がヘルメスの実の娘であることをリタに明かしたのだが、当の本人は気づいていなかったのである。

不幸中の幸いで、龍姫達の生まれ故郷である地球、日本に飛ばされた際に、そこで受けた血液検査で、リタと自分のDNAが半分一致したことが判明した書類をジュデイスがリタに見せたのである。

そうリタとジュデイスは異母姉妹だったのであることが琴里によって判明したのである。

それを見たリタは受け入れたらしく、そのままどこかへ立ち去ってしまったのであった。

一方その頃

「明日、アレクセイ達と戦うですね」

「ああ、今度こそは、アレクセイ達とは蹴りを付けねえとな」

「はい、今のみんななら負ける気がしないですね」

「確かに、いまじゃ、女神と精霊と人間の集団だもんな、これで負けたら笑いもんだな」
ユーリとエステルは教会の近くの公園の芝生の上でラピードと一緒に座って、明日、アレクセイ達の野望を阻止することを話していたのであった。

「珍しいね、お姉ちゃんがゲームをしたがらないなんて」

「このパーティーメンバーにゲーム機で遊べるわけないでしょ!!」

「確かに、アーストさん、機械音痴だったね」

ネプギアとユニも明日の戦いの決意を語り合っていたのであった。

リドウ参上

アレクセイ達の野望を阻止することを決めた一同は各自用意された部屋に戻り休むことにしたのであった。

ユーリは龍翔からもらった黒い長袖のシャツとジャージから、いつもの胸元が開いた黒の服に着替えたのは言うまでもない。

そして、ついに決戦の日を迎えたのであった。

「フレン、結局、鎧か」

「やっぱり、いつもの格好の方が安心できるかならね」

「全員そろったようだな、これよりアレクセイ達の野望を阻止するべくザウデ不落宮に乗り込む、今回は上から侵入する、以上!!」

「はい!!」

「後は任せろ!! 行って来い!! 坊主ども!!」

戦線に向くメンバーは全員プラネタワの屋外展望台に集合していた。

もちろん、フレンはいつもの鎧に着替えているのであった。

ザウデ不落宮に乗り込むため、ネプテューヌとネプギアとユニは三龍神を召喚して、

背中に乗ってザウデ不落宮の頂上に向かったのであった。

「これはこれは、どうだったかな、次元を超えて旅をしてきた感想は、それにわたしの知らないかぶれもいるようだが」

「こっちは仲間が増えたから良かったんですけど、ゲームギョウ界はあなた方の好きにさせません!!」

「アンタ達の所為で、どれだけの涙が流れたと思ってるの!!」

「何をいつてるんです? あなた方も責任があるんですよ!! ネプテューヌさん、ノワールさん、お似合いですね、その、ユーリ・ローウエルと同じ服」

「ノワールなら可愛そうにあなた達が殺しちゃったじゃない!! わたしは、獅子神狼龍だ!! そこんとこよろしく!!」

「そうだよ、ネプテューヌも殺しちゃったじゃない、わたしは鳴流神龍舞りょうまだよ!! そこんとこよろしく!!」

待っていましたと言わんばかりに上昇したザウデ不落宮の頂上に、アレクセイ達が待ち構えていたのであった。

しらじらしくい態度で出迎えて来たのである。

イストワールは女神でありながら、友のためなら国さえも捨てる覚悟を決めたネプテューヌと、ユーリと同じ服を着ているが、下に黒のサラシ型の下着を着込み、その上

から黒いシャツを着たノワールを嘲笑っていたのであった。

だが、ネプテューヌとノワールは、名を捨て、鳴流神龍舞と獅子神狼龍としてこの場に来たことをぶつけたのである。

もう、国を統治する女神でなく、人の心を理解した龍の女神としてこの場に現れたのである。

「悪いが、あの方を、待たせるわけにはいかないので、これで失礼させてもらう、頼んだよ、リドウ」

「何!! リドウ、おまえ!!」

「久しぶりだね、ルドガー、悪いけど、キミたちは此処で死んでもらうよ!!」

「わりいけど、倒さしてもらおうぜ!!」

アレクセイ達はどうやら待たせてる人物がいるようで、光の柱に入ってどこかに行ってしまったのだった。

後を追おうとしたら、黒い長髪に白髪が入った髪の男性が立ちはだかったのだ。

そう、何を隠そう、ルドガーが二千万ガルドの借金をさせた張本人、リドウ、その人だった。

龍姫達はアレクセイ達を追うため、一斉に得物を構えたのである。

助太刀

アレクセイ達があるお方を持たせると言つて、ザウデ不落宮の頂上から天界に向かつて伸びている光の柱の中に入って行つてしまつたので、龍姫達は後を追おうとしたら、エレンピオスの医師で、ルドガーに多額の借金をさせた張本人、リドウが立ちはだかつたのである。

リドウと一戦交えることになつたのであつた。

「見ない顔だね？」

「悪いですけど、お引き取り下さい!! 幻狼斬!!」

「そうだよ!! そこどいてよ!! 虎牙破斬!!」

リドウの両手から繰り出される、六本のメスを裁きながら、龍姫達は攻撃を叩き込んでいった。

そして、

「行かせてもらうよ!!」

「まさか、やめろ!! そんなことしたら、死ぬぞ!!」

「な!! 骸殻纏いやがつた!!」

「油断は禁物よ!!」

そう何を隠そう、リドウもルドガー同様にクルニスクの傍流だったのだ。

メツシユの金髪から、赤いメツシユに変わり、赤黒い骸殻を身に纏ったのである。

「ふあはははは!!」

「まるでザギだよ!!」

「此処で引き下がるボクたちじゃない!!」

そんなことでは臆するわけがないメンバーだったので、得物を構え直して、攻撃の態勢に入ったのだった。

そんな時だった、龍姫達が入ってきた扉から、龍姫達がよく知る人物が現れたのである。

「魔神剣!!」

「え、刀夜!! 咲耶!! それに、勇龍!!」

「遅れて済まない、わたしが来たからには大丈夫でござるよ!!」

「みなさん、助けに来ました」

「遅いから、迎えに来てあげたわよ!!」

「おまえ、仮にも教祖がこつちの次元に来て何やってんだ、おまけに、オレの服まで着や

がって」

「刀夜が、教祖!!」

「えええ!!」　　なんで、龍美さん達が居るです、それに、士道君まで。(。D。)ノ!!」

「話は後にしてくれ!!」

なんと、龍姫達が住んでいる次元のゲームギョウ界から刀夜達が助けに参上してくれたのである。

刀夜と咲耶は女神化状態で現れたので、いきなり、ござると言い出したのだが、龍美と龍月と士道達がいることの方が驚いたのであった。

「何!!　伏兵だと!!」

「仕方ない、此処は、我に任せよ、飛ばして行くでござる!!」

「どうなってるんだ!!」

いきなりの助太刀だったのでリドウは冷静さを失くしており、急いでいることを察した刀夜は一気にかたを付けるため、オーババリミツツLv3を発動させたのであった。

「こうなったら、纏めて掛かって来い!!」

「そなたでは、わたしどもには勝てん!!　虎牙破斬!!」

自棄になってしまったリドウに、女神化した刀夜は自身の得物である、無銘の日本刀で斬り上げて、斬り下ろし、

「秋沙雨!!」

滅多刺しにした後、最後は斬り上げず、斬り下ろし、

「熱波旋風陣!!」

その場で回転斬りを繰り出した後、天龍同様に、そのまま、日本刀を叩きつけて、爆風を熾して、

「悪霊退散!! 神狼滅牙・天魔封滅!!」

「あれが、刀夜のバーストアーツ」

刀夜は龍姫がテルカ・リユミレースに飛ばされて戻って来るまで、自分だけのバーストアーツを編み出していたのである。

得物である、自身の刀の刀身に紫色の鬨気を纏わせて、飛び上がり、リドウに向かって、渾身の一太刀を叩き込んで、

「終わらせてもらうでござる!! 覚悟を決めるでござるよ。荒ぶる心、無風なる水面の如く、鎮まれ。断つ!! 無想神烈閃!! 我が刃の前に安らかに眠るでござるよ」

「うずめの秘奥義みたいだ」

うずめの秘奥義の一つ白夜殲滅剣のように滅多斬りにし、最後は一閃して、刀夜が納刀した瞬間にリドウに鋭い斬撃が駆け巡る秘奥義を叩き込んだのである。

天界

刀夜達の助太刀もあってなんとかリドウを戦闘不能にしたメンバーであった。

「まさか、プラネテニューヌを統治してるのが、刀夜なんて、スゴイ」

「まだ、就任して間もないんですけど、申し遅れました、わたし、神超次元ゲームギョウ界、プラネテニューヌを統治している教祖、龍宮寺刀夜です」

「すまない、自己紹介をしてい場合じやないのでな、急ぐぞ!!」

刀夜達は女神化を解いて、急いで龍姫達共にアレクセイ達を追うため、光の柱に入って行ったのであった。

しばらくして、到着した場所はなんと、

「此処、天界だよ」

「あの外道元騎士団長、神にでも、なるつもりか?」

「アレクセイなら、やりそうだね、急ぐう」

「はい!!」

天界に通じていたようで、アレクセイ達が向かったと思われる場所に向かったのである。

そんな時だった、いきなり龍姫達の目の前に一匹の黒猫が現れて、

「にゃ〜」

「どうしたの？ ボクたちになにか用？ ちょっと、アイテムパックに入らないで!!」

「おい、置いて行くぞ!!」

「すいません、すぐ行きます!!」

なんと、龍姫の瑠璃色のアイテムパックに勝手に入ってしまった、龍姫は仕方なくそのまま行くことにしたのであった。

道中、天界の人にアレクセイ達のことを聞くと、

「本部が、どうとか言っていましたけど?」

「ありがとうございます」

「アレクセイ達ならやりそうだな」

「天界を乗っ取るつもりだね」

やはり、アレクセイ達は、天照大御神が指揮を取っている天界の神々がいる、建物に向かったと言うのである。

それを聞いた龍姫達はその建物に向かったのである。

そして、ついに、

「これが、天界を管理している所か、準備は出来てるか?」

「いつでも、行けますよ」

その建物に到着したのである。

どうやら、和風なお城であった。

到着した龍姫達はアレクセイ達の野望を阻止すべく中に潜入したのであった。

「助けてくれ!!」

「魔神剣!! 何があつたんですか?」

「実は、鎧を着た男がやって来て、そしたら、いきなり剣を抜いたんだ、そしたら、この有様だ!!」

「急ぎましょう!!」

城の中に潜入したメンバーは目を疑つたのだ。

なぜなら、中は、アレクセイ達が持っているゲバハーンの所為で、魔物達でかえつていたのだつた。

逃げ惑う、職員を、魔物から救出して、事情を聴いたら、やつぱり、アレクセイの仕業だつたのであつた。

助けた職員たちは外に逃がして、一行はアレクセイ達が待ち構えているだろう、この城の頂上に向かつたのであつた。

この時、あの精霊が天界にやってきたことは言うまでもない。

でじ

アレクセイ達が潜んでいる、天界に位置する城に潜入した龍姫達は、内部が、アレクセイの部下と、魔物の群れが君臨していたのである。

ゲームギョウ界の魔物とは比べ物にならないくらい強い、テルカ・リュミレースの魔物だったので、ベールとロムとラムは悪戦苦闘を虐げられていたのだった。

「はあああ!! キヤ〜!!」

「ベール!! 魔神剣!! 大丈夫、後ろに退がった方がいいよ」

「ですが、女神としての威厳が・・・」

「いい加減にしなさい!! 女神としてのプライドは捨てるべきですわ!!」

「!! わかりましたわ・・・」

やはり、テルカ・リュミレースの魔物の中で一番弱いとさている、水色と白色の体を持った、オタマジヤクシのような、魔物「オタオタ」さえも、苦戦していたので、後から魔物が近づいていることに気が付てなかったもので、龍姫が斬撃を放って、ベールの背後から来た魔物を倒して、後に後退するように指示を出したのだが、今だに女神の地位にしがみ付いていたので、もう一人の自分である、翔龍は櫛を飛ばして、ベールは後ろ

に後退したのであった。

そんなこんなで、魔物を倒しながら道なりに進んでいったのであった。

しばらくして、お城の屋外の中庭に到着したのであったが、

「出てきて、かくれんぼする必要ないよね、狂三!!」

「流石、龍神の名をお持ちの方ですわね、おや、初めてお見えするお方もいるのですね、

わたくし、時崎狂三と申します」

「姉様、下がってください、此処は真那がいやがります」

「あなたが、わたしと声が似ている、精霊なのね、わたしはこっちのミラの姉のミュゼよ」

「ミュゼさん、こんな時に、何自己紹介をしてるんですか!!」

やはり、猫の嗅覚を持った龍姫の前では匂いまでは隠しておせなかつたらしく、龍姫に出てくるように言われて出てきたのは、真那が追っている影と時間を操ることが出来る精霊で、二丁拳銃などの銃器を得物にし、右目が紅眼で、左目が金の瞳に時計の文字盤のオッドアイで、黒と赤のゴスロリ調の両肩が露出したドレスを身に纏った、龍姫のクラスメートの時崎狂三が現れたのである。

真那は龍姫に下がるように言って、龍姫からもらった、日本刀を左腰から抜刀して八相の構えの態勢を取ったのである。

自分と声が似ている精霊に会えたことがうれしかったのか、ミュゼは自己紹介をして

しまい、龍美を筆頭に、突っ込まれてしまったのであった。

そして、真那と狂三が得物を構えた瞬間、

「バーン!!」

「ダメですわよ、わたくしは、あなた方と戦う意志はございませんので、それと、これをもたらしておきますわ、もちろん、パーティーマンバーに入って差し上げますわ!!」

「それは、女神デバイス!! 龍姫姉様どうして? 真那達の敵ですよ」

「忘れたのかしら、わたし達は、無駄な戦いはしないことのよ」

「あ、すいませんでした、後で、始末書を書いて提出します」

「いや、別に始末書はいらないから・・・」

なんと狂三は得物である、二丁拳銃を床に投げ捨て、龍姫達に、戦う意志がないことを証明したのを見届けた龍姫は、後腰にぶら下げているアイテムパックから、鈴型の緑色の水晶が付いたチョーカー型の女神デバイスを渡したのである。

真那が良しとしなかったのだが、ジュデイスが言い聞かせて、真那は納刀し、後で始末書を提出すると言い出したのだが、土道達は呆れてしまったのであった。

「わたくしの力、お貸ししますわ!!」

「狂三、女神になっても、精霊の能力は使えるけど、元に戻れなくなるけどいい?」

「これはわたくしのケジメ、選ぶんじやありません、もう選んだのです!!」

「わかった」

狂三は龍姫達に協力することを誓い、龍姫から受け取った女神デバイスを首に装着して、女神になることを選択して、女神デバイスを使ったのである。

狂三を包んでいた光が収まりそこにいたのは、

「これがわたしの女神の姿だによ？」

「なるほど、ミュゼが女神になると、あの姿になるのだな」

「たしか、地球のお店の看板に描かれていた猫ですね」

「エステル、どんなお店（・ω・）」

157 cmから173 cmまで背が伸び、胸も先ほどより大きくなり、ちゃんと、胴丸で胸の隆起を抑え込んでいたのだが、何を思ったのか、白猫耳の被り物に、青いリボンが付いたエプロンドレスに身を包み、胴丸を隠し、大きな鈴を着けており、頭にホワイトブリムと言うヘッドドレスを着けて、頭の左右にも、大きな鈴を装備して、猫しっぽまで装備し、両目が、右紅左翠のオッドアイになっており、髪も黒い長髪から、緑色に変わっており、両手には白い手袋を装着していたので、誰が見ても猫耳メイドにしか見えなかったのである。

狂三の女神の姿を見たエステルは、龍姫の実家に向かう最中に見かけた看板に描かれた人物と似ていることを思いだしたのであった。

レイアがどんなお店と聞いたのは言うまでもない。

「女神としての名は？」

「決まってるによ、電撃猫女神、デ・ジ・キャラットハートだによ!!」

「よろしくな、でじこ!!」

「よろしくだによ!! ユーリ!!」

狂三は女神としての名を名乗り、真龍姫達とユーリから、でじこと言うニックネームをもらって、握手して、アレクセイ達がいる最上階を目指すのであった。

ラシユガルの王

龍姫達の友人で、影と時の精霊でもある時崎狂三と再会した龍姫は、狂三と話し合いの結果、手を貸してくれることになり、土道を護衛する名目で龍姫から女神デバイスを贈呈され、晴れて、龍の女神の仲間入りにを果たしたのだが、どう言うわけか、とあるマスコットキャラクターに似ていたは言うまでなかったのである。

「狂三、変身、解いた方がいいよ、魔力を消費するから」

「わかったによ!! けど、土道、こっちに來て欲しいによ!!」

「なんだか、嫌な予感が・・・」

「土道青少年だけ、ずるい!!」

龍姫が狂三に魔力を温存させるために変身を解くように言ったのだが、土道に近くに來て欲しいと指示を出し、仕方なく土道は女神化している狂三に近付いたのだった。

レイヴンは拗ねていたのは言うまでもない。

そして、

「キヤア〜!! どうしましょう、このままでは移動もままならないですわ(。Д。)ノ!!」

「狂三、今すぐ、お兄ちゃんから離れる!!」

「おおおお!!」

「.....」

「おやおや、レイヴンさんは気を失っているんですね」

狂三も女神になったことにより、胸が大きくなって、ウエストなどの腰回りが、引き締まって、細くなり、163cmに背が伸びて、いたのだが、元々、着ていたゴシック調で両肩が露出していたので、大きくなった胸で、服が入らなくなってしまったので、その勢いで士道の顔に大きくなった胸を押し付けて、隠していたら、真那が女神化してしまい、レイヴンが立ったまま気絶してしまい、アルヴィンが興奮していたのであった。

もちろん、ルドガーはエルの前に立って、見せないようにして、男性陣は目を逸らしたのだった。

「龍姫、なんか着るもんもってねえのか？」

「仕方ない、この服で我慢してね、イルミナル!!」

「はい、マスター!!」

「ありがとうございますわ、これで動けますわ」

「さてと、気を取り直して、アレクセイ達がいる最上階に急ぎますか!!」

ユーリは顔色一つ変えないで、龍姫に今の狂三に着れそうな服を持っていないのかと

聞いて来たので、龍姫はインテリジェントデバイス「イルミナル」で赤と黒の二色のパークーとスカートでなく、黒のハーフパンツをリライズ機能で着させてあげたのである。そのおかげで動きに支障がなくなった上に、龍姫達同様に、術技が使用可能になったのである。

狂三は龍姫お礼を言つて、気を取り直してアレクセイ達が待ち構えているであろう、最上階に急ぐのであった。

道中、道を塞いでいる魔物の群れを片付けながら進んでいたら、また、大きな扉の前に出たのである。

龍姫達とユリー達とジュード達はその大きな扉を押し開けて、中に入ることにしたのである。

吹き抜けた天井の大きな広間だったが、どうやら先客がいたようで、

「待つていたぞ」

「また、あなた様と会えるとは、イルファンの元王、ナハティガル・I・ファン」

「やはり、生き返っていたのだな」

「悪いが、此処を通すわけには行かん!!」

「ジュードから聞いていた通りだな、人の命を弄んだ落ちぶれた国王だったらしいじゃねえか、悪いが行かせてもらうぜ!!」

「来い!!」捻りつぶしてくれよう!!」

そこにいたのは、アーストがリーゼ・マクシアの霸王になる前、人からマナを取り出し殺した国王だった、ナハティガルが龍姫達とユーリ達とジュード達の行く手を阻んだのである。

一刻も早くアレクセイ達がいる最上階に行くため、ナハティガルと戦うことが避けられない状態だったので、ユーリがニバンボシを抜刀したのを皮切りに、一斉に武器を構えたのであった。

優雅に

アレクセイ達の野望を阻止するため最上階に向かっていたのだが、その道中、時崎狂三を仲間に加え、機械兵や、アレクセイが呼び込んだテルカ・リュミレースの魔物を倒しながら突き進んでいたら、一年前、自分の民さえ実験道具にした、今は亡き、ラ・シユガルの王だった額に傷があり、巨大なランスを軽々と振り回す大男、ナハティガル・I・ファンが立ちはだかったのである。

龍姫達は先を急ぐためナハティガルと戦うことになってしまったのだった。

「イルベルト、この手で、引導を渡してやろう!!」

「ボクたちのこと忘れてませんか？ 魔神連牙斬!!」

「こしやくな、小僧の分際で!!」

「ナハティガル!! あなたを倒す!!」

「やってみろ!! この生まれ変わった、この王の力で叩き潰してくれる!!」

「わりいけど、手加減出来ねえぜ!!」

ナハティガル相手に、龍姫達は女神化する必要性がないと判断し、変身しないで、武器を構えて、戦うことにしたのであった。

龍姫は隙を見つけて、無殺傷モードにしてある、絆龍で斬撃を合計、六発纏めて放った。

ナハティガルは龍姫達の連携に付いて行けず、ローエンを相手にするのがやつとだったのである。

龍ラピにラピードと言う二匹の犬まで相手にするとは思ってなかったのだから。

「戯れもここまでだ!! 天上天下万里一空!! デモンズランス!!」

ナハティガルは一気に片付けるため、オーバリーミッツを発動して、ランスを回転させながら飛びあがり、そこからランスを投げつける秘奥義を放ったのだ。

今の龍姫達には通用しないことを知る由もなかったのだから、

「させない!! エターナルインフイニティ 極光波!!!!」

「なんじゃと!! 王の槍を跳ね返しただと!!」

「もう、おまえの技は効かん!!」

真龍姫も極光術を修得した女神である以上、カウンター秘奥義である光の結界を張って、相手の飛び道具系の秘奥義を跳ね返して、少しだけだが、パーティーメンバーを回復させたのである。

ナハティガルは自分の秘奥義が潰されたことに、己の視覚を疑ったのである。

そして、

「これが」

「本物の」

龍音&優華龍「デモンズランス・ゼロ（レイン）!!」

「くっ!! 馬鹿な!!」

龍音と優華龍は闇の槍を作り出し、龍音は飛びあがりそのまま投げつけて、十二発の追尾弾のおまけつきで、優華龍は一本投げつけた後、纏めて四本の闇の槍を発射し、全無殺傷で、ナハティガルに命中させたのである。

「すいませんが此処はわたくしが決めさしてもら差していただきます!!」

「ローエンさん!!」

ローエンはナハティガルとの因縁にケリを着けるため、リーゼ・マクシアでは共鳴しないと出来ないオーバリーリミッツを、ユーリ達から教わった、テルカ・リュミレース式の戦闘術で発動させて、

「フィニッシュです!! 渦塔は氷結し、光も闇に凍る!! 無情なる諸行に・・・挽歌を!!」

グランドファイナーレ!!」

「ぐは!!」

タイダルウェイブを発動して、そのまま凍らせて、打ち砕く秘奥義で終止符を討ったのであった。

冥闇

アレクセイが犯罪神の力で生き返らせた、リーゼ・マクシアの王の一人だった男、ナハティガルは龍姫達に敗れて、

「行くがいい」

「みなさん、先を急ぎましょう」

その場で蹲り、先に進むことを許可したようで、背後から襲うことはないと考えた一同は、アレクセイ達がいる最上階に向かったのであった。

もちろん、ナハティガルに勝つても道中、魔物に襲われるのは言うまでもないのだった。

やはり、龍姫達の目の前に大きな扉と出くわしたのである。

龍姫達は意を決して中に入ることにしたのであった。

中に潜入した龍姫達を待ち構えていたのはなんと、

「ジランド!!」

「それに、セルシウス!!」

「悪いが、此処を通すわけにはいかねえ、そっち野郎には恨みはねえが、これも仕事なん

でな」

「急いでるんだよ!! 通してよ!!」

「マスターの邪魔はさせません!!」

ジュード達が一年前、ナハティガルを利用して、用済みだと判断して、無理矢理使役した、氷の精霊、セルシウスにナハティガルを殺させて、アレクノアを率い、アルヴィンの叔父でもある、ジランドが、セルシウス共に龍姫達の目の前に立ちはだかつたのである。

龍姫達の説得も虚しく、結局、戦うしか道が残されていなかったのである。

ジランドもセルシウスも戦う姿勢を崩そうとしなかつたのだ。

龍姫達は一斉に武器を構えたのであつた。

「黙って、見逃してくれるわけねえか?」

「それはできねえ、相談だな!!」

「マスターの邪魔はさせません!!」

「セルシウス、こんな奴に手を貸しちゃダメだ!!」

ジランドとセルシウスを相手に、言葉を交わしながら、戦うことを強いられた龍姫達だつたのである。

ジランドの銃が火を噴き、セルシウスの鉄拳が繰り出され来るのを受け流しながら、

攻撃を繰り出していったのだった。

もちろん、お互い、共鳴技を繰り出していったのだ

「一気に片付けるよ!! 武龍!!」

「そのつもりや、龍姫ちゃん!!」

龍姫&武龍「飛ばして行きますか（行くで）!!」

「龍姫!! 武龍!! 頼んだぞ!!」

「来い」

龍姫と武龍は短期決戦に持ち込むためにオーバーリミッツLv4を同時発動させて、ジラントとセルシウスに立ち向かって行ったのであった。

ジラントとセルシウスは武龍を向かい打つ構えを取っていた。

だが、それも龍姫の天羽々斬と絆龍の二刀、武龍の斧と脇差の二刀流の前に敵うはずがなく、

「魔王地顎陣!!」

武龍はジラントとセルシウスの攻撃の合間を縫って、斧を叩きつけて岩の槍で攻撃して、

「時空蒼破斬!!」

「ぐっ!!」

龍姫は二刀流状態で、刀身に、鬪気を纏わせて斬り上げて、斬り下ろし、前方に巨大な鬪気を放って、

「共同作業としやれ込まんとな」

「問題ないよ!!」

「行つてや、龍姫ちゃん」

「虚空術式展開!! 目標ロック!!」

「ほんじゃ、打ちこんで行くで!!」

龍姫&武龍 「冥闇煉獄羅刹閃!!」

「おうきにー」

武龍が炎で捉えたのを、龍姫がバインドして、二人同時に斬り抜ける秘奥義を叩き込んだのであった。

氷姫の女神

またもや龍姫達の前に立ちはだかつたジラントとセルシウスは、龍姫と武龍の合体秘奥義「冥闇煉獄羅刹閃」を受けて、ジラントは気絶していたが、

「はあ、はあ、殺せ、今すぐ、わたしを殺してください・・・」

「悪いが、それは出来ないな」

「何故です・・・もう留まることが・・・」

「待って!!」

セルシウスは力を使いすぎたようで、体が消えかかっていたので、最後に殺してくれと言ってきたのだが、白のパーカーと短パンを履いたジュード達の仲間のミラが出来ぬと答え、龍姫が待つてと言いながら近づいたのだが、

「そんな、間に合わなかった」

セルシウスは手のひらサイズの石になってしまったのだった。

龍姫がその石を拾ったのだが、次の瞬間、

「何だ、精霊の化石が光ってる!!」

「龍姫!!」

「龍姫お姉ちゃん!!」

なんと、セルシウスの化石が急に光り出したのである。

しばらくして、光が収まりそこにいたのは、

「まさか、セルシウス!!」

「そうしたのだ、何かついてるのか、じろじろ見て」

「何って、両目が、ゲームギョウ界の」

「女神の瞳になってるんだよ!!」

なんと、化石になってしまったセルシウスは女神になってしまったのだった。

身長は変わってないが、髪が、淡い青いロングヘアーに変わっており、服装は白のノー
スリーブに、黒の腹巻に、青の巻きスカートと言う、先ほどと同じような服装だったの
だが、女神になったことにより、ぺったんこに近かった胸が、ベール並に大きくなって、
両目が、ゲームギョウ界の女神特有のゲーム機の起動ボタンのマークの碧眼に変わっ
て、声が、中性的な声だったのだが、先ほど打って変わって、女性らしい声になってい
たのであった。

「まあ、いい、おまえが、わたしの新たな契約者か?」

「ボクは、セルシウスに仲間になって欲しいんだ!!」

「そうだよ!! 契約者じゃなくて、わたしの友達になって欲しいんだよ!!」

「友か・・・いいだろう、龍姫と言ったな、わたしの力を貸してやろう」

「ありがとな、セルシウス、女神になったってことは」

「だったら、氷姫の女神、アイスハートはどうです？」

「別にセルシウスでいいのだが、この世界では、女神になった者は、別の名を名乗るのか、気にいった、女神としての名はアイスハートだな、よろしく頼むぞ」

セルシウスは龍姫が契約者と勘違いしたので、龍姫が仲間になって欲しいとお願いして、龍空翔が友達になって欲しいと言いだして、女神になったセルシウスは、龍姫達に力を貸すことを約束して、エステルが、セルシウスに、女神の名を授けて、一行はアレクセイ達がいる最上階に急ぐのであった。

ぷち子

化石になってしまったセルシウスを龍姫が魔力を分けたら、具現して、なんと女神になってしまい、龍姫達共に、アレクセイ達の野望を阻止するためにパーティーメンバーに入ってくれて、女神化を解いたのだが、先ほどの眼帯を嵌めた姿ではなく、童顔になっており、髪は青いロングヘアーに、両目が、碧眼のまま、胸も成長したようで、大きくなって、服装はベールが着ているドレスを白と青の二色にしたものを着ていたのであった。

今は、力を温存するため、姿を晦ましているのであった。

閑話休題

スキット：精霊の復活

正ミラ「しかし、驚いたぞ、まさか、化石が蘇るとは」

ローエン「どうやら、龍姫さん達の魔力は、少なからず、影響しているようですね」

ジュード「そうだよな、なんかわかる？ マクスウエル？」

マクスウエル「済まんが、わからん、ただ一つだけ言えることがある」

ユーリ「龍姫達の魔力は、女に影響してる」

ミュゼ「確かに、龍姫達は女神、それ以外、それ以上でもないわね」

リタ「そうね、けど、これで、アタシの研究課題が出来たわ」

エステル「それより、龍姫、大丈夫です？」

龍姫「大丈夫だよ、減った魔力は、グミで回復できるから」

「そういうえば、女神って何なの？」

「そうか、おまえはパーティーマンバーに入って間もないんだったな、今いる天界の下には、ゲームギョウ界があるのは知っているな？」

「たしか、そこには四人の女神が国を統治して、人の心、シエアの奪い合いをしてたから、犯罪組織如きに、三年間幽閉されたんでしょ、それと、ゲームギョウ界の人間は誰も助けにいかなくなったって、ルドガーから聞いたわ」

「それだけ、わかっているなら話が早い」

分史世界のミラは女神と言う存在を、パラレルワールドの自分、歩きながらミラに質問していたのであった。

正史ミラは簡単に女神の説明をして、分史ミラはこの世界の人間の不甲斐なさと、人の心と言うシエアがなければ生きて行けない、ゲームギョウ界の女神の体質についてルドガーから説明を受けていたので、話が早かったのであった。

やはり、分史ミラも、女神の体質に疑問を持っていたのは言うまでもない。

そうこうしているうちに、大きな扉の前に出たのであった。

「そうだわ、あなた、この際、女神になったらどうかしら？」

「確かに、それも一理あるな、決めるのは、おまえだ!!」

唐突にミュゼが、分史ミラに女神になってみたはどうかと勧めたのである。

それを聞いたユーリは本人の意志を尊重させるために分史ミラに決定権を委ねたのである。

そして、分史ミラが出した答えは、

「そうね、この際、アンタと見分けが付いた方がいいと思っていたから、選ぶんじゃない、もう選んだのよ!!」

「わかりました、ボクも何も言いまへん、これを受け取ってくださいな」

「ありがとう、じゃあ、いくわよ」

なんと、正史ミラに向かって、女神宣言をしたのである。

武龍はアイテムパックから、琥珀色の水晶が付いたペンダント型の女神デバイスを分史ミラに授けたのである。

女神デバイスを受け取った分史ミラは早速、首に、掛けて、使って光に包まれたのである。

その包んでいた光が収まりそこにいたのは、

「これがミラの女神姿だにゆ？」

「どう見ても、身長と体型以外が、あのキャラにしか見えないよ（・ω・）」

「わたしも、あの看板のお店の店前に置いていた、小さな看板に描かれていた絵に似てます」

「まさか、さつき言ってた、地球のお店・・・」

171cmと少し背が伸びて、胸も一回り大きくなっていたが、流星に戦闘の妨げになるので、インナーの上から軽鎧を装備して、隆起を抑え込んで、ぺったんこにして、その上から白色のセーラー服に青いワンピースを着て、頭に虎猫の被り物を被り、同じ柄の猫しっぽが付いて、金髪のロングヘアーから、両端に鈴が付いたゴムで左右に分けて結っていた茶髪であった。

口調が、「にゆ」になっていたのだった。

狂三と同様に、エステルが地球のお店の看板に描かれていた絵に似ていると述べて、またレイアが聞いたのは言うまでもなかったのであった。

「そうだ、今日から、ぶち子って呼ぶね!!」

「わたしも、ぶち子と呼ぼう」

「わかったにゆ、今日からぶち子だにゆ!!」

「バリボーなのに、ぶち子？」

真龍姫達は勝手にぷち子と言うニックネームをつけ出したので、正史ミラもぷち子と呼ぶことにしたのだが、ティポが突っ込んだのは言うまでもない。

戦乙女

分史ミラがプチ・キャラットハートと言う精霊女神に覚醒したことによって、パーティーメンバーから「ぷち子」と命名されて、扉の前にいるのであった。

スキット：今更

龍舞「まさか、ユーリ達はグミで回復できるだね」

ユーリ「いちいち、あんな瓶の蓋開ける暇は戦闘中にねえからな」

ロム「それに苦くない」

龍音「一応、治療薬だけ」

「準備は出来てるな？」

「もちろんです!!」

「じゃあ、行こうぜ!!」

龍姫達は最上階に行くため、扉を押して開けたのである。

すんなり、最上階に行けるはずもなく、また、あの男が立ちはだかつたのである。

「ユーリ!! 俺と一緒にのぼり詰めれねえと、此処から先は通さねええええ!!」

「何!!」

そう何を隠そう、タルカロンからユーリに突き落とされて尚、犯罪神が生き返らせた暗殺者、ザギがまたもや、龍姫達の行く手を阻んだのである。

なんとしても、最上階に行くため、龍姫達は武器を構えたのである。

その時だった、

「誰だ!!」

「人間と精霊よ、それと、龍神、信仰心がなければ生きれない者達よ、命を投げ捨てる者ではない!! おまえたちも戦士なら戦いの渦中こそ道を見出すべきだろう」

「まさか、戦乙女、ヴァルキリー!!」

蒼穹の甲冑に身を包みんだ、銀の髪の戦乙女ヴァルキリーがどこからともなく現れて、ザギの双剣を弾き返したのである。

「また増えたか、何人でも掛かって来い!! 出ないといけねえええだろうがあああ!!」
「悪いけど、自己紹介をしている暇はないようだな、力を貸すぞ」

ザギは相変わらざるの言動の酷さだったのだが、龍姫達は得物を構え直して、態勢を整えたのであった。

「魔神剣・双牙!!」

「幻狼斬!!」

「飛燕連脚!!」

「霸道滅封!!」

「カチカチツルツルピキピキドカーン!! インヴェルノ!!」

龍姫達は一齐に攻撃を繰り返り出し、ザギを追い詰めていったのだった。

そして、次の瞬間、

「その身に刻め!! 神技!! ニーベルン・ヴァレスティ!!」

「上がってきたあつあぁ!!」

ヴァルキリーは何の前触れもなく、剣で、数回斬りつけて、打ち上げた後、自身も飛びあがり、そこからデモンズランスの要領で槍を投げつけたのである。

戦乙女の秘奥義を受けたザギはその場で気絶したのであった。

「ありがとうございます、ボクは鳴流神龍姫って言います」

「そうか、龍姫か、わたしは、戦乙女で三女神の二柱、ヴァルキリーだ。よろしく頼む（この者が、あのお方の子達?）」

「助かった、礼を言うぞ、俺の名はアースト・アウトウェイだ」

「よろしく頼む、先を急いだ方がいいだろう、それにしても、人間の女神を信仰する心がこの世界の女神の源だとはな、流石の、オーディン様も、聞いて呆れるな」

「なんだ、おまえ、女神なのに、人の心がなくても生きて行けるんだな」

「何を言っている、我ら、戦乙女は、信仰心が無くても、死ぬことがない」

龍姫達は道中、歩きながら自己紹介をしていたのだが、ヴァルキリーが龍姫を見るなり、浮かない表情をしたが、切り替えて、ゲームギョウ界の女神の源が信仰心であることを否定したのであった。

決戦直前

龍姫達はザギの妨害にあつたが、戦乙女ヴアルキリーの助太刀によつてなんとか切りぬけて、ヴアルキリーは姿を晦ましたが、戦闘になつたら現れて、一緒に戦つてくれたいたのであつた。

道中、魔物の群れを蹴散らしながら、アレクセイ達の野望を阻止するため最上階に向かつたのであつた。

やはり、ベールとロムとラムは、ゲームギョウ界の魔物と違い、倒したら、血が出ることにと毎度いながら、パーティーメンバーに憑いて行つたのであつた。

そんなこんなで、アレクセイ達がいる最上階手前の階段に到着したのであつた。

「はい、明星式号」

「ありがとな」

「ネプギアちゃん、刀、交換しないと、はいこれ、吉光」

「そうだったね、わたしとユーリさんでやるんだつたね」

そう、この次元のマジコンを精霊にするため、リタから、修理してもらつた水色の刀身の剣で、星喰みを斬つた「明星式号」を受け取つたユーリは早速、粒子化して、姫龍

紗から、美龍飛が龍姫から教わった製法で打った名刀、「吉光」と「九字兼定」を交換したのである。

「そうだ、カロル君、これ、使ってあげて、お姉ちゃんも一緒に行きたがってたから」

「使ってあげなよ、カロル」

「ありがとう、ロム、大切に使用してもらおうね」

ロムは、ザギに深手を負らせて、今も、ルウイーの外科病棟に入院している、姉、プランのハンマーをカロルに渡したのである。

ジュードが使ってあげたらとカロルに言っ、カロルは一言礼を言っ、受け取っ、粒子化したのであつた。

「エルちゃん、これあげるね、ただのインテリジエントデバイス」

「間違つても女神デバイスじゃないだろうな？」

「大丈夫です、龍姫からもらった火竜の紅玉をコアにして作り上げた、真正正銘のインテリジエントデバイスですから」

「ありがとう、龍美」

「マスターを認識しました、では名前を付けて下さい」

「じゃあ、マルル!!」

「わかりました、マルルとお呼びください」

龍美は龍姫からインテリジエントデバイス企画書を受け取った瞬間に、龍姫からもらった火竜の紅玉をコアにした腕輪型のインテリジエントデバイスをエルにあげたのである。

ルドガーは女神デバイスかと疑ったのだが、龍美はインテリジエントデバイスと説明したのである。

エルは、飼い猫である、ルルにちなんで、マルルと名付けて、左腕に嵌めたのである。

「マスター、変身魔法で、大人になれますよ、女神ではないので、普通に人間のままです」
「つて事は、エルも、みんなと一緒に戦えるんだ!!」

「無茶はしないようにね」

「ハーン!!」

「気合い入れて、行くぞ!!」

「オウ!!」

マルルは変身魔法で大人になれることを説明して、フレンが無茶はしないように注意して、エルは元気よく返事をして、アレクセイ達が待ち構えている最上階に向かったのであった。

最終決戦

天界の神殿の最上階に到着した龍姫達は、ゆつくりと一段ずつ、階段を上って行ったのである。

そして、

「ようこそ、こんな天空の場所へ」

「来たか、ルドガー、いや、息子よ」

「やはり、生き返っていたのか、ヒズリー!!」

「それって、まさか!!」

「クルスニクの槍!! なるほどな、三年前、マジック達に、こいつらを幽閉させて、プラネテューヌとラストেশションの技術者を使って作らせて、女神のシエアエナジーを槍に吸収させたわけか」

「その通りですよ、アースト君、いや、リーゼ・マクシアの王と呼んだ方がいいのかな?」

龍姫達はついにアレクセイ達とご対面したのであった。

アレクセイ達ともう一人、白髪の大柄の赤いスーツを着た男がいたのだ。

その男に向かって、ルドガーはヒズリーと叫んだのだ。

その側には、まるで大砲のような兵器が上に向けられており、ミラが、クルニスクの槍と言ったのだった。

それを見たアーストは三年前、女神達を幽閉した理由がわかったと言ったのである。

「アレクセイ!! やはり、あなたはゲームギョウ界でも変わらないんですね!!」

「何を当たり前のこと言っている、どうやら、腐敗し閉塞しきったゲームギョウ界を再生させるには、絶対的な力が必要なのだ」

「そうね、シエアがなければ、女神は死ぬわね、けど、龍神になったわたし達は何も怖くない、だって、お姉ちゃんも、妹も増えた、友達だって出来たんだから!! けど、ほんだけの人が悲しんだと思ってるの!!」

「今のゲームギョウ界の民は、新しい世界を望んでいる、女神などもう必要ないのだよ」
「世迷言……全部、世迷言なのじゃ!! こいつらの言うことは何もかも嘘ばっちじゃ!!」
「……どうしてなんです、いーすんさん!!」

「あなたが悪いんですよ、あなたがあの時、死んでれば、こんなことはしなかったんですから、まさか、天界から、テルカ・リユミレースとリーゼ・マクシアとエレンピオスカら武偵を送り込んでくるとは、思いもありませんでしたよ」

「そうですね、もう、ネプギアという、女神候補生は、もう此処にはいません、今あなた方の目の前に立っているのは、聖龍皇霸王にして、鳴流神家、鳴流神恵龍^{エリス}だ!!」

「先、越されちゃったわね、わたしも宣言するわ!! アンタ達の目の前にいるのは、ユニと言う女神候補生じゃない、時空魔王にして、獅子神家、獅子神臥龍よ!!」

フレンがテルカ・リユミレースでも同じことしたことを思いだして、アレクセイに言い放ったのだ。

やはりアレクセイ達は考えを変えることはないと言いだして、イストワールは嘲笑っていた。

パティも世迷言だと言って斬り捨てた。

ネプギアは名を捨て、聖龍霸王として、そして、鳴流神家の一員として、鳴流神恵龍寿と名乗ったのである。

ユニも名を捨て、時空魔王として、そして、獅子神家の一員として、獅子神臥龍と名のつたのである。

「わたし達は世界の解放を約束する!!」

「女神から、シエアから、ちっぽけな箱庭のゲームギョウ界から!!」
「世界は生まれかわるのですから!! きやははは!!」

ユーリ&獅子神家一同「世のためだろうが、なんだろうが、それで誰かを泣かせてりや(たら)世話ねえぜ(ないよ!!)(わね!!)!! てめえら(あなた達)(アンタ達)を倒す理由はこれだ(よ)!!」

全員「今のアンタ達（おまえら）（あなた達）が一番、見にくいぜ（です）（な）（ですわ）（よ）（わ）（ぞ） !!」

アレクセイ達はゲームギョウ界を解放すると言い出したので、ユーリが抜刀したと同時に一斉に武器を構えて、面と向かって、「今のアンタ達が、一番、見にくいぜ」と心が醜いことを言い切ったのである。

アレクセイ達との戦いの火蓋が切って落とされたのであった。

会合

龍姫達は五世界を巻き込んだ戦いに終止符を討つべく、天界の神殿の頂上でアレクセイ達と言葉を交わしていたのであった。

「なあ、大将達、どうあつても、やめる気はねえの?」

「また、おまえもそんなことを言うのか。なぜだ? おまえたちの誰一人として、シエアの奪い合いをよいとは思ってないだろうに」

「目的は手段を正当化しねえよ、大将達。前にも言ったよね」

「確かに、わたし達、女神はシエアの奪い合いを行ってきました、けど、もう終わりにする」

「いつも正しい道を選ぶはしない以上、誰にだって、つらい過去や、悲しい思い出はある、でも、取り返しようが無い過ちも、数えきれないほどの後悔も、その全てがボクたちが生きた証なんだ!!」

「俺達の未来は俺達が決める!! そして、自分の足で歩いて行く、それこそが俺達がこの世に生きている幸せであり、喜びなんだよ!!」

「絶対の幸福なんて、この世にない!! 苦しみや悲しみがあるからこそ人は幸せになり

たいと願うんだ!! それを自分の手でつかもうとする!! 本当の幸せを探して生きる毎日にあるんだ!! 人はそうやって歴史を築いていくんだよ!!」

「どの世界も不安定で、いろんな人がいて、勝手な正義を信じて生きている。そのせいで、争いも悲しみも耐えることはない、不安定だけど、だからこそ、人は変われるんだ!! 違う何かを知ろうすることが人を変えるんだ!! 人が変われば世界だって変わる・・・シエアなんて必要ないんだよ!!」

「強行な手段は、許さないものを生む。わかるわよね?」

「ゲームギョウ界にこれっぽちも未練ないけど、テルカ・リュミレースが関わってる以上、アンタ達の作る世界が、今よりマシだって保証はどこにもないわ!!」

「幸せとは誰かに与えられるものでもない、自らの手でつかんでこそ価値があるのよ!!」

「何故です、女神であるあなた方までそんなことが言えるのです」

「てめえらの言い分認めるやつはいねえよ」

「いいだろう、わたし達が叩き潰してくれよう!!」

「わたしは魂を冒流するものは許さない!!」

双方一歩も引かない論理合戦が始まり、

「ゲームギョウ界のシエアの大半はこちらの掌中にある、勝ち目はないぞ」

「何を言っている、まだクルスニクの槍は充填中だろうか?」

「・・・精霊か、これは迂闊でした」

まだクルスニクの槍に力が充填していないことに気づいたミラにイストワールは迂闊だったと言って、

「いいだろう、新世界の生贄にしてやろう!!」

「勝つて、自分達の未来、決めさしてもらおう!!」

「未来は創り出すもんだろう。選んだ道を信じて創り出すもんだ!!」

龍姫達を倒して、世界を変えると豪語し出した、アレクセイ達に、自分の未来を勝ち取らせてもらおうと宣言して、戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

犯罪神

龍姫達は言葉を交わしたが、やはり戦うしか道が残されておらず、刃を交えるのであった。

「またもや、このわたしに、剣で挑むとは」

「我が、骸殻の前にひれ伏すが良い!!」

「このわたしが、強いんです!!」

イストワール以外が中二病まがいなセリフを言い出したので、

ユーリ&勇龍「誰もいないとこでやってくれ(欲しいわね)。聞いてて恥ずかしいぜ

(恥ずかしいわ)!!」

と冷静な突っ込みを入れていたのであった。

もちろん、戦闘中であることは言うまでもなかったのである。

「ボクたちを甘く見ないことですよ!! 魔神連牙斬!!」

「霸道滅封!!」

「天光満ところに我はあり、黄泉の門開く時、汝あり!! 出でよ神の雷!! インディネイ

シヨン!!」

「あの魔術、龍姫達が発動すると、しやれになんねえな!! 爪竜連牙!!」
 「わたしも敵に回したくない!!」

怒涛の攻撃を繰り出し、アレクセイ達を追い詰めて行っていたのであった。

ヴアルキュリーも龍姫達を敵にしたくないと言っていたのであった。

すんなり勝たせてもらえるわけがないのは言うまでもない。

「舞い飛べ、聖劍!! ふん!! はっ!! 閃覇嵐星塵!!」

アレクセイはオーバリーリミッツを発動させて、ゲハバーンを飛ばして、上空から落とす秘奥義を繰り出してきたのだが、

「させない!! 極エターナルインフィニティ光波!!」

「何!! 私の技が返されただと!!」

「龍空翔、助かった!!」

龍空翔も秘奥義を返す、極光術を修得していたようで、落ちてきたゲハバーンをアレクセイに向かって跳ね返して、パーティーメンバーを回復させたのであった。

これには流石のアレクセイ達も愕然としていたのは言うまでもないのであった。

「なら、これならどうだ!! 容赦はせん!! はあああ!! ふん 絶拳!! どりやああ!!」

「ワン!!」

「何、無傷だと!!」

骸殻を纏ったヒズリーは拳に闘気を纏わせて中断突きを、誤って、疾風犬で、只今、絶賛無敵中の龍ラピとラピードに向かって繰り出したことに、絶望していたのであった。

その時、アレクセイがクルニスクの槍に力が充填できたことに気が付いたのである。

「わたし達の勝ちだ!!」

「しまった!!」

龍姫達と戦いながら、クルニスクの槍を放つ隙を伺っていたのであった。

そして、クルニスクの槍に充填されたシエアは上に向かって放たれたのだ。

「あれは、星喰み!!」

「それと、誰だ!!」

「余程、死に急ぎたいと見える!! 慌てずとも、遠からずおまえたちの世界ごと滅ぶと言
うのに!!」

「おまえが、犯罪神か、いいだろう、王として相手になってやる」

なんと、星喰みともに、犯罪神が現れたのであった。

第二グランド

アレクセイに隙を突かれて犯罪神と星喰みがゲームギョウ界に出現してしまったのである。

その時だった、空から誰かの声が聞こえて来たのだ。

そして、

「ねぶく!! いたたく!!」

「お姉ちゃんが空から降ってきた!!」

「ここ、天界よね?」

なんと別次元のネプテューヌが天界でありながら、空から落ちてきたのである。

そうあの次元のゲームギョウ界の天界でマジエコンヌを救うために一人残っていたネプテューヌである。

成長した姿だった。

「これってやばい状況!! 助太刀するよ!! 括目せよ!! 変身完了!!」

「さて、第二グランドとしゃれ込みますか!!」

「そうだね、括目せよ!! 変身完了!!」

「アクセス!! 黒衣の断罪者が相手をしてあげる!!」

「シヨコラ!! 括目してください!! バリアジャケット装着完了だ!! そして、この刃の色はおまえを倒す色だ!!」

「さて、女神達は変身完了したことだし、腹括れよ!!」

「もちろんだよ!!」

「エルも、セツトアップ!! これで戦える。武器は?」

「エル、これ使って」

「ありがとう、龍姫」

気を取りなした一行は、終止符を討つべく女神達は一斉に女神化を行ない、バリアジャケットを装着完了したので、ユーリ達とジュード達も態勢を立て直して、後に下がっていたエルも、インテリジェントデバイス「マルル」で、龍姫と同一年くらいのスタイル抜群の、ルドガーとお揃いのサスペンションを装着し、黒の服に、短パン型のバリアジャケットを装着し、クリーム色の髪をツインテールに結った少女の姿に変身したのである。

もちろん、女神ではなく、あくまで、人間状態である。

しかし、エルは武器を持っていなかったもので、龍姫が後腰に帯刀していた小太刀を二振りともエルに貸し、エルは小太刀を抜刀し、構えた。

「来い、纏めて、葬ってやる!!」

「行くぞ!!」

態勢を立て直した龍姫達は一斉に武器を構え、アレクセイ達も武器を構えたのである。

「何故、諦めようとしない!!」

「人間でありながら、犯罪神である、我に挑むとは」

「わりいな、異世界から来た異世界人なもので、ゲームギョウ界の常識は知らねえよ!!」
「これこそが、人の本当の力なのですよ!!」

「そうね、わたしも、ユーリ達に会えて、自分を変えるきっかけをくれた。もう、人間の歴史に、神なんていらぬのよ!!」

「何を言ってるんですか!! あなたはこのゲームギョウ界のプラネテューヌの守護女神なんですよ!!」

「そうね、わたしは女神だった、けど、もうプラネテューヌの女神パールハートは此処にはいない、いるのは、鳴流神龍舞よ!!」

タリの女神の力を持ったキセイジョ・レイ、犯罪神の二人は人間である、ユーリ達とジュード達に何故、人間でありながら、圧倒する出来るのかと己の目を疑っていた。

龍舞は人間の歴史に神はもういらぬと、イストワールに宣戦布告をして、イスト

ワールを圧倒していた。

「飛ばして行きますか!!」

「まさか!!」

龍姫達はアレクセイ達との戦いにケリを着けるためにオーバリーミツツLv4を発動させたのだった。

最終章

アレクセイ達との戦いの終止符を討つべく、龍姫達はオーバーリミッツLv4を発動させて、アレクセイ達に向かって行ったのである。

「これはこれは、どうしてあの時、女神だと気が付かなかったのだ!!」

「しらじらしいよ!! アレクセイ!! 獅子戦吼!!」

「ちよつと、頭冷やそうか・・・魔神剣!!」

「龍姫ちゃん達、本気だね、おっさん、頑張るわよ!!」

アレクセイは龍姫達がテルカ・リュミレースのザウデ不落宮でやり合った時は女神化をしていなかったたので、龍姫達が女神だと今になって気が付いたのである。

そして、

「一曲参りましょうか!!」

「そうするによ!!」

「四象移ろいて始光を生ず!! 歌劇!!」

ローエン&狂三「ティーロ・スフォルツァンド!!」

ローエンがナイフで描いた魔法陣から狂三が二丁拳銃で魔法弾を打ちこんだ後、魔法

陣から極太のレーザー光線を発射して、

「心得よ!! 我が剣は王の牙!! 六道の悪行浄滅せん!! 闘・魔神王剣!! 成敗!!」

アーストは魔法弾を放ち、捉えて、一刀両断にして、

「人と!!」

「精霊の力!!」

「この刹那!!」

「天に合する!!」

「これが!!」

「わたし達の!!」

ジュード&ミラ「虎牙破斬・罅!!」

ジュードが拳で打ち上げて、空中でミラが追撃し、その後、左右から挟撃して、

「行くぜ!! フレン!!」

「行くよ!! 土道!!」

「行くわよ!! 狼龍!!」

「行くよ!! 龍月!!」

「はああああ!! 決める(よ)(わよ)!!」

「見せてやろうぜ(上げましょう)(あげよう)!!」

「これがわたし達の全力全壊!!」

「武神!! 双天波!!」

ユーリとフレンの友情の秘奥義を、龍姫と土道、龍舞と狼龍、龍美と龍月の八人で一斉に守護方陣でアレクセイ達を閉じ込めて、斬り抜け、飛びあがり、八人分の斬撃をお見舞いして、

「これで終わりだ!! こいつは未来へ託す永劫の剣だ!! 斬!!」

惠龍寿は「吉光」に光を溜めて、袈裟斬りから入り、

「空!!」

斬り上げて、

「天!!」

更に斬り上げて、

「翔!!」

回転斬りで斬り上げて、

「けーーん!!」

天高く飛びあがりながら斬り上げて、アレクセイ達に引導を渡したのである。

「すいません、先代の女神様・・・」

「先代の女神がどんな奴だったかのか知らねえオレが言っても説得力ねえけど、もう気

が付いてたんじゃね」

「ユーリ、急がないと!!」

「ああ、やるぞ!! 惠龍寿!!」

「わかった、ユーリさん!!」

ユーリは明星式号を掲げて、惠龍寿は吉光を掲げて、エステルとミラと惠龍寿が四属性の精霊を召喚して、下界のゲームギョウ界からマジコンの光が集まって、巨大な翼の剣を形成していたら、

「終わったか」

「デューク!!」

「それに、ヨーデル殿下まで!!」

「デュークとソディア達に護衛してもらって此処に来ました」

そこデュークがヨーデル殿下を引き連れて現れたのである。

デュークは宙の戒典を掲げて、二人に同調し、

「いっけえええええ!!」

全員が声を上げて、ついにゲームギョウ界を星喰みと犯罪神から救ったのである。

龍姫達はアレクセイ達をバインドして身柄を拘束し、テルカ・リュミレースのフレンに預けたのだ。

その時だった、龍姫のアイテムパックから、あの黒猫が飛び出してきて、光り出したのである。

しばらく様子を見ていると

「龍美姐達にそっくりなのじゃ!!」

「いい加減、言つてやつたらどうだ、天照大御神さんよ、いや、龍美たちのおふくろさんと呼んだ方がいいか?」

「ええええ!! お母さんが、天照大御神様だったの。(。D。.)ノ!!」

「やはりそうか、わたしは、戦乙女、ヴァルキリー、以後、お見知りおきよ」

「龍美お姉ちゃん達は、女神の子供だったの。(。D。.)ノ!!」

なんと龍姫に瓜二つの容姿を持った和服の女性に変身したのである。

ユーリは一目見ただけで、龍姫達姉妹の実の母親だと見抜いてしまったのである。

「わたしは、天照大御神こと、鳴流神剣心です、ごめんなさい、もう少し早く話してあげていれれば」

「ごめん、おかあさんがあの時、ボクにこのおまもり、くれた時に気が付いてたんだ、ボクたち兄妹の眠つてる妖力を封印するためだったんだよね」

「その通りよ、龍姫、それに星龍ちゃん達も龍姫のこと、ありがとうね、そうだわ、龍姫、復学してみない?」

「けど、あれから、結構経ってるから、無理なんじゃ」

「いいじゃないですか!! お母様の言うことは言いた方がいいですよ!!」

「そうだね、大丈夫かな? 死んだ人間が、復学しても?」

「大丈夫だ!! 龍姫は俺が守る!!」

なんと剣心は龍姫達に復学するように勧めたのであるが、龍姫は躊躇していたので、エステルが助け船を出して、土道が龍姫に守ると言ってくれたことで、

「わかった、ボク、復学するよ!!」

「そんな、龍姫お姉ちゃんが復学したらわたし達はどうすればいいの?」

「そんなことだろうと思って、はい!!」

龍姫達は復学することを決意したのだが、真龍姫達が駄々をこねだしたので、剣心が指パッチンをしたら、

「これって、まさか、お姉たちの学校の制服!!」

「おまけに、生徒手帳まで」

「お姉ちゃん達の一学年下のクラスなんだ、勇龍と同じクラスだね!!」

「そうだ、リタ・モルディオ、龍姫達の学校に編入しなさい!!」

「なんでよ!! アタシには研究しないといけない課題が山積みなのよ!!」

龍姫達が復学する都立来禅高校の制服を今のスタイルに合わせたセットを贈呈し、生

徒手帳も授けたのだ。

いきなりヨーデルがリタに龍姫達の復学する学校に、編入するように命令を下したら、リタは拒否し出したのだが、強制的に、美龍飛達と同じ学年の生徒として編入させられたのであった。

龍舞と狼龍と恵龍寿と臥龍は国を捨て、空から降ってきたネプテューヌは海龍と言う名をもらい正式に鳴流神と獅子神家の養子になり、

超神次元ゲームギョウ界に暮らすことになり、セドナも龍姫達の一学年下の生徒として、通うことになり、パールとロムとラムにゲームギョウ界を託し、旅立ったのであった。

天照大御神こと剣心は家に帰ることにしたのである。

こうして、三年間のマジコン戦争は終わりを迎えたのだが、これがまた龍姫達の冒険の始まりに過ぎなかったのであった。

スキット：お帰り

海龍「間に合ってよかった」

ユーリ「つたく、紫の女神様は空から落ちてくるのが好きなのか？」

フレン「コラ!! すいません」

龍姫「あの時、マジエコンヌを助けるために残ったネプテューヌなんだね？」

エステル「それはどう言うことですか？」

海龍「実はわたし、此処とは違う別次元のゲームギョウ界の天界から女神化して降りてきたんだけど、途中で次元の亀裂に吸い込まれたんだよ」

ユーリ「アレクセイ達は運に見放されたわけだな」

ミラ「まあ、仲間が増えたことには代わりないんだ」

龍姫「あ、海龍、お帰り」

海龍「うん、ただいま!!」

剣心「それと、残念だけど、あの次元にはもう帰ることは出来ないの」

海龍「わたしにはお姉ちゃん達に、凛々の明星、精霊、ジュード達だっているんだもん、未練なんてない、これからもよろしくね!!」